2015 年度

博士論文

集団ではなく個として移住した沖縄移民のアイデンティティをめぐる考察

―ブラジル国クリチーバ市における沖縄人（ウチナーンチュ）を事例として―

指導教授：長　有紀枝

副指導教授：大熊　玄

21 世紀社会デザイン研究科
比較組織ネットワーク学専攻

08WM003K
組原　慎子

集団ではなく個として移住した沖縄移民のアイデンティティをめぐる考察
―ブラジル国クリチーバ市における沖縄人（ウチナーンチュ）を事例として―

はじめに 1

序章　なぜ個として移住した沖縄移民のアイデンティティなのか 3

1．本論文の問題関心と背景 3

2．本論文の目的と構成 4

3．沖縄移民のアイデンティティ研究における本論文の意義と位置付け 7

4．本論文の調査方法 8

5．「沖縄人（ウチナーンチュ）」の呼称について 8

6．ブラジル国クリチーバ市の表記について 11

第１章　沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティをめぐる考察
―アイデンティティ研究の対象としての沖縄 13

1．多分野から研究される沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティ

（1）５分野（心理学・社会学・民俗学／民族学・政治学・歴史学）における
アイデンティティ研究の対象としての沖縄 13

（2）歴史からみるアイデンティティ研究の対象としての沖縄 14

2．沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティの歴史的変遷
―沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティに影響のある４つの出来事 15

3．沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティに影響のある風習･考え方からみる特徴 19

（1）沖縄の風土的な影響―「イチャリバチョーデー（行き逢えば兄弟）」
に見られる海洋民族的特徴 19

（2）沖縄の親族制度「門中（ムンチュウ）」の影響―親族を繋げる契機 21

4．小括―アイデンティティは創られる 24

第２章　沖縄移民のアイデンティティをめぐる考察
―アイデンティティ研究の対象としての沖縄移民 26

1．本論文における沖縄移民の定義 26

2．沖縄移民の歴史と分布 27

（1）戦前の沖縄移民（1899 年－1941 年頃） 28

（2）戦中の沖縄移民（1941 年頃－1945 年頃） 31

（3）戦後の沖縄移民（1945 年頃－1993 年） 32

（4）沖縄移民の分布 37

（5）沖縄内外の沖縄人交流 38
①沖縄における「世界のウチナーンチュ大会」 38
②戦後における沖縄移民の沖縄救済運動への「返礼」と人材育成 40
3．沖縄移民のアイデンティティに関する先行研究― 42
4．ブラジル沖縄県人会設立の動きにみる集団としての移民.....48
5．小括―沖縄移民の特徴と沖縄移民のアイデンティティ研究 49

第３章　クリチーバ市における沖縄人の流入の歴史 51
1．クリチーバ市における日系人の歴史 51
（1）クリチーバ市における日系人の流入―３つの要因 53
①戦争による海岸沿いからの立ち退き命令 53
②都市であるクリチーバ市への就学、就職の機会を求めて.....53
③1975 年頃に発生した霜害 55
（2）日系人組織の変遷 55
①戦後の「勝ち組」「負け組」問題による影響 55
②クリチーバ学生連盟による日系人組織の歩み寄りの促進 57
（3）2009 年現在の日系人組織「クリチーバ日伯文化援護協会」.....58
2．クリチーバ市における沖縄人の歴史 60
3．個として移住した沖縄人の集団の結成過程：第１期―1957 年を中心に
＜「親睦会」「頼母子」＞ 66
4．個として移住した沖縄人の集団の結成過程：第２期―1959～1970 年代を中心に
＜「親睦会」「頼母子」「クリチーバ沖縄県人会」＞ 69
5．個として移住した沖縄人の集団の再結成：第３期―2006 年を中心に
＜「頼母子」「クリチーバ沖縄県人会」＞ 71
6．クリチーバ市とはどのような地域なのか 81
7．小括 84

第４章　クリチーバ沖縄県人会とアイデンティティ.....86
1．クリチーバ沖縄県人会としての再始動 86
（1）ブラジル国における調査概要―クリチーバ沖縄県人会を中心に 86
（2）クリチーバ市の沖縄人に出会った経緯と印象（2008 年） 89
（3）クリチーバ沖縄県人会メンバーの属性 90
（4）クリチーバ沖縄県人会メンバーの属性―まとめ 91
（5）クリチーバ沖縄県人会の活動 92
①定期の活動　―「頼母子」など 92
②不定期の活動―沖縄料理教室など 93

③クリチーバ沖縄県人会から独立した活動―「琉球國祭り太鼓」.....94
２．４名の会長へのインタビューからみる沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティ 96
（１）2001～2005 年度　マツダ・ノブテロ会長 96
（２）2006～2009 年度　ウエズ・ジョージ会長 98
（３）2010～2011 年度　ギノザ・マツオ・マリア会長 101
（４）2011～2014 年度　ヒガ・エリオ会長 103
（５）４名の会長インタビューから見えること 107
３．構成メンバーへのインタビューからみる沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティ 107
（１）クリチーバ沖縄県人会と沖縄に対する考えからみる 108
（２）クリチーバ沖縄県人会メンバーの特徴 112
４．小括―「シンボルとしての沖縄」.....119

終章　個として移住した沖縄移民のアイデンティティの再構築 122
１．総括：クリチーバに移住した沖縄移民アイデンティティを支える
「シンボルとしての沖縄」.....122
２．クリチーバにおける沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティの今後の課題―次世代への継承...126
３．本論文の今後の課題 127

図表・写真一覧 128

参考文献 130

付録資料 1. クリチーバ市における沖縄人（ウチナーンチュ）の歴史年表 141
付録資料 2. クリチーバ沖縄県人会会員リスト（2009－2013 年）.....154
付録資料 3. クリチーバ沖縄県人会メンバーによる沖縄料理のレシピ 161
付録資料 4. 沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティに関する論文・文献リスト：５分野 168

謝辞..... 173

はじめに

本論文のテーマ選択の背景には、沖縄出身である筆者自身が沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティへの関心をもっていたことがあった。筆者の父は鳥取県生まれ、母は沖縄県の豊見城市生まれであることから、沖縄ではハーフ（ダブル）と言われることもある。

沖縄において「ウチナーンチュ（沖縄人）」「ヤマトンチュ（大和人）」あるいは「ナイチャー（内地人）」の区別は日常にはよく耳にしていた。筆者のようなケースを沖縄の言葉（ウチナーグチ）で「マンチャー（血が混ざっている）」ということは、大阪在住の沖縄人（ウチナーンチュ）から言われて知った。筆者が高校卒業後、東京に出てきたときは、特に沖縄のことを見聞きすると、体のうちから沖縄への思いが湧き出るのを感じた。

沖縄では、年輩の人の話や沖縄の地元新聞紙上でもよく沖縄から世界中に移住した移民のことが取り上げられ、沖縄の良さが移民社会には残っていると言われていた。

筆者は、修士論文（2007 年度）を書いた際に沖縄移民のことを取りあげたことから、それを実際に見聞しようと考えて、2008 年にハワイを訪問し、同年、南米での移民 100 周祭で現地を訪れた。その結果、日本本土と沖縄は異なる動きをしている様子が見られた。そして、沖縄人（ウチナーンチュ）のネットワークが世界中に広がっていることもわかった。その後、関西地域の大正区や関東地域では川崎市、横浜市鶴見区などにある沖縄人（ウチナーンチュ）の集住地域に実際に現地に赴き、その状況を見聞した。当然のことではあるが、それぞれの場所で「沖縄」の捉え方は異なっていた。このようにして、多様な沖縄像があることを沖縄の外から実感した。また沖縄人（ウチナーンチュ）ネットワークに関する研究も多くあり、それらの研究は沖縄人（ウチナーンチュ）がなぜつながり合うのかをテーマとしていた。

そのような中で、2008 年のブラジル沖縄移民 100 年祭で出会ったブラジル国クリチーバ市の沖縄人（ウチナーンチュ）たちは、生活しているクリチーバ市という場所をベースにして、自分たちなりのアイデンティティを作り上げていた。地縁、血縁のネットワークも利用し、現地で作りあげてきたネットワークを生かしながら、余裕のある生活を楽しみ、旅行も楽しんで行っている。そして沖縄を含む日本を実際に見聞した経験を持っている人たちも多かった。そのため、移民ということをあまり感じさせなかった。にもかかわらず、比較的最近になって沖縄県人会を立ち上げたときいて、興味を感じた。

このような経緯からクリチーバ市に居住する沖縄移民のアイデンティティを調査することとなった。その結果、移民をする際に、集団で移住をするのか、個としての移住をするのかでアイデンティティ形成に相違があるのではないかと考えるようになった。

アイデンティティの定義については、心理学、社会学などさまざまな場でなされている。本論文においてクリチーバの沖縄人のアイデンティティは、鄭瑛恵（チョン・ヨンヘ）の定義した「国境線を跨ぐ『複合的なアイデンティティ』」と同様に、出自が複数あることから生まれるアイデンティティだと考える[1]。人は母国から離れた国、地域に出ると自ずと、あ

[1] 鄭瑛恵.2003『〈民が代〉斉唱－アイデンティティ・国民国家・ジェンダー』岩波書店. p.106

るいは否応なしにアイデンティティを考えさせられる。鄭によると、移民２，３世以降になっていくと、出自を複数持ち、それを同一化（アイデンティフィケーション）すること、従来のエスニックグループに帰属意識を持つことも難しくなる。しかし、それはアイデンティティが低下することではないという。

沖縄においてアイデンティティが取り上げられる場合、個人の問題というより、沖縄全体のあり方との関連で語られることが多い。これからみていくように、歴史を振り返れば、沖縄は、琉球国としての統一国家の形成が日本と比べて約 1000 年遅れ、近代になる前から沖縄は日本、中国のはざまにあって従属を強いられてきた。そして日本に併合された後は日本への同化が進んだ。第二次大戦後はアメリカに占領され、本土復帰後も今日まで過重な基地負担にあえいでいる。このような歴史と、移民の歴史とは切っても切れない関係に立っている。そこで本研究においても、従来の研究とは一線を画し、沖縄が置かれてきた歴史的状況の中で、沖縄人（ウチナーンチュ）がどのようにアイデンティティを形成しようとしてきたのかを主に見ていきたい。

序章　なぜ個として移住した沖縄移民のアイデンティティなのか

１．本論文の問題関心と背景

本論文は集団ではなく個として移住した沖縄移民のアイデンティティの形成や変化を、ブラジル国パラナ州クリチーバ市における沖縄人（ウチナーンチュ）を事例として考察としようとするものである。

沖縄は、戦前戦後[1]を通じ世界各地に移民を多く輩出しているが、移住先では同じ出身村や地域ごとに居住するという特徴が見られる。こうした沖縄移民に関する研究は、沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティ論、沖縄人（ウチナーンチュ）ネットワーク論として、地理学、文学、文化人類学、社会学など多様な学問領域から試みられているが、その多くが特に沖縄からの移民が多い北米、南米を中心とする移民研究であり、とりわけハワイやブラジルへ集団で移住した沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティの研究に関するものである。

こうした先行研究を渉猟しつつ、沖縄出身である筆者が、過去約 10 年間にわたり、ハワイやブラジルの沖縄移民を訪ねるフィールド調査をする過程[2]で、特に関心を抱いたのが、ブラジルにおいて集団ではなく、就職や、進学、結婚など個人的理由で、個として移動を続ける沖縄人（ウチナーンチュ）のアイデンティティをめぐる問題であった。ブラジル国クリチーバ市の場合、他の地域とは明らかに入植の経緯が異なるにも関わらず、先行研究がほとんど見当たらない。

ブラジルに移住した沖縄人（ウチナーンチュ）は、当初、沖縄移民の集団的入植地のあるサンパウロ州に居を構えた。これを第１段階とすると、サンパウロ州内に住んでいた沖縄人（ウチナーンチュ）の一部は、就職、進学、結婚など様々な事情でサンパウロを離れ、ブラジル各地に拡散し第２、第３の移住先に移るのであるが、このような沖縄人（ウチナーンチュ）たちの沖縄アイデンティティはどのように変遷し、あるいは保持されているのであろうか。本論文は、こうした問題関心のもとに、クリチーバ市に住む沖縄人（ウチナーンチュ）のアイデンティティを、クリチーバ沖縄県人会と重ね合わせみていこうとするものである。クリチーバは、集団で移住した初期の沖縄移民との直接的な関係がまったくなかった地であるにもかかわらず、クリチーバ市に移住し定住している沖縄人（ウチナーンチュ）が沖縄の血縁、地縁を越えて集う極めて特殊な地域だからである。

なお「沖縄人（ウチナーンチュ）」の呼称については本章の５で、また、クリチーバ市については、本章の

---

[1] 本論文で「戦争」とは特に断りのない限り、太平洋戦争を指している。

[2] 筆者のフィールド調査の滞在地と時期は、次の通りである。後述するクリチーバ市を除く（第 4 章参照）。★米国ハワイ州オワフ島、マウイ島、ハワイ島：2008 年 3 月、2009 年 3 月、2009 年 9 月、2014 年 9 月、各約２週間、★ブラジル国サンパウロ州内のグァタパラ移住地：2009 年 7 月 18-20 日、サンパウロ州カンピーナス市[2009 年 8 月 22 日日帰り]、同州サンパウロ市（ビラカホン地区など）[複数回、複数箇所]、マットグロッソドスール州カンポグランデ市[2009 年、日帰り]、パラナ州ロンドリーナ市、マリンガー市、カンバラー市（2009 年 8 月）、サンタカタリーナ州フロリアノポリス市（2013 年 9 月）★米国ロサンゼルス州 2008 年 8 月、★アルゼンチン国ブエノスアイレス市：2008 年 8 月★台湾台北市（沖縄県人会長宅訪問）2 回、★ボリビア国サンタクルス市：2008 年 9 月、2013 年 9 月、★メキシコ国メキシコシティ：2013 年 3 月 9 日～14 日、★ペルー国リマ市：2011 年 1 月 16 日～20 日

６で詳述する。

２．本論文の目的と構成

上記の問題関心に沿って本論文は、以下二点を明らかにすることを目的としている。

まず、第一に、クリチーバの「沖縄人（ウチナーンチュ）」アイデンティティを論ずる前に、「沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティ」と「沖縄移民のアイデンティティ」とは何かを明らかにすることである。本論文では、「沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティ」と「沖縄移民のアイデンティティ」を分けて論じている。沖縄において形成されてきた「沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティ」が、沖縄人（ウチナーンチュ）によってそれぞれの移住先に持ち込まれ、その過程で変容し、あるいは新たに生じたアイデンティティを「沖縄移民のアイデンティティ」と捉えるためである。

第二の目的は、集団ではなく個として、第２、第３の地へ移住を重ねた、沖縄人のアイデンティティの形成および変遷を明らかにし、クリチーバの「沖縄人（ウチナーンチュ）」アイデンティティを明らかにすることである。

上記二つの目的を達成するため、本論文は６つの章からなる。

まず、第一の目的である「沖縄人アイデンティティ」と「沖縄移民のアイデンティティ」とは何かを把握するため、第１章「沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティをめぐる考察―アイデンティティ研究の対象としての沖縄」と第２章「沖縄移民のアイデンティティをめぐる考察―アイデンティティ研究の対象としての沖縄移民」で論じている。

第１章「沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティをめぐる考察―アイデンティティ研究の対象としての沖縄」においては、歴史からみた沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティ形成の考察の整理を行った。沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティは、日本におけるアイデンティティとは別に研究対象とされてきている。その理由として次のような歴史的経緯がある。琉球国が日本に併合された 1879 年のいわゆる「琉球処分」から 2015 年で 136 年になる。この間の沖縄に関する研究をさかのぼると、常に沖縄人（ウチナーンチュ）は日本人なのか、日本人とは違うのかをめぐる議論が行われてきている。沖縄は、複数回にわたり帰属が替わる経験をしてきたことにより、沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティも特異な歴史をたどってきたと筆者は考える。

沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティについては様々な分野で先行研究がなされてきたが、本章では５つの分野に大別しどのような議論が行われてきたかを概観した。筆者は特に「琉球人とか沖縄人という一貫した概念は存在しなかった」という立場から沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティの歴史的な変遷を分析しているグレゴリー・J・スミッツ（Gregory James Smits、以下スミッツ）の研究を援用しながら、歴史的考察を行った。スミッツの研究から、沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティは、土地との関係から離れた場所においても形成されるということが言える。

次に、歴史以外の視点で沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティに関係すると思われる要因を二点挙げている。一つめは沖縄人同士の間で交わされる沖縄のフレーズの一つとなっている「イチャ

リバチョーデー（行き逢えば兄弟）」[3]に見られる海洋民族的特徴である。移民に出て行く特徴の一つともいえると筆者は考えている。二つめの特徴は、沖縄独自の父系血縁の親族制度「門中（ムンチュウ）」の影響である。筆者はこれを一種の親族をつなぐ社会システムと考えている。門中では居住地に関わらず、直系の長男が位牌を持つことが基本となっており、この直系の長男にあたる人が移民となっていることが多いため位牌が移民先の移住地にとどまるという事態が生じてきた。祖先崇拝を重視する沖縄人（ウチナーンチュ）にとって位牌を守ることは重要な責務である。位牌を受け継ぐ役割などによって遠く離れた親族がつながらざるを得ない機会が生まれる。これが沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティを生み出す装置にもなりうると筆者は考える。

これらの歴史的要因、海洋民族的特徴、沖縄独自の親族制度「門中（ムンチュウ）」という３つの要素から、沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティは、土地的な関係から離れた場所においても形成されると筆者は考えた。

第２章「沖縄移民のアイデンティティをめぐる考察―アイデンティティ研究の対象としての沖縄移民」においては、沖縄移民の歴史を戦前、戦中、戦後の三つに大別してみていく。戦前の特徴として、「沖縄移民の父」と称された当山久三[4]らの移民運動により、日本内で移民が許可されていなかった沖縄からも日本本土全体から 14 年遅れで可能となった。出移民の背景、要因については、集団で土地を共有する地割制が廃止され、個人で土地の売却が可能となり、渡航費用が工面できるようになるなど社会的な諸事情があった。また孤島であるという地理的な自然条件や徴兵忌避を理由に移民することも見られた。しかし基本的には、窮乏から移民に出て行かざるを得ない状況があった。戦中の特徴としては、移民各地でどのような境遇だったのか、どのように暮らしていたのか、沖縄からの移民であることによってみられた特徴を挙げた。戦後の特徴としては、戦争での引揚げ者で人口増加を抑制するため、あるいは移民先からの送金を得るため、沖縄からの移民を積極的に再開させている。戦後、沖縄は約 27 年間米軍の統治下におかれていたことから日本本土とは別の移民政策がなされた。米軍基地のために土地を接収、占領され、それに伴い米軍側も積極的に沖縄から移民させようとする動きなどがみられた。この章では、沖縄における移民とは何かを 1980 年代まで含めて概観する。そして沖縄移民の分布として南米、北米を中心とした主な移民先の状況を見た上で、沖縄移民のアイデンティティを対象とした先行研究について概観し、研究の動向についての分析を行う。

次に、本論文の主たる目的である、集団ではなく個として第２、第３段階へとまったく別の土地へ移住した沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティの実態を明らかにするため、第３章「クリチーバ市における沖縄人（ウチナーンチュ）の流入の歴史」と第４章「クリチーバ沖縄県人会とアイデンティティ」でクリチーバ市における沖縄人（ウチナーンチュ）の沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティについての認識をみていく。

第３章「クリチーバ市における沖縄人（ウチナーンチュ）の流入の歴史」においては、まずクリチーバ市に

---

[3]沖縄大百科事典刊行事務局編 1983a.『沖縄大百科事典　上巻』沖縄タイムス社.によると、「イチャリバチョーデー」は沖縄のことわざとされている。(執筆：あしみね・えいいち)p.199

[4]「當山久三」とも表記される。（1868 年- 1910 年）沖縄県金武町字並里生まれ。政治家、社会運動家、教育者。沖縄県における海外集団移民事業の主導者である。

おける日系人の歴史を概観する。

クリチーバ市における日系人の流入は、少なくとも３つの要因からみることができる。その３つの要因とは、①戦争による海岸沿いからの立ち退き命令、②都市であるクリチーバ市への就学、就職の機会を求めて、③1975 年頃に発生した霜害である。

次に日系人組織の変遷を、①戦後の「勝ち組」「負け組」問題による影響と、②クリチーバ学生連盟による日系人組織の歩み寄りの促進という視点からみた。その上で、2009 年現在の日系人組織「クリチーバ日伯文化援護協会（「文協」または「日系人会」)」の状況を概観し、そのあとにブラジルパラナ州及びクリチーバ市における沖縄人の歴史をみていく。

次にクリチーバ市とはどのような地域なのかをみていく。もともとクリチーバ市は財政的に豊かではない地域であったが、1970 年代ごろから土木と建築を専門にしているポーランド系移民の市長の誕生を契機として、大きな変化を遂げた。一つの例として、クリチーバ市のバスを利便性がある、地下鉄並みに利用できるようにした。そのほか「人間都市」「環境都市」などと言われ、独創的な理念のもと、住民が街に自主的に関わりやすいような政策が多くみられる。世界中の交通、街づくりの専門家などから注目されてきた都市である。

次に、クリチーバ沖縄県人会の前身を時系列的に３段階に分けて概観した。はじめに 1957 年を中心に＜「親睦会」「頼母子」＞、つぎに 1959 年～1970 年代を中心に＜「親睦会」「頼母子」「クリチーバ沖縄県人会」＞、そして現在のクリチーバ沖縄県人会ができた 2006 年を中心に＜「頼母子」「クリチーバ沖縄県人会」＞まで順を追って、どのように沖縄人（ウチナーンチュ）が集まってきたかをみていく。クリチーバ沖縄県人会の記録と証言が異なる部分もあるため、それぞれの事情を述べていく。

第４章「クリチーバ沖縄県人会とアイデンティティ」においては、2006 年にクリチーバ沖縄県人会として本格的に始動したことをみていく。ブラジルでは、沖縄人（ウチナーンチュ）は集住して居住している傾向があるが、集団としての移住と区別して、個として移住した沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティはどのようになっているのだろうか、またそれはどのように継承されているのかについて、把握を試みる。クリチーバ市においては、日系人と一緒に組織作りをしてきたのだが、それでも沖縄人（ウチナーンチュ）の集まりが別にできており、それは現在においても継続されてきている。

まず沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティを４名の歴代会長インタビューからみてみると、沖縄人（ウチナーンチュ）だけでなく、沖縄に興味を持つ人などは歓迎するという傾向がみられ、また沖縄ということで集まることに意味を見出すことは 4 名に共通していた。しかし、クリチーバ沖縄県人会において目指すべき方向などはなかなか一つにならない。一方、構成メンバー側からみると、沖縄の祖先の出身地が異なり、育ってきた場所も異なる沖縄人（ウチナーンチュ）が集うため、それぞれの思い描く沖縄像も十人十色である。また沖縄を共通項に集まること自体に一つの満足感を持ちつつも、今後の新たな活動や目指すべき方向については常に模索している状態であった。

終章「個として移住した場所における沖縄移民のアイデンティティの再構築」においては、本論文の総括として、クリチーバ市の沖縄移民をつないでいるのは、「シンボルとしての沖

縄」であると結論づけた。先行研究として『沖縄イメージを旅する―柳田國男から移住ブームまで 』[5]がある。沖縄という場所から離れた土地に暮らしているクリチーバ沖縄県人会のメンバーたちの意識や考え方から、沖縄のイメージが創られていることをみていく。そしてクリチーバ市の沖縄人(ウチナーンチュ)がそれぞれ持つ沖縄をイメージづくることを、筆者は「シンボルとしての沖縄」と名付けた。この「シンボルとしての沖縄」がある種の“接着剤”の役割を果たしていると筆者は考える。そして、クリチーバ沖縄県人会に参加することにより定期的な確認をし、つながっていることを実感することで、沖縄移民のアイデンティティが新たに形成されることをみていく。

３．沖縄移民のアイデンティティ研究における本論文の意義と位置付け

沖縄移民の研究については、琉球大学法文学部人間科学科の人文地理学研究者を中心に充実した研究がなされている。しかし、その対象は沖縄人(ウチナーンチュ)の多く居住する地域における伝統的文化活動の盛んな沖縄県人会に集中している傾向がみられる。ブラジルに移民した沖縄人(ウチナーンチュ)は、初めは多く居住する地域にいたかもしれないが、その後、個人の事情によってブラジル内で頻繁に移動を繰り返してきたのが実態である。移動先は、沖縄移民にゆかりのない場所もみられる。クリチーバ市もその一つで、もともと移民とは関係のない地域である。本論文では、そのような場所においてみられる沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティの動向を明らかにするものであり、従来のウチナーンチュの移民研究の空白を埋めようとするものである。また、これまで沖縄人(ウチナーンチュ)に関する研究は行われていないクリチーバ市を対象としたことも大きな意味がある。

本研究は、移民史とアイデンティティ研究の両面からアプローチしている。沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティの側面については、上記のように、主に、スミッツの研究を援用しながら、歴史的考察を行った。沖縄移民史の分野については、沖縄県史や特に移民を輩出している市町村字ごとの移民史が発行されており、データ収集、聞き取り調査も豊富になされてきたといえる。これらの調査成果をもとに本研究も可能となっている。その他に、未調査となっている小規模な沖縄県人会、あるいは、沖縄県人会に関わっていない沖縄人(ウチナーンチュ)はまだ多数存在すると推測される。これらの見えにくくなっている沖縄人(ウチナーンチュ)の状況を調査することは容易なことではないが、これらを考慮することによってより多面的な沖縄人(ウチナーンチュ)像がみられるのではないかと筆者は考える。

このように、本論文は、移住したそれぞれの場所の影響も受けながら変化し、新たに形成されるアイデンティティという観点から考察しようとするものである。

[5]多田治 2008.『沖縄イメージを旅する　柳田國男から移住ブームまで』中公新書ラクレ.

４．本論文の調査方法

本論文では、現地調査を行った。クリチーバ市での筆者の調査期間は、2009 年から 2013 年の間に、計４回訪問し、それぞれ約１ヶ月から６ヶ月間フィールド調査を行った。

クリチーバ市に居住する日系人や沖縄人(ウチナーンチュ)が個で移住したことを筆者はインタビューや資料から読み解いた。

フィールド調査に関しては、主に研究対象のクリチーバ沖縄県人会については、インタビュー調査と参与的観察を主とした。現地滞在中のインタビューは、基本的には IC レコーダーを使用し、部分的にビデオに収録した。筆者が日本に居住しているため、クリチーバ市での滞在期間が限られていたことから、インターネットでの無料通話のできる Skype、メールまたは電話での情報収集も随時行った。クリチーバ沖縄県人会のメンバーへのインタビューは、談話を行いながら複数人で自由に話してもらうこともあれば、あらかじめ筆者が質問事項を用意し、必要に応じて質問内容を変えて行うこともあった。言語については基本的に日本語が話せる方には日本語で対応してもらったほか、英語も使用した。2012 年以降は筆者自身が簡単なポルトガル語会話を取り入れながら、日本語、英語も混ぜながらのインタビューも行った。理解が難しい際には言葉のわかるクリチーバ沖縄県人会のメンバーに通訳をしてもらうなどした。

クリチーバ沖縄県人会に関しては先行研究が見当たらなかったため、滞在中は可能な限り多くの沖縄人(ウチナーンチュ)から話をきくように心掛け、自宅や職場を訪ね、複数のメンバーには筆者から宿泊を願い出て、日常生活レベルから理解を深めた。クリチーバ市での滞在時間が限られているため、特にクリチーバ沖縄県人会活動でキーパーソンにあたるメンバーにはインタビューを重ねた。クリチーバ沖縄県人会の活動は、月１回行われる「頼母子(たのもし)[6]」がある。クリチーバ沖縄県人会メンバーが最も集まる貴重な機会となっておりこの会への出席は欠かせなかった。また、クリチーバ市のウチナーンチュの特性を明らかにするため、ブラジル滞在中にサンパウロ州などの複数の沖縄県人会も訪問調査を行い、比較資料とした。

５．「沖縄人(ウチナーンチュ)」の呼称について

本論文に入る前に、論文のタイトルにも使用している「沖縄人(ウチナーンチュ)」という言葉について説明しておく。くわえて、沖縄出身者または沖縄にルーツのある人を指す呼称は複数あるなかで、本論文で主に「沖縄人(ウチナーンチュ)」を使用する理由も述べる[7]。

沖縄（主に沖縄本島内）の言葉で「ウチナー」は「沖縄」、「ンチュ」は「の人」の意である。まず、「沖縄」という場合、宮古などの離島を含める場合と、沖縄本島とその周辺島の

---

[6] 沖縄では「模合(もあい)」、「ムエー」、「寄り合い」または「ユレー」とも呼ばれる定期的にお金を出し合い、一人ずつ順番にお金を受け取る。本土における頼母子講・無尽講に相当する相互扶助システム。

[7] 「沖縄人(ウチナーンチュ)」以外の呼び名は、「琉球人」、「シマンチュ」、「沖縄県民」などがある。

みを指すのかは時期によって変化がみられるため整理しておく。「沖縄」、「沖縄人（ウチナーンチュ）」について辞典・事典はどのように記述されているのかいくつかみてみたい。

『沖縄大百科事典』は、「沖縄」について「沖縄島にたいする呼称」、また「王府圏の呼び名であった可能性」もあるとしている[8]。『沖縄民俗辞典』[9]でも上記と同様のことが述べられ、呼称の変化については次のように説明している。

「ウチナー（沖縄）という地域呼称は、本来、沖縄島とその周辺の諸島地域を指す語であり、したがって、沖縄人（ウチナーンチュ）もこの地域の出身者を主に指す語であった」[10]。そして、「明治時代以降に伊豆諸島の八丈島の人々が中心となって開拓した大東諸島や、あるいは宮古・八重山諸島の人びとにとって、沖縄人（ウチナーンチュ）とは本来、自己を含む呼称ではなかった」ということである。「沖縄人（ウチナーンチュ）」という言葉は、ある時期から大東諸島、宮古・八重山諸島の人びとも含んだ意味で、マス・メディアに多用されることにより一般的にも使われるようになった。

同書では、沖縄人（ウチナーンチュ）という言葉が多用されるようになった二つの契機を挙げている。はじめの契機は 1972 年の施政権返還後に積極的に用いられたこと。二つめは移民先で活躍している移民を紹介する沖縄の地元新聞『琉球新報』に 1985 年 12 月 28 日まで 484 回、毎回カラーで２年間の長期連載された「世界のウチナーンチュ」による大きな反響によってである。連載以降、ラジオやテレビ番組でも特集が組まれ、1990 年から沖縄においてほぼ５年に１度「世界のウチナーンチュ大会」という大規模イベントが開かれ始めた。これによって、沖縄県内のみならず、移民のなかでも「沖縄人（ウチナーンチュ）」という語が積極的、肯定的なニュアンスで用いられるようになった。このように、沖縄人（ウチナーンチュ）という言葉は世界各地に居住する沖縄にルーツを持つ人にも使われている言葉と言える。また日本国内においても沖縄独自の歴史・文化が注目されるようになり、日本の人々を意味する「ヤマトンチュー」あるいは「ナイチャー」に対して、「沖縄人（ウチナーンチュ）」という自称を用いるようになった[11]。しかしながら、「ウチナーンチュ」という言葉は以前に比べて、宮古・八重山諸島出身者を含んで使われるようになってはいるが、今日においても、宮古・八重山諸島においては、「沖縄」という語は、日常会話の中で沖縄本島を指す語として用いられている[12]。

次に、沖縄における呼称の使用状況をみるため、一つの基準として沖縄（主に本島）の地元新聞の場合を見てみよう。『沖縄タイムス』と『琉球新報』のデータベース[13]で「沖縄県民」「沖縄人（ウチナーンチュ）」、「島人・シマンチュ（島の人）」そして「琉球人」などの登場回数を調べた。下記に『沖縄タイムス』と『琉球新報』における沖縄アイデンティティの呼称に関係する用語の登場回数結果の表を付す。

---

8 沖縄大百科事典刊行事務局編 1983a.『沖縄大百科事典　上巻』沖縄タイムス社.

9渡邊欣雄・佐藤壮広・塩月亮子・岡野宣勝・宮下克也編 2008.『沖縄民俗辞典』吉川弘文館.

10同上書、pp. 57 - 58　（原知章、執筆）

11同上書、pp. 57 - 58

12 同上書。

13 『沖縄タイムス』は 1997 年以降、『琉球新報』は 1998 年以降の号外も含むすべての記事が収録されている。

キーワード	『沖縄タイムス』データベース（1997年1／1～2015年9／9）件数	『琉球新報』データベース（1998年1／4～2015年9／9）件数
琉球人[14]	664	439
沖縄人[15]	1902	1078
沖縄県民[16]	4832	2606
シマンチュ（しまんちゅ）	174（128）	94（126）
ウチナーンチュ	6027	4896
島人[17]	1305	937
沖縄の人[18]	4981	3723
沖縄県人[19]	812	989
県系人（沖縄県系人）	1606（95）	2024（166）
世界のウチナーンチュ[20]	2110	2125
沖縄移民	281	222
琉球国	1305	958
琉球王国	2463	1480
琉球王朝	2607	1604

〈表１〉『沖縄タイムス』と『琉球新報』における沖縄アイデンティティの呼称に関係する用語の登場回数

『沖縄タイムス』と『琉球新報』のデータベースより筆者作成。

調査の結果は、〈表 1〉にあるように「ウチナーンチュ」が最も高い値を示し、次に「沖縄県民」だった。

また世界各地の移住先に居住している沖縄の人々を、地元新聞では特に「県系人」あるいは「世界のウチナーンチュ」と表記している。

ハワイなど米国での沖縄に関する研究文献では“Uchinanchu（ウチナーンチュ）”のほか

14 無関係で重なるワード「琉球人形」を省いた数。
15 無関係で重なるワード「沖縄人形」「沖縄人権」「沖縄人民党」「沖縄人気」を省いた数。
16 無関係で重なるワード「沖縄県民間大使」を省いた数。
17 無関係で重なるワード「島人参」を省いた数。
18 無関係で重なるワード「沖縄の人口」「沖縄の人気」「沖縄の人情」「沖縄の人権」「沖縄の人間」を省いた数。
19 無関係で重なるワード「沖縄県人会」「沖縄県人口」「沖縄人事委員会」を省いた数。
20 『琉球新報』が 2 年ほど連載した記事「世界のウチナーンチュ」の後、登場するようになっている。琉球新報の編集局での理解の仕方は、「世界のウチナーンチュ」の確たる定義があるわけではないとしながら、「沖縄県の祖父母の血を引く人」としている。琉球新報社編 1986a.『世界のウチナーンチュ（１）』ひるぎ社.「まえがき」を参照。

“Okinawan（オキナワン）”と使用されているものが見受けられる。

呼称の使い方は、専門分野によっても違ってくる。例えば、歴史学や政治的な背景を表す場合、琉球王朝時代から使われている「琉球人[21]」を使用する傾向にあり、民俗／民族学の分野では、「沖縄人」が使用される。あるいは、「琉球＝沖縄人」「琉球人・沖縄人」と並列に表記されることもある。

「ウチナーンチュ」と同様に「シマンチュ」という呼称も使われる。「シマンチュ」とは、「シマ」「の人」の意であるが、「シマ」とは、文字通りの島と、村落をさす[22]。沖縄は 12 世紀頃から始まる古琉球時代の地域支配が、「間切（まぎり）・シマ制度」を通じて行われていた[23]。間切とは、「古琉球から 1907 年（明治 40）までの長期にわたって存続した沖縄独自の行政区画単位」[24]であり、いくつかの「シマ（村落）」を集合させて一つの「間切」となっていた。したがって、「シマ」は宮古・八重山諸島も含めてすべてに当てはまることになるが、現在の行政区画ではないため、前述の地元新聞では、「ウチナー」、「ウチナーンチュ」を用いる傾向になっていると筆者は考える。

本論文の主なフィールドであるクリチーバ市においても、沖縄県人会のメンバー内では「沖縄の人」「ウチナーンチュ」または「県人[25]」と複数の呼称が使われている。

以上みてきたように、「ウチナーンチュ」という言葉は、前述したように「世界のウチナーンチュ大会」などによって広く認知されていると考えられるため、本論文では、基本的に沖縄出身者、沖縄にルーツを持つ人を「沖縄人（ウチナーンチュ）」と呼称する。漢字の「沖縄人」を当てる読み方は二通りあり、「おきなわじん」または「ウチナーンチュ」である。本論文では、沖縄において一般的に使われる「ウチナーンチュ」という読み方と、視覚的な理解を促すため、漢字表記で「沖縄人」とする。また日本語の表記として「沖縄移民（おきなわいみん）」も併用し、沖縄の場所を指す場合には、「沖縄」と用いることとする。

６．ブラジル国クリチーバ市の表記について

ブラジル国クリチーバ市とはどのような地域なのかも本章であらかじめ述べておきたい。

「クリチーバ」の表記については、ポルトガル語で Curitiba、日本語では、「クリチバ」

21　ポルトガル語で「琉球人」を意味する「レキオス（Lequios）」という言葉もある。

22渡邊欣雄・佐藤壮広・塩月亮子・岡野宣勝・宮下克也編 2008.『沖縄民俗辞典』吉川弘文館.「シマ」とは、「日常生活を営む地域や領域を示した沖縄語。同時に死後の世界・異界をも包括し得る意味をもって使われる」pp. 250 - 251「シマ」を参照。沖縄大百科事典刊行事務局編 1983b.『沖縄大百科事典 中巻』沖縄タイムス社.　p.324。併せて「シマ」を参照。

23 上掲書、1983b.

24沖縄大百科事典刊行事務局編 1983c.『沖縄大百科事典　下巻』沖縄タイムス社.p.508。「間切　まぎり」を引用。

25 「沖縄県人」については沖縄県でない時期に移民した人たちの間でも使われている。理由の一つとして、沖縄県人会があることが関係していると考えられる。

[26]または「クリティーバ」と表記される。本論文では、主な事例としている沖縄県人会が名乗る日本語表記の「クリチーバ沖縄県人会」から「クリチーバ」表記に統一することとした。

詳しくは、第３章「クリチーバ市における沖縄人（ウチナーンチュ）の流入の歴史」で後述する。

[26] 外務省は、「クリチバ」を使用しており、在クリチバ日本国総領事館、http://www.curitiba.br.emb-japan.go.jp/index_j.html（2015 年 12 月 13 日閲覧）がある。

第１章　沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティをめぐる考察
—アイデンティティ研究の対象としての沖縄

第１章では、沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティをめぐる考察を行なう。まず、１では、沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティ研究にはどのような研究があるのかを、複数の分野に分けて概観していく。２では、その中で特に重要だと思われる歴史的考察を行うため、歴史から論じた沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティに関する研究を中心に見ていくこととする。次に３においては、沖縄人（ウチナーンチュ）に深く根付いている風習、考え方の中から、沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティに関係すると思われる要因として次の２点を挙げる。一つめは「イチャリバチョーデー（行き逢えば兄弟）」に見られる海洋民族的特徴である。二つめは、父系血縁の親族制度「門中（ムンチュウ）」の影響である。

１．多分野から研究される沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティ

（１）５分野（心理学・社会学・民俗学／民族学・政治学・歴史学）における
アイデンティティ研究の対象としての沖縄

ここでは、沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティに関する先行研究を概観する。なお、筆者は「沖縄人アイデンティティ」が移民先に持ち込まれ、その延長線上に「沖縄移民のアイデンティティ」があると考える。そのため、本論では両者を分けて表現することとする。

沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティは、日本におけるアイデンティティとは別の研究対象として語られてきた。実際、沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティに関する論文、書籍、雑誌はどのぐらいあるのかをみてみる。方法は、学術論文、図書・雑誌などの学術情報データベース CiNii（サイニィ、Citation Information by NII）Articles と CiNii Books を併せて使用した[1]。検索ワード「沖縄」「アイデンティティ」で検出した「沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティ」に関する論文、図書、雑誌記事は 100 を超え、「沖縄移民のアイデンティティ」に関しては 40 を超えた。「沖縄移民のアイデンティティ」の詳細は第２章で後述する。また、沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティに関する文献などはタイトルに「アイデンティティ」という言葉が使用されていないものも多数あると推測される。タイトル上では使用されていないが、内容的に沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティが取り扱われている場合もある。100 ほどの沖縄人アイデンティティに関する論文、文献などは、複数の分野に渡っている。これらを分類することは困難であることは承知の上で、主たる研究対象を心理学、社会学、民俗学／民族学、政治学、そして歴史学の５つに分けてみていく。先行研究のリストは付録資料 4.「沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティに関する論文・文献リスト:5分野」として巻末に付す。

沖縄のアイデンティティに関する文献、論文は多くあるなかで、それぞれの分野でどのように語られてきたのかを概観してみよう。

---

[1]CiNii Articles：http://ci.nii.ac.jp/（2015 年 10 月 14 日閲覧）
CiNii Books：http://ci.nii.ac.jp/books/　（2015 年 10 月 14 日閲覧）

沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティとの関連で比較的広く読まれてきている文献として、琉球大学の教授などを経て、元沖縄県知事を歴任した大田昌秀による『沖縄人とは』[2]があげられる。大田によると、アイデンティティ理論を歴史過程の分析に応用することは問題がないわけでもないとしながらも、人々の意識の変容などの理解には歴史の枠組みが便利であるとして沖縄史を検証しなおしている。17 世紀初期の「薩摩の琉球入り」に始まり、「日・支両属」、第２次大戦後の米軍統治下などにおいて、「沖縄人(ウチナーチュ)は、中国人でもなければ、日本人でもない、といった「宙ぶらりん」な状態におかれてきた」[3]。常に沖縄人(ウチナーンチュ)は政治目的に利用され、常に「アイデンティティ喪失」の“根こぎ”状況に落とし入れられてきた。そして「喪失せしめられた自らのアイデンティティを回復し確立する苦渋の歴史であった」と見ている。本書を社会学の分野に分類したのは、歴史学をベースに、沖縄文化考、ハワイの沖縄人(ウチナーンチュ)からみるアイデンティティ、エリクソンとフロイトのアイデンティティ論なども含まれており歴史学に限った論考ではないからである。

沖縄が薩摩に侵攻される以前にどのような特徴を持っていたのかということと、それが沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティ形成に大きな影響を及ぼしているという面からの研究は、特に、民族学／民俗学分野の貢献が大きい。最近の研究成果として、ヨーゼフ・クライナー『日本民族学の戦前と戦後－岡正雄と日本民族学の草分け』[4]、同じく『世界の沖縄学－沖縄研究 50 年の歩み』[5]があげられる。

（２）歴史からみるアイデンティティ研究の対象としての沖縄

５分野の中で、本論文は主に歴史的考察を行うとしているため、歴史に基づく「沖縄人アイデンティティ」の考察を行う。歴史学については少なくとも次の８つの論文、書籍がある。

・グレゴリー.J. スミッツ・渡辺美季訳 2011.『琉球王国の自画像―近世沖縄思想史』ぺりかん社.
・田名真之 1998.『近世沖縄の素顔』（おきなわ文庫、84）ひるぎ社.
・戸邉秀明 2015.「沖縄近代史から考える「近代性」とアイデンティティの問い方 － 研究動向をめぐる一種の随想」(特集 沖縄研究 ： 理論/出来事の往還)『言語社会』9：107-122
・比嘉克博 2015.『琉球のアイデンティティーその史的展開と現在の位相』琉球館.
・又吉盛清編 2005.『日露戦争百年－沖縄人と中国の戦場』同時代社.
・山﨑孝司 2012.「沖縄復帰運動が目指した「祖国」－境界とアイデンティティの揺らぎ」

[2]大田昌秀 1980.『沖縄人とは』green-life.
[3]大田昌秀 1980.『沖縄人とは』green-life.2p
[4] ヨーゼフ・クライナー編 2013.『日本民族学の戦前と戦後－岡正雄と日本民族学の草分け』東京堂出版.
[5] ヨーゼフ・クライナー著・沖縄大学地域研究所編 2012.『世界の沖縄学　沖縄研究 50 年の歩み』芙蓉書房出版.

(会活動ニュース 戦争展文化企画)、日本史研究会『日本史研究』596：99-101
・琉球新報社 2011a.『薩摩侵攻 400 年　未来への羅針盤』(新報新書〔1〕) 琉球新報.
・琉球新報社 2011b.『「琉球処分」を問う』(新報新書〔2〕) 琉球新報社.

そのなかでも本章では、前述したペンシルベニア州立大学准教授（発表時の肩書）のグレゴリー・J・スミッツの「沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティ」に関する研究を中心に取り上げたい。2004 年 3 月 9 日に法政大学で行われた沖縄アイデンティティのシンポジウム[6]において、スミッツが登壇した際に使用した資料「沖縄アイデンティティの歴史的変動とその事情」がウェブサイト上[7]で閲覧できるようになっている。スミッツの論考は、従来の「沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティ」研究と比べ、沖縄と距離を置いた客観的な見方がなされていると筆者は考える。これまでの沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティ論について多くの文献がある中で、スミッツは、はじめは沖縄人(ウチナーンチュ)というアイデンティティはなかったという立場から研究を行い、その後、沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティが形成され、変動しやすい性質をもっていたことを指摘している。さらに沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティを分析することにより、普遍的なアイデンティティの性質も述べている。

２．沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティの歴史的変遷
—沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティに影響のある４つの出来事

スミッツの登壇資料「沖縄アイデンティティの歴史的変動とその事情」に沿って、スミッツの述べる沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティの歴史的変遷をみていく。この登壇資料は 12 の項目に分けられているが、筆者は説明の便宜から a.～g.の 7 つの項目に分けて以下でみていく。

はじめに全体を通してみると、「琉球人とか沖縄人という一貫した概念は存在しなかった」という立場からまとめられている。前近代の琉球列島住民の多くは、自分たちのアイデンティティを考えたかどうか疑わしい、とし、「琉球・沖縄のアイデンティティは、現在も、昔も、不安定なものです。このアイデンティティの性格は、各時代の事情によって変動しがちなものであり、社会や政治的な工夫として存在」していると述べている。

また、「沖縄のアイデンティティが変わりやすいという性格をあげながら、いくつかの根本的なレトリック上の方法が、それぞれの時代に見られることを指摘したいと思います。特に大切なのは、政治のアジェンダを進めるために、「伝統」というものを作り上げるという

[6]会場・開催日：法政大学多摩キャンパス　100 周年記念館国際会議場
2004 年 3 月 9 日(火)－3 月 12 日(金)、主催：法政大学国際日本学研究所

[7]「沖縄アイデンティティの歴史的変動とその事情」

http://www.personal.psu.edu/faculty/g/j/gjs4/Okinawan_Identity.htm

工夫です」[8]と始まる。

ここから、時系列に沿ってみていく。

a. スミッツが沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティに影響のある出来事の一つ目として挙げた「1609年の薩摩侵攻までの古琉球の時代」：尚真王（しょうしんおう）[9]が、按司（あじ：地方の支配者）を首里に定住させるなどの政策により、権力を中央に集中させ、海外貿易が盛んになり、琉球王国の黄金時代だとよく言われるが、その時代の平民が琉球人、沖縄人という意識を持っていたとは考えられない。当時の平民は自分の村または、広くとも数村からなる間切（まぎり）（当時の村区分）ぐらいの地理的アイデンティティを持ち、世界観は地元の宗教、自然環境、経済的な事情などからなっていた。琉球人としての意識を持つものはエリート階層に限られていた。だから、琉球アイデンティティの基礎は王権イデオロギーだった。

b. 近世琉球：幕藩体制に巻きこまれるとともに、中国からの文化がより一層盛んになった。この時代の平民も、琉球人であるというはっきりとした意識はほとんど見られなかった。これに対して、エリート層は、琉球人としての意識を持ち、そのアイデンティティ観が、日本の方に偏ったり、中国の方に偏ったりする傾向が見られる。例えば、為政者であった尚象賢（しょうじょうけん）（1617～1675年・和名は羽地朝秀）は、琉球士族が日本のエリート文化を勉強するよう促した。詩人であり外交官であった程順則（ていじゅんそく）（1663～1735年・琉球名は寵文）は、中国文化を琉球で普及しようとした。その中で蔡温（さいおん）（1682～1762年・大和名は具志頭親方文若）は朱子学を利用して琉球の主体性を強調した。

『琉球王国の自画像　近世沖縄思想史」』[10]によると、いわゆる亀甲墓[11]の福建から琉球への導入・普及、門中という父系出自集団の形成、さらに王府による士族階級の登録といったことは向象賢と蔡温の在任中における出来事であった。これらは琉球王国が中国と日本の間でバランスをとりながら存在していた時期にできあがった制度である。したがって、折衷的な制度になっており、「広く浅い」側面と、タテ社会的な側面との両方を持っていたといえる。門中については、3で後述する。

c. 沖縄人アイデンティティに影響のある出来事の二つ目、「いわゆる「琉球処分」（琉球併合）と旧慣温存時期（1870年代から20世紀のはじまりまで）」：琉球処分は主に学校教育によって、平民の間に、自分たちは日本人だというアイデンティティ観を普及させた。この日本人としての意識は旧慣温存策を廃止するような要求を起こした。その結果、20世紀に入ると同化政策、すなわち沖縄を他県と同じようにさせる政策が次第に著しくなった。

---

8 スミッツの登壇資料.2004「沖縄アイデンティティの歴史的変動とその事情」
http://www.personal.psu.edu/faculty/g/j/gjs4/Okinawan_Identity.htm

9 琉球王国第二尚氏王統の第3代国王（在位1477年（成化13年）- 1527年（嘉靖5年）

10 グレゴリー＝J＝スミッツ・渡辺美季訳 2011.『琉球王国の自画像　近世沖縄思想史」』ぺりかん社

11 「かめこうばか」または「きっこうばか」と呼称される。「亀甲墓は俗に母体をかたどったものであるといい、人は死ぬと再びもとのところへ戻るという帰元思想のあらわれといわれている。」(執筆：名嘉真宜勝)参照：沖縄大百科事典刊行事務局編 1983a.『沖縄大百科事典　上巻』沖縄タイムス社. p.763

この同化策が沖縄人（ウチナーンチュ）のアイデンティティ観を徹底的に変更し、琉球列島住民の多くは自分たちを日本人とみなすようになった。

同化策の時期は 20 世紀前半中続いた。この半世紀の沖縄アイデンティティの特徴として 3 つ挙げられている。第 1 に、沖縄の住民は圧倒的に「日本人」というアイデンティティを意識して身につけようとしたが、その具体的な内容は必ずしも明白ではなく、例えば 1940 年の沖縄方言論争は、日本人とは何であるかを定義しようとする討論であった。第 2 に、経済的発展は文化によるものだという思い込みがあった。第 3 に、「同化」するのは主として文化であり、日本文化を身につけることが多くの沖縄人の義務とされたこと。本土での日本人アイデンティティ論を見ると、「単一民族、単一文化」という理解があり、日本人と外国人とを比較して定義するために、「日本人は近代化した進歩した国民であると同時に、深い伝統的な文化も保有する民族である」という見方ができた。スミッツはこれを「日本人の理想像」と名づける。沖縄人は本土人から「異なる」というレッテルを負わされていたので、民俗学者の伊波普猷（いはふゆう）（1876～1947 年）や歴史学者の東恩納寛惇（ひがしおんなかんじゅん）（1882～1963 年）は、琉球人は日本人と同じ起源を有し、今でも昔でも本質的には相違はない同胞だと主張した。実際の文化的相違は一般に、薩摩のせいであると主張された。17、8 世紀中、薩摩は中国と間接的に貿易をするために琉球を中国化させる政策をとり、この不自然な中国化政策によって、琉球の自然の文化的な進展が阻止されたというわけである。

日本人の理想像のうち「伝統的な文化」の側面についてはこのような主張は当てはまったかもしれないが、「近代化」の側面については説得力ある理由が日本政府側に挙げられなかった。沖縄の人々が正式に日本国民になるには沖縄が近代化される必要があった。

沖縄の貧困は、当時の社会と経済構造から十分に説明できるとスミッツは考える。沖縄経済は砂糖産業に過度に依存していた。世界中で砂糖は生産過剰で、値段が下がっていたにもかかわらず存続し続けていたことが第 1 次大戦後の「ソテツ地獄」[12]の主因である。しかし、沖縄人も、本土人も、このような理由をあまりあげず、沖縄の貧困は沖縄の文化的欠陥によるものだとして、文化的な理由を強調する傾向があった。文化的欠陥としてあげられたのは、ルーズなこと、酒を飲む男が妻の労働だけに頼って生活する怠け者であること、靴をはかない習慣、奇妙な音楽等々である。

他方、日本文化というのも同一、一貫したものではなかった。19 世紀の日本には、言語、宗教、衣服、食物、社会的習慣などさまざまな面で文化的多様性が存続していた。例えば、鹿児島弁も各地で方言があった。北海道から与那国まで見ると、琉球の諸文化は

---

12 「第一次世界大戦後の世界恐慌期から世界代行好機の慢性的不況下における沖縄経済および県民生活の極度の窮迫状況を意味する用語。沖縄近代史の歴史概念として定着した観がある。米はおろか、芋さえも口にすることができずに、野生のソテツの実や幹（まずいうえに猛烈な毒性があり、調理をあやまると死を招く危険もある）を食べてようやくにして飢えをしのぐといった悲惨な窮状をたとえてこう呼んだ。」（執筆：西原文雄）参照：沖縄大百科事典刊行事務局編 1983b.『沖縄大百科事典　中巻』沖縄タイムス社.p.630

日本列島の多様な文化の長い連続体の一端にあった。しかし、琉球列島は日本の国境内に入ってきたのに、本土人の認識や心理では依然として国境外にあって、正式な国民国家のメンバーとはみなされなかった。この状態が沖縄人にとっては大きな問題になり、「一貫した日本文化」という神話は沖縄人の生活を悪化する役割を果たすとともに、文化的側面にこだわる傾向のせいで実際の問題を見落とす結果となった[13]。

d. 沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティに影響のある出来事の三つ目、「沖縄戦」：日本軍の行動や、いわゆる「集団自決」などによって、沖縄での皇民意識の根強さを示しながら、中央政府が沖縄を犠牲にしたことも示した[14]。

e. 沖縄人アイデンティティに影響のある出来事の四つ目「米軍に支配された 1950～60 年代の沖縄」：日本は戦争を禁止する憲法をもち、次第に経済大国になっていく、理想に見える国であった。「我が本土」や「我が祖国」という当時流行の表現がいうように、米軍支配の時期、同化の時期と同じく、琉球・沖縄は大昔から日本の一部であったという見解が共通の考えになった。

f. 復帰後 1980 年代になって：日本の理想像はだいぶん衰えてきた。復帰してから 10 年たっても、沖縄の平均収入は本土に比べまだ 70％で、基地問題も相変わらず残っていた。復帰を期待はずれと失望で見た沖縄人は少なくなかった。それとともに、学問の世界でも、琉球と日本との関係を否定したわけではないが、琉球中心、あるいはアジアのメンバーとしての琉球という見方も次第に顕著になってきた。1987 年の日の丸焼き捨て事件や、1995 年の米兵による強姦事件が基地問題の象徴となり、沖縄県と中央政府との緊張度が高まった。基地を廃止するために、平和主義者としての琉球という伝統を作り上げた。つまり、琉球は、武器さえ持たなかった完全に平和な社会という主張である。この主張は、歴史的事実としては正しくないが、沖縄の伝統文化は完全に平和な社会を支えることで世界に貢献すると唱えられ、これは基地問題の悲劇的な面を強調する役割も果たしている。

g. このように、今も昔も琉球・沖縄での政治的なアジェンダを支えるために、過去の状態を操り、いわゆる伝統をつくるという方法が、それぞれの沖縄のアイデンティティ論につながっていた。こういう状況は、別に沖縄に限ったことではない。歴史や歴史学は、アイデンティティ論を支える道具として使える可能性もあるし、逆にアイデンティティ論自体を批判する可能性もある。

---

13 スミッツの登壇資料.2004「沖縄アイデンティティの歴史的変動とその事情」
http://www.personal.psu.edu/faculty/g/j/gjs4/Okinawan_Identity.htm

14 スミッツは講演の中では沖縄戦についてさほど長い時間を使って述べてはいないが、沖縄アイデンティティの負の側面として、その後に大きく影響を与えた事象である事は言うまでもない。

このようにスミッツは、琉球・沖縄の時代区分を通して、各時代に、どの層、どの琉球人や沖縄人が、当時のアイデンティティ問題をどのように意識していたかに着目し、沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティに関する歴史的環境の重要性を指摘している。

３．沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティに影響のある風習・考え方からみる特徴

次に、歴史以外の視点からも、沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティに影響のある特徴について考察する。ここでは①「イチャリバチョーデー（行き逢えば兄弟）」に見られる海洋民族的特徴、②父系血縁の親族制度「門中(ムンチュウ)」の影響の２点から論じていく。

（１）沖縄の風土的な影響―「イチャリバチョーデー（行き逢えば兄弟）」に見られる海洋民族的特徴

沖縄人(ウチナーンチュ)意識の生まれる背景として、沖縄において頻繁に使用される「助け合い」を意味する「ユイマール」、思いやりの心として「チムグクル」そして「イチャリバチョーデー（行き逢えば兄弟）」などが沖縄人(ウチナーンチュ)によって頻繁に使われることが挙げられる。３つはいずれも共通した面を持つが、筆者は特に「イチャリバチョーデー（行き逢えば兄弟）」を取り上げる。

まず「イチャリバチョーデー」について『沖縄大百科事典』によってみていく[15]。「イチャリバチョーデー」とだけ述べる場合と、続けて「何(ヌー)の隔(フィダ)てぃぬあが」と続ける場合がある。どちらも意味は、「いったん出会えば兄弟と同じこと、何のへだてがあるか」「道で行き逢い、ことばをかわす機縁でもあれば、それはもう兄弟のようなものだ」という意味である。これは仏教の「一樹の陰一河の流れ、袖振り合うも他生の縁」と同様の意味でもある。

「イチャリバチョーデー」に関して、沖縄県が中心となって主催する世界のウチナーンチュ大会第４回大会実行委員会事務局長であった知念英信氏の講演レジュメを紹介する。第４回大会は 2006 年開催である。

同氏の講演レジュメ「世界のウチナーンチュ大会から見える沖縄・日本比較メンタル文化（論旨）」には次のような仮説が設定されている。

〈沖縄的メンタルの特徴〉

◎「イチャリバ　チョーデー」という考え方（海を渡り慣れた民の外交戦術）

〇強固なアイデンティティー

〇チャンプルー（mixed up）文化

・交ぜることを良しとする文化

---

[15]沖縄大百科事典刊行事務局編 1983a.『沖縄大百科事典　上巻』沖縄タイムス社. p199
（執筆：あしみね・えいいち）

〇ニライカナイの思想
　・幸は海の彼方から
〇南方的おおらかさ

〈本土的メンタルの特徴〉
◎郷に入らば、郷に従へ（定住、稲作農耕の民の処世術）
〇希薄なアイデンティティー
〇素材の個性を重視
　・交ぜると悪しとする感覚
〇天孫降臨
　・幸は天下って
〇北方的ストイシズム

出所：知念英信氏による講演レジュメ「世界のウチナーンチュ大会から見える沖縄・日本比較メンタル文化（論旨）」

上記の知念氏のレジュメでは、沖縄的メンタルの特徴と本土的メンタルの特徴とに分けてとりあげている。これは沖縄の伝統的な考えの代表とも言えるため、解析を試みたい。

まず、沖縄的メンタルの特徴の一つである「イチャリバチョーデー」（行き逢えば兄弟）は、「海を渡り慣れた民の外交戦術」とも記されているが、定住、稲作農民的ではない、漁民ないし海洋民族的な特徴を持っているということである。横とのつながりを重視した、出会った人とは仲良くするという意味と考えられる。次に「強固なアイデンティティ」は沖縄出身であるということを沖縄の人たちは強く実感していることから言われるのだろう。「チャンプルー文化」は、沖縄の風物が中国、東南アジア、日本、アメリカの文化と混ざっていることを指すのではないかと思われる。例えば、料理についても混ぜ合わせたものが多い。

「ニライカナイの思想」は昔から海の彼方にあると信じられている理想郷のことを意味し、そこには五穀豊穣や幸せをもたらす神がいる、幸は海の彼方からくると言われている。

最後に「南方的おおらかさ」とあるが、これは年間を通して暖かい気候の影響を受け人々や時間の流れがゆったりのんびりとしていることだと思われる。

以上、沖縄の代表的な考えとして知念氏のレジュメをみてきた。これらは昔から沖縄内で語られてきた沖縄的、または本土的メンタルの特徴の一部であるともいえる。

このような発想は南方的おおらかさを背景としていると考えられよう。このような特徴を持っているということは一般に、「遅れている」というマイナスの評価に繋がってきた。

2013 年現在、ブラジル、クリチーバ市においても「イチャリバチョーデー」、同義で別の言い方である「イチャタラチョーデー」または、「チョーデーグクル（兄弟の心）」など沖縄

の心を表わす一つとしてクリチーバ沖縄県人会のメンバー内の会話で沖縄について語られる際に頻繁に使われている。また、特に若い人で構成される琉球國祭り太鼓が沖縄をはじめ世界各地に支部として展開されている。クリチーバ支部もあり、2012 年に開催された 5 周年記念公演では、「イチャリバチョーデー」が公演のテーマになっていた。

〈写真 1〉琉球國祭り太鼓クリチーバ支部 5 周年記念公演のチラシ

2012 年 11 月 3 日に開催された。テーマは ICHARIBA CHOODEE：イチャリバチョーデーである。

琉球國祭り太鼓については、第 4 章「クリチーバ沖縄県人会とアイデンティティ」で詳述する。5 周年のチラシをみると、ICHARIBA CHOODEE をポルトガル語では、UMA VEZ JUNTOS, PARA SEMPRE FAMÍLIA となっている。兄弟という言葉に「家族」となっており、「行き逢えば皆家族」と意味されるだろうか。踊る曲は全て沖縄音楽となっており、太鼓のメンバー内では沖縄の言葉の意味を理解する機会が生まれている。

「イチャリバチョーデー（行き逢えば兄弟）」や「ユイマール（相互扶助）」を現在においても大事にする背景には、島内に自立的な産業がないこと、戦後の米軍基地化など、沖縄人（ウチナーンチュ）にとって助け合いを必要とする歴史が長く続いてきたからであると考えられる。

（2）沖縄の親族制度「門中（ムンチュウ）」の影響―親族を繋げる契機

沖縄人（ウチナーンチュ）のアイデンティティに影響のある要因の一つとして、沖縄の親族制度である「門中（ムンチュウ）」を挙げる。

日本移民の地理学研究者である石川友紀「沖縄県における出移民の歴史及び出移民要因論」において沖縄からの出移民の要因を 5 つ挙げており、出移民要因の一つとして「社会組

織」である「門中」を取り上げている[16]。石川は、門中の影響として、各移民在留国における県人会、市町村人会・字人会の誕生していること。そして、「一度このようなつながりができると、移民母村においても郷里（土地）への執着を断ち切って、海外への気軽な渡航をみるようになるのである。もちろん、経済的貧困さ、将来性への不安さもその根底にあるとはいえ、そのような精神的近接感の方がより大きく働いたものと考える。[17]」としている。

門中（ムンチュウ）とは、沖縄県における始祖を同じくする父系の血縁（沖縄でシジという）集団、親族集団である。門中は 17 世紀後半以降、士族の家譜変遷を機に沖縄本島中南部を中心に発達し、のちには本島北部や離島にも広がった[18]。

沖縄における門中は中国の社会制度「宗族」から取り入れたものであるが、門中の中身は、中国式だけではなく、日本本土の「同族」[19]も採り入れられたものとなっている。

門中は家系図を書いてみると、日本の伝統的な同族よりは中国の宗族に類似していると言われる。日本の場合、家を継ぐのは長男１人だから、あとは皆分家して別々になる。そういう意味で縦にしかつながっていかない。中国の宗族の場合、分家というのがなくて兄弟が同じまとまりに包摂される。だからどんどんふくらんで大きくなる。この宗族のネットワークが、華僑の発展に非常に大きな役割を果たしてきている。親戚といっても巨大なものとなるから、「広く浅い」親族関係ができる。沖縄では、分家はあるが、分家したからと行って兄弟間のつながりが切れるのではなく、１つのまとまりであり続ける。それを象徴するのが伝統的な門中墓で、皆同じ墓に入る。ただ、現在は、分家した家族ごとに家族墓をつくることが一般的になっている。

また、中国では、昔から夫婦別姓である。姓は血縁で決まるので、結婚したからといって変わらない。そして、相続は均分相続である。ところが沖縄では夫婦同姓である。そして、伝統的には長男が位牌とともに財産も単独相続するということが多かったと思われる。そういうことで、門中は「封建的」な制度だといわれてきた。

人類学者のエマニュエル＝トッドに従えば、中国の宗族は「共同体家族」と分類され、親子関係は権威主義的で子供の成人後の親子同居もあるとともに、兄弟間は平等主義的であり、均分相続である。これに対して、日本の同族は、「直系家族」と分類され、親子関係は権威主義的であり、兄弟関係は不平等である。沖縄の家族も基本的には日本と同様で均分相続ではなく、長子の単独相続が原則であるが、日本本土とは違い、分家しても様々な点で親族関係が維持され、日本の同族と比較すると親族関係の広がりが大きい[20]。

門中（ムンチュウ）の特徴として、次の三つがあげられる。①共有する門中（ムンチュウ）墓を維持管理、②定期的なオコデ（門中（ムンチュウ）の神人）による先祖祭祀、③親族集団として日常的な交流や扶助といった場

---

16 石川友紀 2005.「沖縄県における出移民の歴史及び出移民要因論」『移民研究』 p 21

17石川友紀 2005.「沖縄県における出移民の歴史及び出移民要因論」『移民研究』創刊 ： p25

18波平エリ子 2010.『トートーメーの民俗学講座　沖縄の門中と位牌祭祀』ボーダーインク.
「ムートゥヤー（宗家）」と「ユダチ（世立ち）」、「ユダファ（枝葉）」と呼ばれる分家群で構成される。

19 日本の伝統的な家族制度で、本分家関係が系譜的に結ばれた家々の集団をさす。

20 エマニュエル＝トッド（石崎晴己、東松秀雄訳）1992.『新ヨーロッパ大全』藤原書店.

面でも重要な役割を果たしている（地域的な偏差がある）。日本本土の同族は婿養子による継承も許容される。これに対し、沖縄の門中は父系血縁（シジ）による継承を貫く強い志向を有する。養子を取る場合にも養子同門制の原則に固執する。他門中（ムンチュウ）の出身の嫁婿が家やトートーメー（位牌）を継承するとタチイマジクイ（他系混交）の禁忌に抵触するとされる[21]。

「門中（ムンチュウ）」に関係することとして、例えば、現在でも、戦前移民でブラジルやペルーなどの南米に移住した人たちの孫、曾孫にあたる３世、４世を、沖縄で位牌を継ぐために呼び寄せるということがある。沖縄の位牌祭祀に関する慣習は民法の規定と矛盾を来すことがあり、いわゆる「トートーメー（位牌）問題」を引き起こしてきた。

沖縄文化に詳しいブラジル沖縄県人会の会長を務めたこともあるヨナミネ・シンジさんはブラジルにおける門中との関係について以下のように述べている。

「ブラジルではウチナーンチュの移民が一時禁止されていたが、呼び寄せは認められていたため、呼び寄せでかなりの人がやってきた。（沖縄において）移民には長男が多いので、トートーメー（位牌）を継ぐ本家がブラジルに移り、沖縄側がブラジルに手を合わせに来ないといけない状態になった」
（2009 年８月 24 日、サンパウロの沖縄県人会本部にて筆者によるインタビュー）

クリチーバ市の２世のアカミネ・カズコさんが位牌のエピソードを次のように話している。

「父親は「みんなが怒るけど、私たちのトートーメー（位牌）はあなたが守りなさいよー送らなくていいよー」という。いとこはいつも「（沖縄に）送りなさいと、そうしてはいけない」と言った。昔は小さい位牌だった。それで大きな位牌に換えた。そうすると新しい位牌があるので古いの、前の（位牌）は沖縄に送った。おじさんは灰を（一緒に）少し送りなさいという。次男は私が亡くなったら継ぐって言っている」（2013 年１月 29 日インタビュー）

ブラジルに位牌があり、ブラジルと沖縄とのやりとりがあるのがわかる。

長男に男子がいなくて、次男の次男とか、さらには門中内のもっと遠い男系血縁の者が位牌の継承とともに財産まで相続するということがある。それも、実子の女子と均分ではなく大部分もしくは全部を相続するということになると、慣習と民法規定との乖離が大きくなって女子でもトートーメー（位牌）を継承できるはずだとして問題となった。しかし、沖縄でも少子化は進んできており、「門中（ムンチュウ）」の制度的なルールに従うことが困難な状況が増え、「門中（ムンチュウ）」同士のつきあいがだんだん希薄になって行きつつある。小さな世帯単位での生活

[21]琉球新報社編 2003.『最新版　沖縄コンパクト事典』琉球新報社.

がメインになって、祭祀承継のために養子適任者とされた者が実際に養子となることを承諾しないという話も耳にする。今後そのような方向性は加速していくと考えられるが、それでも門中（ムンチュウ）を枠組みとする「広くて浅い」親族関係は現在でも広範に残っている。今後、小さな世帯単位に分解していく親族関係をつなぎ止める装置として、「広くて浅い」親族制度の意義は再評価される可能性があるのではないか。

例えば、前述のように「世界のウチナーンチュ大会」という催しがある。これは1990年からほぼ5年ごとに沖縄県が開催しているもので、2011 年 10 月に実施された第5回世界のウチナーンチュ大会は参加者 7363 人という過去最大規模になった。この大会は当初、沖縄移民の里帰りという意味が重要となっており、「広くて浅い」親族ネットワークの存在を基盤として展開されてきた。最近では、このような親族ネットワークの存在が沖縄の独自性や沖縄人（ウチナーンチュ）の豊かさとつなげて理解されるようになり、沖縄の外よりむしろ沖縄県民に向けたメッセージが発信されるようになっている。また、何をもって沖縄人（ウチナーンチュ）というのかということについては、沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティは、「自然的に継承されるもの」から「意識的に獲得されるもの」へと変化していっている。

この社会組織の影響について文化人類学者の森幸一によると、ブラジルでの「門中（ムンチュウ）」について、70 年代初頭から経済的上昇の結果起こった現象の一つが戦前移民の〈訪沖〉だった。この旅行の目的が「先祖の移住」、つまり、出稼ぎ移民として、沖縄の親族や家族に留守を頼んできた継承した位牌（トートーメー）や遺骨、ヒヌカン（火の神）、香炉など」を〈ウンチケー[22]〉して「ブラジルにお連れする」ことにあった。ブラジルに移住した「門中（ムンチュウ）」成員が門中墓を購入する動きも活発化したという。これは〈ブラジルの門中〉や「ヤー[23]」が誕生し、沖縄との関係のあり方を変更したこと、沖縄と歴史的に連続性を持ち、神話や時間を共有する実態としての〈ブラジルのヤー〉が誕生したのだと諒解することができるという[24]。

制度のタテマエと運用の実態とが必ずしも一致していないため、比較の中で沖縄の親族制度を位置づけるには慎重さが必要であるが、少なくとも日本本土と比較して「広くて浅い」親族関係であることは明瞭に認められる。「門中（ムンチュウ）」制度という親族システムが沖縄人（ウチナーンチュ）同士をつなぎとめようとする要因になっていると考えられる。そこには義務感も含んだ思いがあると筆者は考える。

４．小括－アイデンティティは創られる

沖縄のアイデンティティに関する研究論文は他の都道府県と比較すると、類をみないほど多い。沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティ論は巻末に掲げた表「添付資料４」の通り、心理学、社

---

22 祖先崇拝の対象となるものを新たに迎え入れたり、造ったりすること。

23 家のこと。

24森幸一 2000.「ブラジルにおける沖縄系人のアイデンティティの変遷過程」『産業総合研究調査報告』第Ⅳ編、南米研究部会、沖縄国際大学産業総合研究所 8：43-56.

会学、民俗／民族学、政治学、歴史学と複数の分野で論じられている。従来の沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティ研究にみられるのは、固定化された前提に基づいたアプローチによるものだと筆者は考える。その中で沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティを古琉球時代である 15 世紀からさかのぼってみてきたスミッツの研究は、全くニュートラルな入り口から入っている。それは、彼が沖縄人(ウチナーンチュ)というアイデンティティはもともとなかったという立場から入っているためである。そして、スミッツは各時代に分けたアプローチをし、特に、薩摩による侵略、琉球併合、敗戦による米軍支配、本土復帰の４つの出来事が沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティに大きな影響を与えたと述べている。スミッツの研究からみえるのは、沖縄が国際的な動きに翻弄されて、沖縄自身のアイデンティティを積極的に作れない環境が続いてきたということである。そのような状況の中で、琉球王朝時代において蔡温などが積極的に沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティづくりに力を入れてきた。アイデンティティの持ち方は、琉球士族などの上層部の人々と民衆の層によって意識の違いがあり、特に上層部の人々にとって、琉球あるいは沖縄の所属が危ぶまれる際にアイデンティティが揺れ動いていたことがみられた。

スミッツのいうように、「琉球人とか沖縄人という一貫した概念は存在しなかった」または「アイデンティティはもともとなかった」と考えれば、新たにつくりだすことも可能となり得る。スミッツの資料では移民についての言及はみられなかった。しかし、沖縄移民のアイデンティティを考える際、スミッツの考えは、土地からはなれた場所においても新たなアイデンティティが形成される得ることを示していると筆者は考える。

沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティに影響のある要因として、さらに「イチャリバチョーデー（行き逢えば兄弟)」という海洋民族的性質と、現在においても沖縄に根付いている「門中(ムンチュウ)」制度の影響の二つを筆者は指摘した。この２つはいずれも日本本土に比して、沖縄で特にみられるものである。この「門中(ムンチュウ)」制度によって、移民先においても沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティ醸成の可能性が高まると考えられる。

前述のように、いわゆる亀甲墓の福建から琉球への導入・普及や門中という父系出自集団の形成、さらに王府による士族階級の登録といったことは向象賢と蔡温の在任中における出来事であった。つまり、琉球王国が中国と日本の間でバランスを取りながら存在していた時期に出来上がった制度であり、そのため、門中も折衷的な制度になっており、当時の沖縄が置かれていた歴史的な状況を反映している。

「門中(ムンチュウ)」制度の影響については次の２章「沖縄移民のアイデンティティをめぐる考察―アイデンティティ研究の対象としての沖縄移民」でも述べる。

沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティは、２のスミッツの論じる歴史からみて、どのようにつくられ、変化してきたかを認識するだけでなく、このプロセスをみることにより、土地から離れたところでの新たなアイデンティティの醸成の可能性を確認した。さらに、「イチャリバチョーデー」「門中」については土地から離れたところでのアイデンティティ醸成に大いに追い風となる可能性を確認した。

第２章　沖縄移民のアイデンティティをめぐる考察
—アイデンティティ研究の対象としての沖縄移民

第１章では、沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティがどのように形成されてきたのかをみてきた。

本章では、次章でクリチーバ市の事例に入る前に、沖縄において移民とはどのような存在だったのか、どのように輩出されてきたのかを歴史的に追ってみていきたい。移民の歴史を追った後、沖縄移民の分布を把握し、その上で、沖縄移民アイデンティティに関する研究を概観していく。

１．本論文における沖縄移民の定義

はじめに本論における移民の定義をみていく。

日本における移民の定義として、沖縄移民の専門で地理学研究者である町田宗博によると、「1894（明治 27）年の『移民保護規則』において従来用いられてきた『出稼ぎ』という言葉から『移民』という言葉の使用に移行した」。そして「移民とは『労働ヲ目的トシテ外国ニ渡航スル者』としている」「第２次世界大戦後、日本の外務省は『移民』の用語を改め『移住』または『海外移住』の使用を始めた。これは移民という暗いイメージを改める意味があった」[1]としている。日本において、はじめは「出稼ぎ」という言葉の使用が見られたが、その後、「移民」の言葉になり、第２次世界大戦後以降、「移住」という言葉に変換されていった。

沖縄においての「移民」については『沖縄民俗辞典』[2]で次のように述べられている。移民とは、「沖縄では通常、県内から日本国外へ移住し、かつ定住した沖縄系移民１世およびその子孫を指し、日本本土への移住とは明確に区別される一方で、第二次世界大戦前の日本の植民地への移住は移民に含める傾向にある。ほかに沖縄移民、沖縄系、県系人、琉僑、世界のウチナーンチュなどの呼称も用いられる」。日本本土への移住、あるいは出稼ぎについては、移民とは区別されるとあるが、出稼ぎに出た背景、理由、出稼ぎ先での暮らし方、そして本土での沖縄差別から移民の状況と共通する面が多くみられる。そのため、出稼ぎは、移民と同様に扱われることもみられることを述べておく。

移民の定義が「労働を目的として外国に渡航する者」とすると、移民の始まりが変わってくる。一般的に沖縄では、地元紙などから 1899 年のハワイへの 26 名の契約移民を沖縄移民の始まりとしており、本論文も基本的に移民の歴史を上記と同様に規定する。しかし沖縄における移民の定義について、別の重要な見方もあることを述べておく。「人の移動」に視点を据えた榮野川は「沖縄の移民－近代うちなーんちゅの移動の小史」で、移民の始まりは、

---

[1]町田宗博 2006.「第二次世界大戦前の移民」与那原町史編集委員会『与那原町史　資料編１移民』与那原町教育委員会.pp3-4.

[2]渡邊欣雄・佐藤壮広・塩月亮子・岡野宣勝・宮下克也編 2008.『沖縄民俗辞典』吉川弘文館. p36

1879 年のいわゆる「琉球処分」前後にさかのぼっている。日本の強制的な「琉球処分」に対し、中国清朝政府に請願するために政治的亡命、あるいは中国に密航した「脱清人[3]」という存在があったこと、あるいは日本本土へ渡り高等教育機関へ進学し、沖縄ネットワークを作った留学生ら、また日本本土から米国へ移民していく者も含めて榮野川は移民と捉えている。米国に住みながら沖縄人（ウチナーンチュ）らは沖縄県人会を組織し、将来のために道を作ることを希望し、沖縄の新聞記事に渡米を進める内容を掲載したり、移民を勧めることを目的に沖縄に一時帰郷したりという動きがみられた。これらの事象を榮野川は、「渡航の目的が留学、修学、農業視察、商業とされてはいるが、実質的には移民であったといえるだろう」[4]としている。

また国外への移民と、国内への出稼ぎは基本的に区別して考えるが、共通した面が多いため、場合によっては合わせてみていくこととする。

２．沖縄移民の歴史と分布

それでは、沖縄移民の歴史をみていく。

主に沖縄県における沖縄移民の歴史とその背景をたどっていく。第２次世界大戦前の沖縄移民は 1899 年、当山久三（とうやまきゅうぞう）の斡旋によってハワイに渡った 26 名が最初であった。沖縄が送り出した移民の実数は、広島、熊本に次いで３番目に多く、出移民率、海外在留者送金額なども高い位置を占めていることから、全国有数の「移民県」とされる。

戦前の 1923 年（大正 12 年）から 1930 年（昭和５年）にかけての移民は、「ソテツ地獄」[5]という特に困窮した時期と重なっており、ソテツ地獄によって押し出された人々の数を示しているとされる。また、戦後の沖縄における海外移民は本土のそれよりも４年も早く再開されている[6]。

1899 年から始まった戦前移民は移住する前の苦労と移住した後の苦労と二重の困難であったという。戦後移民の特色は、『新沖縄文学（45 号／沖縄移民）』[7]の「石鼓」・「“移民県”の現実」によると、ボリビア移民に見られるような政策移民と、近親者に呼び寄せられ

---

[3] 「脱清人」は、主に琉球国の支配階層の地位にあった一部の人や久米三十六姓という中国帰化人の子孫たちで、琉球存続の危機を危ぶみ、琉球を救済するように清国に働きかけをする「琉球救国運動」を行った人たちである。後田多敦 2010.『琉球救国運動　抗日の思想と行動』出版舎 Mugen.に詳しい。

[4]駒井洋監修・陳天璽＋小林知子 2011.『東アジアのディアスポラ』明石書店. p. 179

[5] 「第一次世界大戦後の世界恐慌期から世界代行好機の慢性的不況下における沖縄経済および県民生活の極度の窮迫状況を意味する用語。沖縄近代史の歴史概念として定着した観がある。米はおろか、芋さえも口にすることができずに、野生のソテツの実や幹（まずいうえに猛烈な毒性があり、調理をあやまると死を招く危険もある）を食べてようやくにして飢えをしのぐといった悲惨な窮状をたとえてこう呼んだ。」（執筆：西原文雄）参照：沖縄大百科事典刊行事務局編 1983b.『沖縄大百科事典　中巻』沖縄タイムス社.p.630

[6]鳥山淳 2004.「占領と移住・移民」『沖縄を知る事典』編集委員会編『沖縄を知る事典』日外アソシエーツ pp. 62-63.

[7]新川明編 1980.『新沖縄文学（45 号／沖縄移民）』沖縄タイムス社.

る移民の２つに大別される。また特に政策移民の中に米軍の強制接収によって土地を奪われた人々が多く加わっていることだと述べられている[8]。

これらは沖縄近代 100 年の歴史を照らし出す重要な鏡として見落とすことができない事実である。海外における移住者たちの生き方は沖縄の歴史のありようと密接に関わっているのである。

（１）～（３）で戦前、戦中、戦後に時代区分した沖縄移民の歴史的背景、特徴などを、そして（４）では沖縄移民の分布をみていく。

（１）戦前の沖縄移民（1899 年－1941 年頃）

沖縄移民の戦前期間を、「移民の父」と呼ばれる当山久三[9]の斡旋により始まった 1899（明治 32）年 12 月出発、翌 1900（明治 33）年ハワイ到着の 26 名の契約移民から第２次世界大戦勃発までの 1941 年頃とする。この約 42 年間の間に約 7 万 3000 人が移民している[10]

沖縄県の移民は、日本の第１回移民（1868 年）から 30 年、また集団移民開始から 14 年遅れて、1899 年 12 月にアメリカに合併されたばかりのハワイへ県人初の移民 26 人が送り出されたことに始まる（1900 年 1 月にホノルル港へ到着）。これは沖縄県当局や金武町（きんちょう）の当山久三の力が大きかった。最初の移民はサトウキビプランテーションの農業労働者であった[11]。

第２回移民は、1903 年、当山久三自ら出身地の金武町から 40 名を農業自由移民として引き連れてハワイへ渡った。金武では彼らの送金で瓦家を建て、田畑を買う家が増えたという。1904 年はメキシコ、1905 年にはフィリピンとニューカレドニア島、1906 年にはペルー、1908 年にはブラジルへの移住が開始された。メキシコ移民は、炭鉱労働者として送り出されたが、過酷な条件下で集団脱走が多数出るほどの惨状だったと当時の「琉球新報」が「墨国移民の危機」という見出しで伝えている。フィリピンについては、はじめ、ルソン島北部のベンゲット道路工事に導入される労働者として入植した。その後、ミンダナオ島ダバオでマニラ麻園の開発のために太田工業が設立されたのに伴い、沖縄から大量の移民が送

---

[8]新川明編 1980.『新沖縄文学（45 号／沖縄移民）』沖縄タイムス社. p.13

[9] 1898 年（明治 31）に上京するも就職には恵まれなかった。ところが、東京の古本屋で移民の本にであい、移民について強い関心を持つようになる。同時に、当時自由民権運動を推進していた東風平村（こちんだそん）の謝花昇（じゃはなのぼる）の思想にも共鳴した。その後、自由民権運動が挫折したなどのことから、移民問題に情熱を注ぐことになり、1899 年（明治 32）には沖縄県から初めての移民をハワイへ向けて旅立たせた。２回目の 1903 年（明治 36）には、自らも引率してハワイに渡り、ハワイでは、半年間滞在し移民の実情を調査して沖縄に帰ってきた。その後、久三は移民会社の代理人になり、多くの移民をハワイや南北アメリカ大陸などに送りだした。1909 年（明治 42）の 41 歳の時には、沖縄県の第１回県会議員にトップ当選したが、翌年、病死する。

[10] ハワイへの契約移民 30 名がサツマ丸で那覇を出発したことがはじまりとなっている。翌 1900 年にハワイへ到着するが、１人は本土で、３名はハワイ到着して身体検査で不合格となり帰されている。

[11]石川友紀「沖縄と移民」新川明編 1980.『新沖縄文学（45 号／沖縄移民）』沖縄タイムス社.　153p

られた。ダバオは日本人移民の中心地になっていった。マニラ市やパナイ島イロイロ市では漁業や商業に従事する県人が多かったが、大正末期からダバオの日本人の半数を沖縄人(ウチナーンチュ)が占めていた。フィリピン、旧南洋群島のサイパン、テニアン、パラオなどの移民は、太平洋戦争で戦争に巻き込まれていった。各地に米軍が上陸すると、軍とともに山中に逃避行し、多くの犠牲者が出た。敗戦後は、身一つで日本に強制送還されている。残留日系人の問題が今も存在する。ペルー移民に関しては、ハワイと同様、サトウキビ耕地での労働であったが、やがて都市地区での商業労働に従事する者が多くなっていった。1918 年以降、ペルーでは日本人移民の中で沖縄人(ウチナーンチュ)が半数以上を占めるようになっていた。現地での日本人移民が発展するにつれて排日の気運が高まり、40 年頃には排日暴動が起きている。太平洋戦争が開戦すると、日本人有力者の逮捕、米国への追放が行われた。米国では敵性外国人として収容所生活を余儀なくされている。1908 年のブラジル移民については、家族単位での移民ということが条件になっていた。妻として渡った 49 人の女性の中には仮の夫婦もあったという。こうしたことからか契約耕地に到着後逃亡する者が相次ぎ、鹿児島と沖縄移民はブラジルへの移民を禁止された。その後も禁止や制限が繰り返し出されたが、1926 年には外務省により「家長夫婦は 3 年以上同棲した者」などの付帯条件付きで移民が認められた。

米国については、1908 年に日米紳士協約が発効し移民に制限が加えられるまでは、ハワイを中心に展開されていた。1914 年はアルゼンチン、1920 年にボリビア、その後は東南アジア、南洋群島など世界各地へ移民が継続し、大正時代から 1935 年までの間に大部分の移民が送り出された。第２次世界大戦前、全国平均では移民は 100 人に１人の割合だが、沖縄は 10 人に１人となっている[12]。

行先は、ハワイ、北米合衆国、カナダ、中米（メキシコ、キューバ）、南米（ブラジル、ペルー、アルゼンチン、ボリビア、チリ）、フィリピン（ルソン島、ミンダナオ島、バナイ島）、旧南洋群島（サイパン島、テニアン島、ロタ島、パラオ諸島、トラック諸島、ポナペ島・クサイ島、ヤップ島、ヤルート島）[13]、英領マレー（シンガポール、ピナン、ボルネオ）、ニューギニア島、木曜島（トレス海峡諸島）、大洋島、旧オランダ領東インド[14]（ジャワ、バタビア、セレベス、スマトラ）、仏領ニューカレドニア、英領フィジー、旧満州[15]、そして台湾となっている。戦前移民の移民先国を割合としてみた場合、約 30%がハワイを中心とした北米、約 40%がブラジル、ペルー、アルゼンチン等の南米で、残る約 30%が東南アジアとなっている[16]

---

[12]榮野川敦「沖縄の移民」2011.駒井洋監修・陳天璽＋小林知子 2011.『東アジアのディアスポラ』明石書店.

[13] 現在の北マリアナ連邦、パラオ、ミクロネシア連邦

[14] 現在のインドネシア

[15] 現在の中国東北地区

[16] 上村昌司「戦後沖縄移民の諸問題」新川明編 1980.『新沖縄文学（45 号／沖縄移民）』沖縄タイムス社.pp.172－173

ここで、出移民の要因について見ておこう。日本移民の地理学研究者である石川友紀「沖縄県における出移民の歴史及び出移民要因論」[17]において、「沖縄県の出移民の要因は、経済的要因のほか地割制廃止による新土地制度の施行、移民会社・周施人・移民指導者の存在、徴兵忌避などの社会的要因の占める比重も高く、個人的な動機も少なくない。また海外への雄飛の精神も加わる」とし、社会地理学的観点から次の５つの出移民要因を事例を挙げて考察している。a.「人口過剰による経済的要因」、b.「移民啓蒙家および先駆者の出現」、c.「共同体規制の崩壊」、d.「社会組織」、e.「徴兵忌避」を挙げている。

a.「人口過剰による経済的要因」については、沖縄県の出移民にふれた地理学研究として与世里盛忠の「地理的ニ見タ糸満研究」のなかで人口増加の原因について２つのことがあげられる。１つは、廃藩置県当時以降、人口が倍増していること。２つめに、漸次交通の発達により、移入物質の便が増加し、県民の生活が向上するとともに消費の拡大につながるという影響がみられたことが指摘されている。

また石川は、金城功の「移民の社会的背景」を引用し紹介している。「人口過剰、土地の狭隘、資源の貧弱、そのような沖縄にいてはおさきまっくらだ、それで移民をして外地で稼ぎ沖縄経済に貢献するのだという考え方に落ち着き、多くの人が海外に出ていったのであろう。移民を送り出し、沖縄県の人口さえへらせば逼迫した沖縄をなんとか救済できるのではなかろうかという考えも流布していた[18]」。

b.「移民啓蒙家および先駆者の出現」については、1871（明治 4）年の全国にわたる廃藩知見の制度は沖縄は 8 年後の 1879（明治 12）年に琉球藩を廃し、沖縄県が置かれた。沖縄県からは、代議士 2 人が選出され、国政への参加は 22 年後になっていた。当時は、沖縄県政史上最も長く在任した第８代県知事奈良原繁の時代であり、沖縄県から移民を出すことは時期尚早として反対していた。そこに当時自由民権思想が勃興した時代であり、本土でこの思想の影響を受けた謝花昇、金武町出身の当山久三（のちの「移民の父」）が登場してきた。その後、フィリピン移民の先駆者として、同じく金武町出身の大城孝蔵がいる[19]。

c.「共同体規制の崩壊」については、1899（明治 32）年から 1903（明治 36）年までの 5 年間の間に行われた「土地制度の改革」と呼ばれる地割制の廃止があった。1899 年 4 月 1 日施行の沖縄県土地整理法により、沖縄県における最後の地割旧慣に従って実施されたものである。この土地整理は、旧来の土地共有制から私有制に変わり、居住の自由、移動の自由が認められ、土地の売却などにより資金の都合がつくなどして、移民希望者も急増したことが挙げられている[20]。土地整理事業以前には、村から出たいという意思があっても伝統的な共同体社会に多くの規制があり、出ることが出来ない場合が多かった。

d.「社会組織」については、第 1 章の沖縄人のアイデンティティ要因の一つとして提示し

---

[17]石川友紀 2005.「沖縄県における出移民の歴史及び出移民要因論」『移民研究』創刊 ： pp. 11-30

[18]石川友紀 2005.「沖縄県における出移民の歴史及び出移民要因論」『移民研究』創刊 ：pp.21-23
沖縄県教育委員会編 1974 原本・1989 復刻.『沖縄県史（第７巻　移民）』国書刊行会.pp.91-92

[19]石川友紀 2005.「沖縄県における出移民の歴史及び出移民要因論」『移民研究』創刊 ： pp. 23-24

[20]石川友紀 2005.「沖縄県における出移民の歴史及び出移民要因論」『移民研究』創刊 ： p24

た「門中（ムンチュウ）」の影響を述べている。石川は、門中の影響として、各移民在留国における県人会、市町村人会・字人会の誕生していること。そして、「一度このようなつながりができると、移民母村においても郷里（土地）への執着を断ち切って、海外への気軽な渡航をみるようになるのである。もちろん、経済的貧困さ、将来性への不安さもその根底にあるとはいえ、そのような精神的近接感の方がより大きく働いたものと考える。[21]」としている。

e.「徴兵忌避」については、沖縄県の徴兵令の施行は、1898（明治 31）年からとなっている。当時は兵隊に行けば帰ってこないものとみなされていたため、移民となれば、徴兵が延期されることから特に高齢期のものは移民を選んだという。

石川の出移民の要因については、筆者は概ね賛同する。

引き続き、戦中の沖縄移民をみていく。

（２）戦中の沖縄移民（1941 年頃―1945 年頃）

戦中の沖縄移民に関しては、第２次世界大戦勃発の 1941 年頃から、終戦となった 1945 年の期間としてみていく。

移民先において沖縄移民は、言語や習慣が本土出身移民と異なっており、本土出身移民者に「日本語が満足に話せない」、「野蛮だ」などと見られ、沖縄／大和と二項対立的に差別的な状況におかれていた[22]。本土移民からの沖縄移民への差別は強かったが、米国などでは、戦争になって一緒に戦わなければならない状況が生まれた。戦争になると、国と国との問題になるため、沖縄移民だけの問題が浮上することは少ない。連合国の米国の影響下にあったペルー（1944 年参戦）、ブラジル（1942 年参戦）などの南米諸国に居住する日系人、日本人移民は「敵性国民」とみなされた。戦争が始まると、ペルー政府はただちに（開戦の日午後３時）日本との国交を断絶し、ペルー国内では日系人の移動の禁止、営業の禁止、５人以上の集会の禁止など日本人弾圧の法律が作られた。日本人会などの団体は解散をさせられ、日本人小学校も 32 か所すべてが閉鎖されることなった。日系人の多くの資産はすぐに没収され、敵国人の財産としてみなされた。団体幹部や有力者であった日本移民のリーダーたちは、逮捕あるいは国外に追放された。この強制的な国外追放は米国がアメリカ圏のすべてから日系人を閉め出す目的で行われ、ペルーからは米国の収容所へ強制的に約 2000 人が送られた[23]。ブラジルにおいても、海岸沿いに住む日本人はスパイ視されることから内陸に強制移動させられ、集会が禁止され、日本語関係のものは取り払われた。一方、アルゼンチンは中立を守り日系人に宥和政策を取っている[24]。フィリピンにおいては、日本軍が開戦の日に

---

[21]石川友紀 2005.「沖縄県における出移民の歴史及び出移民要因論」『移民研究』創刊 ： p25

[22]町田宗博 2006.「第二次世界大戦前の移民」与那原町史編集委員会『与那原町史　資料編１移民』与那原町教育委員会.pp3-4.

[23]石川友紀「移民の世紀　沖縄移民の 100 年」ホームページ参照。http://rca.open.ed.jp/city-2001/emigration/cont/e_1_tf.html　（2015 年 10 月 8 日閲覧）

[24]移民研究会編[編集委員＝飯野正子　木村健二　粂井輝子] 1997.『戦争と日本人移民』東洋書林. 頂、

フィリピン・ルソン島、南部ミンダナオ島ダバオにある米軍施設を空襲しており、日本人移民は強制収容所に送られている。当時の日本移民は、約２万 7000 人とされ、そのうち約 70%が沖縄県出身者であった。戦時中は日本軍の飛行場建設などで移民の多くが勤労奉仕として駆り出され、女性、子どもも含まれていた。移民は現地の女性と結婚した者も少なくなく、混血の移民２世が日本軍の徴兵に応ぜざるをえないこともあった[25]。ハワイにおいても同様に太平洋戦争が始まると、すぐに戒厳令がしかれ、午後４時半以降の日系人の商売や外出が禁止、活動全般の禁止、日本語学校の閉鎖、日本語の放送禁止、日本語の新聞も発行が停止された。連邦捜査局により日系人のリーダー的な立場の有力者などは逮捕され、一般の移民は強制収容所に送り込まれ、300 人余りの人々が自由を拘束された。学業などの目的で日本から帰った米国生まれの２世は、スパイ監視の目がとくに厳しく向けられた。また、移民に対する軍事優先の住民の猶予なしの立ち退きが強制され、農場や家屋、家具などの財産が安く処分された。ハワイに関係する欧州戦線での戦死者は 806 人中 506 名が日系人で 63%に及んだ[26]。

沖縄の場合、日本で唯一の地上戦が行われた場所であることから、沖縄移民が米軍兵として沖縄で従軍するということがあった。米国西海岸に居住する日系人、日本人移民の約 12 万人が強制収容所へ収容されたが、日系アメリカ人で形成された部隊には沖縄移民も加わっており主な組織が３つあった。１つは通称「パイナップル部隊」（100 大隊）と呼ばれ、前衛としてヨーロッパ等の危険な地域に送られた。２つめも１つめと同様の第 442 連隊戦闘団というヨーロッパ等の危険な地域に送られた部隊である。そして３つめはアメリカ陸軍情報部（MIS）といい、通訳、翻訳、盗聴、傍聴、日本兵捕虜への尋問を担当した。このアメリカ陸軍情報部は、特にアメリカ生まれ日本で教育を受けた日系人の「帰米（きべい）２世」とアメリカで生まれた日系移民第２世代「日系２世」で構成されていた。米兵として沖縄戦に送られた沖縄にルーツを持つ「帰米２世」や「日系２世」の兵士が、英語、沖縄方言、日本語を駆使し、壕に避難している人々へ投降を呼びかけ多くの人命が助かった事実がある。

（３）戦後の沖縄移民（1945 年頃―1993 年）

そしてその後終戦となり、米国のハワイへ戻った２世兵たちが沖縄の惨状を報告し、大々的に沖縄救援運動を起こし、米国から南米にも広がっていく。救援運動は戦後に行われることとなるが、関連するため、ハワイから始まった救済運動の過程の概要を述べておく。まず 1945 年、ハワイで沖縄衣類救済運動委員会が組織される。翌 1946（昭和 21）年、ロサンゼルスで在米沖縄救済連盟が組織される。翌々年の 1947（昭和 22）年、ハワイで「沖縄救

pp.268 - 284

[25] 石川友紀「移民の世紀　沖縄移民の 100 年」ホームページ参照。http://rca.open.ed.jp/city-2001/emigration/cont/e_1_tf.html　（2015 年 10 月 8 日閲覧）

[26]石川友紀「移民の世紀　沖縄移民の 100 年」ホームページ参照。http://rca.open.ed.jp/city-2001/emigration/cont/e_1_tf.html　（2015 年 10 月 8 日閲覧）

済更生会」設立され、ブラジルでは「沖縄救済連盟」が結成される。1948（昭和 23）年、ハワイの沖縄救済会から豚 550 頭が沖縄に到着する。1949（昭和 24）年はボリビアで「沖縄戦災民救援会」が設立される。同年、「山羊を送る会」が結成され、700 頭が送られている[27]。この救援運動は、郷里を思う気持ちを各地に居住する沖縄移民のネットワークともいえるだろう。

ブラジルにおいても沖縄の惨状が伝わり、郷土愛に燃える有志たちによって 1947 年「沖縄文化救済協会」が出来、救援活動が行われている[28]。

一方、戦後の大きな問題として、「勝ち組」「負け組」問題が挙げられる。これは、日本の敗戦直後、情報伝達の不備により、あるいはデマそして移民という社会的立場の不安定さなどにより敗戦を否定あるいは信じない人が多く、彼らは「勝ち組」、「戦勝派」または「信念派」と呼ばれた。敗戦の事実を受け入れた人は「負け組」「敗希派」または「認識派」と呼ばれていた。「勝ち組」は、「臣道連盟（しんどうれんめい）（臣道聯盟）」という国粋団体を組織し、「負け組」側との間で 10 年余りに渡る確執争いが続くことになる。沖縄移民に「勝ち組」が多かったとされることから、沖縄人移民の中の日本人アイデンティティとも呼ぶべき日本という国に忠実であろうとしたことがみられた。例えば、「ジュキア線ペードロ・デ・トレードに鎖国村を作り、戦後 28 年に渡って外部と接触を絶ってきていた報告同士会の浜比嘉良喜（81 歳）、比嘉栄一、前田松栄の３家族の 14 人が国援法の適用を受けて日本に帰る。（1973 年 11 月 15 日）」[29]「勝ち組」「負け組」の根深さはクリチーバ市においてもいまだに日系人会の一部が分かれていることから窺える。そして日本が負けたことを認めなかった沖縄出身者の勝ち組家族からみえるものは、日本人だということを強く意識していたと考えられる。

戦後の移民先から沖縄への引揚げについては、榮野川によると、連合国の占領政策で、北緯 30 度以下の南西諸島を日本から切り離し「非日本人」としたことが、沖縄人（ウチナーンチュ）の引揚げをより複雑化させ、他の日本人と様相を異にしていたという。引揚げには２つのパターンがあり、１つは「南洋群島や台湾のように直接沖縄へ帰還した」ケース、もう１つは、「フィリピンのようにいったん日本人として本土へ引揚げたのち、琉球人として引揚げた」ケースで

---

27 2015 年 7 月 26 日付け記事、『琉球新報』「奔流の彼方へ―戦後 70 年沖縄秘史　25」

28 ブラジル沖縄県人会 2000a.『ブラジル沖縄県人の移民史－笠戸丸から 90 年－１』サンパウロ：ブラジル沖縄県人会.

29 サンパウロ人文科学研究所編 1996a.『ブラジル日本移民・日系社会史年表－半田知雄編著改訂増補版－』サンパウロ人文科学研究所.　p.196
詳細は次の通りである。「ブラジル勝組家族が帰国」昭和 48 年 11 月 17 日午後９時 30 分、羽田空港にブラジル移民の勝組の３家族 14 人が帰国した。戦後 28 年、いまだに日本は先の大戦で勝利したと信じる勝組は少数派ながらもブラジル移民社会に存在し、この３家族も勝組だった。３家族はサンパウロ州に住んでいた大正５年移民の浜比嘉良喜（82）一家、昭和４年移民の比嘉栄一（65）一家、昭和６年移民の前田松栄（55）一家で、いずれも沖縄県出身だった。３家族とも初の帰国で、ブラジルでは勝組の報国同志会メンバーであった。帰国第一声は「天皇陛下万歳」で、「日本が負ける訳がない。ここ（羽田空港）の賑やかさに改めて勝ったと実感した」などと記者会見で意気揚々と語った。外務省の援助での帰国だったが、３家族は「陛下の思し召しで帰国ができた」と理解しており、天皇陛下の有難さに報道陣の前で感泣するほどだった。３家族は沖縄県で暮らす事になっていた。
http://archive.is/Vd4Pv#selection-757.0-765.385　（2015 年 10 月８日閲覧）「昭和ラプソディ（昭和 48 年 10 月～12 月）」参照。

ある。終戦とともに、米軍占領地となっていた沖縄への帰還は禁止され、通信、連絡、送金を絶たれ、「難民」の状態になり、マッカーサーから許可の出る 1946 年８月まで引揚者は方々を転々とし、各移民先から引き揚げてきたときの港とは違う場所から大挙して沖縄に帰った。また転々としている間に日本本土に入植していく人たちも多かった。行き先は、埼玉県の所沢、上福岡（軍の施設跡や軍需工場の寮に送られた）、成田空港のある三里塚付近、静岡の沼津や焼津、三重の津、愛知県の名古屋であり、戦前から集まっている大阪に友人、知人を頼って行った人は多い[30]。「逼迫した食料事情と利殖した行員、軍事や海外からの引揚者の受け入れのため」として、1945 年 11 月 9 日の「緊急開拓時行実施要領」の閣議決定によって日本国内各地で戦後の農業開拓事業が開始されていた[31]。「千葉県遠山村三里塚地区の御料牧場に入植した沖縄県出身の人々」のなかには、戦前、戦中を外地で暮らしていた人が多く、終戦後帰国したものの、帰る故郷を失い、収容所や知人宅に身を寄せていたが、上海から帰国していた与世盛智郎が中心となり県民の生活の安定と本土復帰運動の拠点として開拓に乗り出した事例もある。戦後開拓し、1955 年ごろには営農も軌道にのっていたが、成田新国際空港建設で安住の地を追われていくこととなる[32]。

大量の引揚者による人口過剰問題から、早速、移民再開を求める議論がされ始めている。

戦後の沖縄移民の時期区分を 1945 年頃から 1993 年と設定したのは、1993 年のアルゼンチンへの 5 人が最後の移民となっているためであるが、90 年代は 10 人以下となっているため、実際は 80 年代まで移民が続いたとみられる。

戦後の沖縄移民に関しては戦中ですでにみてきたハワイから始まった救援運動、２つのパターンの引揚げが行われていった。戦後の移民数は、1948 年に移民が再開から 1993 年までの間に 17726 人であった[33]。沖縄に特殊な事情として、米軍基地で土地を接収、占領され、それに伴い米軍側も積極的に沖縄から移民させようとした動きがあることである。80 年代まで含めて沖縄県の移民史を援用しながら概要を述べるのにとどめたい。

戦後、米軍占領統治領下に置かれたことにより、「本土」と「沖縄」の移民の時期が異なっている。下表に示した日本移民の地理学研究者の石川友紀による日本移民の時期８期区分のなかで日本本土と沖縄の時代区分をみてみよう。時期区分の基準は「日本の出移民数の増減を主体に、移民政策、経済変遷、移民受け入れ国や地域の状況を勘案し」たものとなっている[34]。

---

[30]那覇市歴史博物館編 2007.『戦後をたどる　「アメリカ世」から「ヤマトの世」へ』琉球新報社. 新垣安子執筆。少しでも沖縄に近づきたいという思いから西へ西へと移動したという。

[31]村川庸子「沖縄人海外引揚者と成田の戦後開拓」（コラム９）移民研究会編[編集委員＝飯野正子　木村健二　粂井輝子] 1997.『戦争と日本人移民』東洋書林. pp.330－331

[32]村川庸子「沖縄人海外引揚者と成田の戦後開拓」（コラム９）移民研究会編[編集委員＝飯野正子　木村健二　粂井輝子] 1997.『戦争と日本人移民』東洋書林. pp.330－331

[33]沖縄県観光商工部交流推進課『国際交流関連業務概要』平成 21 年 3 月、p.138

[34]石川友紀「日本出移民の歴史地理学的研究　ブラジル日本移民を事例に」2010. 丸山浩明編著『ブラジル日本移民－百年の軌跡－』明石書店. p90

期	年代	時期名称
第１期	1885（明 18）～1898（明 31）	ハワイ・北米無制限 移民前期
第２期	1899（明 32）～1907（明 40）	ハワイ・北米無制限 移民後期
第３期	1908（明 41）～1923（大 12）	ハワイ・北米無制限 南米移民前期
第４期	1924（大 13）～1934（昭９）	南米移民中期
第５期	1935（昭 10）～1941（昭 16）	南米移民後期 南方移民後期
第６期	本土 1942 年（昭 17）～ 1951（昭 26） 沖縄 1942 年（昭 17）～ 1947（昭 22）	中絶期
第７期	本土 1952 年（昭 27）～ 1961（昭 36） 沖縄 1948 年（昭 23）～ 1962（昭 37）	南米移民再興期
第８期	本土 1962 年（昭 37）～ 1972（昭 47） 沖縄 1963 年（昭 38）～ 1972（昭 47）	南米移民停滞期

〈表 4〉石川友紀による日本移民の時代区分

出所：石川友紀「日本出移民の歴史地理学的研究　ブラジル日本移民を事例に」2010. 丸山浩明編著『ブラジル日本移民－百年の軌跡－』明石書店. 石川友紀の時代区分をもとに筆者加工作成。第６期～第８期は本土と沖縄と分けられる。

石川の表から戦後にあたる第６以降、本土と沖縄の移民時期が大きくことなることがわかる。

1948（昭和 23）年、戦後初の呼び寄せ移民 33 人がアルゼンチンへ出発し、ブラジル、ペルーへの呼び寄せ移民も再開されていく。移民の再開が早々に行われた背景と戦後移民の特徴をみてみよう。

日本の敗戦と米軍占領の開始により、移民先、疎開先などから 1951 年３月末までに約 10 万人余り（宮古・八重山・奄美群島への帰還者を合わせるとほぼ 18 万人）の引揚げ者が沖縄に流入した。1953 年まで日本国外への移民送り出しはほぼ停止状態にあったため、米軍

用地として接収された沖縄本島中部地域の人を中心に、国内の新天地への移住が切望されていた。後の琉球政府の計画が策定されるのを待ちきれず 1950 年から「自由移民」として宮古島、西表島、石垣島への移住が始まっている。1952 年に発足した琉球政府は「計画移民」に着手し、57 年までに 4000 人以上が軍用地集中地域などから西表島、石垣島へと入植した。1957 年以降は沖縄にも日本政府の渡航費貸制度が適応されたため、同年から 59 年にかけて毎年 1000 人以上がブラジルに移民している[35]。1954 年（昭和 29）に琉球政府の計画移民としてボリビアへの第 1 陣 278 名が送り出されたが、その後、1964 年までの 10 年間で 3200 人がボリビア東部へ入植した。1973 年（昭和 48）の沖縄復帰の翌年まで、移民政策として餞別金制度も設置された[36]熱病と河川氾濫によって転住を強いられながらも、1956 年以降は「コロニア・オキナワ」を形成した[37]。ただし定着率は低く、アルゼンチン、ブラジル、日本国内の横浜市鶴見や沖縄への再移動も多く見られた。南洋群島の移民については、戦前 6 万人もの沖縄移民が生活していたが、移民要望があったにも関わらず、再開されることはなかった。戦後の北米移住者については他の都道府県と比較すると、本土移住者の 400 人弱に対し、沖縄移住者は約 1 万 3000 人にも上っていた。これは米軍が多く駐留していたことと関係している。このようにして 1948 年から 1977 年までに、約 3 万人の移民が送り出されていた。戦後の移民の行き先国はアメリカ合衆国への近親呼び寄せに次いでブラジルへの約 9300 人、アルゼンチンへの約 3800 人、ボリビアへの約 3300 人、ペルーへの約 730 人、カナダへの約 60 人パラグアイへの 30 人、メキシコへの 12 人、ニューカレドニアには 2 人となっている[38]。

榮野川によると、人口過剰問題解決に向けて移民が盛んに唱えられるが、琉球政府や米軍政府の積極的な施策にもかかわらず、1950 年代半ばをピークに移民は減少に転じていく。1957 年から 59 年にかけては、沖縄からの移民にも日本政府による渡航費貸付制度が適用されるようになり、59 年にかけて毎年 1000 人以上がブラジルに移民している。しかし、多くの移民が農業で生計を立てるのは厳しく、都市部に出て裁縫業などに転職した。一方で 60 年代以降から日本本土への就職が増加していく。1972 年以降、沖縄は再び日本の 1 県となり、日本とパスポートなしで往来できるようになった。沖縄では、戦前だけでなく、戦後も雇用が求職を下回り、日本が高度経済成長期に入っても雇用に改善はみられない状況が続いていた。基地経済と日本政府援助に依存してきた沖縄経済は慢性的に高い失業率を抱えている。移民を生み出さざるを得ない社会・経済構造が現在においても続いているといえるのではないか。

---

[35]鳥山淳 2004.「占領と移住・移民」『沖縄を知る事典』編集委員会編『沖縄を知る事典』日外アソシエーツ pp.62-63.

[36]石川友紀「ようこそ『移民の世紀』へ」。

[37] 1960 年までは、日本国外へ渡航する場合、沖縄を統治していたアメリカ民政府により発行された「琉球居住者」用身分証明書を携帯しなければならなかった。

[38] 石川友紀「ようこそ『移民の世紀』へ」HP 参照。http://rca.open.ed.jp/city-2001/emigration/（2015 年 10 月 22 日閲覧）

ブラジル、アルゼンチン、ボリビア、ペルーなどの南米諸国が主な移民先となっていく。戦後はブラジルへの移民が最も多く、1990 年の 2 人までの 42 年間で 9494 人がブラジルに送られている[39]。1949 年に 5 人から再開され、1963 年の 183 人以降は減少していく[40]。

（4）沖縄移民の分布

日本国外に起居する沖縄人の分布状況をみていきたい。沖縄県庁の 2010 年度推計によると、日本国外在住の日系人総数約 336 万人のうち訳 39 万人が沖縄県系人とみられる。その分布状況については下表を参照されたい。

前述したように戦前は沖縄からフィリピン、ミクロネシアなどへの移民も多かったが、敗戦後、大日本帝国の旧版図からは官民問わず日本に引き揚げた結果、下表においても、沖縄県系人は主として南北アメリカに居住している。そのうち、ブラジル在住者が絶対数では圧倒的に多く、他方、日系人数に占める沖縄県系人の割合は、ペルー、アルゼンチン、ボリビアにおいて特に高い。米国ではハワイ在住者が多く、同州在住日系人総数 25 万人のうち 5 万人が沖縄県系人と推定される[41]。

国名	日系人数（単位・人）	沖縄県系人（同左）	日系人数に占める沖縄県系人の割合（%）
ブラジル	1,868,736	186,873	10
ペルー	98,883	69,218	70
アルゼンチン	39,279	27,495	70
ボリビア	11,173	6,703	60
アメリカ合衆国（ハワイ）	1,208,527（約 250,000）	96,682（約 50,000）	8（20）
カナダ	76,322	1,526	2
メキシコ	18,139	906	5
その他	37,010	2,220	6
合計	3,358,069	391,623	11

〈表 5〉**在外日系人数と沖縄県系人数（2010 年推計値）**

出所：沖縄県交流推進課 HP をもとに筆者作成。

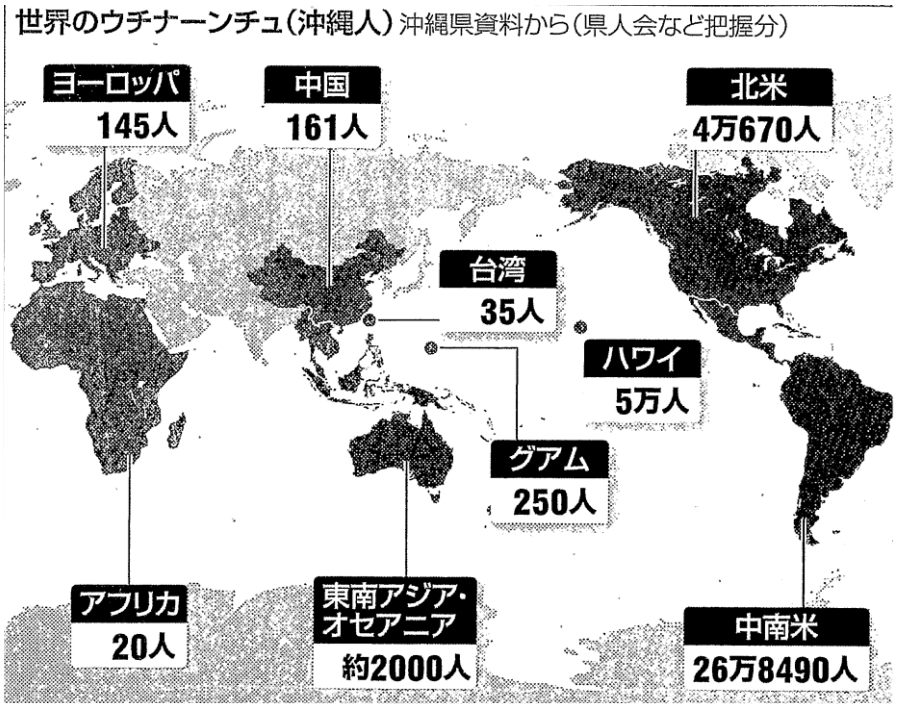
但し、アメリカ合衆国に含まれるハワイの数字については『朝日新聞』2011 年 10 月 15 日、朝刊「沖縄移民、世界から 5 千人」（仲村和代　署名記事）に基づく。

[39]沖縄県観光商工部交流推進課『国際交流関連業務概要』平成 21 年 3 月、p.138

[40]榮野川敦「沖縄の移民」2011.駒井洋監修・陳天璽＋小林知子 2011.『東アジアのディアスポラ』明石書店.

[41] 『朝日新聞』2011 年 10 月 15 日付朝刊「沖縄移民、世界から 5 千人」（東京版）（仲村和代　署名記事）

続いて、上表と重複するが、全体からみるために各地に居住する沖縄人の分布を沖縄県人会などから把握された下記に付した「世界のウチナーンチュ（沖縄人）」からみてみよう。



〈図 1〉世界のウチナーンチュ（沖縄人）分布（県人会など把握分）沖縄県資料より

出典：『朝日新聞』2011 年 10 月 15 日、朝刊「沖縄移民、世界から５千人」（仲村和代　署名記事）

（５）沖縄内外の沖縄人（ウチナーンチュ）交流

①沖縄における「世界のウチナーンチュ大会」

1980 年代ごろから沖縄の外にいる沖縄移民たちのことが沖縄の新聞、ラジオ、テレビなどのマスコミで頻繁に取り上げられるようになった。そして、沖縄の外に居住する沖縄人（ウチナーンチュ）への注目が高まり、1990 年からはほぼ５年に１度、沖縄において「世界のウチナーンチュ大会」が開催されるようになった。この「世界のウチナーンチュ大会」が開催されるに至った経緯を概観してみよう。1972 年に本土復帰したものの、本土への同化の行き詰まりに直面した沖縄は、1980 年前後には「沖縄のアイデンティティ・クライシス」ともいえる自信喪失状態にあった。その結果「沖縄／大和」の二項対立に立脚するのではなく、国際化時代における肯定的な沖縄のアイデンティティを再構成しようとする動きが沖縄のマスコミなどに見られ始める。これは世界各地で活躍・成功しているウチナーンチュとの自己同一性を見出そうという沖縄居住者の発想に基づくものであった[42]。

[42]新垣誠 2006.「WUB とオキナワ・ディアスポラ『オキナワ』・『日系人』という視点から」

金城によると、80 年代のマスコミによる「世界のウチナーンチュ」への注目、これを受けた政策としての「第 1 回世界のウチナーンチュ大会」の開催、また同年の入管法改正に伴い日系 3 世までの合法的な日本滞在と就労が認められ、南米在住の沖縄人の日本へのデカセギブーム（逆移民）が始まったことは、「ウチナーンチュの集団のライフコースとしての移民の歴史を広く県民の間に思い起こさせ『ウチナーンチュ』のイメージを再構築させた」といい、沖縄県民は世界に散らばる同胞の存在を再確認し始めたという[43]。

世界のウチナーンチュ大会のアイディアが生まれた経過を見ていこう。

琉球新報社は 1984 年 1 月 1 日、かねてから計画されていたという「世界のウチナーンチュ」の連載企画をスタートさせた。これは本土復帰 10 周年を迎えた際の社をあげた企画で、趣旨は県民の持っているバイタリティーをもう一度呼び起こすというものだった。ここで琉球新報社の連載企画のきっかけとなった人物、野里洋を取り上げたい。

野里によると「『世界のウチナーンチュ大会』の原点は琉球新報の連載『世界のウチナーンチュ』にあったのは間違いない」が、もっとさかのぼるとそれ以前に野里が連載した記事にある。野里は、前々から考えていたヨーロッパ旅行を部長に申し出て、1975 年 11 月、1 ヶ月休みを取ってトルコからロンドンまで汽車で周った。そこで会った沖縄人を取材し、「ヨーロッパのウチナーンチュ」という記事を翌年 1 月 6 日から連載した。現在ほど「国際」が言われないときであったが、好評であり、大型企画「世界のウチナーンチュ」の取材のトップバッターとして声がかかったのは 8 年前のヨーロッパ旅行で各国の事情を多少は知っているという事だった[44]。

「世界のウチナーンチュ」というタイトルで 1984 年 1 月 1 日から始まったこの連載は、２、3 年がかりの企画で、社会部のデスクにいた野里が先輩記者と一緒に企画を任されたものだった。「沖縄は復帰後の激動と混乱が続いていたが、10 年を過ぎたころからいくらか落ち着きを見せ始めていたので、私たちはこの時期に、沖縄を見つめ直し、県民に自信を与えるような紙面づくりはできないか、と考えていた」とある。

はじめは沖縄に帰国した人から話を聞くというやり方をとっていたのが、記者が現地に出かけて直接取材を行おうと計画し、外国の地で沖縄人たちがどのような生活をしているのか、どういう仕事をしているのかを聞くことになった。野里は、まずヨーロッパから始めるようにと命じられ、1983 年 12 月初めに単身でヨーロッパ取材に入った。

野里はヨーロッパの中でもまず、北アフリカの西沖合い、スペインの自治州カナリア諸島グラン・カナリア島のラスパルマスから取材を始めている。そこで会った沖縄人はカナリア

ヒラバヤシ，レイン・リョウ他編『日系人とグローバリゼーション　北米、南米、日本』人文書院 pp.440-466.

[43]金城宏幸 2007.「ディアスポラの記憶としての『世界のウチナーンチュ』」安藤由美/鈴木規之/野入直美編『沖縄社会と日系人・外国人・アメラジアン―新たな出会いとつながりをめざして―』クバプロ pp. 99-120

[44]野里洋 2007.『癒しの島、沖縄の真実』ソフトバンク新書.

諸島の中にある日本の遠洋漁業基地でイカやタコを獲る漁船の乗組員であった。また、パリ、マドリード、スペイン南部のムルシアでは、沖縄の若い空手家たちが現地のこどもたちに空手を教えていた。ミラノからストックホルムに飛んで、原子力発電所関係の会社に技術者として勤務している沖縄人に会っている。その沖縄人は日本語が口から出なくなっているぐらい日本人と会う機会がほとんどなかったようだ。そこでの野里の感想は、取材で各地を歩いて、沖縄人のたくましさを感じた。沖縄からはるか遠く離れた地で三線を引き、故郷の歌を歌って励ましていたことから、「どんな国へ行ってもウチナーンチュはウチナーンチュであった」といっている[45]。

連載記事の反響は、沖縄中が大騒ぎになったというほどであった。何十年もあったことがない親戚、友人、知人が写真入りで紙面に載り、いろんなところで話題になったという。元琉球政府主席の松岡政保氏は「朝、目が覚めると琉球新報の『世界のウチナーンチュ』から読んだ。連載が休みになると、その日一日中さびしかった」と述べている。沖縄県も新聞連載と反響の大きさに動かされ、当時の西銘順治知事が「世界のウチナーンチュ大会」の開催を決断したという。

この連載は多くの読者を引きつけ 1985 年 12 月 28 日まで 484 回、毎回カラーで２年間の長期連載であった。新聞紙上の連載記事は後に３巻に分冊された。その本の出版のときに琉球新報社の編集局長は反響の大きさについてこう述べている。企画のねらいはある程度満たされた。学校では教材として使われ、老人クラブや婦人会など各種の会合で「世界のウチナーンチュ」が話題になりテーマとして取り上げられた。登場する沖縄人の、習慣、生活の全く異なる外国での生活の生き方から、読者が共感を覚え、自信と誇りを抱かされたようだと言っている。

また、沖縄テレビ（OTV）も同様の番組を作成し、1987 年には「沖縄発われら地球人」をスタートさせ 1996 年まで 135 回に渡って放映された。1997 年からは番組名を「世界ウチナーンチュ紀行」に換え、2001 年までに 62 回の放映が行われている[46]。県内在住の人々のみならず、世界に散在する沖縄人にも反響が及んだ。国境を越えて沖縄人が連帯を再確認し、共鳴し合うようになったという。

「世界のウチナーンチュ」意識が盛り上がるなか、復帰 20 周年を数年後に控え、沖縄県は新たな振興策を模索し、移民１世の故郷への思いや声を受けて、また沖縄県民の誇りとロマンを将来に見いだしたいと「第１回世界のウチナーンチュ大会」を企画した。

②戦後における沖縄移民の沖縄救済運動への「返礼」と人材育成

沖縄県側が世界の沖縄人（ウチナーンチュ）に対する制度を増やしていく動きがあるが、その歴史的背景に

---

[45]野里洋 2007.『癒しの島、沖縄の真実』ソフトバンク新書. p. 252

[46] 沖縄テレビ放送株式会社制作「沖縄発われら地球人」と「世界ウチナーンチュ紀行」のテキスト化資料がなされている。平成 18 年度琉球大学移民研究センタープロジェクト「移民関係映像資料の利活用に関する基礎的研究」資料　琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門旧移民 2010.3　町田　宗博／編者

は、第２次世界大戦後の沖縄移民による救済運動があげられる。

第２次世界大戦後、荒廃し食糧難に陥っていた沖縄を救おうとハワイを中心に救済運動が展開されたこと、また移民からの送金率の高さなどから世界の沖縄人に感謝しようという動きがみられた。沖縄の外に居住する沖縄人（ウチナーンチュ）に対する関心が高まり、ブラジルなど世界各地の沖縄人（ウチナーンチュ）の子弟を沖縄に送る沖縄県費留学制度を沖縄県がスタートさせている。また移民を輩出した那覇市を含む 22 の市町村は、国外各地に住む沖縄人の子孫たちを３～６ヶ月ほど沖縄滞在させる研修生として受け入れるなど、現在に至るまで積極的な活動を行ってきている（2012 年１月現在）。「世界のウチナーンチュ大会」ごとに世界各地にいる沖縄人のネットワーク化を図ろうとする企画を積極的に増やす動きがみられる。

以上は沖縄側の背景と動きとして捉えられる。では沖縄の外にいる沖縄人たちにはどのような背景と動きがあったのだろうか。沖縄人の数が多数を占めるハワイの運動とブラジルの沖縄人アイデンティティの編成過程の事例をみてみる。

白水は『移動する人びと、変容する文化　グローバリゼーションとアイデンティティ』[47]でハワイの沖縄人（ウチナーンチュ）の次のような重要な動きを指摘している。すなわち、「80 年代の 10 年間はウチナーンチュ・スピリットが多いに宣伝され、例をみないほど沖縄系社会が盛り上がった時期」だと述べている。

1980 年は終戦から 35 年目にあたり、またハワイへの沖縄移民 80 周年の記念の年になっていた。「第二次世界大戦直後、『故郷』沖縄が日米戦のため荒廃したとの報に接したハワイの沖縄系の人びとは一致団結、膨大な支援物資を『故郷』沖縄に送る」という救済運動を行ったが、その救援物資に対して沖縄県側からの一種の「返礼」として「第１回沖縄研修旅行（スタディツアー）」というのが行われ始めた。これが、「のちのちまで語り草になるほどの感動的な沖縄訪問になった」という。

白水は、ハワイの沖縄系社会の動きを３段階に整理している。

ⅰ「第１次ウチナーンチュ運動」:「終戦直後の沖縄救援活動とそれに続く市町村人会の大同団体、いわゆる沖縄県人会（UOA,後の HUOA）の結成に至る高揚を指す」

ⅱ「第２次ウチナーンチュ運動」: 80 年代の 10 年間の精神的高揚に基づく社会現象

ⅲ「第３次ウチナーンチュ運動」: ハワイ・オキナワ・プラザ建設の募金キャンペーンが開始された 2005 年から竣工予定の 2010 年までを指す）

ⅰでは、オキナワン・フェスティバルの創始、ハワイ・オキナワセンターの建設が行われ、「無形と有形の沖縄文化発展推進装置」が 1980 年代に生み出されている。

[47]白水繁彦編 2008.『移動する人びと、変容する文化　グローバリゼーションとアイデンティティ』御茶の水書房.

次に、ブラジルにおいてウチナーンチュの名乗りが変遷してきた過程を、人類学者の森幸一による「ウチナーンチュ・アイデンティティの編成過程」[48]によって見てみたい。

時系列でみていくと、1920 年代は日本、ブラジル双方におけるナショナリズムの高揚が背景にあった。日本側は、コロニアと呼ばれるエスニック共同体を基盤におき、「日本人」との連続性を保証するため日本語教育体制と天皇崇拝シンボリズムを創造した。30 年代以降になると、ブラジルにおける外国人移民の国民化政策推進によって、2 世の間にはブラジル人性と日本人性をめぐる葛藤が生まれていた。この頃、沖縄／日本の序列化された 2 分構造を相対化し、ブラジル／日本を対立軸に捉えようとの動きが見られたが、沖縄／日本の序列化も強く再生産された。沖縄人は「県人」という名乗りを用い、「短所欠点」「非常識」「特殊風俗」「倫理観」などの面で内地に「劣る」自らを「日本人」に同化させることで是正し、「日本人になる」という目標に向かって努力を重ねるようになった。第 2 次世界大戦後、1950 年代になると、沖縄人は「日本」への「同化」という政治性は維持しながら、本土系日本人と同じく「コロニア」と自称するポジションへと立場を変えている。

戦後になっても沖縄／内地の序列を伴う 2 分論的認識は残っており、日系社会内部では、「沖縄さん」という名付けが生産された。1960 年から 70 年代にかけては米国内において外国人への同化の圧力は弱まった。この頃「ブラジルのウチナーンチュ」という名乗りが誕生し、これまでの名乗りであった「県人」「コロニア人」なども並行して頻繁に用いられ続けた。このように、沖縄人のアイデンティティは「ウチナーンチュ」対「ナイチ（ヤマト）」の 2 項対立状態から戦後における独自のエスニック共同体の確認へと変遷してきている[49]。

このように、ブラジルにおいても沖縄人を積極的に名乗る時期が 1970 年代以降から見られ始めていることがわかる。サンパウロ人文科学研究所の 2002 年報告書では、「民族芸能復興運動」と表現した沖縄系の活動について言及されている[50]。

以上のように、沖縄内外で沖縄人の動きは 1970 年代、80 年代からポジティブに影響しあってきたとみることができる。

３．沖縄移民のアイデンティティに関する先行研究

次に、沖縄移民のアイデンティティを対象にした研究を整理する。

沖縄からの最初の移民を出しているハワイにあるハワイ大学や琉球大学でもオキナワン・コミュニティ、オキナワン・アイデンティティに関する事例研究は豊富にみられる。こ

48　森幸一 2000.「ブラジルにおける沖縄系人のアイデンティティの変遷過程」『産業総合研究調査報告』第Ⅳ編、南米研究部会、沖縄国際大学産業総合研究所 8：43-56.

49森幸一 2000.「ブラジルにおける沖縄系人のアイデンティティの変遷過程」『産業総合研究調査報告』第Ⅳ編、南米研究部会、沖縄国際大学産業総合研究所 8：43-56.

50村野英一 2004.『南米の日系パワー―新しい文化の始動―』明石書店.

れらを含めた沖縄移民のアイデンティティを対象とした研究論文、論文集は少なくとも 40 以上はあり、次のとおりである。

沖縄移民のアイデンティティに関する先行研究
・青木保［ほか］編集委員 2002.『アイデンティティ　解体と再構成』(アジア新世紀 / 青木保［ほか］編集委員, 3）岩波書店. ・足立伸子 2008.『ジャパニーズ・ディアスポラ 埋もれた過去　闘争の現在　不確かな未来』新泉社. ・新垣誠 2002.「日系アメリカ人研究と沖縄人をめぐるアイデンティティの政治学　Identity Politics of Japanese American Studies and Okinawans」沖縄キリスト教短期大学『沖縄キリスト教短期大学紀要』31：pp.145-153 ・新垣譲著 2003.『東京の沖縄人－「東京」で暮らし「沖縄」を思う若きウチナーンチュたちインタビュー』ボーダーインク. ・アラム・バクティアル 2010.「インドネシアと沖縄　文化的アイデンティティの変遷から見た植民地文化の構造」（特集 インドネシア・朝鮮・「満州」・台湾）（フォーラム 日本軍政下の東南アジアと台湾・沖縄）　植民地文化研究会『植民地文化研究』9：2-8. ・石川友紀研究代表 2004.「旧南洋群島における沖縄県出身移民に関する歴史地理学的研究」（科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書, 平成 12 年度－平成 15 年度） ・石原昌家 1982.「沖縄人出稼ぎ移住者の生活史とアイデンティティの確立」沖縄国際大学文学部『沖縄国際大学文学部紀要 社会学科篇』10(1)：63-68 ・上運天ウェスリー1991.「ハワイ・沖縄民俗社会の文化維持の形態 THE MAINTENANCE OF THE OKINAWAN ETHNIC COMMUNITY IN HAWAII」法政大学『沖縄文化研究』17：339-423. ・大城直樹、2007.「沖縄系ハワイ移民女性とアイデンティティ構築の場所」Okinawan Hawai'ian Women and Places for Identity Construction　神戸大学『文化學年報』26：31-45. ・太田順一著 1996.『大阪ウチナーンチュ　フォト・ドキュメンタリー』ブレーンセンター. ・大田昌秀 1980.『沖縄人とは』green-life. ・親川志奈子 2013.【《UH・UR 合同シンポジウム》報告】琉球における言語復興運動とインディジニティ　ハワイ語復興との比較から Language Revitalization and Indigenity in the Ryukyus：A Comparison with the Language Revitalization in Hawai'I 琉球大学国際沖縄研究所 国際琉球沖縄論集 = International Review of Ryukyuan and Okinawan Studies 国際琉球沖縄論集 = International Review of Ryukyuan and Okinawan Studies 2：1-9. ・木村秀之 2005.「ブラジルに生きる沖縄系日系人とエスニック・アイデンティティ--アララ

クアラ市 K 家族の事例」、天理インターカルチャー研究所、『天理インターカルチャー研究所研究論叢』13：73-92.
・金城宏幸 2010.「ウチナーンチュの越境的ネットワーク化と紐帯ー「チムグクル」を運ぶ言語的文化」Okinawans' transborder network and its bonds: "Chimugukuru" transmitted by local language　琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門、移民研究『移民研究』6：83-98.
・米須興文 2000.「文化的アイデンティティの試練　アイルランドと沖縄の経験」
The Vicissitudes of Cultural Identity：Irish and Okinawan Experiences
沖縄国際大学外国語研究 4(2)：81-100.
・白水繁彦 2004.「エスニック文化とアイデンティティの世代間継承--ハワイ沖縄系コミュニティにおける事例研究」（特集 沖縄移民と世代継承）日本移民学会『移民研究年報』10：21-42.
・白水繁彦著 2011.『イノベーション社会学　普及論の概念と応用』御茶の水書房.
・白水繁彦編 2008.『移動する人びと、変容する文化　グローバリゼーションとアイデンティティ』御茶の水書房.
・城田愛 2006.『エイサーにみるオキナワンたちのアイデンティティ　ハワイ沖縄系移民における「つながり」の創出』博士学位申請論文・京都大学大学院人間・環境学研究科.
・ JOYCE, N Chinen. 2007. *Uchinaanchu Diaspora: Memories, Continuities, and Constructions*: volume42 Department of Sociology University of Hawai'i Press Honolulu.
・鈴木規之編・鈴木規之 2005.「沖縄のディアスポラの研究　日系人・外国人住民への意識調査から」2002 年度琉球大学法文学部人間科学科社会学専攻社会学コース「社会学実習」.
・仲程昌徳 2013.『「南洋紀行」の中の沖縄人たち』ボーダーインク.
・野入直美 2008.「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク(2)参加者の<声>に見るアイデンティティと紐帯の今後　""Worldwide Uchinanchu Festival"" and Okinawans' global network (2) Identity, uniqueness of Hawaii and gender of Uchina networking　琉球大学移民研究センター『移民研究』4：97-115.
・野入直美 2009.「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク（4）－中南米からの参加者の特徴を中心に－」The Worldwide Uchinanchu Festival and Okinawan Network(4) Features of Participants from Middle and South America 琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門『移民研究』5：27-40
・野入直美 2012.「構築される沖縄アイデンティティ　第 5 回世界のウチナーンチュ大会参加者アンケートを中心に」Constructing Okinawan Identities：Focusing on the Surveys of the Participants of the 5th Worldwide Uchinanchu Festival　琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門『移民研究』8：1-22

・朴秀娟・森幸一・工藤真由美 2013.「沖縄系エスニックコミュニティにおける日本語と沖縄方言の継承意識　ブラジル及びボリビアの言語生活調査から」大阪大学大学院文学研究科日本語学講座 Attitudes toward the succession of the Japanese language and the Okinawan dialect within the Okinawan communities in Brazil and Bolivia　阪大日本語研究 25：1-29
・原知章 2005.「オキナワン・コミュニティからウチナー・ネットワークへ　ハワイにおけるオキナワン・コミュニティの持続と活性化に関する予備的考察」静岡大学人文学部『アジア研究』1：77-104
・原知章 2003.「テレビとアイデンティティ『琉球の風』と『ハワイ・オキナワ・トゥデイ』をめぐって」『アジア遊学(特集 沖縄文化の創造)』（第 53 号）勉誠出版　130-140.
・比屋根照夫研究代表 2001.『アメリカ統治と戦後沖縄 ： 異文化の衝撃』（科学研究費補助金(基盤研究(A)(2))研究成果報告書, 平成 10・11・12 年度）琉球大学法文学部.
・福井千鶴 2003.「アルゼンチンにおける沖縄人移民の研究--沖縄人移民の特異性とアイデンティティー」日本大学国際関係学部『国際関係学部研究年報』24：189-206.
・福井千鶴 2010.『南米日系人と多文化共生』沖縄観光速報社.
・研究代表者星名宏修 2006.『日本植民地期台湾「皇民文学」の総合的研究　日本人・沖縄人の表現を中心に』（科学研究費補助金(基盤研究 C)研究成果報告書、平成 15 年度－平成 17 年度）.
・細田亜津子 2010.「沖縄ウーマンからみえる沖縄戦後史--フィリピンに生きる沖縄ウーマンの聞き取りを中心として」Study of Okinawa history after World War 2 from Okinawa woman's points of view: case study of hearing of Okinawa woman living in Philippines　長崎国際大学『長崎国際大学論叢』10：95-105.
・前原絹子 2006.「To Okinawa and back again　ハワイの沖縄系帰米二世のライフストーリー 」To Okinawa and back again: life stories of Okinawan kibei nisei in Hawai'I [含 英語文要旨]琉球大学移民研究センター『移民研究』2：23-42.
・町田宗博、金城宏幸、宮内久光編 2013.『躍動する沖縄系移民―ブラジル、ハワイを中心に』（琉球大学　人の移動と 21 世紀のグローバル社会Ｘ）彩流社.
・森幸一 2000.「ブラジルにおける沖縄系人のアイデンティティの変遷過程」、沖縄国際大学産業総合研究所「産業総合研究調査報告書」(8-4): 43-56.
・森田浩平 1997.「移住とアイデンティティー(移住と社会的ネットワーク　沖縄県今帰仁村を事例にして)」立命館大学人文科学研究所『立命館大学人文科学研究所紀要』68：293-307.
・森本豊富、根川幸男編著、2012.『トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化　過去から未来に向って』明石書店.
・山口覚 2005.「それぞれの世界を生きる：本土在住沖縄出身者の多様化する社会的諸実践」Living in a Segmented World:The Diversified Social Practices among Okinawans

on Mainland Japan　『人文地理』57(6)：585-599 The Human Geographical Society of Japan.

・山里勝己研究代表 2005.『戦後沖縄とアメリカ ： 異文化接触の総合的研究』（科学研究費補助金(基盤研究(A)(2))研究成果報告書、平成 14～16 年度）琉球大学法文学部.

・山下靖子 2007.「「沖縄系移民」研究の展開と視座」、伊豫谷登士翁『移動から場所を問う―現代移民の課題』有信堂高文社.

・山本成 2005「ハワイのヤング・オキナワンのエスニシティに関する研究」A study on the ethnicity of young Okinawans in Hawai'i　沖縄国際大学大学院地域文化研究科『地域文化論叢』7：17-47.

・吉田容子研究代表者 2006.「空間・場所をめぐる諸権力の解明 ： 沖縄を事例としたフェミニスト分析から」(科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書、平成 15 年度－平成 17 年度)

・琉球新報社編集局編著 1986.『世界のウチナーンチュ』ひるぎ社 123:南米篇.

・レイン・リョウ・ヒラバヤシ他 2006.『日系人とグローバリゼーション　北米、南米、日本』人文書院.

・RONALD, Y Nakasone. 2002. Okinawan Diaspora: University of Hawa'i Press Honolulu.

・湧川清栄遺稿追悼文集刊行委員会編 2000.『アメリカと日本の架け橋・湧川清栄　ハワイに生きた異色のウチナーンチュ』ニライ社.

〈表 5〉沖縄移民のアイデンティティ関係の先行研究

出典：CiNii Articles：http://ci.nii.ac.jp/（2015 年 10 月 14 日閲覧）と
CiNii Books：http://ci.nii.ac.jp/books/（2015 年 10 月 14 日閲覧）を併用した。
検出されたもののなかで、直接本論文とは関係しないと思われるものについては、省いた。

沖縄移民のアイデンティティ研究のひとつには、沖縄人（ウチナーンチュ）のコミュニティをディアスポラ、あるいはネットワークと捉えている研究論文がみられる。また文化的なアイデンティティの再構築、確立や変遷からみたもの、あるいは、沖縄のアイデンティティの特異性を強調したものやエスニック・アイデンティティとして捉えているものがみられる。

では、具体的に沖縄アイデンティティの研究を詳述する。近年集団的アイデンティティやエスニック・アイデンティティとフードとの密接な関係が注目され、欧米をはじめ多くの研究がなされている。白水繁彦「変容エージェントによる文化の創出―ハワイ沖縄系コミュニティにおける事例研究」は、沖縄の伝承的家庭料理がハワイにおけるオキナワン・コミュニティの内外の人々が集うハレの舞台に登場していることに着目し、沖縄食（オキナワン・フード）がオキナワン・アイデンティティと結びつける努力をしている様子を捉えている。婦人会であるフイ・オ・ラウリマによって沖縄文化紹介・解説とならんでオキナワン・フードのレシピを掲載した Okinawan Mix Plate という本を紹介している。「オキナワン・フード

を食べたり、作ったりすることは心からウチナーンチュになることである。もっといえば,『心から＝真の』ウチナーンチュになるためには単に生まれただけでは足りないということである」。白水はこれを敷衍して、たとえ自分が血統的にウチナーンチュに生まれていなくてもオキナワン・フードを食べたり作ったりする行為を通じてウチナーンチュになれる（少なくとも近づける）とみている[51]。佐藤万里江の「ハワイの沖縄料理の創造―女性団体出版のクックブックにみる文化変容」では、「ハワイのオキナワ料理」というローカル化したオキナワ文化の形成過程が述べられている[52]。

エイサーという沖縄のダンスを研究対象としている城田愛は、ハワイにおいて「オキナワン・アット・ハート」または「オキナワン・スピリット」を「アロハ・スピリット」に共鳴するようにハワイ社会の住民にもアピールするようになっているという[53]。そしてハワイ大学社会学の教員であるジョイス・ナオミ・チネンは、インターマリッジが 40%以上になっている現在、レイスにもとづくウチナーンチュの定義は時代遅れになっており、スピリットという観点から語ることで、オキナワン・コミュニティの多様性が見えてくるとしている[54]。

ブラジルにおける興味深い事例を琉球大学移民センター所属、社会学者の野入直美が見出している。2008 年開催の「沖縄移民 100 周年芸能祭」において、「ブラジルの沖縄県系人が沖縄の伝統に愛着と誇りを持っていることが伝わってきた」そして「彼らは「伝統」をタイムカプセルのように固定化して保存するのではなく、ローカルの文化との融合、異文化間のせめぎあいや文化変容を含めて、ダイナミックな形での「伝統」の継承を試みているようにみえる」しかし、その上で、移民送出社会である＜本家＞の沖縄に対して、＜分家＞、ブラジルなどの移民先の沖縄人たちが、失われつつある文化に警鐘を鳴らすという。野入は、沖縄生まれ、沖縄人（ウチナーンチュ）として沖縄での日々を過ごしている人々よりも沖縄の外にいる人々のほうがより伝統意識が強く、「伝統」を自覚的に、ときには危機感をもって継承されていく必要性にせまられているかもしれないと述べている。

野入の研究から、筆者は、サンパウロにおける沖縄人は、「伝統」をより大切にする姿勢がみられ、ブラジルにおいて「沖縄人アイデンティティ」がストレートに持ち込まれて保存される傾向にあると考えている[55]。

---

[51]白水繁彦編 2008.『移動する人びと、変容する文化　グローバリゼーションとアイデンティティ』御茶の水書房.

[52]佐藤万里江「ハワイのオキナワ料理の創造」白水繁彦編 2008.『移動する人びと、変容する文化　グローバリゼーションとアイデンティティ』御茶の水書房.

[53]城田愛「オキナワン・ハワイアン・スタイル」白水繁彦編 2008.『移動する人びと、変容する文化　グローバリゼーションとアイデンティティ』御茶の水書房.

[54]城田愛「オキナワン・ハワイアン・スタイル」白水繁彦編 2008.『移動する人びと、変容する文化　グローバリゼーションとアイデンティティ』御茶の水書房.

[55] 野入直美 2009.「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク（４）－中南米からの参加者の特徴を中心に－」The Worldwide Uchinanchu Festival and Okinawan Network(4) Features of Participants from Middle and South America　琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門『移民研究』5：27-40

４．ブラジル沖縄県人会設立の動きにみる集団としての移民

ここで集団としての移民としてブラジル沖縄県人会の設立について述べておきたい。

1908 年の笠戸丸船での移民は、799 人中、355 人、44.4%が沖縄出身者だった[56]。沖縄からのブラジル移民の最初の山として、1917 年、2138 人（日本全体で 3883 人）の 55.1%、1918 年 2204 人（日本全体で 5956 人）の 37.0%を占めている。移住地での集団化が行われていた。その弊害として、1919 年、サンパウロの総領事館より沖縄移民のみがストライキの拳に出る、紛擾をかもし易い、などのことを指摘され、沖縄人のブラジル移民に事実上の禁止令が出されたともある[57]。逆に言えば、当時のブラジル移民の中で沖縄移民は相互の連絡を取り合い、結束し、集団で行動をとっていた可能性がある。

沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティを継承する地盤としての沖縄県人会について、「移民の古里とも言うべきサントス」に 1916 年には集団の沖縄県人会が創設されている[58]。その主要な活動を時系列で拾ってみると、1917 年　沖縄集団移民の制限嘆願し、この後、再び一度ずつの沖縄移民禁止と解除を経て、1918 年、アナジアスで、1922 年にサンパウロの沖縄県人会が立ち上げられた。翌年 23 年には、アレクリンやペードロデバーロス及びマットグロッソドスール州カンポグランジでも結成された。1926 年、在伯県人有志が集結し、散在する在伯有識者を網羅し在伯県人有志大会を開催した。ここに沖縄県人会の名称を「球陽協会」と名づけた。その後、沖縄県人会の名称は数回改定される。

1941 年太平洋戦争のため、日本人団体は全て解放させられるが、戦後、現地沖縄の窮状を慮り、1947 年　沖縄救援委員会の発足をみて、在伯沖縄人の結びつきは加速する[59]。その後は、県人会は、その中心となるサンパウロに本部をおき、現在も活動はわかりつづけている。琉球民謡、舞踊、空手、沖縄角力大会、第 1 回移民笠戸丸の生存者叙勲などの行事が開催され続けている。

時代は下って、1953（昭和 28）年～1967（昭和 42）年頃、事業団などによる集団移住地が主なもので 18 か所創設しており、それぞれ、各県ごとに移民が送出されている[60]。このなかに沖縄移民は一人も含まれていなかった。沖縄移民は、サンパウロ州各地において沖縄県人会などを中心にコミュニケーションをとっており、結束力を持っている。この協働はそのまま維持されることとなり、2007 年度の資料[61]によると、沖縄移民の実に 73%がサンパウロ市およびその他の近郊に居住している記録となっている。

---

[56]沖縄県教育委員会編 1974 原本・1989 復刻.『沖縄県史（第 7 巻　移民）』国書刊行会.p270

[57]沖縄県教育委員会編 1974 原本・1989 復刻.『沖縄県史（第 7 巻　移民）』国書刊行会.p271

[58] ブラジル沖縄県人会 ASSOCIAÇÂO OKINAWA KENJIN DO BRASIL2008.『広報　ブラジル沖縄移民 100 周年祭　Comemoração do Centenário da Imigração Okinawa no Brasil』(全 35 ページ)、p5

[59] ブラジル沖縄県人会 ASSOCIAÇÂO OKINAWA KENJIN DO BRASIL2008.『広報　ブラジル沖縄移民 100 周年祭　Comemoração do Centenário da Imigração Okinawa no Brasil』(全 35 ページ)、p.6

[60]新川明編 1980.『新沖縄文学（45 号／沖縄移民）』沖縄タイムス社. p151

[61] ブラジル沖縄県人会 ASSOCIAÇÂO OKINAWA KENJIN DO BRASIL2008.『広報　ブラジル沖縄移民 100 周年祭　Comemoração do Centenário da Imigração Okinawa no Brasil』(全 35 ページ)、p.18

以上から、沖縄からそのまま持ち込まれた沖縄移民のアイデンティティが集団の中に継承されている。このような県人会の活動がサンパウロを中心に集団で移住した沖縄人（ウチナーンチュ）のアイデンティティを醸成する大きな力となったことは言うまでもない。このことは、金城宏幸によっても次のように述べられている。「ウチナーンチュが移民した日本国内や海外各地に存在し続ける「県人会」や「クラブ」などは、その地域における沖縄文化とアイデンティティの「維持装置」あるいは「発信地」として機能している」[62]ということである。

５．小括―沖縄移民の特徴と沖縄移民のアイデンティティ研究

本章では、沖縄移民の歴史と分布をみてきた。薩摩藩、中国、日本本土など所属が安定してこなかった歴史の影響もあり、特に戦前において、沖縄人（ウチナーンチュ）の文化、風習は日本本土と大きく異なり、移民先では小さな日本本土社会のなかで沖縄差別が顕著にみられた。戦中に関しては、国同士の闘いとなるため、本土、沖縄と分けられる見方が減ったという見方もある。戦後は日本本土とは異なり、米軍統治下の影響での琉球政府による移民政策、米軍に土地を強制的に奪われ、集団移民することになった「伊佐浜移民」[63]など沖縄に特殊な移民政策が行われてきた。このような政策は本土復帰の 70 年代初頭ごろまで行われている。

沖縄人（ウチナーンチュ）の分布については、現在は、南米、北米の一定の地域に沖縄人（ウチナーンチュ）の割合の高さが見られる。数が多いのはブラジル、その次にアメリカである。沖縄移民のアイデンティティの先行研究概要から、ブラジルは県人会活動が活発なところは研究がなされている。ハワイは沖縄県人会の活動、動向をみた研究、また県人会に所属しておらず、沖縄に関する活動を行っている人への研究も行われているのがみられる。

野入直美の 2011 年第５回世界のウチナーンチュ大会アンケート調査からは、世界のウチナーンチュのアイデンティティ構築に関する論文から、各地に居住する沖縄人アイデンティティの様子が把握できる[64]。

ハワイは沖縄県人会が出身市町村ごとの会や住んでいる地域の会などで構成された連合

---

[62] 金城宏幸 2009「「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク（5）－新たな社会空間の形成と紐帯をめぐって―」『移民研究』5：46

[63]極東情勢の緊張を理由に基地計画を発表した米軍は、1953 年、米国民政府布令第 109 号「土地収用令」を公布し、各地で土地の強制接収を始めていく。1954 年 12 月、沖縄県宜野湾市伊佐浜区民の立ち退きを勧告、55 年 1 月、村代表の妥協を不満とする同区婦人代表が琉球政府行政主席に立ち退き反対を陳情し「伊佐浜土地闘争」が起こった。同年 3 月に、米軍は銃剣とブルトーザーを出動させたが、区民の座り込みで阻まれ、米軍は同月 18 日に再度通告する。数千人の支援団体が集結したため見送ったが、翌 19 日に支援団体の隙をついて強制接収された。伊佐浜区民は、大山小学校に仮居した後、沖縄市美里の俗称インヌミ屋取に移住、その 2 年後、ブラジルへ 10 家族（61 人）が移住した。（参照：沖縄大百科事典刊行事務局編 1983a.『沖縄大百科事典　上巻』沖縄タイムス社. p.162「伊佐浜土地闘争」）

[64]野入直美 2012.「構築される沖縄アイデンティティ　第５回世界のウチナーンチュ大会参加者アンケートを中心に」Constructing Okinawan Identities ： Focusing on the Surveys of the Participants of the 5th Worldwide Uchinanchu Festival　琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門『移民研究』8：1-22

会となっているが、意識的に沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティを創りだしている。戦後移民ではブラジルが１番で、多くの１世が健在である。南米のなかでペルー、アルゼンチン、ボリビアなどは日系人の約６，７割が沖縄人（ウチナーンチュ）となっており、日系移民のなかでマイノリティーではない。ブラジルに沖縄人（ウチナーンチュ）の数は他の南米の移住地域と比べて多いが、沖縄人は日系人の 1 割を占めているに過ぎないため、他のところとは意識のなかで違いが生まれている。戦後、あまり語られていない米兵の妻として移民した形態などもあることはあまり語られてきていない。

沖縄からそのまま持ち込まれた沖縄移民のアイデンティティが集団の中に継承されていることをみてきた。一方で、クリチーバ市の沖縄人（ウチナーンチュ）の場合は、集団ではなく、全体的に個人で来ている。1961（昭和 36）年－1971（昭和 46）年までブラジルに居住していた伊波吉郎家族の長女絹枝さんによると、クリチーバ市には初めは石川市（現うるま市）伊波の人たちがかなり多数入ったが、全体的に個人で来ていたと述べている[65]。その結果現在まで、クリチーバ市では、家族ごとに散らばって居住する強い傾向がみられる。個としての移住については次章で述べることとする。

[65]2016 年 1 月 3 日沖縄の伊波吉郎宅にて、筆者によるインタビュー。

第３章　クリチーバ市における沖縄人（ウチナーンチュ）の流入の歴史

第３章では、クリチーバ市の日系人全体の歴史を把握し、その後、クリチーバ市に流入した沖縄人（ウチナーンチュ）に関する歴史に焦点をあてる。

クリチーバ沖縄県人会の背景・特徴を知るため、日系人と沖縄人（ウチナーンチュ）の歴史とに分けて論じる。戦後の日系人全体の歴史は、日系人も沖縄人（ウチナーンチュ）も一緒に日系人会を組織し、協力しあってきたことは証言、記録によってみられる。その後、クリチーバ市の沖縄人（ウチナーンチュ）が個として移住したことをクリチーバ沖縄県人会のメンバーへのインタビューから見ていく。

クリチーバ市の日系人全体の歴史を見ていくに当たって、主にクリチーバ沖縄県人会のメンバーであるヤマシロ・ゼンショウ、ウエズ・ジョージら、またクリチーバ市の日系人会のメンバーなどからの聞き取りをもとにしている。これらの聞き取りと併せながら、主な基礎資料としてブラジル沖縄県人会の周年史、ポルトガル語による『歩み AYUMI』[1]、その後新たに出版され同じくポルトガル語による『武士道 BUSHIDO』（全３巻）[2]などを参照してみていく。

日本人または日系人を指す呼称として、戦前の一部で明らかに日本人だと判断される個所については「日本人」という表現を用いるが、基本的には「日系人」を用いることとする。

１．クリチーバ市における日系人の歴史

クリチーバ市に日本人が居住し始めたのは、1915 年である。しかし、それ以前に何名かの日本人がクリチーバ市を視察訪問している。1909 年に徒歩で 2 人の熊本県人が到着したのが最初の記録である[3]。1910 年には藤崎商会サンパウロ支店長の後藤武夫と皇国殖民会社の代理人の上塚周平、1911 年には玩具の行商に訪れた村崎豊重（熊本県出身）とある。1915 年に最初に居住したのは、東京外国語学校出身の杉山英雄（千葉県出身）、英国船の船長だった松田新吾（福岡県出身）である。また 1924 年には「移民の父」と呼ばれる皇国殖民会社の社長水野龍とその家族がクリチーバ市に移住している（パラナ日伯文化連合会、2005）。1927 年に水野の提唱で最初の日本人団体「宣化会」を創設した。

クリチーバ市の邦人調査が 1933 年に行われている。クリチーバ市内及び近郊在住者は 17 家族となっている。最初の日系人団体として、1927 年に「移民の父」といわれた水野

---

[1] SETO, Cláudio; UYEDA, Maria Helena. 2002. 歩み　Ayumi - caminhos percorridos: memorial da imigração japonesa – Curitiba e Litoral do Paraná. Curitiba: Imprensa Oficial do Paraná, (Depoimento a Cláudio Seto e Gilberto Hara. Curitiba, 20 de janeiro de 1995)

[2] SETO, Cláudio; UYEDA, Maria Helena. 2009. BUSHIDO 武士道 CAMINHO DO GUERREIRO SEMEADOR 100 Anos de Presença Japonesa no Paraná VOLUME1. Curitiba-Paraná.

[3]牛窪襄 1972.『パラナ日系 60 年史』パラナ文化出版社.サンパウロ州内において鉄道敷設工事を終えた後、クリチーバ市でお金を稼ぎ、その後アルゼンチンへ移住している。

龍によって「宣化会」が創設され、4代目まで続いた後、戦争のため解散となっている[4]。1927年の日系人会の始まりについては、パラナ州日系人移民の歴史史料『武士道』や『歩み』の記録では、1934年に最初の日本人組織「宣化会」が創設されたこととなっている。その後、1941年「連合　日本人会」と改名されている。

戦後の日系人会は「友之会（ともものかい）」という名前で1946年8月11日に設立され、同年同月25日には、２世を中心とした「ウベラーバ青年会」もできる。

当時のことを知るクリチーバ沖縄県人会のメンバーは、「小屋では、喜劇、悲劇などの芝居をし、初回だけで小屋代（29コント）以上が賄えた。（２世　ヤマシロ・ゼンショウ）（『AYUMI』には10×６mとある）

〈写真2〉クリチーバ市における戦後初の日系人会「友之会」のメンバーと「ウベラーバ青年会」のメンバー：松で建てた日系人会館を背景に（1946年11月3日撮影か）

“A primeira sede do Tomonokai Em frente os jovens do Uberaba Seinenkai”

戦後、最初の会「友之会」と「ウベラーバ青年会」の若者たちが並んでいる。

4 “パラナ日本移民百周年への道程”刊行委員会編 2005.『パラナ日本移民百周年への道程』パラナ日伯文化連合会.

出典：SETO, Cláudio; UYEDA, Maria Helena. 2002. 歩み　Ayumi - caminhos percorridos: memorial da imigração japonesa － Curitiba e Litoral do Paraná. Curitiba: Imprensa Oficial do Paraná, (Depoimento a Cláudio Seto e Gilberto Hara. Curitiba, 20 de janeiro de 1995)　p.289

クリチーバ市に日系人が集まるようになるのは戦前よりも戦後に集中している。クリチーバ市に流入する要因は大きく３つのことがあげられる。

（１）クリチーバ市における日系人の流入―３つの要因

クリチーバ市への日系人流入の３つ要因をみていく。１つは第二次世界大戦が始まったことにより、日本、イタリア、ドイツ人などは「敵性」外国人とみなされ海岸沿いから内陸部への移動を余儀なくされたこと。２つめは、サンパウロ州から続く鉄道敷設がパラナ州にも延びており、パラナ北部に多くの日系人が住んでいた。北パラナから都市であるクリチーバ市に学校や仕事を求めて移り住むようになること。３つめは、1975 年頃に発生した霜害によって、コーヒー栽培などの農業が出来なくなった人が新たな職を求めて移り住んできたことである。以下で詳述する。

①戦争による海岸沿いからの立ち退き命令

1943 年、ブラジル政府は海岸線 65km 以内に居住する日本、ドイツ、イタリアの枢軸国の「敵性」外国人の立ち退き命令を発布した。そのため、パラナ州内の海岸沿いにあるカカツやアントニーナに居住する日系人は着の身着のままでクリチーバ市に転住している。立ち退き令がクリチーバ市に日系人が集まる原因となっている。

クリチーバ沖縄県人会メンバーのウエズ・ジョージによると、現在クリチーバに居住する日系人は、パラナ州の海沿いのパラナグア辺り[5]に移住していた。その中に沖縄人（ウチナーンチュ）もいた[6]。上記同様に第二次大戦時、海沿いから山奥へ何十キロとしていされた以上離れるようにとのことで内陸側へと移動しクリチーバ市、その近郊へ移り住んできた人がいる。パラナグアから来た人たちは日本語が達者だったのが特徴だった。

②都市であるクリチーバ市への就学、就職の機会を求めて

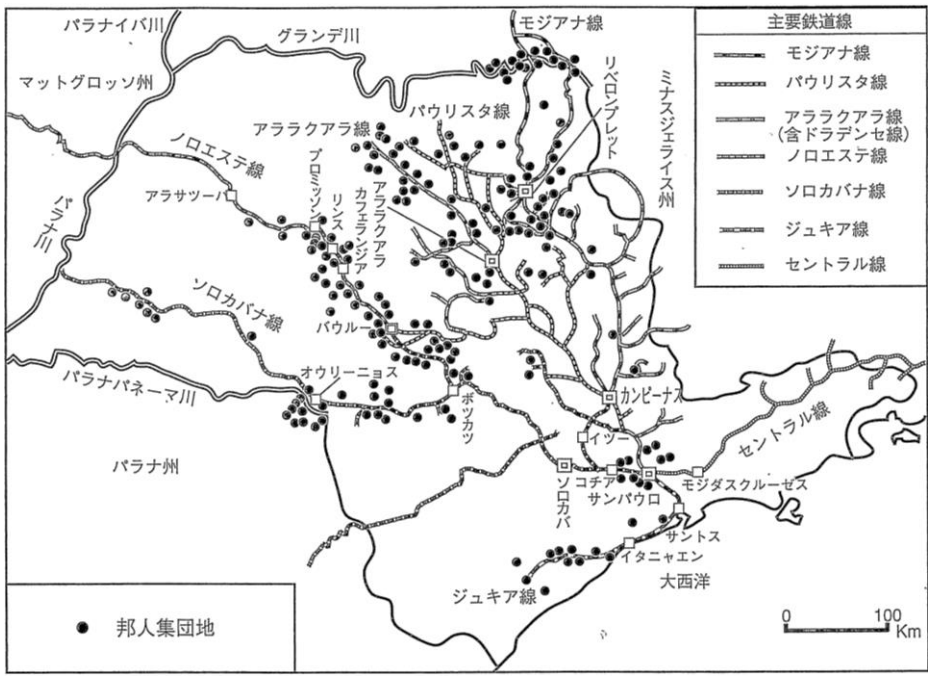
ウエズによると、第二次世界大戦後、しばらくして 1950～60 年代になり、特にパラナ州ロンドリーナ、カンバラー、マリンガーからクリチーバ市に就学、就職の機会を求めて移住してくる日系人たちが増えていった。北パラナに住むようになったのは、サンパウロ州から続く鉄道の敷設工事で働く人が住み着いていったことなどによる。

---

5 アントニーナも近い。

6 インタビューによると、伊波村出身の伊波松一ら家族は、サンパウロ州の海岸沿いサントスからパラナグアへ移住していた。(2016 年 1 月 3 日インタビュー)

以下に地理学専門の丸山浩明によって作成された「サンパウロ州における邦人集団地の分布（1926 年)」(1926 年版のサンパウロ州地図をもとに）をみると、鉄道の線路沿いに邦人が集中分布しているのがわかる。



〈図 2〉サンパウロ州における邦人集団地の分布（1926 年当時）丸山浩明作成

出典：「ブラジル日本移民の軌跡　百年の「大きな物語」、p.142

丸山浩明編著『ブラジル日本移民－百年の軌跡－』、明石書店、2010 年

図 3 にあるサンパウロ州における邦人集団地の分布は、第 1 回目の集団移民となった 1908 年の笠戸丸移民以降、1910 年代から開始されたノロエステ線やジュキア線の鉄道敷設工事に伴い、線路沿いへの移住が起こった。サンパウロ州を越えた地域へ土地や就業、あるいは、呼び寄せなどで転々と移住するなどして定着地域が広がったことにもよる[7]。

そしてクリチーバ市内の大学、学校を卒業した日系人学生たちが、そのままクリチーバ市で就職し、定住するようになり、家族などを呼び寄せる人もいた[8]。

下記に付した「パラナ州日系家族分布図」をみると、パラナ州の北部に集中していることがわかる。

7『ブラジル沖縄県人移民史　笠戸丸から 90 年　1908～1998』、1 巻、p131-132

8 パラナ州アサイー出身の日系 2 世のタムラさんによると、70 年代には日系人はまだ数えるほどだったが、80 年代から増加した。

〈図 3〉パラナ州日系家族分布図（1980 年 2 月 15 日　MITSURU OGAKI 作成）

出所：国会図書館所蔵資料

〈図 4〉は、1980 年に作成されたパラナ州の日系家族の分布図である。日系人は、クリチーバ市のほか、北西部のロンドリーナ市、アサイー市、マリンガー市、またはカンバラー市などの北部、そして海岸沿いのパラナヴァイなどに集中して居住しているのがわかる。

③1975 年頃に発生した霜害

また、クリチーバ市に日系人、沖縄人（ウチナーンチュ）が移動する大きな出来事があった。パラナ州の北部は、赤土でコーヒーがよく育つ場所であった。しかし、1975 年頃のひどい霜風でコーヒー栽培が出来なくなってしまった。コーヒー栽培が続けられなくなると、北パラナに住んでいた人々は、クリチーバ市や北はマットグロッソ州、ゴイアス州、サンパウロ州、南はサンタカタリーナ州などの町に移り住んでいった。

以上のように日系人がクリチーバへ移動してきているのがわかる。

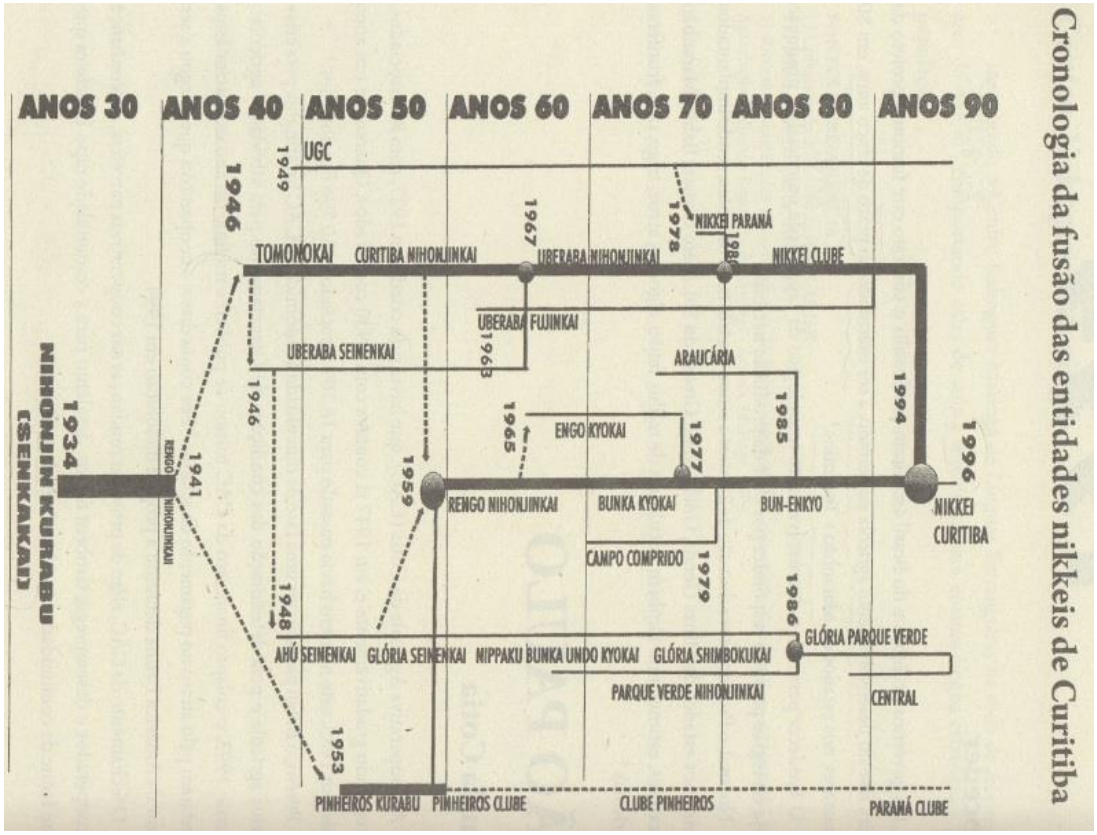
（2）日系人組織の変遷

クリチーバ市の日系人組織は、戦争をきっかけに、分裂の動きとまとまりの動きの双方がみられる。これらを①戦後の「勝ち組」「負け組」問題による影響と②クリチーバ学生連盟による日系人組織の歩み寄りの促進とに分けて以下でみていく。

①戦後の「勝ち組」「負け組」問題による影響

戦後の日系人会は、第二次世界大戦の「勝ち組」「負け組」問題の影響により分裂してきた。クリチーバ市においては現在もその影響がみられる[9]。

以下でクリチーバの日系人会の変遷をみてみよう。



〈図 4〉クリチーバ市の日系人会の歴史　合併の時系列：『BUSHIDO』より

出典：CLAUDIO,Seto MARIA,HELENA Uyeda“BUSHIDO 武士道 CAMINHO DO GUERREIRO SEMEADOR 100 Anos de Presença Japonesa no Paraná” VOLUME3,Curitiba-Paraná :2009.p.252

写真にあるように 1946 年以降、大きくみると 3 本の太線があり、３つの団体の動きになっている。これは日系人組織の変遷が複雑になっていることを示している。

日系人組織は、1934 年の「NIHONJIN　KURABU（SENKAKAI）日本人クラブ（宣化会）」に結成され、戦争のため、解散している。そして第二次世界戦争後の 1946 年、「TOMONOKAI 友の会」、同年に「UBERABA SEINENKAI ウベラーバ青年会」ができ、その後は、複数の組織が複数回変化している。このような分裂は、「勝ち組」「負け組」の影響によるものとされる[10]。

大きく３つのグループである「UBERABA ウベラーバ」、「PINHEIROS ピニェイロス」、「GLÓRIA グローリア」３つに分かれていたが、1996 年には「UBERABA ウベラー

[9]日系人会のメンバーたちへのインタビューによる（2013 年）。
[10]日系人会のメンバーたちへのインタビューによる（2013 年）。

バ」と「PINHEIROS ピニェイロス」が一緒になる形になり「NIKKEI CURITIBA 日系クリチーバ」としてまとまった。現在でも「GLÓRIA グローリア」は独立した活動を行っている。

当時の様子を聞いておぼえているという沖縄人（ウチナーンチュ）1 世の伊波吉郎（きちろう）[11]は、兄で長男の永吉が日本は戦争で負けていないと言ったのに対し、次男の勇吉は、日本は負けたと言い、兄弟で喧嘩になったと語っている。当時のブラジルの日系社会では日本が敗戦していることを認めない風潮があり、「勝ち組」の方が人数的に上回っており、敗戦を信じる「負け組」には悪い印象が持たれていた。次男の勇吉は、家族を代表して数回沖縄に帰郷しているが、当時、負けているか、勝っているかを確認してくるからと言って帰郷したという。

②クリチーバ学生連盟による日系人組織の歩み寄りの促進

本章の（1）の②「都市であるクリチーバ市への就学、就職の機会を求めて」と同時期にクリチーバ学生連盟（UGC“União dos Gakussei de Curitiba”）が誕生している。第二次世界大戦後の 1950～60 年代の頃、北パラナなどから就学、就職の機会を求めて移住してくる日系人たちが増えていった時期である。当時の様子について、「パラナ州各地だけでなく全国からクリチーバに集まってきた若者たちで、自然発生的に親睦団体を結成しようとする機運が高まっていた」また「明るい家庭的な雰囲気の中で相互扶助ができ、人格形成の場を作り、日本人がブラジル社会に同化してもらいたいとの願望から金城芳吉、笠井幸三、武田ペドロら 15 人の大学生たちが中心となって、1949 年 4 月 29 日、学生たちが集会を開いた」（パラナ日伯文化連合会、2005）。クリチーバ学生連盟が組織化され、その後、学生自ら資金獲得をし、会館を建てて活発な活動を行ってきている。1967 年には会員数が 800 名に及んでいる。1967 年の調査ではクリチーバ市に居住する学生は 3000 人おり、その 8 割が親元を離れて暮らしていた学生だった。クリチーバ学生連盟の活動部門は、医療薬剤部、歯科医師、文化部、運動部、女子部、報道出版部、保財部、工学建築部、法務部、少年部、社交部、図書部、映画部、音楽部など幅広い運動を展開していた。一例として医学部の連盟員たちの巡回診療がある。1955 年、「日系コロニア[12]」の健康状態を調査するため、北パラナなどの地域において巡回診療を行い、継続を強く要望され、1957 年にも巡回診療が行われている（パラナ日伯文化連合会、2005）。クリチーバ学生連盟のなかには多くの沖縄人（ウチナーンチュ）も一

[11] 1961（昭和 36）年－1971（昭和 46）年までブラジルに居住。40 歳の頃、家族 8 名（本人含む）で渡伯、渡伯後、末っ子の四女が生まれる。吉郎の兄弟でクリチーバ市に在住していた永吉、勇吉らの呼び寄せでクリチーバ市近郊のサン・ジョゼー・ドス・ピニャイスに移住する。吉郎家族は移住後、呼び寄せられた理由が、介護の必要になった吉郎らの母親を看てもらうためだったことを知る。その後、吉郎家族は、野菜作りと市場での野菜販売を 10 年間行い、よく儲かったという。しかし、大量の農薬を使用することから体への負担を懸念し、サンパウロ市ビラカロンで裁縫業に転職することとなった。ブラジルに定着していたが、沖縄にいる親類の事情からやむなく沖縄に帰ることとなった。長男の勝は、34 歳の時にブラジルの海で知人の子供を助けた後、水死しており、沖縄の吉郎の仏壇には位牌はなく、ブラジルで写された勝の写真だけが飾られている。（2016 年 1 月 3 日沖縄にてインタビュー）

[12] 日系社会の呼称。

緒に活動している。現在日系人会などでは、学生の頃一緒に活動していた人たちが多く重なっている。2013 年現在もクリチーバ学生連盟は残っている。

（３）2009 年現在の日系人組織「クリチーバ日伯文化援護協会」

「勝ち組」「負け組」の影響もあり、二つの組織に分かれているが、主な日系人組織である「クリチーバ日伯文化援護協会（以下、日系人会と表記）」の 2009 年現在の状況について、ジョージ石井さん前日系人会会長の説明などからみていく。（2009 年 8 月 15 日インタビュー）

会員は 1500 家族。会費は 80 レアル。500 家族ぐらいが払っている。不足分は、半年ごとのビンゴや祭りなどで補充する。祭りは、春、花、移民祭りがあり、2008 年は移民 100 周年との関係で 10 万人来たとのことである。毎週来ているのは、500～600 人程度という。日系クラブのある場所とは別のところに、「文援協（クリチーバ日伯文化援護協会）」と呼ばれる「日本語講座」、その横に学生寮が併設されており、（2009 年当時）58 人（女性 24 人、男性 34 人）がいる。

毎週の日系人会への出入りは、500～600 人程度という。体育館、野球場やプール（2013 年現在）がある。１階には広い食堂があり、週末には、クラブのついでに食堂に寄る人、食事を目的に来る人もいる。日系クラブとは離れた場所には、「文援協（クリチーバ日伯文化援護協会）」の「日本語講座」、その横に学生寮が併設されており、現在 58 人（女性 24 人、男性 34 人）がいる。

日系人会の活動については、パラナ州内の日系新聞『禅 zen　PLANETA ZEN-O JORNAL DACOMUNIDADE NIPO-BRASILEIRA DO PARANÁ』で詳しく述べられている。毎週のように、イベントが開催されよく集まっている印象である。スポーツ関係から、宗教、文化、政治、日本からの総領事との交流など盛んに行われている。

クラブは、30 部[13]あり、以下にあげる。

＊Academia Nikkei（日系アカデミア）
＊Ala Jovem（ユースウィング）
＊Artes Marciais - Karate Shotokan（武道、空手松涛館）
＊Assessoria Jurídica（法律上のアドバイス）
＊Baiten: Restaurante (Lanchonete)（売店、レストラン（軽食））
＊Beisebol e Softbol　（野球とソフトボール）
＊Bunka Center / Praça do Japão（文化センター／日本庭園）

[13] http://www.nikkeicuritiba.com.br/index.php?modulo=departamentos
文化援護協会のホームページ「nikkei」を参照。（2014 年 1 月 10 日閲覧）

＊Cenibra - Casa do Estudante Nipo-Brasileira de Curitiba（セニブラークリチーバ日伯学生の家）
＊Curso Bunkyo（文協コース）
＊Danças de Salão（ダンス）
＊Diretoria Executiva（執行部）
＊Feminino（女子部）
＊Fujinkai（婦人会）
＊Futebol（サッカー）
＊Gatebol(ゲートボール)
＊Ikebana Ikenobo e Ohara-Ryu（生け花池坊と小原流）
＊Internet（インターネット）
＊Jornalismo（ジャーナリズム）
＊Karaokê（カラオケ）
＊Minyo（民謡）
＊Nipson（？）
＊Odori（踊り）
＊Okinawa Kenjinkai（沖縄県人会）
＊Piscina – Hidroginástica（プール　ジャグジー）
＊Piscina – Natação(プール　競泳)
＊Secretaria Clube（事務局）
＊Secretaria Executiva（幹事）
＊Secretaria Geral（役員会）
＊Social（社会）
＊Sojukai（そうじゅ会）
＊Tênis de Campo（テニス）
＊Tênis de Mesa（卓球）
＊Veteranos（ベテラン）
＊Voleibol（バレーボール）
＊Wakaba (Taiko)（わかば））
＊WAKABA YOSAKOI SORAN（わかば　よさこいソーラン）

上にあげたこのクラブの中に沖縄県人会が含まれている。このことから、沖縄県人会の情報も日系新聞の『禅 Zen』に掲載されている。

なお、沖縄県人会以外の各都道府県の会がどのぐらいあるのかを述べておく。

『パラナ日系 60 年史』[14]の記録から創立年と会名をみていく。1960 年「クリチーバ福島県人親睦会」（会員 46 名）、1968 年クリチーバ宮城県人会（会員 16 名）、1971 年創設の南パラナ新潟県人会。1971 年以降、福岡県人会南パラナ支部が総説されている。
奄美出身[15]で鹿児島県人会に所属している人へのインタビューによると、鹿児島県人会は 40 家族ほどで構成されている。
兵庫県の姫路市とクリチーバ市が姉妹都市との関係もあり、兵庫県としてパレセ・ヒョーゴという日本風の建物がある。商工会議所にもなっている。

２．クリチーバ市における沖縄人（ウチナーンチュ）の歴史

まず、ブラジル全体における沖縄人（ウチナーンチュ）の歴史を概観してから、クリチーバ市における沖縄人（ウチナーンチュ）の歴史を見ていこう。
北パラナ州への沖縄人（ウチナーンチュ）の入植は、1917 年島袋仁和、比嘉松賀、安里牛、比嘉加重、新垣松助の５家族がバルボーザ耕地（カンバラー）に入植したのが始まりとなっている[16]。
『ブラジル沖縄県人の移民史－笠戸丸から 90 年－』[17]によると「パラナ州の州都クリチーバ市への県人の進出は、1942 年頃で同市近郊サン・ジョゼー・ピンニェイロに伊波松一、勇吉が、蔬菜作りで入植したが、大きな集団地になることはなかった」[18]とある。当時に詳しいクリチーバ沖縄県人会のヤマシロ・ゼンショウによると、沖縄県石川村、伊波村（現うるま市）の 5 家族がパラナグァ（パラナ州の海岸近く）に在住していたが、立退きのために新たな場所を探していた理由からクリチーバ市に視察にくるなどして移り住んできたと述べている。
パラナ州内において 1958 年現在の記録をみてみると、「350 家族 2,621 人の沖縄人が在住し、沖縄県人会は５支部あったが、２支部に減少した」[19]とある。2013 年現在、ブラジル沖縄県人会には 44 の支部があり、2006 年に新設されたもっとも新しい支部としてクリチーバ沖縄県人会がある。なぜ 2006 年まで設立されなかった理由については、
後述する４～６の「個として移住した沖縄人（ウチナーンチュ）の集団の結成過程：第１～３期でみていくこととする。
では、どのように移住してきたのかをクリチーバ沖縄県人会のメンバーへのインタビュ

---

14 牛窪襄 1972.『パラナ日系 60 年史』パラナ文化出版社.
15 クリチーバ市内には日本レストランなどが多数存在する。奄美出身のオーナーの経営するレストランは、「レストラン都」と「NAKABA ナカバ」が見られた。ナカバのオーナー本人によると、もともとの姓は「央（なかば）」だったが、「中場」に改姓したという（2009 年インタビューによる）
16ブラジル沖縄県人会 2000a.『ブラジル沖縄県人の移民史－笠戸丸から 90 年－１』サンパウロ：ブラジル沖縄県人会. p131
17 ブラジル沖縄県人会 2000a.『ブラジル沖縄県人の移民史－笠戸丸から 90 年－１』サンパウロ：ブラジル沖縄県人会.
18 ブラジル沖縄県人会 2000a.『ブラジル沖縄県人の移民史－笠戸丸から 90 年－１』サンパウロ：ブラジル沖縄県人会. pp.131-132。
19 ブラジル沖縄県人会 2000a.『ブラジル沖縄県人の移民史－笠戸丸から 90 年－１』サンパウロ：ブラジル沖縄県人会. p.251

ーから見ていく。サンパウロ州からパラナ州のクリチーバ市に移動してきた経緯を事例からみてみよう。

事例１．（沖縄人（ウチナーンチュ）１世　山城弘義（ひろよし）さん）

1 世の山城弘義さんは 1941 年大阪生まれである。両親が沖縄から大阪の工場へ出稼ぎをしていた。戦後、山城さん家族は沖縄へ戻っている。1960 年３月３月に山城さん家族は、オランダ船テゲルベル号でサンパウロ州サントスに 55 日間かかって到着した。その当時一緒だった人はちりちりバラバラでもう会っていないという[20]。ブラジルに到着し、サンパウロ州パウリスタで野菜、米を自分で作って、フェイラ（露天市）で売った。同じ伊波出身の伊波保さんがクリチーバ市にいたので、はじめ汽車でクリチーバをたずねている。その後、山城さん家族は 1962 年にクリチーバ市に移住した。山城さんによると「サンパウロからクリチーバに来るとき、だんだんくねくね道になっていました。昔はトラックの上に乗って３日ぐらいかかった」「ママイ（母）の兄弟がいて呼び寄せ移民としてきた。すでに親戚が移民として入っていたいとこから、ブラジルの写真も見せられた。大きな希望を持ってブラジルへ行くことを決めた。10 兄弟（本人は長男）と両親と一緒に来た。ブラジルに来たことを後悔したこともあった。

山城さんは、クリチーバ市で両親らとパステル屋を始め、現在は３代目の山城さんの３人の娘夫婦を中心に、お店は 30 年以上続いている。（2009 年 7 月インタビュー）

事例２．（沖縄人（ウチナーンチュ）２世　サダコ・ヤマシロさん）

両親は沖縄県今帰仁村出身で母親は花嫁移民でブラジルへきた。男２人、女７人の９人兄弟姉妹。サンパウロ州ジュトリーナ（リンスの近く）生まれ。カフェ（コーヒー）園があった田舎に居住していた。サンパウロ州からパラナ州の北部に引越し、結婚してクリチーバ市へ。

（2009 年 7 月インタビュー）

事例３．（沖縄人（ウチナーンチュ）１世　久高・伊波しずこさん）

25 歳で沖縄から、兄の久高唯義が移住していたクリチーバ市にきた。言葉もわからなか

---

[20] 山城弘義さんの詳細インタビュー「船に乗っとる間は楽しかったよ。いろんなことがあってね。オリンパスに１年いた。おばさんも山焼いて、電気もなかった。土で小屋立てて、コッケイロ（ココナツ）割って土入れて。サッペイ（かやぶき）。米つくって４アルケールやっていた。だけど、それでは駄目で、ハワイ（移民している親戚）からの援助が送られてきた。500 ドル。1962 年にクリチーバ。トマト作っていたけど、霜が降りて１年ぐらいで失敗。苦労ばかりだった。野菜をフェーラで売り出してよくなった。僕が来て、１年、２年、３年経っていくうちに日本は良くなってね、移民がだいぶ少なくなって。（ブラジルに移住したことを）後悔したこともあったね。もうちょっと待っとけば日本で暮らされよった。僕らは日本でも生活に困らなかった。（お父さんは）沖縄で軍作業をしていた。基地の中。弾薬倉庫。前原（まえばる）天願という軍の部隊があった。僕のお父さんはその仕事についてから長かった。その当時僕のお父さんは頭が良かったからね。英語テストもみんな通ってね、一番高い給料を取っていた。70 ドル、80 ドル。その当時は相当の給料高い方だった。ブラジル人はもっといい。助ける。馬鹿にしない。」

ったので、はじめの 10 年ぐらいはずっと畑をやっていた。1997 年までは埼玉の羽生市でペットボトル製造の会社に５年間働いていた。2000 年までは、クリチーバ市で旦那さんと自宅の１階で喫茶店を経営していた。よくみんなでシズコさん宅に集まっていた。シズコさんは沖縄県人会の人たちに「かぎやで風」などを教えていたりしていた。踊りを披露するため、日本とブラジルを行き来したこともあった。（2009 年 7 月インタビュー）

事例４．（沖縄人（ウチナーンチュ）２世　ヤマシロ・ゼンショウさん）
ヤマシロさんは 1929 年頃に生まれ。戦前は、サンパウロ州郊外アララクワラ市に３、４年住んでから、同州イタポリスに移り、家族は綿づくりで生計を立てていた。善正さんはその間寄宿舎学校に１、２年通った。戦後間もない 1946 年頃、同州オリンピアからクリチーバ市へ来た。当時、クリチーバ市在住の沖縄出身者は、石川（現沖縄県うるま市）の人が多かった。伊波永吉さんは「友之会」に入った。この会には、伊波勇吉さん、仲間セイゼンさん（沖縄県石川近くの屋嘉出身）、山城松一さん（クリチーバ市に最初にきた沖縄の人）などがいた。クリチーバは寒い気候で綿栽培には適さないため、22 年間野菜作り、作った野菜はメルカード（市場）で卸していた。畑は馬でおこした。米、トウモロコシも自分たちで食べる分ぐらい作っていた。そのほかガソリン販売、店、タクシーの運転手など様々な仕事をした。1963 年に結婚し、妻の居住していたサンパウロ州に４、５年住んでから、長男ということでクリチーバ市に戻って両親と一緒に住んでいた。
　両親はもう亡くなったが、どちらも沖縄県の旧石川市伊波村（現在うるま市）の出身で、家庭内ではウチナーグチを話していた。

事例５．（沖縄人（ウチナーンチュ）３世　ゴヤ・アルベルトさん）
　1949 年、サンパウロ州プレジデンテ・プルデンテ生まれ。父はサントス生まれ 2 世、母も 2 世　祖父母は糸満。サンパウロ市に実家がある。

事例６．（沖縄人（ウチナーンチュ）２世　ゴヤ・フクモト・イレーニさん）
　1943 年、サンパウロ州プレジデンテ・ヴェンセスラウ生まれ。
3 年前友達のマルシアさんに言われて沖縄県人会に入った。

事例７．（沖縄人（ウチナーンチュ）２世　ネレウ・カナシロさん）
　1959 年、マットグロッソドスール州カンポグランジ生まれ　両親とも名護出身　食料品販売店経営者。父は 18 歳、母は 8 歳の時にブラジルへ。カンポグランジにはフェーラ（露天市）があって、土日だけそばを売っていたが、今は毎日になっている。
デカセギからブラジルに戻った 94 年に、妻ホザンナさんの兄がいるということでクリチーバ市へ。

事例８．（イタリア系４世　ホザンナ・カナシロさん）

1962 年、サンタカタリーナ州アグアドーセ生まれ　沖縄人（ウチナーンチュ）と結婚後、日本にデカセギし、その後、兄のいるクリチーバ市へ。

事例９．（沖縄人（ウチナーンチュ）２世　エリーザ・エイコ・カナシロさん）

1949 年、サンパウロ州トレド生まれ（サントス近く）両親は大宜味村から来た。

トレドで生まれた後、4 歳の時にパラナ州アプカラナへ。そこで母は 60 年間住んでいる。お正月に行っている。1968 年に大学の試験を受けにクリチーバ市に来た。田舎は大学がなかったので。クリチーバ市については寒さは嫌いだけど、きれいな街（Cidade limpa）,クリチバーノ（クリチーバの人）は難しい人だけど、まじめな人、住みやすい。家の方は本当に住みやすい。のんびりしていて隣もいい人。

事例 10.（沖縄人（ウチナーンチュ）２世　マリア・ホカマさん）

1928 年、サンパウロ州ジュキアーのアレクリン町生まれ。

両親とも沖縄からブラジルへ移民した。マリアさんの 5 人のこどもは、それぞれ勉学のため、パラナ州カスカベル市、またはクリチーバ市へ移住している。マリアさんは同州マリンガー市で商売していた。自宅を仕事場に、マリアさんの夫が機械で刺繍を作る仕事をし、マリアさんはデザインを描いていた。国旗などを作っていた。あの頃はこのような仕事をやっている人はおらず、機械もなかった。1967 年から仕事をはじめ、政府からも 30 年頼まれてやってきたが、夫が白内障になってやめた。夫が 2009 年 11 月 2 日に亡くなった。70 年間煙草を吸っていて肺の 20 パーセントしか機能していなかった。

マリアさんは暑いのが苦手なので、クリチーバの気候が好き。若い時、同州ロンドリーナ市に住んでいた。

事例 11.（沖縄人（ウチナーンチュ）2 世　アカミネ・カズコさん）

「母親がなかなか妊娠しなかったという母親がブラジルに行ったら、ブラジルの水はとってもいい、おばあさんが水が変わればこどもを授かるでしょうからと 1937 年、ブラジルへ父親とおじさんと 3 名でサンパウロ州の鉄道モジアナ線のあるバウルーという町に移民した。それから同州アララクワラ市近くのカンジドホドリゲスというところで（カズコさんは）生まれた。」「（カズコさんが）3 歳の頃、同州アンドラジーナへ引越した。（カズコさんが）13 歳のとき、彼女の振る舞いがブラジル式だからということで、同州リンスの日本の花嫁学校（「生長の家」を基本に教えていた）に入れられた。」16 歳ですでにサロンを経営。4 年間勤務し、21 歳で結婚し、夫の仕事でサンパウロ州の中心部に移動その後、リオデジャネイロと移った。その後、クリチーバ市に移り、4 年間、病院関係の学校に関わり、その後 30 年間、結婚式衣装のオートクチュールデザインの仕事をしてきた。

事例 12.（沖縄人（ウチナーンチュ）２世　ヒロトシ・タミナトさん）

1950 年生まれ。父親が 1930 年、17 歳のとき、国頭郡今帰仁村字天底から来伯。戦後、母親（旧姓：阿波根）たちを沖縄からブラジルに連れに行った。サンパウロ州プレジデンテ・プルデンテで生まれ育ち、大学入学のため、クリチーバ市に移住した。建築、エンジニアリングが専門。議員。クリチーバ市のナイトフェイラを計画し、学校などの建築もした。

事例 13.（沖縄人（ウチナーンチュ）２世　ノブテロ・マツダさん）

サンパウロ州・リンス生まれの２世で、パラナ州の日系人社会の中で初めてのクリチーバ元市議会議員。ノブテルさんは勉学のため９歳の時１人で親戚を頼ってサンパウロ州のアリアンサ植民地、そして高等学校を卒業し、1945 年にサンパウロの工科大学へ進んだが、大学１年の時、体が弱く、鼻から血が出るなどしたため、医者から気候の良いところ、空気がきれいなところに転地することを勧められ、当時は田舎町だったクリチーバ市へ転校した。クリチーバ市は水道、空気がきれいだった。その後、ノブテルさんはパラナ連邦大学を 15 年かけて卒業した。15 年もかかったのは、学生運動の中心に立っていたからである。

事例 14.（沖縄人（ウチナーンチュ）３世　セルジオ・アラカキさん）

祖父母は 1908 年の笠戸丸移民だった。パラナ州北部のアンジラーで育ち、20 歳の頃、学校に行くためクリチーバ市に移住した。カメラ屋を営んでいたが、2000 年代に栃木県の真岡に 8 年間デカセギし、その後、クリチーバ市に戻り個人のタクシー運転手をしている。

事例 15.（沖縄人（ウチナーンチュ）１世　島袋・キルシュ・秀子さん）

沖縄県那覇市壷屋出身。1962 年、10 歳のときに沖縄から母親家族と親戚のいるサンパウロ州へ移民してきて 1970 年ごろまでいた。その後、おばさんのいるパラナ州マリンガーへ移ってきて、1980 年、夫の仕事の関係でクリチーバ市へ移ってきた。10 年前ぐらいまでクリチーバにいる沖縄人（ウチナーンチュ）は誰も知らなかった（2013 年インタビュー現在）。パラナ州クリチーバ市発行の新聞「Gazeta do Povo」に沖縄県人会のメンバーのアカミネ・カズコさんが沖縄についての記事を投稿しているのをみて、コンタクトをとったのがきっかけ。カズコさんにはクリチーバの沖縄県人会に行くことを誘われたが、母親が他界したばかりでいけなかった。

事例 16.（沖縄人（ウチナーンチュ）３世　アラカキ・エリジオ・アリオさん）

1967 年生まれ。サンパウロ州ドラセーナから 1982 年に山城弘義に呼ばれてクリチーバ市へきた。

事例 17.（沖縄人（ウチナーンチュ）３世　シマブクロ・セリオさん）

1956 年生まれ。サンパウロ州アダマンチーナから 1992 年にクリチーバ市へ働きにきた。

事例 18.（沖縄人（ウチナーンチュ）３世　セリア・トシエ・トウマさん）

1961 年生まれ。パラナ州のフェニックスという日本人移住地生まれ。1979 年に勉強するため、クリチーバ市へ移ってきた。

事例 19.（沖縄人（ウチナーンチュ）２世　イハ・クニヨシ・ホーザさん）

1934 年、那覇市上間から両親がパラナ州北部のグァチファへ来て、翌年、ホーザさんが生まれた。その後、サンパウロ州のプレジデンチ・プルデンチに引越し、結婚してクリチーバ市近郊のサンジョゼー・ドス・ピニャイスへ来た。18 年間ランショネッチ（軽食屋）を営んだ。

事例 20.（沖縄人（ウチナーンチュ）２世　アラカキ・ジュリアさん）

1933 年生まれ。夫のリセイさん(2 世)は、サンパウロ州ビリグイの奥地の日本人移住地「ジャンガーダ植民地」におり、そこから同州マリリアのアダマンチーナに移り、1957 年に結婚した。同州ドラセーナにおいて、コーヒー畑をやっていたが 1955 年の霜で全滅。商店を開けたが、初めだけよかった。マットグロッソ・ド・スール州カンピーナスに行くつもりだったが、ジュリアさんの妹と結婚した山城さんの世話でクリチーバ市へ移ってきて 10 年間フェーラ（露天市）をやり、インタビュー現在はランショネッチ（軽食屋）NINKI を経営している。

事例 21.（沖縄人（ウチナーンチュ）３世　ジョージ・トクマツ・ゴヤさん）

1945 年生まれ。サンパウロ州プレジデンチ・プルデンチ生まれ。父親が那覇からサンパウロ州へジストロへ移民し、母親が 2 世でサンパウロ州マリリア生まれ。ジョージさんは 1964 年 19 歳の時に大学へ進学するために出てきた。

事例 22.（沖縄人（ウチナーンチュ）２世　フミコ・トウマさん）

1929（昭和４）年、パラナ州カンバラー生まれ。

当時カンバラーでは沖縄のコロニア（移住地）に 10 家族ぐらいと住んでいた。ウエズさんの母親亀子さんのお父さんたち、と親同士が知り合い。

両親は最初、サンパウロ州パウリスタ線のゴイヤスに入っていた。父親はパラナ州カンバラーの借地で 10 年間コロニア生活をし、雑穀（豆、実）を作り、その後、稼いだ収入で同州アンジラにある 10ha の山を買ってコーヒー栽培をした。そこで儲かり、今度はその土地を売り、30km 離れた昭運植民地というところで 10ha の土地を買いコーヒーばかりの栽培を行っていた。75 年の霜害でコーヒー栽培は根っこまでやられてしまった。コーヒーを全部取り除いて、雑作を植え直した。1958 年にパラナ州フェニックスで結婚し、1982 年までいた。80 年に娘が大学に入るため、クリチーバ市に出た。そして 2 年後、フミコさんたち

家族もクリチーバ市へ移り住んだ。「頼母子」には夫のお母さんが入っていたため、クリチーバ市にきて 2 年後に入った。（2011 年 1 月インタビュー）

事例 23.（沖縄人 2 世　フローラ・ヤマシロさん）

1925 年、サンパウロ州セードロ（ジュキア線）生まれ。

両親は沖縄県佐敷（現在の南城市）出身。父親の妹と一緒に 3 回（目の集団移民）移民、笠戸丸の次の次で、来伯し、バナナ農園でバナナ作りをしていた。1970 年代にバナナ園を売って、サンパウロ州の田舎から町へ出てきている。

フローラさんは 10 人きょうだいの 7 人目。きょうだいたちが勉学などでサンパウロ市に出て行く中、フローラさんも 1938 年サンパウロの日本人学校の大正小学校[21]へ通う。その後、専門学校で刺繍を学び、1945 年頃の戦中は、サンパウロに家族と住んでいた。戦中、日本人 1 世は移動が禁じられていたが、2 世はブラジル人として認められるため、親の妹が病気の際、フローラさんが親の変わりに看病に行った。コチア産業組合で会計の仕事に就き、9 年間働いて、岐阜県 2 世の西野さんに出会い 1954 年末に結婚。1955 年から 1959 年までコチア産業組合のヘベロンプレット支部（サンパウロ州）にいたが、気候の関係から夫が体調を崩し、組合にお願いして 1960 年からクリチーバ支部へ転勤してきた。

巻末に付した付録資料 2「クリチーバ沖縄県人会員リスト（2009－2013 年）」に「以前の居住地または田舎」という項目を設けている。72 世帯の登録中、クリチーバ市居住数は、67 世帯である。残りの世帯は、パラナ州カンバラー市、クリチーバ市近郊のコロンボ、カンピーナグランデにおいての居住がみられる。詳細は付録資料 2 を参照されたい。

メンバーたちの事例を 23 あげてきた。もともとサンパウロに入植し、集団で居住しているメンバーが多い。その後、個々の理由でクリチーバにきたことがわかる。

３．個として移住した沖縄人（ウチナーンチュ）の集団の結成過程：第 1 期
—1957 年を中心に＜「親睦会」「頼母子（たのもし）」＞

次にクリチーバ市において沖縄人（ウチナーンチュ）だけの集まりがいつ頃から始まったかを見ていく。

クリチーバ沖縄県人会の記録資料によると、1957 年に親睦会（記録資料では「SHINBOKU-KAI」と表記）となっている。沖縄県人会のメンバーらのなかでは「頼母子」と呼称されている。

ここでいう「頼母子」は、一般に沖縄で言われる「模合（もあい）」を指し、頼母子講や無尽講の一種で庶民に広く親しまれている相互扶助的な金融の仕組みであり、寄合（ユーレイ）ともいう。小は親睦を兼ねたものから大は大型機器購入・住宅・営業・営農資金までさまざまな模

[21] 根川幸男ブラジリア大学准教授によると、大正小学校は、戦前にできたサンパウロ初の日本人学校、バイリンガルな子どもを育てるという先進的な一面が見られる教育だった。

合が行われている」[22]。「「模合」という言葉は、沖縄特有ではなく、２人以上のものが同時、共同、対等に物を所有したり、仕事をすることを「モヤイ持ち」「ヨリアイ仕事」などという例は、本土にもある。」[23]

クリチーバ沖縄県人会のヤマシロ・ゼンショウは、当時の様子を次のように述べている。

「頼母子は、寄り合って助け合う。その場で楽しもうとした。一月に一回集まって話し合おうと。バラバラになったらいかんと。伊波永吉、末一が案を出した。世話話とか無駄話とかしてね。世間、日本のこと、百姓のこと、いろんなことを沖縄語で話した。当時は日本語を話さなかった人が多かった。十分に日本語が話せない。あの頃は子どもたちも参加していた。個人の家で。」（2 世　ヤマシロ・ゼンショウ）

1958 年当時の様子を資料からみてみると、クリチーバ市及び近郊に 19 家族、人口 140 名（内訳：日本生まれ男 19、女 20、計 39 名、伯国生まれ男 54、女 47、計 101 名）。就学児童数は、小学 13、中学６、高等４、計 23 名。職業別世帯として、農業は（雑作農２、蔬菜栽培２、蔬菜栽培（借地）12）計 16 世帯、商業は（バール１、雑貨店１）計２所帯となっている[24]。

1959 年、クリチーバ沖縄県人会のサンパウロにある沖縄県人会本部への登録がみられ、伊波松一を中心に会員９名、伊波が会長を 8 期務めたとの記録がある[25]。

頼母子の発起人である伊波永吉の曾孫にあたるダニエラ・イハを通して行ったインタビューで、彼女の母親は当時のことを次のように話している。「たのもしは家族同士で持ち寄りしたり当選などでお金をもらったり楽しむための集まりだった」。この「当選」というのは、「お金をもらう人の当選」を指す。「毎回みんなお金を出してそれでその月集めた分を当選して貰う人を選ぶ」ということであった。（2015 年 10 月取材）

また１世の山城弘義も次のように述べている。

「1957 年ぐらいから。こっちは、クリチーバは、大体石川（現うるま市）出身が多い。１人が来たらみんな来る。だから、伊波姓が多かった。その後に名護の人たちが来ている。たのもし会は、顔合わせ、楽しみのための会で、その中で婦人会もできている」（2009 年７月インタビュー）

また、頼母子はどのようなものなのか。

---

[22]沖縄大百科事典刊行事務局編 1983c.『沖縄大百科事典　下巻』沖縄タイムス社.　p658
[23]山城善三・佐久田繁 2013.『沖縄事始め・世相史事典』日本図書館センター.　p199
[24]城間善吉 1959.『在伯沖縄県人・五十年の歩み　日本移民五十周年記念』東京.
[25]屋比久孟清編著 1987.『ブラジル沖縄移民誌』サンパウロ：在伯沖縄県人会.　327p

ブラジル沖縄県人会サンパウロ本部の当時事務局長だった 1 世の与那覇朝昭さんは次のように述べている。

筆者：「沖縄では「模合」というが、クリチーバでは「頼母子（会)」と言っているが。」
与那覇：「だいたい、頼母子(たのもし)と言うけど、「モーエーグァー（模合(もあい)）」という人もいる。家内は 12 人兄弟で、結婚して子供ができると道で会っても名前もわからなくなる。だから家族の頼母子会がある。今は裕福な生活になっているので、親睦会になっている」

与那覇さんいわく、サンパウロでは「同船会[26]」や「同窓会」などのような会が多いという。これはサンパウロにおける沖縄人(ウチナーンチュ)の中に集団で移住したということが意識されていることにほかならない。クリチーバ市ではこの移住のため、同船会という類の表現は使われていない。このことを表すもう一つの事例としてサンパウロにおいては、2008 年の沖縄県人会移民 100 周年記念祝賀祭典の資料[27]によると、41 もの市町村ごとの郷友会が存在する。これは集団での移住のため、人数も多く、このような組織が作られる。しかし、クリチーバはこのような市町村別の郷友会は存在しない。

クリチーバ市においては早い段階から「親睦会」という呼称の使用がみられる。
これは、クリチーバ市の沖縄人(ウチナーンチュ)が「個として移住」した故の特異性を物語っているのではないか。一度集団で移住した人々が様々な理由で個としての行き場を求めて移住しに来た末にサンパウロとの距離的問題も踏まえ、独自のコミュニティの中で人生を生き始めたことを表している。

戦後、1946 年 8 月 11 日に日系人会として「友之会」が設立されている。木造の日系人会館を建設し、その建設費寄付者 31 名中 6 名が沖縄人(ウチナーンチュ)との記録がある。また同年同月 25 日に 2 世が中心となって「ウベラーバ青年会」が設立されている。沖縄人(ウチナーンチュ)も日系人と一緒に活動をしてきている。

第二次世界大戦の「勝ち組」「負け組」で分裂している状態を何とか修復しようと、クリチーバ市の学生連盟メンバーたちによって、日系人会を一つにしようという動きが 1940 年代末から 1950 年代にかけて行われ始めた。この学生連盟のなかにも沖縄人(ウチナーンチュ)がおり、日系人と一緒に活動をしてきたことがみられる。

---

26 同じ移民船に乗ってきた人たちで構成される。

27「ブラジル市町村郷友会・市民会連絡名簿」、ブラジル沖縄県人会 ASSOCIAÇÂO OKINAWA KENJIN DO BRASIL2008.『沖縄県人会移民 100 周年記念祝賀祭典 1908 - 2008』(全 64 ページ)、p.68

４．個として移住した沖縄人（ウチナーンチュ）の集団の結成過程：第 2 期
—1959 年～1970 年代を中心に＜「親睦会（しんぼくかい）」「頼母子（たのもし）」「クリチーバ沖縄県人会」＞

形成過程である第 2 期を 1959 年～1970 年代と表記した理由は、クリチーバ沖縄県人会の創設時期が、メンバーの証言と記録資料で異なったためである。

「クリチーバの沖縄人の歴史」についてローマ字表記による以下のクリチーバ沖縄県人会による記録資料がある。1960 年代も「親睦会（SHINBOKU-KAI）」と表記され、毎月、個人宅にて頼母子が行われていた。以下でみていこう。日本語表記は筆者によるものである。

名称：「親睦会（SHINBOKU-KAI）」
創設者：Eikiti Iha, Matsuiti Iha(伊波松一),Seisu Nakamura(仲村政秀),Yuki Iha(伊波勇吉), Matsuiti Yamashiro(山城松一), Hide Higa(比嘉ヒデ), Gensu Nakama(仲間善正).

名称：「親睦会（SHINBOKU-KAI）：Uma segunda geração（第 2 世代）」（第 2 世代）
Tamotsu Iha(伊波保), Zengui Yamashiro, Tadayoshi Kudaka(久高唯義), Zennei Iha, Kitiro Iha, Jiro Kohatsu(古波津次郎), Ushi Shinaguikuro（原文ママ、島袋ウシ）

（出所：クリチーバ沖縄県人会資料）

日付は記されていないが、60 年代中旬から会の結成が開始されたとあり、親睦会が第 1 世代と第 2 世代とに分けられている。

当時、どのような活動がなされていたのか。

文字化された記録は見つからなかったため、クリチーバ沖縄県人会の所持する写真、写真に記されたメモからみた。1971 年、伊波松一の誕生会（Festa de aniversário do Sr.Matsuiti Iha Líder Pioneiro）、1972 年、青年会によって、パラナ州サン・ジョゼー・ドス・ピネイロスにおいて（Jovem do Groupo- S. José dos Pinhais→Excursão à Foz do Iguaçu）、イグアスーの滝へのツアーが行われている。

1980 年代については、頼母子は継続されている模様（記録なし）写真の記録により、1981 年、赤嶺カナのシャカラ にて、また 1985 年 3 月 24 日、個人宅（２世　イハ・ホーザ）に集まっている。

名称「クリチーバ沖縄県人会」としての記録は見当たらなかったが、『ブラジル沖縄県人の移民史－笠戸丸から 90 年－』[28]の記録をみてみると、クリチーバ支部として、1959 年から 86 年までの記録が残っている。

「戦後沖縄県人会歴代支部長名簿」[29]のクリチーバ支部の欄には次のように記されている。

---

[28] ブラジル沖縄県人会 2000a.『ブラジル沖縄県人の移民史－笠戸丸から 90 年－１』サンパウロ：ブラジル沖縄県人会.

[29] ブラジル沖縄県人会は支部になっているため、正確には「支部長」であるが、クリチーバ沖縄県人会

1959 年～1966 年：伊波松一
1967 年～1969 年：伊波勇吉
1970 年・1971 年：仲村政秀
1972 年・1973 年：伊波松一
1974 年・1975 年：伊波勇吉
1976 年：伊波松一
1977 年：仲村政秀
1978 年・1979：伊波勇吉
1980 年・1981 年：伊波永吉
1982 年・1983 年：伊波松一
1984 年・1985 年：古波津次郎
1986 年：伊波勇吉

しかし、メンバーの１人によると、サンパウロ市にあるブラジル沖縄県人会本部に会費を払いながら登録していたのは１、２年間ほどであったという。サンパウロ市との距離が少なくとも 400km 離れていたこともあり、当時は連絡や知らせが届いても遅い時には２か月後になっており、本部との交流も全くなかったため退会したとのことである。同メンバーの証言によると、1970 年代に支部になっていたが、会長だった伊波松一が他界してから支部を退会したということである。この証言に合わせると、伊波松一が会長を務めている 1980 年代まではブラジル沖縄県人会の支部としての「クリチーバ沖縄県人会」であったと考えられる。

これはクリチーバの沖縄人が「個として移住」した故の特異性を物語っているのではないか。一度集団で移住した人がさまざまな理由で個としての行き場を求めて移住した末にサンパウロとの距離的問題も踏まえ、独自のコミュニティの中で人生を生き始めたことを表わしている。

その後の動きとして、1990 年代も引き続き頼母子は個人宅にて毎月開催されて新年会、忘年会なども行われていた。90 年代は県人会長選挙の制度導入、沖縄県人会会館の建設に向けて頼母子で積立が行われるなど、活発な動きが見られた。1995-1999 年は、セルジオ・ミヤシロ[30]が会長を務めており、当時会館建設に向けて力を入れていたが、不慮の事故のため他界し、会館設立の話は無くなる。1999 年- 2000 年にパウロ・イハが会長を務めている。

内では、「会長」と呼ばれている。

30　クリチーバ沖縄県人会の資料によると、組織に貢献した会長として３名の名前が記されている。セルジオ・ミヤシロ、パウロ・イハ、そしてノブテロ・マツダ。E por fim os ex-presidentes que contribuíram muito com os seus esforços os senhores.

５．個として移住した沖縄人（ウチナーンチュ）の集団の再結成：第 3 期
—2006 年を中心に＜「頼母子（たのもし）」「クリチーバ沖縄県人会」＞

クリチーバ沖縄県人会としての再設立の様子についてみていく。サンパウロにある沖縄県人会本部には所属せず、「頼母子（たのもし）」として活動を継続してきたが、2006 年６月に「クリチーバ沖縄県人会」としてサンパウロにある沖縄県人会本部に所属する形で支部が設立された。その後も毎月の集会は、「頼母子」と呼ばれている。クリチーバ沖縄県人会として再始動する前段階として 2000 年のはじめごろから新しいメンバーが加わり動き始めていた。

クリチーバ沖縄県人会の資料にしたがって、支部の設立までの役員名は以下の通りである。

【2001－2005】
Presidente: Nobutero Matsuda
Vice-Presidente: Jorge Uesu
Secretario Geral: Paulo Iha
Tesoureiro : Adilson Kohatsu
Tesoureiro: Carlos Taira
Departamento Feminino: Kazuko Akamine Ferraz
１° Tesoureira : Regina Simabuco
２° Tesoureira : Kazue Taira
Segunda Tesoureira Kazue Taira
Odori : Shizuko Iha
Conselho Fiscal:
Hiroyoshi Yamashiro
Jose Yoshiteru Yabiku
Luiz Shimabuko
Risei Arakaki

出典：クリチーバ沖縄県人会の資料（ポルトガル語）
以下、筆者の日本語訳。

【2001-2005 年】
会長：ノブテロ・マツダ
副会長：ジョージ・ウエズ
事務局長：パウロ・イハ
会計係：アジルソン・コハツ

会計係：カルロス・タイラ
婦人部：カズコ・アカミネ
第１会計：ヘジーナ・シマブッコ
第２会計：カズエ・タイラ
踊り：イハ・シズコ
監事（財政アドバイス）：
〇ヒロヨシ・ヤマシロ
〇ジョゼー・ヨシテル・ヤビク
〇ルイス・シマブコ
〇リセイ・アラカキ

【2001－2005】は、まだクリチーバ沖縄県人会ではないが、2006 年のクリチーバ沖縄県人会の前身となるものとなっている。

そして、いよいよ 2006 年のクリチーバ沖縄県人会としての再始動となる。以下に【2006-2008】をあげる。

【2006-2008】
Presidente: Jorge Yasufide Uesu
Vice- Presidente: Yasukatsu Uechi
１° Tesoureiro: Paulo Iha
２° Tesoureira: Celio Kohama Shimabukuro
１° Secretaria: Maria Guinoza Matsuo
２° Secretaria: Hatsue Satow Shimabukuro
Departamento Feminino: Neli Tamiko Uesu
Departamento Cultural: Tereza Yaeko Uechi
Departamento Social: Kazuco Akamine Ferraz
Conselho Fiscal: Nobutero Matsuda
Aldo Yamashiro
Elisa Kanashiro Maruo
Conselho Deliberativo:
Hiroyoshi Yamashiro
Jose Toma
Paulo Iha
Adir Rocco
Risei arakaki
Soki Higa

Genso Yamashiro
Jose Yabiku
Nobutero Matsuda
Julio Inafuco
Luiz Simabuko

以下、筆者の日本語訳。

【2006-2008 年】
会長：ジョージ・ヤスヒデ・ウエズ
副会長：ヤスカツ・ウエチ
第 1 会計：パウロ・イハ
第 2 会計：セリオ・コハマ・シマブクロ
第 1 事務局：マリア・ギノザ・マツオ
第 2 事務局：ハツエ・サトウ・シマブクロ
婦人部：ネリ・タミコ・ウエズ
文化部：テレーザ・ヤエコ・ウエチ
社会部：カズコ・アカミネ・フェハス
監事（財政アドバイス）：
○ノブテロ・マツダ
○アウド・ヤマシロ
○エリーザ・カナシロ・マルオ
諮問委員会（審議アドバイス）
○ヒロヨシ・ヤマシロ
○ジョゼ・トウマ
○パウロ・イハ
○アジール・ロッコ
○リセイ・アラカキ
○ソーキ・ヒガ
○ゼンショウ・ヤマシロ
○ジョゼ・ヤビク
○ノブテロ・マツダ
○ジュリオ・イナフコ
○ルイス・シマブコ

本格的なクリチーバ沖縄県人会の始動し、役員名簿をみると、新メンバーの加入、社会部、文化部の設置などが新しくできている。また県人会として指導する前の特徴的な動きとして、会の活動を行う定まった場所を確保したことが挙げられる。これは山脇ジョージ日系人会会長に日系人会館の一室を使用したい旨を伊波カンジ、伊波リセイ、屋比久ジョゼー、山城弘義らが相談し、日系人会から了承され可能となった。クリチーバ沖縄県人会の活動場所があることで、毎月開催の頼母子は毎回メンバーの個人宅で行っていたものが日系会館にて行われるようになる。頼母子は、午後２時から軽食（持ち寄り当番制）を行いながら、お知らせ、ビンゴなどが行われている[31]。

当時のことを知るジョージ・イシイ日系人会長によると、クリチーバ沖縄県人会ができてから、沖縄県人会の方から日系人会館の場所を借りられないかと話をしにきた。県人会の人たちは１ヶ月に１回会議を行われている。沖縄県人会で日系人会に入っている人は少ないが、日系人会の活動にも積極的に入ってほしいとイシイさんは思ったという。

日系人会の会館を使用すると同時期に、新しい沖縄人（ウチナーンチュ）メンバーが集まり始める。そしてメンバーの中から、沖縄踊り（または琉球舞踊）への参加の動きが 2000 年代から見られる。2000 年 7 月 16 日、第 39 回パラナ民族祭（39º Festival de Etnias do Paraná）に沖縄踊りに参加している。2002 年 3 月 16 日、金城節子先生の琉舞の初回講座開催された。

その他、親睦会として個人宅への集まり[32]や忘年会、新年会が開催されてきている。

そして 2006 年に「クリチーバ沖縄県人会」が再設立された。その際の沖縄県人会のホームページ、あるいは UCHINA PRESS で紹介された記事を紹介する[33]。

「沖縄県人会クリチーバ支部記念式典・祝賀芸能公演」

「若い人たちに沖縄の伝統文化を継続してもらいたい」―。沖縄県人会（与儀昭雄会長）四十四番目の支部となるクリチーバ支部創立記念式典と祝賀芸能公演が、去る六月四日午後二時からパラナ州都の同市内日系クラブ会館で開催され、ウエズ安秀ジョルジ支部長（五九、三世）は創立の意義を強調した。この日のためにサンパウロからは慶祝芸能団約百四十人が駆け付け、会場は立ち見客も出るなど「近年でこんなに入ったことはない」（地元関係者）超満員の約六百人が出席。今後の相互交流と発展を祝った。

---

31 クリチーバ沖縄県人会の資料（ポルトガル語）
A partir dos anos 2000 as reuniões mensais passaram a acontecer num dos salões do Nikkei Clube a convite do então presidente Sr. Jorge Ishii. Estas reuniões de Tanomoshi e confraternização são animadas com comidas típicas e outras ao som de musicas e danças típicas apresentados por ex-bolsistas. A seguir a relação das participantes do Tanomoshi no ano de 2005.
以下、筆者日本語訳：2000 年から毎月の集まりを日系クラブで当時のジョージ・イシイ会長の招待で行われるようになった。この頼母子の集まり、その他の会では、伝統料理、その他音楽と伝統踊りが披露されて賑やかである。

32 2003 年 7 月、赤嶺カナのシャカラにて集う。

33クリチーバ沖縄県人会の再設立については、沖縄県の地元新聞『琉球新報』と『沖縄タイムス』、またブラジルの日系人新聞である『ニッケイ新聞』などにも取り上げられ記事として掲載されている。

県人会本部前評議員会長の山城勇氏の話によると、会員数十人以上であれば支部を創立しても良いとの定款があったことから、一九五〇年代末には支部数は六十を数えたという。クリチーバ支部も七〇年代半ば頃まで活動していたが、一世会員の高齢化により自然消滅し、今回の同支部創立は実に約三十年ぶりとなる。

二年前まで日系クラブの企画担当理事で副会長を務めていたウエズ支部長は昨年会長に就任した際、「これからは若い人たちを入れて活動していく必要があり、日本や沖縄の伝統文化を継承させたい」と今年二月に支部登録を行い、正式団体として認可されている。

記念式典には、サンパウロ本部から与儀会長をはじめとする慶祝芸能団約百四十人が大型バス三台で駆け付け、地元クリチーバからは萩生田浩次総領事、上野アントニオ元連邦議員、原ルイ市議、山脇ジョージ日伯文化援護協会会長ら来賓も出席。また昨年十一月に創立五十周年を祝ったロンドリーナ支部からも金城ロベルト市議や会員が姿を見せ、晴れの日の式典を祝った。

式典では支部創立会員が舞台上で紹介されたあと、県費留学生ＯＢの上地マサルさんが同制度についての報告を行った。来賓紹介のあと、ウエズ会長があいさつ。一九四七年に日系クラブ前身であるウベラーバ青年会が創立した経緯を説明した上で、同支部発足が日系クラブの協力により実現できたことに感謝の意を示した。さらに、「『いちゃりばちょーでぃ（会えば皆兄弟）』の気持ちを通じて我々の世代が会の活動を行うのは意義深いこと。県系、日系に限らず、幅広く沖縄の伝統文化を伝えていきたい」と、今後の相互交流とさらなる活動の必要性を強調した。

引き続き、祝賀芸能公演が行われ、祝儀舞踊曲としては欠かせないという「かじゃで風節」「ごえん節」「揚作田」「東里節」「赤田花風節」が、野村流音楽協会ブラジル支部（知念直義会長）、野村流古典音楽保存会ブラジル支部（嘉数秀治会長）、箏曲興陽会ブラジル支部（宮城みよ会長）、箏曲保存会ブラジル支部（宮里良子会長）メンバーにより演奏。また、琉球舞踊協会（城間和枝会長）メンバーによる舞踊やクリチーバ支部員のカラオケ、昨年の県費留学で一年間沖縄県立芸術大学で琉球舞踊を学んだという斎藤悟さん（一九、三世）の「取納奉行」なども披露された。

躍動感溢れる琉球国祭り太鼓の演奏のあと、フィナーレは沖縄独特の「カチャーシ」を会場が一体となって踊り、公演は興奮冷めやらない間に「お開き」となった[34]。

[34] http://www.100nen.com.br/ja/okinawa/000208/20100422006374.cfm
ブラジル沖縄県人会のホームページより参照。「移民百年祭」の欄より（2015 年 1 月 10 日閲覧）

〈写真 3〉沖縄県人会クリチーバ支部記念式典・祝賀芸能公演

出所：『UCHINA PRESS』

〈写真 4〉沖縄県人会クリチーバ支部記念式典・祝賀芸能公演

出所：『UCHINA PRESS』

この 2006 年に行われたクリチーバ沖縄県人会創立記念式典は DVD 化されているが、上記の記事のように、当時の会長や副会長をはじめ、クリチーバ沖縄県人会を立ち上げた人々の大きな喜びや期待が表れている。〈写真３〉に見える壇上のメンバーだけをみてみると、確認できる 10 名のうち、1 世が 1 名、２世が 7 名、３世が２人である。この３世は２人とも、父親が 1 世、母親が２世なので、2.5 世とも言えるが、2 世に近い。２世が中心になって会を立ち上げたことがわかる。

ブラジル沖縄県人会作成の 100 周年記念祭のホームページ[35]によると、「クリチーバ支部も七〇年代半ば頃まで活動していたが、一世会員の高齢化により自然消滅し、今回の同支部創立は実に約三十年ぶりとなる」とある。しかし、ヤマシロ・ゼンショウによると、1957 年からクリチーバ市の沖縄人(ウチナーンチュ)は定期的に集まってはいたということだった。一度サンパウロの本部へ登録したが、場所の遠さなども影響してサンパウロからの情報が届くのが遅く、会費を支払う必要性を見いだせずに登録解除をしたという。ブラジル沖縄県人会全体の登録記録には、1990 年代まで会長の名前が記述されている。

ブラジル沖縄県人会本部に登録する形では、クリチーバ市では 30 年前に途絶えていたが、沖縄人(ウチナーンチュ)同士の集まり自体は続いていた。活動は個人宅に集まり、頼母子、ピクニックなどである。しかし、現在のメンバーの多くはこれまで県人会に関わってこなかった新たな顔ぶれとなっている。2015 年まで 4 人の会長が務めてきているが、全員、2000 年代からの新メンバーとなっている。これまでクリチーバ市で会長を務めてきたメンバーは、他界、サンパウロ市への引越しの理由でクリチーバ市には残っていない。

クリチーバ市の沖縄人(ウチナーンチュ)は、日系人と一緒になって活動をしてきてはいるが、少なくとも 1957 年からは沖縄人(ウチナーンチュ)を中心とした集まりを月 1 回「頼母子」などの形で現在まで継続している。

ジョージ・イシイ日系人会会長（当時）（2009 年 8 月 16 日インタビュー）

「クリチーバはもとは日系人は少なかった。貧乏人は少なく、乞食はいない。これがいい。中の上か上の下か。日本人は、40 年前（1960 年代）はバカにされた。戦争に負けたからである。今は日本人というと親切にされる。これも、親や祖父母がきちっと働いてくれたからだ。３世は日本語を話せない人が多い。これからやっていきたいことは、祭りなどで日本の文化関係を見せたいし、残したい。沖縄さんには太鼓などある。続けるだろうと思う。タミナトさんやウエズさん、それからオオシロ・ヨシアキさんという実業家なども日系人会の理事である。」

クリチーバ沖縄県人会の ESTATUTO SOCIAL（規約）は、創設にあたって、日系人会の規約、そして福島県人会の規約などを参考にして作成された。クリチーバ沖縄県人会の目的などをみるため、確認調査としてサンパウロにある沖縄県人会本部から数名が 2006 年にクリチーバ市を訪問し、会議が開かれた。その時の内容を当時の沖縄県人会秘書のギノザ・マツオ・マリアのポルトガル語による記録（2006 年 9 月）に基づいて以下に記する。筆者による日本語訳を付す。

---

[35]「沖縄県人会クリチーバ支部記念式典・祝賀芸能公演」ブラジル沖縄県人会 HP 参照,
http://www.100nen.com.br/ja/okinawa/000208/20100422006374.cfm
創立記念祭については、琉球新報の記事にも掲載されている。
ブラジル／クリチーバ支部誕生／県人会４４番目／琉舞などで式典祝う
2006.06.25　『琉球新報』朝刊　25 頁　通２　写図表有　（全 912 字）　（与那嶺恵子通信員）

＜PESQUISA SOLICITADA PELA AOKB À ASSOCIAÇÃO OKINAWA KENJIN DE CURITIBA＞
：ブラジル沖縄県人会本部からのクリチーバ沖縄県人会への尋ねられた質問

A) HISTÓRICO DA CONSTITUIÇÃO DA SUB-SEDE. O GROUPO ORIGINOU-SE EM MEADOS DE 1960, TENDO COMO PRINCIPAL OBJETIVO A AJUDA MÚTUA FINANCEIRA (TANOMOSHI), COMO TAMBÉM A CONFRATERNIZAÇÃO E AMIZADE ENTRE OS MEMBROS DO GRUPO.

P（質問）：支部創立の歴史は？
R（返答）：グループ支部創立の歴史は 1960 年代中頃、財政的な互助（頼母子）、またメンバー間の親睦と友好を目的に始まった。

B) DATA DE SUA FUNDACÃO A ASSOCIAÇÃO OKINAWA KENJIN DE CURITIBA FOI FUNDADA NO DIA 19 DE FEVEREIRO DE 2006.
：クリチーバ沖縄県人会の創立日は 2006 年 2 月 19 日

C) QUAL ERA NÚMERO DE ASSOCIADOS NA ÉPOCA DA SUA FUNDAÇÃO?

P：創立時の会員数は何名か？
R: 79 ASSOCIADOS.
返答　:79 名の会員

D) QUAL O NÚMERO ATUAL DE ASSOCIADOS?
：現在の会員数は？
R: 117 ASSOCIADOS.
返答：117 名

E) CITAR OS OBJETIVOS QUE MOTIVARAM A SUA FUNDAÇÃO.
会を設立する動機となる目的について

A) CURTIVAR A MAIS AMPLA E PERFEITA CORDIALIDADE ENTRE OS ASSOCIADOS.
R：会員間の友好をより広く、完璧に増強すること

B) PROMOVER ATIVIDADE CULTURAL, ESPORTIVA, RECREATIVA, FILANTROPICA, ASSISTENCIAL E BENEFICENTE.
R：文化、スポーツ、レクレーション、慈善、ボランティア活動を促進させること。

C) PROMOVER O INTERCÂMBIO COM OUTRAS ENTIDADES CONGÊNERES DE COOPERAR NAS ATIVIDADES DA SOCIEDADE CULTURAL BENEFICENTE NIPO-BRASILEIRA DE CURITIBA (NIKKEI CULBE).
R：他の組織、クリチーバ日伯文化援護協会（日系クラブ）との活動協力交際を促進させること。

D) ESTREITAR A CONEXÇÃO COM A PROVÍNCIA DE OKINAWA BEM COMO APROFUNDAR LAÇOS DE AMIZADE ENTRE O BRASIL E O JAPÃO NO DESENVOLVIMENTO DA SOCIEDADE BRASILEIRA.
R：ブラジル社会の発展において、ブラジル、日本との友好の絆を深めるだけでなく、沖縄県との結びつきも強くする。

F) ENUMERAR AS ATIVIDADES ANUAIS DESEENVOLVIDAS PELA ASSOCIAÇÃO OKINAWA KENJIN DE CURITIBA.
R: REUNIÕES MENSAIS DOS ASSOCIADOS (TANOMOSHI), BINGOS, ATIVIDADES CULTURAIS COMO TREINO DE CANTICOS OKINAWANOS, EXCURÇÕES, CHURRASCADAS ETC.
：クリチーバ沖縄県人会の年次活動の列挙
返答：毎月の集まり（頼母子）、ビンゴ、
メンバーの月例会（TANOMOSHI）、ビンゴ、沖縄の曲練習の文化活動、遠足、バーベキュー等。

G) CITAR AS DIFICULDADES QUE VEM ENFRENTANDO.
R: AS FAMILIAS DOS ASSOCIADOS (MAIORIA) NÃO TEM A TRADIÇÃO DE CULTIVAR A CULTURA OKINAWANA, PORTANTO OS FILHOS TÊM RESISTÊNCIA EM PARTICIPAR DAS ATIVIDADES CULTURAIS A SEREM DESENVOLVIDAS.
：直面している困難の列挙
返答：会員の家族（多数）が沖縄文化を強化する習慣を持たない、そのため、子供たちは文化活動に参加することに抵抗がある。

OS NISSEIS MENOS ACULTURADOS À TRADIÇÃO DOS ANCESTRAIS NÃO DEMONSTRAM INTERESSE EM PARTICIPAR DAS ATIVIDADES DA ASSOCIAÇÃO.
：祖先の伝統から文化変容する２世は、協会の活動への参加に関心を示さない。

- A MISCEGENAÇÃO CONTRIBUI PARA A ALIENAÇÃO À CULTURA DOS ANCESTRAIS.
：外国人（非日系）との結婚は、祖先の文化を重んじなくなる傾向にある。

-A FALTA DE TRADIÇÃO À CULTURA DOS NOSSOS ASSOCIADOS NÃO FORNECE BAGAGEM SUFICIENTE PARA QUE POSSAM TRANSMITIR ISTO AOS SEUS FILHOS, QUE TAMBÉM NAS VIVENCIARAM A CULTURA DESDE PEQUENIHOS.
：私達会員は、沖縄の伝統文化が欠如しているため、文化の中で子供たちに継承することができない。

マリアさんのメモにある２番目のＣ「団体、県人会などの同様な組織、日系クラブと交際すること」の項目から、日系人などが関わる祭りなどに沖縄県人会として参加することを考えるようになった。規約作成により、少なくともクリチーバ沖縄県人会における活動計画に影響をもっている。また、クリチーバ沖縄県人会が「直面している困難は」では、多くの家族は沖縄文化、伝統を持っておらず、文化育成の小さい時から文化を見ていない２世以降はなかなか沖縄文化に興味を持たず、沖縄県人会に参加しない様子も伺える。

６．クリチーバ市とはどのような地域なのか

では、クリチーバ市とはどのような地域なのか。まず、クリチーバ市を地図でみてみよう。

〈図 5〉ブラジル国の地図：パラナ州クリチーバ市の位置

出所：外務省（Ministry of Foreign Affairs of Japan）ホームページより

https://www.ezairyu.mofa.go.jp/RRnet/map/koukan/map/32/map_brazil.html

クリチーバ市は、サンパウロ州に隣接しているパラナ州に位置する州都である。クリチーバ首都圏全体の人口は 175 万人（2010 年現在）、面積は 432 平方キロで、ブラジル南部では最大の都市である。IBEG（Brazilian Institute of Geography and Statics: ブラジル地理統計研究所）のデータによるとクリチーバ市民の約 80%は最低賃金の 3 倍以内の収入となっている。これはブラジル国内では相対的に豊かであるが、日本などと比べれば、まだまだ経済は厳しい状態にある（2000 年現在）[36]。

クリチーバ市には、公共交通機関はバスのみで高速高架道路はない。日本の多くの町にあるような最新技術のゴミ焼却炉や地下鉄もなく、その上スラム（フェヴェーラ）が多く形成

[36]服部圭郎 2004.『人間都市クリチーバ　環境・交通・福祉・土地利用を統合したまちづくり』学芸出版社. p. 22

されているところである[37]。しかしクリチーバ市の独特な政策からブラジル国内外において「個性的な都市」とされている[38]。それは、1966 年以後、ジャイメ・レルネル元市長[39]を中心に「人を大切にする街づくり」や「人間が住みやすい街づくり」を基本概念に据えて、交通、土地利用、都市デザイン、緑地、環境などに関する都市政策を行ってきたことによる[40]。1992 年にはリオデジャネイロで開催された国連環境開発会議で、環境政策が表彰され、世界からも注目を浴びるようになった。レルネル元市長のもと、環境政策で兵庫県出身の中村ひとし氏が登用されクリチーバ市の都市政策に大きく貢献している。またクリチーバ市は日系人も多く、クリチーバ市のまちづくりに関係した日系２世の市長や市会議員も誕生している。そのなかに沖縄人(ウチナーンチュ)もいる。クリチーバ市は、ポーランド、イタリア、ウクライナ、ドイツ、日本、フランス、スイス、ユダヤ系、アラブ系、そして先住民族の人々などが集まって出来た都市であることから、多様性にも配慮した街づくりも行われている[41]。

クリチーバ市の政策については世界的に注目されてきた。『社会自由主義国家　ブラジルの「第三の道」』[42]の「社会都市―クリチバの都市政策と社会的包摂」と『人間都市クリチーバ　環境・交通・福祉・土地利用を統合したまちづくり』[43]を中心にみていく[44]。

クリチーバ市の起源は、1693 年、パラナ州都となったのは、1853 年である。人口は、2007 年で約 180 万人であるが、市の周辺部の発展も著しくクリチーバ大都市圏（RMC）を形成している。RMC は、26 ムニシピオ（日本の市町村）から形成され、2007 年には推定人口 317 万人である。

19 世紀後半のコーヒーブームで多数の移民が流入して以降、人口が増加した。移民の出身地はドイツ、イタリア、ポルトガル、ウクライナ、レバノン、シリア、日本など多様である。

クリチーバも急速な人口増加と都市化によって失業が拡大し、貧困や飢餓が深刻化してきた。道路、住宅、上下水などの社会資本の供給の不足で数多くのスラムが生まれ、都市環境は悪化した。クリチーバが他の都市と違うのは、早くから都市が抱える問題を認識して実効的な都市計画を策定したことによる。

---

[37]中村ひとし「人間の生活を中心に据えた都市計画　環境都市クリチーバの取り組み」、篠田武司・宇佐見耕一編 2009.『安心社会を創る　ラテン・アメリカ市民社会の挑戦に学ぶ』信評論.p.232

[38]松本栄次著・撮影 2012.『写真は語る　南アメリカ・ブラジル・アマゾンの魅力』二宮書店. p125

[39] 1937 年クリチーバ市生まれ。1960 年連邦パラナ大学工学部土木工学科卒業。クリチーバ市長を３期務め、94 年からパラナ州知事を 2 期務めた。

[40]松本栄次著・撮影 2012.『写真は語る　南アメリカ・ブラジル・アマゾンの魅力』二宮書店.

[41]中村ひとし「人間の生活を中心に据えた都市計画　環境都市クリチーバの取り組み」、篠田武司・宇佐見耕一編 2009.『安心社会を創る　ラテン・アメリカ市民社会の挑戦に学ぶ』信評論.p.232

[42]小池洋一 2014.『社会自由主義国家　ブラジルの「第三の道」』新評論.

[43]服部圭郎 2004.『人間都市クリチーバ　環境・交通・福祉・土地利用を統合したまちづくり』学芸出版社.

[44]「社会都市―クリチバの都市政策と社会的包摂」小池洋一 2014.『社会自由主義国家　ブラジルの「第三の道」』新評論.　pp.188 - 213

1970 年～90 年代にかけて、3 期（1971～74 年、79～83 年、89～93 年）にわたって市長を務めたジャイメ・レルネル（Jaime Lerner）は、建築家・都市政策を貫く理念は社会的包摂だった。彼は次のように話す。「さまざまな年齢や収入の人が集まり、多様な機能をもつことで、都市は豊かで活力あるものとなる」[45]。「貧しい層でも富める層でも、孤立した集団があるような都市は都市ではない」。

クリチーバには、都市政策の背景には、社会的排除をなくし、社会的包摂（social inclusion）を実現するという理念があり、小池は、クリチーバの都市政策を社会的包摂の視点から考察している。社会的包摂について、「多様な能力を備えた人材の動員を可能にし、経済開発を促すだけでなく、政治を安定させ、治安維持の費用を節約する」また、「多様な人々が主体的に社会に包摂されることは、個々の都市ばかりでなく、社会全体の持続的な発展に不可欠な条件である」[46]

クリチーバでは、都市の形成と発展に伴い、交通や住宅などのインフラ整備を含む社会問題を解決するため、数々の都市計画が作成されてきた。

「一般市民と都市計画の専門家を交えた公共の場」を設けている。

1965 年、クリチーバ都市計画研究所である（Instituto de Pesquisa e Planejamento Urbana de Curitiba：IPPUC）が設置された。

「ブラジルでは公共交通が社会的包摂の重要な手段と位置づけられており、その整備を求める運動も活発である。クリチバの優れた公共交通システムは、そうした社会運動の一つのモデルともなっている。」[47]

クリチバの都市政策は 1960 年代に策定されたマスタープランに沿って策定されたものであった。

小池は、クリチーバの都市政策を社会的包摂の視点から考察している。社会的包摂について、「多様な能力を備えた人材の動員を可能にし、経済開発を促すだけでなく、政治を安定させ、治安維持の費用を節約する」また、「多様な人々が主体的に社会に包摂されることは、個々の都市ばかりでなく、社会全体の持続的な発展に不可欠な条件である」[48]

ブラジルの日系人は現在約 140 万人とされ、パラナ州はサンパウロ州を除けばブラジル最大となる約 15 万人の日系人口を有している。クリチーバ市にはそのうちの約 4 万 5000 人が居住している[49]。移民社会における個人が尊重されるまちづくりもなされて

---

45 レルネルの言葉（Lerner [2005] 31，41）

46 「社会都市―クリチバの都市政策と社会的包摂」小池洋一 2014.『社会自由主義国家　ブラジルの「第三の道」』新評論.　p. 189

47 「社会都市―クリチバの都市政策と社会的包摂」小池洋一 2014.『社会自由主義国家　ブラジルの「第三の道」』新評論.　p. 193

48 「社会都市―クリチバの都市政策と社会的包摂」小池洋一 2014.『社会自由主義国家　ブラジルの「第三の道」』新評論.　p. 189

49 「総領事館ほっとライン　第 32 回　クリチバ　日系人も創造に貢献したエコシティー」萩生田　浩次（在クリチバ総領事）、2014 年、外務省ホームページ。http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/iken/06/souryouji/32.html　（2015 年 10 月 25 日閲覧）

きた。

1990 年のアンケートによれば、クリチーバ市に住む 96%が「自分の住む街を愛している」と答えている[50]。サンパウロは 11%である。

「クリチーバは、建物や車ではなく人間の生活を中心にした街づくりを市民参加によって進め「環境都市」と呼ばれるようになった」[51]

7．小括

1「クリチーバ市における日系人の歴史」の（1）「クリチーバ市における日系人の流入―３つの要因」において、クリチーバ市への移住の形態が個として移住していることを確認した。３つの要因は①戦争による海岸沿いからの立ち退き命令、②都市であるクリチーバ市への就学、就職の機会を求めて、③1975 年頃に発生した霜害があった。

日系人組織の変遷は、戦後の「勝ち組」「負け組」問題による影響のため、複雑になっており、日系人の中でともに活動をしていた沖縄人（ウチナーンチュ）の間でもその影響がみられた。戦後になっても、日系人が分裂したままであることから、クリチーバの学生連盟による日系人たちの歩みよりを促進させたことがみられた。その学生連盟には、沖縄人（ウチナーンチュ）2 世も含まれており、その後、この学生連盟には、パラナ州北部などからクリチーバにきた日系人、沖縄人（ウチナーンチュ）たちが共同生活するなどともに活動も行ってきている。現在においても日系人会のなかで学生時代の仲間として日系人会の組織の中心になり協力しあうことが見られる。

その一方、1950 年代に入り、沖縄人（ウチナーンチュ）だけの「親睦会」または「頼母子（たのもし）」と呼称する月１回の集まりが個人宅で行われてきた。クリチーバ市における沖縄人（ウチナーンチュ）の歴史を３つの期である①1957 年を中心に、②1959 年～1970 年代を中心に、そして③クリチーバ沖縄県人会として再始動した時期とに分けて述べてきた。

サンパウロの沖縄県人会本部には、クリチーバ沖縄県人会として、会長名の登録が 1966 年から 1986 年までみられる。しかし、メンバーによると、サンパウロの沖縄県人会本部には 70 年代に１，２年だけの登録であっただろうという証言であった。その後のクリチーバ市の沖縄人の歴史として、1990 年代に会館設立に力を入れていた当時の会長がみられたが、不慮の事故で他界している。その後 2000 年前後から新しいメンバーの入会が目立つ。もともといたメンバーが沖縄人（ウチナーンチュ）だとわかる人々に声かけをし、入会を促したことも大きな要因になっている。

第 2 章でみてきた「集団としての移住」に対して、クリチーバ市のような移住を「個としての移住」とした。クリチーバ市の沖縄人（ウチナーンチュ）の歴史をみると、クリチーバ市ははじめ、伊波村（いはむら）（現うるま市）の数家族が呼び寄せる形で入ったのが最初ではあったものの、クリ

---

50 中村ひとし「人間の生活を中心に据えた都市計画」、篠田武司・宇佐見耕一編 2009.『安心社会を創る ラテン・アメリカ市民社会の挑戦に学ぶ』信評論. p.240

51 南塚信吾「新たな貧困に立ち向かう住民組織」『朝日新聞』書評 2009 年 10 月 11 日。

チーバ沖縄県人会メンバーらの祖先の出身地別にみても特定地域に限られていない。事例としてあげた沖縄県人会のメンバーへのインタビューから、沖縄人(ウチナーンチュ)それぞれの背景が異なっていることがみられる。そして就学、就職、結婚など個人的な事情で移り住む「個としての移住」が顕著に見られる地域となっていることわかる。

クリチーバ市の特徴として、都市になっているため、就学、就職の機会があること、都市計画が整い、公共交通機関の充実、スラム住民や低所得者も排除しない市民参加のまちづくりのため、住民の満足度、愛着度が特に高い町であること、またヨーロッパなどの各国から移民で構成されており、それぞれの文化を尊重する政策もクリチーバ市が意識的に行っている。そのまちづくりに関係してきた日系人、沖縄県系人も多い。このようなプラスの特徴を理由に移り住むことが見られた。

次章では「クリチーバ沖縄県人会とアイデンティティ」において、さらに「個として移住した」沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティを見ていくこととする。

第４章　クリチーバ沖縄県人会とアイデンティティ

第４章は、本論文の主な目的である、個人で移住した場所において沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティがどのようになっているのかをクリチーバ市における沖縄人（ウチナーンチュ）の事例を中心にみていく。日本からの集団移民とはほとんど関係のなかった[1]クリチーバ市において、日系人、沖縄人（ウチナーンチュ）が２次的あるいは３次的に流入している。沖縄文化に触れる環境が薄いと思われるクリチーバ市において、前章で見たように、2006 年にクリチーバ沖縄県人会として本格的に始動した。沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティはどのようになっているのだろうか、またそれはどのように継承されているのかについて、把握を試みる。

１．クリチーバ沖縄県人会としての再始動

ブラジルの沖縄県人会では世代交代が否応なく進んでいる。これに対して、クリチーバ市では少し事情が異なり、約 30 年ぶりにクリチーバ沖縄県人会としての活動が再開された。本章では、クリチーバ沖縄県人会が実際の活動内容、特徴などを、主にメンバーに対するインタビューをもとに見ていく。そしてなぜ沖縄県人会の再設立に至ったのかに焦点をあて、沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティとの関係をみていく。

（1）ブラジル国における調査概要―クリチーバ沖縄県人会を中心に

筆者が行ったクリチーバ市の調査概要と、同時期に訪問調査を行ったクリチーバ市以外の地域についても述べる。全４回の訪問調査の日程・場所、各回の調査概要を追った後、調査方法、全体の調査概要を述べる。４回の訪問調査日程・場所は以下の通りである。

＜訪問調査概要（全４回）＞

１回目：2009 年 7 月 13 日～8 月 24 日

訪問地：

・サンパウロ州サンパウロ市

・サンパウロ州グァタパラ移住地 、アララクワラ市（7 月 18 日～20 日）

・パラナ州**クリチーバ市**（7 月 21 日～8 月 16 日）

・パラナ州ロンリーナ市（8 月 6 日）、カンバラー市（8 月 7 日）、ロンドリーナ市（8 月 10 日）

・サンパウロ州サンパウロ市（8 月 17 日）

[1] 戦後、クリチーバ市においてコチア産業組合呼寄せ青年移民の存在が確認されている。

・サンパウロ州サンパウロ市ビラカホン地区（8 月 18 日）
・サンパウロ州カンピーナス市（8 月 19 日）
・サンパウロ州サンパウロ市近郊（～8 月 24 日）

１回目の調査概要：

プレ調査としてブラジル沖縄移民全体の現状把握につとめた。サンパウロにあるブラジル沖縄県人会本部を数回訪問し、事務局職員の話を聴くなどした。広島出身者の１世と一緒に、日本人移住地の一つとなっているグァタパラ移住地[2]を２日間滞在し、その関係でアラクワラの沖縄県人会会館を訪ねる。クリチーバ市には約 1 ヶ月間滞在し、クリチーバ沖縄県人会を把握することにつとめた。パラナ州の北部には、沖縄人（ウチナーンチュ）移民が比較的多く居住している。またクリチーバ沖縄県人会のメンバーがクリチーバ市以前に住んでいた地域として、パラナ州ロンドリーナ市、カンバラー市などにも赴いた。また沖縄県人会の活動が活発なサンパウロ州サンパウロ市ビラカホン地区やカンピーナス市を訪問した。

２回目：2010 年 12 月 7 日～2011 年 2 月 2 日

訪問地：

・サンパウロ州サンパウロ市
・パラナ州**クリチーバ市**（約２週間）
・パラナ州マリンガー市

２回目の調査概要：

２回目のプレ調査として、１回目の調査と同じくブラジルにおける沖縄移民全体の歴史、現状把握につとめた。筆者の訪問時期が年末年始となり、県人会活動が行われない時期ではあったが、メンバーの関係する個人的、社会的な会合は多く、できるだけ一緒に参加させてもらい、話す機会を増やすよう試みた。パラナ州内にある、沖縄移民が比較的多く、クリチーバのメンバーがクリチーバ市以前に居住していた地域となっているマリンガー市を訪問調査した。

３回目：2012 年 8 月 7 日～2013 年 2 月

訪問地：

・サンパウロ州サンパウロ市
・パラナ州**クリチーバ市**（約半年間）
・バイア州テイシェイラ・デ・フレイタス市
・エスピリートサント州ビトリア市

[2]「移民のふるさと」の一つと称され、1966 年まで計 134 戸の入植が行われた最後の集団移住地。グァタパラ移住地は、日本政府の応募を募ったところ、1962 年 1 月から入植が開始され、日本の 7 県である山形、長野、茨城、岡山、島根、山口、佐賀県から永住を目的とした農業移住が始まった。1964 年の東京オリンピックで日本の景気が良くなったことにより、移住は減少していった。

３回目の調査概要：

２回目のプレ調査の結果、ポルトガル語会話能力の必要性を感じたことと、クリチーバ沖縄県人会には来ないメンバーの把握をするため、まとまった期間の滞在を決意し、ポルトガル語を習得しながら約 6 ヶ月間クリチーバ市に滞在した。クリチーバ市やサンパウロ市とは別の地域を把握するため、筆者の親戚の居住するエスピリートサント州とバイア州の両州で年末年始を過ごした。

４回目：2013 年 9 月～

訪問地：

・サンパウロ州サンパウロ市

・パラナ州**クリチーバ市**（約１週間）

４回目の調査概要：

沖縄居住の知人がブラジル訪問する機会とあわせ、サンパウロ在住の知人の３家族に会う。沖縄戦の後、米軍占領時代に米軍から土地を奪われた「伊佐浜移民」（第２章参照）10 家族が集団移民しており、そのうちの１家族を訪問する。クリチーバ市では、これまでの調査で出た疑問の確認、近況の把握を行う。

次に調査方法について述べていく。

クリチーバ沖縄県人会に関する調査方法は、文献調査とインタビュー、参与的観察によって行った。文献に関しては、研究論文、移民周年史、沖縄の地方紙 2 紙（『琉球新報』、『沖縄タイムス』）、パラナ州の日系関連の新聞、ブラジルの沖縄コミュニティ新聞“Jornal Utiná Press”を活用した。

インタビュー調査については主に３つの内容に大別した。①クリチーバ沖縄県人会に関する記録、情報が少ないため、インタビューによってクリチーバ沖縄県人会の歩み、活動全体の詳細把握を行うこと。②なぜ沖縄県人会を 2006 年に復活させることになったのかなどの問題意識をもちながら、クリチーバ沖縄県人会メンバーの一人一人の考えから沖縄のアイデンティティを探ること。③クリチーバ市に在住している特徴を見出すため、クリチーバ沖縄県人会のメンバーたちと日系人との関係、社会的なつながりがどの程度あるのかを探ること。またクリチーバ沖縄県人会メンバーとつながりのある団体、親戚などの紹介をこちらから願い出て、積極的に訪問することとした。

以上のように 2009 年からプレ調査に入り、クリチーバ沖縄県人会会長を含め 10 数名に複数回インタビューを行うなかでクリチーバ沖縄県人会の現状把握を行った。記録方法としては、2009 年はビデオ撮影を行い、2010 年以降は IC レコーダーに変更した。現地のクリチーバ市を訪れた際にはクリチーバ沖縄県人会のメンバーの県人会活動、社会的な活動、日常生活に同行し、必要に応じてインタビューを行うなどの参与的観察を行った。

（2）クリチーバ市の沖縄人（ウチナーンチュ）に出会った経緯と印象（2008 年）

まず、筆者がクリチーバ市の沖縄人（ウチナーンチュ）に出会った経緯をみながら、クリチーバ沖縄県人会の沖縄人（ウチナーンチュ）の印象をみていく。

2008 年 8 月 22 日～26 日、ブラジル沖縄県人会の「百周年実行委員会」を中心に、ブラジル沖縄移民 100 周年記念祭（以下、「100 年祭」と表記する）が開催された。100 年祭の開催地は主にサンパウロ市内であるが、ブラジル沖縄県人会館や運動場のある施設また公園など複数の場所で行われた。筆者は、沖縄県人会館本部のあるサンパウロ市内のリベルダージの地下鉄駅近くの HOTEL　AKASAKA（ホテル　アカサカ）に宿泊していた。100 年祭の初日、ホテルの朝食の場に来ていた団体と会い、顔を見て 100 年祭のために来ている沖縄人（ウチナーンチュ）ではないかと判断し、筆者から声をかけた。その団体はクリチーバ市から貸し切りバスで 6 時間以上かけてサンパウロに到着していたクリチーバ沖縄県人会のメンバーたちであった。8 月はブラジルでは冬の時期で、クリチーバ市はサンパウロ市よりも南に位置し、寒い地域であることから、厚手の服装をし、非常に控えめな人たちという印象を筆者は持った。積極的に話しかけてきたのは、沖縄人（ウチナーンチュ）の妻を持つ長崎県系 2 世のマツオ・ベルナルドさんだった。100 年祭は、リベルダージから離れた場所で行われるということで、筆者もクリチーバ市のバスに同乗させてもらうことになった。

筆者はブラジル以前に、ハワイにおいてハワイに居住する沖縄人（ウチナーンチュ）には会ったことがあった。しかし、ブラジルの沖縄人（ウチナーンチュ）に会うのはこの時がほとんど初めての経験であった。バスの車内では、ポルトガル語らしき言葉、沖縄の言葉でも話されているのが聞こえた。この時筆者と話してくれた人は日本語の話せる 2 世、3 世だった。筆者には誰が何世なのか判断がつかない状態であった。クリチーバ沖縄県人会メンバーのなかで、100 年祭会場内での沖縄人（ウチナーンチュ）の集まり全体をみて、外からの目線を持って筆者に解説してくれる人がいた。例えば、サンパウロでの催しのなか、沖縄人（ウチナーンチュ）をさして「県人会に入っている人って結構お金に余裕がある人が多いのね」などと、客観的に見ている印象だった。

クリチーバ沖縄県人会メンバーの一人が用意したという沖縄の紅型模様がプリントされた沖縄音楽の歌集をそれぞれが持っていた。100 年祭への参加者は少なくとも 1000 人以上に及ぶため、クリチーバ沖縄県人会のメンバーたちはローマ字で祖先、あるいは 1 世の場合、自分の出身市町村名、自分の名前と沖縄本島の絵入りの名札をつけていた。

当時クリチーバ沖縄県人会会長だったウエズさんが、バス車内で次回のクリチーバ沖縄県人会の集まりに関することをポルトガル語でアナウンスしていたことから、定期的な集まりがあることが伺えた。ブラジルの沖縄県人会は多い時で 60 支部を越えていたが、現在は 44 支部となっている（2013 年現在）。全 44 支部のうち 40 支部がサンパウロ州内にあり、そのうちの 16 支部がサンパウロ市内にある。筆者は、クリチーバ沖縄県人会は昔からある県人会の 1 つだと、この時考えていた。

クリチーバ沖縄県人会のメンバーの印象として、外からきた者に対する接し方が非常に入りやすいものがあった。数人のメンバーたちと電話やメールなどで話しているうちに2006年にクリチーバ沖縄県人会を設立され、会館はないということがわかってきた。そして筆者は2009年7月にプレ調査としてクリチーバ市を訪問するに至った。

（3）クリチーバ沖縄県人会メンバーの属性

2009年から2013年にわたるインタビュー調査とクリチーバ沖縄県人会の役員がまとめたリストや資料をもとに、氏名、生年、世代、祖先の出身地、宗教、職業、「デカセギ」[3]経験、沖縄滞在経験、現在の居住地、そして以前の居住地または田舎の項目に分けて会員の属性をまとめている。インタビューの機会が作れず空欄の箇所が多数残っているところもある。なお、クリチーバ沖縄県人会の会員の属性は、巻末付録資料の会員リストを参照されたい。

「会員リスト」として整理したメンバーの属性に関する詳細を項目ごとに述べる。

氏名については、役員がまとめた名前リストをベースにした。リストの氏名は夫婦か個人名になっており、役員によると沖縄県人会の会費を支払って登録した世帯別となっている。頼母子会だけの参加やイベントに出席するだけで会費を支払っていなければ、このリストには入っていないため、漏れている可能性もある。しかし、クリチーバ沖縄県人会に参加している人の大体の顔ぶれは揃っていると思われる。リストに入っている人で、他界したメンバーが5名はいる。筆者が調査滞在した2009年～2013年までの間にインタビューを行ったが、他界、引越などで途中所属から外れたメンバーも含めることとする。氏名はイニシャルで表記し、男性・女性の別も記す。

「生年」については、インタビュー漏れのため聞き取りできなかったメンバーについては、空欄にした。

「世代」に関しては、両親それぞれの世代を記した。例えば、1世と2世の子の場合、法律上は3世となる。しかし、筆者はその場合、中間点を取って2.5世と表記した。

「祖先の出身地」に関しては、祖父母、両親、それに父方、母方と出てくるため、できるだけ詳細に記述するようにした。

「宗教」に関しては、沖縄では仏教、キリスト教、創価学会など様々あるなかで、祖先崇拝が一般的にみられる。クリチーバ市では、祖先崇拝が継承されているのかどうかと、それに加えて個人的な宗教の状況について聞き取りを行った。

---

[3] 入移民の国であったブラジルが「出移民の国」になり、2005年にはポルトガル語事典に「デカセギ」が収録され、日本語がポルトガル語となっている。このため、本論文では、ブラジルから日本へいくことを「デカセギ」と表記する（参照：三田千代子2009.『「出稼ぎ」から「デカセギ」へ－ブラジル移民100年にみる人と文化のダイナミズム－』不二出版.）。

「職業」については、前職や退職前の職業を含め、これまで関わった職業についてできるだけ記述した。

「デカセギ」経験については、クリチーバ沖縄県人会でも経験しているメンバーが見られる。

「沖縄滞在経験」に関しては、デカセギで日本本土に居住していても、沖縄に寄らない例は少なくない。しかし、日本本土に居住することで、沖縄がどのような場所で状況なのかについては見聞する機会があると思われる。

「現在の居住地」は、ほとんどのメンバーがクリチーバ市内に居住している。しかし、中には、クリチーバ市と同じパラナ州内にある別の市町村からクリチーバ市に来るメンバーも含まれている。

「以前の居住地または田舎」については、ブラジル国に移民し、良い土地を求めて複数回動いてきたことがうかがえる。また就職、学校、結婚などの個人的な事情によりクリチーバ市に居住している場合は、家族が居住する田舎を持っている場合がみられる。

（4）クリチーバ沖縄県人会メンバーの属性―まとめ

2008 年～2013 年のクリチーバ沖縄県人会メンバーへのインタビューによると、年齢構成は、1 世が 4 人で年齢は 80 歳代～60 歳代、2 世は 80 歳代～50 歳代、3 世以降は様々である。1 世が少なく、2 世、3 世が主体となっている。

メンバーたちの出自を見てみると。1 世～3 世で沖縄の離島に出自を持つ人はいなかった。沖縄の北部地区が 23 人、中部地区が 32 人、南部地区は 16 人、那覇は 5 人である。沖縄以外の府都道府県に出自を持つ人は 13 人、イタリア系が 2 人である。他都道府県出身者の構成については、夫が他府県出身という人が 5 、6 名いて、三重、広島、石川、長崎などである。

2 世以降について、実際生まれ育った場所は、サンパウロ州、パラナ州、マットグロッソ・ド・スール州などである。

沖縄県人会に登録している人数だが、クリチーバ市に日系人は多いが沖縄人（ウチナーンチュ）は少ない。日系人 4000～5000 家族であるのに対して、沖縄人家族は、80 家族以上である。

婚姻関係については、日系人でないブラジル人と結婚した人が 4 分の 1 とされる。

クリチーバ市の沖縄人（ウチナーンチュ）をみると、沖縄人（ウチナーンチュ）の出自を持っているということにこだわり、10 年ほど前から、日系人会とは別に、盛んに県人会活動を行うようになってきている。このような活動の背景には、彼らの個人的な事情のほかに、クリチーバ市やブラジル全体のあり方と密接に関連するものがあると考えられる。

（５）クリチーバ沖縄県人会の活動

クリチーバ沖縄県人会の活動内容についてみていく。章末に付した「クリチーバのウチナーンチュの歴史」で詳細を参照されたい。

①定期の活動　―「頼母子」など

クリチーバ沖縄県人会の定期的な活動は、全体では「頼母子」と、「踊り（琉球舞踊）」や「三線」の講習となっている。

主な活動は、毎月最終日曜日に日系人会館において「頼母子」を行うことである。「頼母子」は 1957 年から継続的に続いてきた歴史のある集まりである。忘年会や新年会、母の日、敬老の日、クリスマスパーティなど主な年度行事を「頼母子」の日程で行われている。

活動内容は、午後 2 時頃から集まり、「頼母子」の現金を支払い、受け取る人もいる。

沖縄のお菓子などを持ち寄る。持ち寄るのは、数人の持ち寄る担当者が決められているほか担当外の人も持ってきている様子である。会費は毎月 1 家族 10 レアル（当時で約 470 円）[4]となっている。それに、クリチーバ沖縄県人会は、サンパウロ本部に所属する形であることから、半年毎に 1 家族 50 レアルを支払う。支払い状況は、両方支払う人もいれば、どちらかだけを払う人もいる。出席できない場合、別のメンバーにお金を預ける人もいる。

クリチーバ沖縄県人会の会員はどうなっているのか。厳密にはサンパウロ本部に会費を支払う人が沖縄県人会のメンバーであると考えられる。しかし、クリチーバ沖縄県人会の場合、月 1 回の「頼母子」で集まるため、「頼母子」の名前がメンバーの中で印象が強く、「頼母子」に出席するとクリチーバ沖縄県人会に入っていると認識される傾向にある。沖縄の特徴の一つと考えられる「頼母子」での座り方について述べておく。基本的にはブラジルでは夫婦一緒に座るが、この場合は「ウチナー（沖縄）式」に男女が別れて座る[5]。

琉球舞踊については、毎月 1 回、サンパウロ市から琉球舞踊の先生 2 名を呼ぶ。生徒数は女性 6 名以上、子ども 3 名以上、男性 4 名以上（2013 年現在）。先生は、島袋よりこ、ジュリアナ・サユリ・イズ（所属：Takaryu Hana no Kai de São Paulo）である。また、先生が不在のときは DVD に収めた先生の踊りを見ながらの自主練習を行っている。沖縄県人会 3 周年記念会や公演ごとに向けての練習の頻度を変える。三線も同様の頻度でサンパウロ市から先生を呼ぶ。生徒数は、8 名前後おり、続いてはいる（2013 年 1 月現在）。定期的に毎週自主練習として個人宅に集まっている。踊りの講習については、クリチーバ沖縄県人会が 2006 年に再結成される前の 2000 年代初めから、サンパウロ市在住の 1 世の先生から講習を受けてきていた。

---

[4] 2013 年 2 月現在、1 ブラジルレアル＝約 47 円となっている。参照：「世界経済のネタ帳」（月間平均レート）http://ecodb.net/exchange/brl_jpy.html　（2015 年 10 月 20 日閲覧）

[5] 2009 年 7 月 26 日の頼母子にて、ジョゼー屋比久による。

②不定期の活動―沖縄料理教室など

不定期の活動としては、クリチーバ市内では日系人の３大祭り（春祭り、移民祭り、秋祭り）が行われており、沖縄県人会として祭りに「沖縄そば」などを販売している。定期的に参加するようになってきている。

沖縄料理を提供する機会にはメンバーが集まり、料理教室「AULA DE SOBA（そば教室)」を行う。パステル[6]工場を持つメンバーがいるため、工場の台所などを借りて行われている。パステルの生地や機械は、沖縄そばの麺を作ることができる。沖縄料理のレシピは、沖縄料理に詳しいメンバーなどの情報を持ち寄って試作し、試食を行って、行事で提供するものを決定する。クリチーバ沖縄県人会の沖縄料理レシピは、付録資料１に付する。

クリチーバ沖縄県人会の創立記念祭は、１、３周年と行われ、5 周年の際には「Festival da Cultura de Okinawa 文化祭」として日系人会館の会場で開催された。「沖縄そば」、沖縄菓子のサーターアンダギーやもちを販売した。

その他には、サンパウロなど別の州で沖縄文化関係の催しがあれば、チャーターバスで遠出する。これは 100 周年記念祭でも見られた。

〈写真 5〉クリチーバ沖縄県人会の忘年会

三線、琉球舞踊のグループ、「琉球國祭り太鼓」のメンバーたちが一緒に歌っている様子

[6] Pastel と表記。小麦粉を練って作った薄い生地を小さく切り、具を包んだものを揚げたもの。ブラジル風揚げ餃子ともいう。

2014 年 12 月、メンバーの撮影による。

〈写真 6〉クリチーバ沖縄県人会の文化祭（創立 5 周年記念）の招待状

出所：クリチーバ沖縄県人会

③クリチーバ沖縄県人会から独立した活動―「琉球國祭り太鼓」

特別枠として、大学生までの若い人たちを中心にした「琉球國祭り太鼓」のグループは毎週日曜に練習が行われている。祭りや忘年会などで披露するため、クリチーバ沖縄県人会と一緒に活動に参加することもあるが、基本的には独立して別の場所で熱心に練習を行っている。10 歳代～30 歳代が入っている。

「琉球國祭り太鼓」は沖縄県をはじめ、世界中に支部が広がっている。クリチーバ沖縄県人会の創立記念祭の際、サンパウロ市内から披露しにきていた「琉球國祭り太鼓」をみたのが活動のきっかけとなっている。クリチーバ支部ができるまでに至った様子を当時の会長だったウエズさんのインタビューからみていく。

―ウエズ・ジョージさんへのインタビュー（2011 年 1 月 6 日）

2006 年のクリチーバ沖縄県人会の設立パーティーの際、サンパウロの沖縄県人会と「琉球國祭り太鼓」グループも駆けつけた。その時、クリチーバ市の沖縄人（ウチナーンチュ）たちは太鼓の披露に魅了され、ウエズさんはクリチーバ市にも太鼓のグループを作りたいという願望を強く持ち始めた。2007 年に、クリチーバでも「琉球國祭り太鼓」を作りたいと「琉球國祭り太鼓」の創設関係者に申し出た。しかし、ユニフォームや太鼓が揃っていることが規則になっており、クリチーバはそれらの条件を満たさないとの理由で認められなかった。その後、ウエズさんは、最初、親戚やこどもたちを集めて 6 ヶ月間はクリチーバ沖縄県人会費から CD プレイヤーを買い、内緒で練習させた。クリチーバ市に「琉球國祭り太鼓」があるようだという噂が広がり始めたが、未認可のため、ウエズさんは表だっては言えなかった。練習場は、クリチーバ市にある兵庫県の建物パレセ・ヒョウゴの敷地内の駐車場で行った。「琉球國祭

り太鼓」のグループが少しずつ拡大していくと、今度は騒音が気になるようになった。そこでウエズさんの自宅近くの学校（小、中、高）の運動場が使えるように学校と交渉し、2011年現在も毎週日曜に学校運動場で練習を行っている。サンパウロ市から「琉球國祭り太鼓」の先生に来てもらうことも考えたが、費用が高くついてそれはできなかった。しかし、ちょうどサンパウロ市から沖縄踊りや太鼓をマスターしたオオシロ・ナオミさんがクリチーバ市内にあるパラナ連邦大学に学びに来ることになっていた。知人だったクリチーバ沖縄県人会メンバーのマツダ・ルジアさんを通してナオミさんに太鼓の指導をお願いし、ナオミさんの指導のもと、太鼓のグループはさらに拡大していった。

「琉球國祭り太鼓」とは1985年に沖縄でできたもので、世界各地の沖縄人の集住地域に広がっている。創設者で沖縄人（ウチナーンチュ）の浦崎さんが沖縄から琉球国祭り太鼓の普及をさせた。クリチーバ市の太鼓のグループは「琉球國祭り太鼓」本部からの許可が得られない状態で6ヶ月が過ぎた頃、ウエズさんが浦崎さんに直接電話でクリチーバ市での太鼓グループ創設を相談し許可を得るに至った。

ウエズさんによると、2010年のNHK（Nippon Hoso Kyokai）紅白歌合戦の際、沖縄の歌手グループの背後で「琉球國祭り太鼓」が出演しているのをみた。「沖縄の音楽がクリチーバで聴けるようになったことが、ヘリザオン（実現）した」と思うとウエズさんはいう。現在、クリチーバの「琉球國祭り太鼓」は、パラナ州の北部に位置するカンバラー市のフェスティバルなどブラジル全国各地で行われる太鼓のフェスティバルにも参加している。「沖縄の太鼓」はブラジル人も知っていて、沖縄のシンボルになっていることを誇りに思っているとウエズさんは述べている。

〈写真 7〉「琉球國祭り太鼓」クリチーバ支部

ますます成長するクリチーバの「琉球國祭り太鼓」。2013年11月　5周年記念公演にて筆者撮影。

〈写真 8〉「琉球國祭り太鼓」クリチーバ支部メンバーの集合写真

出典：「琉球國祭り太鼓」クリチーバ支部の 5 周年記念冊子より。

メンバーの何人かが沖縄染めの伝統工芸である紅型をモチーフにしたものを手にしている。

顔ぶれは、日系人、非日系人、沖縄人となっている。

２．４名の会長へのインタビューからみる沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティ

クリチーバ沖縄県人会全体の活動を見てきた。2006 年のクリチーバ沖縄県人会再設立に関わるメンバーが入り始めた 2001 年頃から 2012 年には、4 人目の会長に代わっている。どの会長も会長職に難しさや負担を感じている様子が伺えた。そこで４名の会長の考えを以下に掲げるインタビューから具体的にみていく。インタビューは二つの大きな項目として、個人の人生背景と沖縄県人会のあり方に対する考えを中心に聞いた。インタビューの分量にはバラつきがみられるが、重要な証言と思われるため、できるだけ内容を変えずに記した。ポルトガル語や日本語の難しい言い回しが出てこないことがあったものは、筆者が補足して説明しているため、全部本人たちがそのまま話した形にはなっていないことを断っておく。

（１）2001～2005 年度　マツダ・ノブテロ会長

インタビュー日時：2009 年８月５日以降、複数回に渡りインタビューを重ねている。

場所：マツダさんの自宅
同席者：妻のルジアさん

〈写真 9〉マツダ・ノブテロ

2014 年 11 月、クリチーバ沖縄県人会のメンバーによる撮影。

◆マツダさんの背景

マツダさんは 2006 年にクリチーバ沖縄県人会が正式に立ち上がる前の 4 年間「頼母子（たのもし）」の会長を務めた。

マツダさんはサンパウロ州リンス市生まれの２世で、パラナ州の日系人社会の中で初のクリチーバ市議会議員である。沖縄との関係は、両親が沖縄県名護市出身の沖縄人（ウチナーンチュ）である。マツダさんは勉学のため９歳の時、一人で親戚を頼ってサンパウロ州のアリアンサ植民地に移住した。中学生時代から政治に関わり、高等学校を卒業後、1945 年にサンパウロの工科大学へ進む。体が弱かったこともあり、進学したばかりの大学１年次在学中に鼻血が出るなどしたため、医者から空気のきれいな気候の良い場所への転地を勧められた。そこで、当時は田舎町だったクリチーバ市へ移住し、パラナ連邦大学に転校した。その後、パラナ連邦大学を 15 年かけて卒業した。マツダさんによると、当時ブラジルでは各州で学生運動が起こり、大学生に政治的な力があったという。マツダさんは学生運動の中心に立っていたため、15 年かけての卒業となった。４人兄弟の長男であるが、弟たちがすでに全員卒業を済ませているなか、マツダさんは 35 歳まで学生運動をしており、金銭的には困った状態にあった。

学生運動の拠点は 1949 年に設立したパラナ州での学生連盟（UGC：União dos Gakusseis de Curitiba ウニオン・ドス・ガクセイ・デ・クリチーバ、以下「学生連盟」と称する）である。この学生連盟の中心人物の中にマツダさんを含め、沖縄人も含まれていた。また、第２次世界大戦が終結した頃、日本の敗戦を認めるか認めないかの「勝ち組」「負け組」問題が収まらず、日系社会が喧嘩状態で分裂していた。そのため、学生連盟が日本のニュースや映画などで日本の敗戦を「勝ち組」に理解させようと努めた。それにも関わらず、「勝ち組」

は話も聞かず、読むこともせず、頑固だったという。しかし、戦後、日本からの新たな移民が来たことでようやく敗戦を理解したという。

マツダさんは、戦後２期の６年間クリチーバ市議会議員となり、クリチーバ市で初の日系市議となった。1970 年８月には、日本外務省招待研修生として訪日し、その際、沖縄も訪れた。

当時マツダさんは沖縄人（ウチナーンチュ）の知り合いがあまりいなかったのと、沖縄人（ウチナーンチュ）だけで集まって何かを行うという立場ではなく、活動もクリチーバ市全体を視野に入れてのものだった。2001 年頃、何人かの沖縄人（ウチナーンチュ）に誘われて「頼母子」に入ることになった。クリチーバ市に住む沖縄人（ウチナーンチュ）の存在を知り、その多さに驚いたという。2000 年代に入ってから「頼母子」が盛り上がり、クリチーバ沖縄県人会を立ち上げようという動きになった際、マツダさん自身はあまりクリチーバ市の沖縄人（ウチナーンチュ）のことを知らなかったこともあり、ウエズ・ジョージさんを会長に推薦している。

◆クリチーバ沖縄県人会のあり方、沖縄に対する考え方

マツダさんは政治家ということもあり、沖縄人（ウチナーンチュ）の枠にとどまらず、日系人、ブラジル人と広く付き合ってきた。そのため、沖縄人（ウチナーンチュ）の集まりに入ってみて、様々な印象を持ったという。例えば、沖縄人（ウチナーンチュ）は、日系人会から入会の要望があるものの、なかなか会員にならない。マツダさんとしては日系会館の一室を使って「頼母子」を始めたのだから、入会すべきではないかと考えている。また気になっているのは、日系人会全体の催し物は、春祭り、移民祭り、花祭りと年に３回開催されるが、そのような日系全体のイベントにおいて、沖縄人は沖縄の太鼓があるというと一番前に行って喜んでみるが、他の日系の催しには積極的ではない。昔、沖縄人（ウチナーンチュ）が日系人会に入らなかった理由としては、言葉がわからない、あるいは日本語がうまく話せないということが１つあった[7]。「クリチーバ沖縄県人会」となったことについて、ブラジル沖縄県人会本部の支部となる必要性を感じておらず、クリチーバ市はクリチーバ市独自でやればいいのではないかという考えをマツダさんは持っている。

（２）2006～2009 年度　ウエズ・ジョージ会長

インタビュー日時：2009 年８月以降、複数回に渡りインタビューを重ねている。
場所：ウエズさんの自宅

[7] マツダさん自身は、ウチナーグチ（沖縄方言）は家庭内できく機会はあったがほとんど憶えていない。一方、妻のルジアさんはマツダさん同様、沖縄人２世であるが、ウチナーグチを聞くことも話すことができるという。

〈写真 10〉ウエズ・ジョージ

2013 年、新年会にて筆者撮影。

◆ウエズさんの背景

1947 年生まれ。ウエズさんの父親は沖縄県具志川市（現うるま市）出身、母親は沖縄人２世（東風平）を持ち、３世または 2.5 世である。眼科医で、クリチーバ沖縄県人会を中心になって立ち上げた人である。

クリチーバ市に住むようになる前は、北パラナ（パラナ州北部）の田舎に住んでいた。田舎には沖縄人（ウチナーンチュ）が多く、運動会などで相撲やバスケットをやっていたという。桑原さんという人が中心になってフェスタ（祭り）などを町と一緒になってやっていたが、沖縄側の中で、沖縄を日本と混ぜてはいけない、本土の人と沖縄人（ウチナーンチュ）には違いがあるから、と頑固な人がいて混ざらなかったことがあった。55 年前、ウエズさんの母親が日本から付録付き雑誌『１年生』～『４年生』という雑誌をウエズさんのために取り寄せていた。日本から家に届くまでに３ヶ月ぐらいかかったが、ウエズさんはとても楽しみにしていた。付録には、車やクリスマスツリーを紙で組み立てるものがあり、本当に嬉しかった。一生懸命読むので日本語も覚えたりできたが、1962 年に、付録をブラジルに送ることが禁止され、雑誌と漫画だけが取り寄せ可能となったときは非常に残念だった。今でも大切に持っている。

ウエズさんは 11 歳の時にカンバラー市という古い町に移った。カンバラー市には、チジュコ・プレット[8]というコロニアがあった。ここはコーヒー園だった。コーヒーを作るには赤土の方がいいのだが、霜が降りて土が灰色になり、栽培していたコーヒーなどがだめになった。それからはコーヒーのかわりに主に大豆と麦を植えた。もともと北パラナは赤土で、コーヒー栽培でどんどん町が出来ていったところで、線路造りはイギリス人が始めた。イギリス人をはじめブラジル中からコーヒー栽培目的で移民が集まってきた。ウエズさんがい

[8]TIJUCO PRETO：TIJUCO は粘土、PRETO は古いという意味。

たカンバラーの町は雨で流されてしまい、民家が徐々に無くなっていっていき、その後、サトウキビ畑だらけになった。

ウエズさんの家は、生長の家、カトリック、沖縄の仏壇もやり、みんな一緒にやっている。ブラジルの宗教は、１世は先祖の奉る仏壇を、２世、３世からはカトリックだけど、気持ちはまだ仏教なんかがある。ある人はカトリックの牧師をしていても、家の仏壇に線香を立てている。例えば沖縄県人会のメンバーのアラカキさんは、プロテスタントのなかの種類でメソジストに入っているが、アラカキさん家族も複数の宗教に入っている。

ウエズさんによると、10 年前まではブラジルはカトリックが 80%ぐらいを占めていたが、今はプロテスタント系のエヴァンジェリコが急増しているという。

◆クリチーバ沖縄県人会のあり方、沖縄に対する考え

「なぜ、沖縄県人会を立ち上げようと思ったのか」という質問にウエズさんは次のように答えた。

「サンパウロから言われて、クリチーバ県人会を作った」「どういうわけか年をとっていくほど、沖縄への気持ちが強くなる。沖縄の気持ちが残っていると思った。本土の人と沖縄の人は何か気持ちが違うと思った。」

「沖縄の文化」と言っても、気持ちの方を捉えているようだ。

ウエズ夫妻はともに３世である。ウエズさんの奥さんネリさんは、これまで日系人会の方に力を入れていた。そのため２人とも、日本の文化にとても興味を持っている。ネリさんは、ウエズさんほど沖縄への関心は強くないという。その理由は、ネリさんの両親が沖縄の羽地（現・名護市）出身で、やんばる（沖縄本島北部）の言葉と沖縄本島南部の方言は違いがあり、標準語を話すようにしていたとのことで、その影響もあり、沖縄への思いはそれほど強くないのだという。クリチーバ沖縄県人会には２人とも３年前の創立から入会している。クリチーバ沖縄県人会への入会資格は特別なく、誰でも入りたい人が入っている。旦那さんが他府県出身という人が５、６名はいる。日本人の中で沖縄人（ウチナーンチュ）は、昔「インフェリオール（劣っている）」と言われた。内地の人から「沖縄さん」、「沖縄人（おきなわじん）」と呼ばれてきたという差別意識は持ってきた。ウエズさんによると、理由はわからないがポリチカ（政治家）に沖縄人（ウチナーンチュ）が多いという。マツダさんの箇所で上述した学生連盟については、北パラナからきた学生たちが集まって学生連盟を作り、学生達は皆お金がなかったので、一緒にペンションに住む。その連盟の前に立つリーダーたちの中に沖縄人（ウチナーンチュ）が多く、その中にマツダさんも、ウエズ夫妻、ウエズさんの長男、長女夫婦も入っていた。

「「琉球國祭り太鼓」は、（ブラジル人より）ペルー人がもっと多い。リーダーは日本人（日系人）でなかった。ブラジルもいずれそうなる。」

90 年代末にウエズさんはヤビクさん、山城弘義さんから勧誘されて「頼母子」に入った。それ以前は、現在いるクリチーバ沖縄県人会の関係者とは関わりはなかった。

（３）2010～2011 年度　ギノザ・マツオ・マリア会長

インタビュー日時：2009 年８月５日以降、複数回にわたりインタビューを重ねている。
場所：ギノザさんの自宅
同席者：夫のベルナルドさん

〈写真 11〉ギノザ・マツオ・マリア
2012 年 10 月６日、筆者撮影。

◆マリアさんの背景
マツオ・ギノザ・マリアさんは、両親とも沖縄県宜野座出身で、２世である。
夫は長崎県系２世である。
◆クリチーバ沖縄県人会のあり方、沖縄に対する考え
沖縄文化の強化を目指すという点では、ウエズさんと基本的に同じ立場である。沖縄文化を強化する努力をしてきた。
頼母子については、新しいお知らせをする場になることはいいが、毎回同じことをやるため、若い人たちも参加したがらない。踊り、三線の講座をやっているが、サンパウロ市から先生を呼ぶのに費用がかかる上、メンバーたちの一部しか興味を示さなかった。踊りなどをやることがメンバーにとって大切でないと考えられるなら講座をなくすことも考えている。2015 年現在、踊りも三線もサンパウロ市から先生を呼びながら頑張って続いている。
クリチーバ沖縄県人会設立目的は、サンパウロにある沖縄県人会本部に所属することで可能となる子弟の沖縄県費留学制度利用などの便宜を受けることがあった。クリチーバ沖縄県人会みんなの考えが一緒でないと強さが出ない。マリアさんが会長当時、実現しなかった計画があった。それは若い人のグループを作ろうとしたことである。「琉球國祭り太鼓」のメンバー、その親たちもよんで、二月に一度、トランプ、カラオケして、沖縄の

ことを何でもして（食事の）持ち寄りもしてやりたかった。２世、３世みたいな人たち、沖縄と関わりなかった人たちが沖縄に興味を持っている。

一般にブラジルでは週末の過ごし方として、家族など親しい人が集まってシュハスコ（バーベキュー）などを行う習慣がある。この習慣はクリチーバ市の日系人社会でもみられることである。長期計画（県人会館の設立など）については、エリオさんたちが会館設立を考えていたが、経費、維持費の問題などで現在は話は進んでいない。2006 年のクリチーバ沖縄県人会の創立記念祝賀会に日本国総領事、文化援護協会（日系人会）の人たちも参加し、交流はある。領近隣県人会などとのネットワーク形成については、ウエズ元会長の妹さんたちがパラナ州ロンドリーナ市に住んでおり、ロンドリーナ沖縄県人会に関わっていることから県人会に関することを相談することがあった。ブラジル移民 100 周年記念祭の際、ペルーの沖縄県人会メンバーたちが帰りにクリチーバにも会いにやってきた。

沖縄県人会として、クリチーバ市との関わりは、クリチーバ市の祭りにブースを出して参加することがある。毎年３つの祭りが行われており、その１つ、毎年６月の 3 日間中に行われる移民祭り[9]に、2010 年、初めてクリチーバ沖縄県人会として参加した。これまでメンバーたちと３回程練習してきた沖縄そばを売った。そばを提供している横では山城さん、ヤビクさんが三線を弾き、みんなで沖縄民謡「安里屋ユンタ」を歌い、「琉球國祭り太鼓」の若い人たちも加わって披露した。沖縄そばは３日間で 800 食完売した。開催場所はクリチーバ市内にあるバリグゥイ公園。日系人会の中にあるそれぞれのクラブ、ゲートボール、カラオケ、野球チームなどがそれぞれ出し物をするほか、会社やレストラン、純心学園[10]なども加わっている。メンバーたちは複数のグループに関わっているため、祭りの間も沖縄県人会以外のところでも手伝う。例えば、マリアさんはカトリックの長崎純心学園グループにも所属しており、１日だけ手伝いにいくなどしている。

2010 年現在、クリチーバ沖縄県人会以外の参加は３年前に福島県人会が行っている以外はみられない。なぜクリチーバ沖縄県人会が参加することになったのかとの質問に対して、マリアさんは少し考えて、「沖縄文化を日系人に知らせるために入りました」と述べた。これまでそばづくりもやってきたこともあり、頼母子で皆さんに移民祭りに加わることはどうですかと聞いてから了解を得てから決定した。

マリアさんたちは韓国ドラマ「冬のソナタ」とか、日本の映画、ドラマなどの DVD を貸し借りしあう。パラナ州ロンドリーナの人からは NHK 連続テレビ小説「ちゅらさん」をもらい、ゆっくり何回も見ながら、特にドラマの中で出てきた食堂（居酒屋）の店主役の藤木勇人がよく方言を話しているのを聞いておぼえたようだった。そこで出てくる「豆腐チャンプ

---

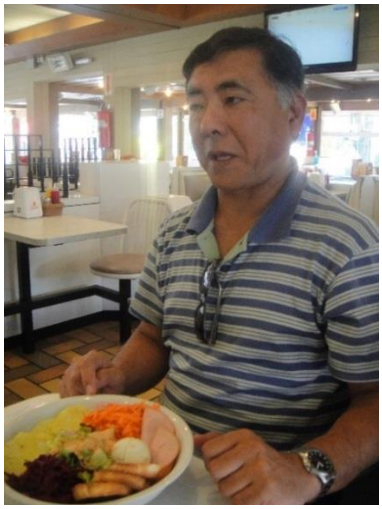
[9]移民祭りは日本からブラジルへの最初の移民が 1908 年に到着した６月の時期に日系人会が主催している祭りである。

[10] カトリック教の長崎純心が経営する学校である。長崎県からのカトリックの尼さんがやっており、２歳～16 歳までの日系人の子供たちが純心学園で日本語を学んだり、友達と遊ぶことができる場所となっている。

ルー」などの様々な沖縄料理が印象に残っている。自分たちがどんなことに興味があるのか、沖縄の親戚に伝えたくて、同じ DVD を勧めることもあった。

（４）2011～2014 年度　ヒガ・エリオ会長

インタビュー日時：2009 年８月５日以降、複数回に渡りインタビューを重ねている。
場所：ヒガさんの自宅など



〈写真 12〉ヒガ・エリオ
2010 年 12 月 19 日、筆者撮影。

◆エリオさんの背景

ヒガ・エリオさんは 1950 年サンパウロ出身。父親が沖縄県北中城村出身１世、母親がサンパウロ州出身の沖縄人２世でエリオさんは３世または 2.5 世である。10 歳の時にブラジリアから引っ越し、20 歳代からクリチーバ市に定住してきた。職業は IBGE（ブラジル地理統計院）の公務員である。第二次世界大戦中に日本語が禁止され、戦後も引き続き使用が禁止されていたことから、日本語は使えないという。沖縄の三線を父親が少し弾いていた。おじいさんが三線を作っていたのを見たことがあった。

エリオさんは会長になる少し前から沖縄の歴史、文化、音楽などに関心が高くなり、沖縄は日本と違うのだという考えが会長４人の中では一番強い。

クリチーバ沖縄県人会は独立した会館を持っていないこともあり、2000 年代から日系人会館で催し事をやるようになっている。エリオさんは場所があることで活動が活発になると考えるため、独自の県人会館建築を提案した。しかし多くのメンバーからは、資金面の負担の大きさなどから賛同を得られていない。会館以外のことでも、企画したものがなかなかメンバーに受け入れられず、会長になって企画をやる難しさも感じている。ヒガさんはハワイやアメリカの研究者と交流を図っており、その関係論文、文献を読んできた。沖縄の名桜

大学の先生、ハワイ大学のジョイス＝知念、イリノイ大学の平恒次[11]などと知り合いで、コンタクトを取ったりするという。ジョイス＝知念はクリチーバ沖縄県人会創立３周年記念式に来る予定だったが来られなかったそうだ。この記念式には、アルゼンチン、ボリビア、ハワイなどからも招待して、10 名ぐらいがブラジル以外の国からきたと話してくれた。

エリオさんの妻イレーニさんは、マットグロッソ・ド・スール州カンポグランジ[12]の出身のため、よくクリチーバに沖縄そばが送られてくる[13]。エリオさんによれば、ブラジルと沖縄は気候が似ている。エリオさんによると、沖縄人については、適応力が、体力も含めて日本人よりあった。社会構造は、日本社会のようにタテ型でなく、水平な社会であると言い、沖縄に滞在した時（那覇９日間、名護２日間、北中城１日間）、沖縄の人は自分をよそ者（stranger）として扱わなかった[14]という。自分にとって沖縄はふるさとだという気持ちをヒガさんは持っていて、いつか、ブラジルにハワイのような沖縄の研究センター[15]を作りたいと考えている。

◆クリチーバ沖縄県人会のあり方、沖縄に対する考え

クリチーバ沖縄県人会としての計画について、2013 年現在、次の５つを挙げている。

①Trabalho Social（社会事業）

②Divulgar Cultura Okinawa（沖縄文化を普及させる）

③ウチナーグチ（沖縄の言葉）の授業

④ビジネスネットワークの WUB（Worldwide Uchinanchu Business association）

⑤沖縄とブラジル間などでの若者の交流

---

11 エリオさんは平恒次の英文での論文を読んできており、個人的にポルトガル語に訳したものを、クリチーバの沖縄県人会のメンバーたちにも見せてみたりしている。興味はあまりもたれなかったようだ。

平恒次の著書に『日本国家改造試論　国家を考える』がある。これは精神面で日本から独立すべき、移民で世界中に散らばっている琉球出身者をまとめて精神共同体を作ろうといった議論がなされている。原洋之介によると独立論の根底には琉球民族と大和民族は違うということがある。（参照：『表現者』2015、p.43）沖縄は日本から精神的に独立しろという意見を復帰後、平によって公表されている。「沖縄精神共和国」という言葉使われた。（前掲書、p.61）

12 マットグロッソ・ド・スル州の州都。沖縄人（ウチナーンチュ）の集住地域として有名な場所。

13 カンポグランジには、筆者も 2008 年に訪れ、カンポグランジの沖縄県人会館で日本語を勉強している若い人たちと話した。市場では沖縄そば屋が多数出店して繁盛している。コーラと一緒に沖縄そばを食べている記事が沖縄地元紙『沖縄タイムス』に紹介されている。

14 エリオさんの長女が沖縄県北中城村の３ヶ月研修制度で沖縄滞在中、彼は沖縄を訪ねている。

15 2009 年、ハワイ大学内に「沖縄研究センター」が創設された。

①Trabalho Social（社会事業）は、服を集めて貧困者に送るなどの慈善活動をすること。例えば、国吉メリッサ[16]のイベントを開いたときには、一人 2kg の（腐らない）食料を集めて老人ホームや保育園に寄付している。これはクリチーバ市全体でイベントごとに Associação beneficente（慈善協会）として、税金を払う代わりに慈善の寄付をするというものである。

②の Divulgar Cultura de Okinawa（沖縄文化を普及させる）は、ブラジル国内で南部といわれるパラナ州以南の、サンタカタリーナ州、リオグランデ・ド・スール州の３市とつながること。クリチーバ市から 400 ㎞離れたサンタカタリーナ州サンジョアキン市[17]では、クリチーバ沖縄県人会のメンバー山城弘義さんの親戚でマウリシオさんが市議会議員を務めている。サンジョアキン市の祭りがあるときにマウリシオさんに声をかけて太鼓のメンバーたちを送ることをヒガさんは考えている。またクリチーバ市から 300km ほど離れたサンタカタリーナ州フロリアノポリス市にはカンポグランジ出身２世のシンザトさんがおり、以前カンポグランジからフロリアノポーリスに太鼓をよんだことがあったそうだが、もっと近いクリチーバから太鼓をよんだらいいとヒガさんは伝えた。そして、サンタカタリーナ州ポメロデ市はドイツ人が非常に多いところで、ドイツ人の祭りがあるが、他の違ったグループが入ることを歓迎しているという。「琉球國祭り太鼓」（クリチーバ支部）のグループとクリチーバ沖縄県人会の活動は別になっているが、祭りのときは一緒にやる。

③は先の話だが、ウチナーグチ（沖縄の言葉）の授業を行うこと。今はインターネットがある。親川志奈子さん、名桜大の瀬名波栄喜さん、ロンドリーナ大を卒業して名桜大でポルトガル語を教えている住江淳司さんたちと繋がることを考えている。

④ビジネスネットワークの WUB（Worldwide Uchinanchu Business association）のクリチーバ支部設立の可能性はあるということをヒガさんははっきり述べていた。

⑤は、若者の交流。交換留学などで沖縄とブラジルの若者を交流させたいとヒガさんは言う。

クリチーバ市とサンパウロ市の沖縄人の集まりは違うかとの質問に対し、ヒガさんは、次のように述べている。

サンパウロ市は会館が近いところにあり、すぐに集まりやすい。クリチーバ市は会館もなく、みんないろんなグループに所属していて、なかなか集まれない。サンパウロ市には 20 以上の会館があり、いつもどこかで何かあれば、所属している支部でなくても行くことができる。エリオさんの父親はサンパウロ市にあるサンタクラーラ沖縄県人会支部に、母親はブラジル沖縄県人会本部の婦人会に所属している。最近は、父親は年をとってきて、北中城村

---

[16] 2003 年サンパウロ生まれの沖縄３世で、ブラジルに移住し三味線の先生をしていた祖父の影響で、幼い頃から日本の音楽に触れていた。日本語は話せなくても日本の歌「涙そうそう」「瀬戸の花嫁」「愛燦賛歌」などを歌いブラジルの歌番組に出演し、日本人の間で注目されるようになった。

[17] JICA（国際協力機構）が四半世紀に渡ってリンゴの生産プロジェクトを行ってきた町。雪も降る町。

人会の手伝いにだけ参加している。サンパウロ市は、沖縄人(ウチナーンチュ)が差別されていたこともあって日系人会と県人会とはしっかり分かれている。

「クリチーバの沖縄人(ウチナーンチュ)に沖縄らしさはみられるか」との質問に、エリオさんは次のように言う。

必要なときにはよく集まる。大事なのは必要なときに助け合うこと。これが、世界が沖縄から学ぶことだと思う。それは Cultural de Paz（平和の文化）。喧嘩があっても平和を追求することが必要だ。沖縄人(ウチナーンチュ)だったら会話しやすい。例えば、サンパウロ市での BIGIN[18]のコンサートに行った際に、エリオさんは席の隣の人からどこからきたかときかれ、遠いところ（クリチーバ市）から来たんだねとエリオさん家族に弁当をくれた。内地でそんなことは難しいという。沖縄人(ウチナーンチュ)は、知らなくてもこのようなことが起こるので、知り合ったらもっとだ。クリチーバ市の日系人会の人たちも沖縄人(ウチナーンチュ)の影響を受けてみんな友達になっているとヒガさんは感じている。ヒガさんのなかに内地は信用しない、内地の沖縄人(ウチナーンチュ)差別もあったという思いがある。1968 年にサンパウロ市で働いていた頃、４人の内地の人と、１人の中国人がいた。そのときにヒガさんは内地からの沖縄差別を感じていたが、中国人とは友達だった。内地よりも中国との関係の方がまだ沖縄に近いとヒガさんは考えた。昔、琉球だった頃、日本は中国、韓国は敵だったが、琉球がその間を取り持っていた。沖縄はみんなと友達だった。これを世界は学ぶ必要がある。」（英語でのインタビューによる）

[18] 沖縄県石垣市出身の３人からなるバンド。世界各地に支部を展開する「琉球國祭り太鼓」の演舞曲として使用されており、年齢問わず高い人気を得ている。

〈写真 13〉2015 年クリチーバ沖縄県人会の新年会

2015 年１月の新年会にて。サンタカタリーナ州フロリアノポリス市から沖縄３世のシンザトさんたちも参加。一部の「琉球國祭り太鼓」、クリチーバ沖縄県人会メンバーたち。県人会のメンバーによる撮影。

（５）４名の会長のインタビューから見えること

まず沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティを４名の歴代会長インタビューからみてみると、沖縄人（ウチナーンチュ）だけでなく、沖縄に興味を持つ人などは歓迎するという傾向がみられ、また沖縄ということで集まることに意味を見出すことは４名に共通していた。しかし、クリチーバ沖縄県人会において目指すべき方向などはなかなか一つにならない。言い換えると、クリチーバ市の沖縄人（ウチナーンチュ）は多様であり、沖縄情報レベルもまちまちであるというのがその要因である。

一方、構成メンバー全体からみると、沖縄の祖先の出身地が異なり、育ってきた場所も異なる沖縄人（ウチナーンチュ）が集うため、それぞれの思い描く沖縄像も十人十色である。また沖縄を共通項に集まること自体に一つの満足感を持ちつつも、今後の新たな活動や目指すべき方向については常に模索している状態であった。

３．構成メンバーへのインタビューからみる沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティ

クリチーバ沖縄県人会の４名の会長インタビューからそれぞれの沖縄県人会に対する考え方をみてきた。今度は、インタビュー対象を会長たちから構成メンバーである全員に広

げてインタビューを行った。全構成メンバーの沖縄県人会や沖縄に対する意識を以下で見ていく。

クリチーバ沖縄県人会の構成員の意識をみるため、自宅や職場などに筆者が出向き、会話の中から次の５つを中心にインタビューを行った。

a.クリチーバ沖縄県人会の活動について、b.言語のあり方について、c.沖縄文化の伝承法について d.祖先への考え方、宗教について、e.沖縄に対するイメージ

（１）クリチーバ沖縄県人会と沖縄に対する考えからみる

a.クリチーバ沖縄県人会の活動について

若い人がなかなか入ってこないことを気にしている。「琉球國祭り太鼓」は成長して大きくなり、頼母子があるときも近くで練習すると顔を出す。しかし、全体的に会の活動に魅力があるものにもなっていない。頼母子について、お年寄りは喜ぶが、60 歳代以下の人たちには、マンネリになってしまう。

「(沖縄) 県費留学をしたが、帰っても子どもたちがクリチーバ沖縄県人会に来ない」「沖縄文化の環境が整っている家庭でもさえも子どもたちが沖縄県人会に興味を示さず、沖縄への気持ちもないようだ」

「混血になると、頭はブラジル人でも小さい時からその文化に育てないとその文化に関心を持たないのではないか。」

そのマンネリを打破しようとする動きもある。何か沖縄のことをやろうと企画するとすでに知っていることで興味が湧かないということもあった。沖縄本島北部のヤンバル出身の人には、沖縄の方言を使わなかったことから、沖縄への関心がそこまで強くないというメンバーもいる。それぞれ子どもの時の育ちが違う。

クリチーバ沖縄県人会を設立した理由として、若い人が沖縄県の制度を通して勉強できたらいいようにということもあった。沖縄県の制度で 15 歳以上 17 歳まで「ジュニアスタディー・ツアー」または 3 ヶ月の研修制度がある。この制度は、沖縄側に親戚がいないとできない。沖縄に頼むことは遠慮してできないという人もいる。おじさん、おばさんはいるけど、若い人たちを沖縄と交流させたいからやったけど。県人会は 20、30 歳代に興味のあることをしていないことは、「頼母子」が強調されている傾向もあるのではないか。30,40 歳代の集まりというのもあったらいいという意見もある。

一方、サンパウロの沖縄県人会本部に所属すると、1 年分か半年分の会費を払うが本部に入っても何も意味はないのではないという意見もある。

関心が一人一人違うのだが、多くのメンバーが最も関心を示すのは沖縄料理だという。

2013 年 1 月現在、子どものための踊りは 11 名、大人のための踊りは 10 名前後が取り組んでいる。三線のグループは、2013 年現在、10 名以上はいる。6 人いるなら、頑張って継続するようにしていた。

b.言語のあり方について

「会話がほしい。沖縄に帰って話しができない。会話ができるように２世も、３世も日本語を学ぶべきだと思う。是非教えないといけないと思っている」（１世　上地安勝）

「戦争があり、日本語を忘れてしまった。学ぶことができなかった」(2.5 世　ヒガ・エリオさん)

ウチナーグチを学びたいという声があり、ウチナーグチができる人たちが教える機会を３回ほど作ったが、教える難しさ、日本語を話さない人が多いことから続かなかったという。「市会議員に沖縄の人がいるが、日本語がわからなくて困る。」（２世　マツダ・ノブテロ）

c.沖縄文化の伝承方法について

「クリチーバ沖縄県人会は、歌と踊りの文化だけになっている。ブラジル人が日本をよく勉強している。生き方がブラジルと日本とは違う。勉強で学べるけど、習慣は学べない。日本に対する気持ちが残らない。どういう生き方を作るか、どういう道を作って行ければいいか研究している。総領事も日本の立場と我々の立場と「デカセギ」。日本のことを教えていない。研修生に最初に教えるのが歴史。見せてもすぐ忘れる。２世でも日本語を話さない。日本語もわからない。カンポグランジでは方言わかるが、日本語はわからない。マットグロッソ出身の人が方言教えようとする。日本語を習う」（２世　マツダ・ノブテロ）

「沖縄のことはわからないけど、両親から学んだことをわかるだけ教えてあげたい。沖縄文化を残していかないとあとがない。沖縄文化を伝えたい」（２世　ヤマシロ・ゼンショウ）

d.祖先への考え方、宗教について

様々な宗教が入っており、そちらが優先されているが、沖縄からの位牌も同時に置いてある家庭が多く見られる。そして沖縄式に月の１日と 15 日に線香とお茶、お水をあげている。家系図を作りたいという声もある。

「ニライカナイがあると信じている。家族の守り神として。トートーメーにはお茶とコーヒー、線香１人３本。」（１世　山城弘義）

「トートーメーは月の１日、15 日にはいつも線香をあげる。親たちの習慣だから続けないと」（２世　ヤマシロ・ゼンショウ）

「宗教はカトリックだけど、沖縄の習慣、仏壇のほう、その方にあれしてみるみたい。沖縄の習慣の方がもっと気持ちが行く」（１世　上地安勝）

マツダ・ノブテロさん（２世）の祖父母、父、父の弟の 4 名が沖縄の屋我地からブラジルに移民をした。移民の際、祖父の妹に土地や家を預けてきた。22 年前（インタビューの 2011 年現在）妻のルジアさんが沖縄を訪問した際、ノブテロさんの親戚のおばさんたちがまだ生きており、おばさんたちは自分たちが亡くなった後は誰もみる人がいないので、長男にあたるノブテロさんにトートーメー（位牌）を取りに来て欲しいと話していたという。その後も何度も沖縄からブラジルに位牌を引き取る件について連絡がきていた。沖縄から持ってきた史料には、「前田引き松田門中系図（昭和五十五年旧五月十五日現在）」という横に長く繋がっている系図のコピーが含まれていた。ノブテロさん自身は位牌のことで沖縄に行くのは気が重く感じている。

e.沖縄に対するイメージ

＜１世＞

「沖縄にいる親戚たちがブラジルに関心をもってきいてこない」との意見が多数ある。

「沖縄人大会の時に沖縄に行ったが、親戚たちは忙しかったのかもしれないが、一緒に過ごす時間があまりなかった」

「（沖縄は）1972 年に復帰しているのに、（補助金などをもらって）甘えていると感じる。ブラジルでは沖縄の人のこどもは 100％大学卒。教育をとても大切にしている。でも沖縄では教育に熱心じゃない。宜野座村だけではないと思うけど、地代で生活している人はそれがなくなったら大変だろう。沖縄は自立していない。沖縄で中学の同級生たちと会って話すけど、なんでも本土、本土という。沖縄には自分を犠牲にしてやる勇気のある政治家がいない。ブラジルでは政治の話からなんでもする。」（１世　上地安勝）

＜２世＞

「沖縄の人は兄弟みたい。兄弟のような感じでとても親しい」（２世　ニシノ・フローラ）

「沖縄の人の情はすごいよ、こうして集まる、集まって仕事のこと、いろんなことを相談する」（２世　ヤマシロ・ゼンショウ）

「ブラジルでは、政治では沖縄の人はたくさんリーダーの仕事をしている。日本人は遠慮するが、沖縄の人は、度胸はすごくある。偉い人の前にいっても平気。上からの押さえつけがない。自由に責任もって間違う。間違ったら、罰あたるというのがない。責任もって遠慮深い。言われたと言って引っ込まない」（２世　オオシロ・ヨシアキ）

「沖縄人は本土の人を信用していなかった。今ではそういうことはない。沖縄では団結し合う。日系クラブに入っている。歌手、食べ物、テレビドラマ（『ちゅらさん[19]』）NHK（Nippon

[19]2001 年度上半期に放送された NHK『連続テレビ小説』シリーズのテレビドラマ。

Hoso Kyokai）で見て、沖縄にすごく興味がある。沖縄に行った時、自分の家みたいと、もっと安心するものある」（２世　マツダ・ノブテロ）

「沖縄のイメージは、親戚が多い。お母さんの方。それでにぎやかだった。沖縄には、1978 年と 1990 年に行ったが、90 年にいとこの家で一人のおじさんが低いテーブルに録音機を隠しておいてあって私（カズコさん）のウチナーグチを録っていた。（おじさんが）若い人の声でウチナーグチを聴きたい、それ（カズコさんの話す言葉）は 35 年前に聴いた言葉とか 50 年前にきいたと。とっても嬉しかった。めずらしい気持ちになる。
沖縄はいいイメージ。平和の塔は素晴らしかった。海は深いところは黒い色になって。マチグワァー（市場）とってもよかった。沖縄の昔の歴史を勉強すると、沖縄は別の国と戦争しなかった。沖縄の中で 3 人の王様、アジムイ[20]って。だけどポルトガル人が（沖縄に）行った時には一つの国が武器（armas de guerra）がない国があると。ではどういう風に戦争するかと。「Os homens lekios não usam armas（琉球人は武器を使わない）」ただ、小さい刀と人を売らない、それが珍しいって。ポルトガル人に手紙を書いた。自分の国にはしていたけど、よそにはしてなかった。私が好きなのは津梁の金。ポルトガル語での沖縄の歴史はあんまりにない。ジョゼー・山城さんのものはあるけど。それを人民はみないといけないと思う。」（２世　アカミネ・カズコ）

・「内地の人は頭がよく行儀がいいから遠慮したけど、沖縄の人は簡単。ソグロ（舅）が内地の人にオキナワサンと言われたと気にしていた。」（２世　ジュリア・アラカキ）
「(沖縄の人は)アレグレ（明るい、楽しい）」（2.5 世　ペドロ・マサユキ・コハツ）

＜2.5 世または３世＞
「（沖縄は）マザーランド。文化は（体を指して）この中にあると。でもこれを実践（praticar）しないといけない。発見しないといけない。45 歳を過ぎたときに沖縄のことを読みながら、好きになった。沖縄を訪れたとき、名桜大学の瀬名波栄喜さんがこう話していた。沖縄の人は沖縄の精神を失っている、沖縄の精神が残っているのは、ハワイや南アメリカ、と。沖縄にいるときに、だいぶ年配の男性、女性が空き缶を拾っているのをみて、ブラジルだったらそういう人は家族が助けてあげる、他人でも助け合うと感じた。沖縄精神は、他の人を助ける、イチャリバチョーデー。沖縄は経済、情報技術、コンピューターを使う点で少し遅れている。沖縄は観光の島なのに英語や中国語などを教えていない。英語が話せない人が多い。アメリカの基地があることが大きな問題だと思っている。基地を取り除くか縮小しなければいけないが、それは沖縄１つでは力がないので、一緒になることが大事だと思っている。

[20] 沖縄の北部にある安須杜（アシムイ）と呼ばれる聖地。

世界で助けること。失業率も高く、WUB はその１つで沖縄を助けるためにやりたいとも思う。沖縄はいつも多く移民してきた」(2.5 世　ヒガ・エリオ)

「(沖縄は）観光地と同じ。祖先のところなので、敬うまたは重んじているし、行ってみたいとも思っている。日本の文化よりも沖縄の文化はもっと純粋、オリジナルだと思う。沖縄の文化は沖縄しかないみたい。太鼓や踊りなどきれいだと思う。他にはないような文化だ。沖縄人については明るく、開放的。忠実、誠実、素直である。これに対して、日本人はもっと献身的で、沖縄ほど明るくない。ブラジル人も明るいが、沖縄はとても陽気である。沖縄は、村々で違うような気がした。隣村でも話すことばが違う」(３世　ヤマシロ・アウド)

沖縄の人は、本土の人と違って地縁、血縁とかで結びついてきたというと、昔のブラジルに住む沖縄の人は「同じシマンチュ（＝同じ部落)」と言い合って結びついてきたと。(2.5 世　ジョージ・ウエズ)

（２）クリチーバの沖縄県人会メンバーの特徴

これまで筆者がクリチーバ市の沖縄人(ウチナーンチュ)にインタビューしてきた結果の分析から、クリチーバ沖縄県人会のメンバーにみられる特徴として次の９つを挙げる。

a.これまでの県人会活動は衰退してきて憂慮されていたが、やはりやろうと盛り上がってきている。
b.沖縄人という共通項で集まる様々な職種を持つメンバーがある。
c.日本人、日系人と別にならず一緒に活動してきたことがみられること。
d.クリチーバ沖縄県人会の集まりは、差別に基づいた被害者意識ではない。
e.クリチーバ市の沖縄人は、沖縄人ということにそこまでこだわりは持たないながらも、沖縄人ということで集まっている。
f.自分たちの生活が安定し、地域で活動したりと、余裕が見られる。
g.住んでいるクリチーバ市に愛着を持っていること。
h.田舎を持つ、旅行好きである。
i.「デカセギ」経験

a. 沖縄県人会の衰退から盛り上がり

2000 年ごろから支部登録の動きが出てきた。その際に、日系人クラブでは会っていた人で沖縄人だとは認識せずにいた人や、呼ばれてきて初めて出会ったという人が多かったようだ。2006 年にクリチーバが沖縄県人会支部として再登録する際にあたって、ウエズ会長（当時）はこう話している。「これからは若い人たちを入れて活動していく必要があり、日

本や沖縄の伝統文化を継承させたい」彼は、設立 2 年前までは日系クラブの企画担当理事で副会長を務めていた。先に本章・3 で述べたように、彼は「沖縄の気持ちが残っていると思った。本土の人と沖縄の人は何か気持ちが違うと思った」と言っている。

b. 沖縄人（ウチナーンチュ）という共通項で集まるメンバー

筆者がクリチーバの県人会の集まりを初めて見たとき、確かに若い人が少なく、すでに退職したメンバーが多い。それぞれの職業をみてみると、眼科医、歯科医、精神科医、政治家、写真家、塾経営、パステル屋、軽食屋、銀行員、教師、アナリスト、旗作り、裁縫屋、公務員、タクシー運転手、農業と様々な職業の人がいる。メンバーは、2 世が 80 代、3 世は 60 代が多いが、はっきりとは分けられない。現役で働いている 2 世や 3 世が半分以上を占めていて想像していたよりも若さも感じた。

c. 日本人、日系人と一緒に活動

1947 年頃、クリチーバの日系人会としての「友之会」創設に参加していた沖縄人（ウチナーンチュ）もいた（下付の写真参照）。その後、第 3 章で述べたように、日系人会は様々な変遷を繰り返した。県人会メンバーのマツダさんによると、当時、「勝ち組」「負け組」問題が一向に収まらず、喧嘩状態が続いており、日本人のグループは、グローリア、ピニェーロスなど 3 つほどに分かれていた。そのため、学生連盟 UGC（ウニオン・ドス・ガクセイ・デ・クリチーバ）が主に勝ち組と言われる人たちに、日本のニュースや映画などを見せて日本が戦争に負けたことを理解させようとした。しかし聞き入れないので、コロニアを一つにさせようと日系クラブをつくったという。複数に分かれていたに日本人会をまとめたのは、学生連盟（UGC）であり、そこに沖縄人（ウチナーンチュ）2 世たちも入っていた。

2011 年現在の日系人会との関係について、当時日系人会長によると沖縄人（ウチナーンチュ）の日系人会への登録は少ない。

理由は、昔、沖縄方言しか話せず、日本人の中に入りにくかった、恥ずかしかったという意見を聞く。

クリチーバ沖縄県人会が設立される前から 50 年以上続いている頼母子には参加していることが影響し日系人会にまで入る必要性を考えない人もいるのではないかと筆者は考える。

〈写真 14〉「友之会　TOMO NO KAI」記念碑

クリチーバの日系人会館（クリチーバ日伯文化援護協会）入り口に「友之会　TOMO NO KAI」創設の際に関わったメンバーの名前が刻印されているブロンズ製の記念碑が飾られている。31 人中 6 名が沖縄人（ウチナーンチュ）となっている。

d. 差別に基づいた被害者意識ではない

クリチーバ沖縄県人会のメンバー内にも沖縄人（ウチナーンチュ）ということで内地の人からの差別を感じてきた人はいる。しかし、主に２世のなかには、育ってきた場所での内地からの沖縄人（ウチナーンチュ）差別を受けた経験がない、あるいは少ない人も多く、差別に悩むことはよくわからないという。差別をされていた話は昔のこととして知っているが、現在特に意識する人は多くない。

e.こだわりは持たないながらも集まる

沖縄にはこだわらないけど、文化維持は大事にしようとする。これはブラジルで生まれた 80 歳代～50 歳代の２世が会員の多くを占めていることにもよる。沖縄人の両親あるいは祖父母をみて育っていることが背景にある。

普段から沖縄以外の複数のグループに所属しており、それぞれのグループに、共通する人も含まれていることもある。つまり別のグループにいくと顔ぶれが似ているということが起こる。しかし、どこでも出会うという感じでもない。

所属しているグループは、宗教、ボランティアグループ、趣味、学校、子どもの関係、2世のグループ、昔からの日系同士のグループ、同窓会、学生グループ、NPO などである。

趣味だけでなく、ボランティアという性質も多く見られるような市民的な活動とのつながりが多方面にわたっている。

グループ名	グループの概要
ABD	ABD （Associação Brasileira de Dekasseguis：アーベーデー）「デカセギ」で日本からブラジルに帰国した人たちの、主に就職活動を支援するNPO。
UGC	パラナ州での学生連盟（UGC : União dos Gakusseis de Curitiba ウニオン・ドス・ガクセイ・デ・クリチーバ）1949 年設立。（p.190） この UGC が 1978 年に日系クラブを設立させた。
しし会	同じ干支つながりで集まる。
2 世会	月 1 回の食事会で寄付金を集める。食事会ではプレゼントを用意しビンゴを行い、毎月盲人へ 300 レアルの寄付を行う。残金は後述の純心（学校と老人ホームがあるが後者か）へ。
各宗教ごとの集まり	仏教（東本願寺）→野球の試合ごとに飲み物などの手助け。 純心学園→ミサ、日本語教室（学童保育のような役割）、 純心がやっている老人の家→デイケア、純心学園の関係者などが毎週日曜日などに食事（フェジョアーダ、ビーフン、焼きそばなど）作って売り、寄付金に充てている。 2007 年にブラジル宣教 27 周年を迎えた長崎純心聖母会は、クリチーバ日伯文化援護協会などと協力しながら、デイケアセンターを建築した(2009 年完成)。 同聖母会によると、6 年前に同市市長夫人から「高齢者のために何かしてほしい」との要望を受けたこともきっかけの 1 つとなったが、8 年前から構想していた。 同聖母会は州都で日本語学校を運営するほか、パラナ州アモレイラでは託児所・老人の家、同州サンジェロニモのフマニタス診療所・公慈善協会にも協力している。 ホリネス（エヴァンジェリコとも。昔はいろいろ教えるので日曜学・校と言われていた。Cajuru にある）、西本願寺、親鸞会 生長の家、創価学会、メシアニカ（大本教）、エヴァンジェリコ…

	東本願寺（第 3 土曜日、月 1 回）で仏法を学び、生け花、コーラス（大山先生の生徒さんにお願いして大山学園でやっている。歌う前に体操をして発声法などもやっていく）、二世会（月 1 回、25 レアルずつ出しあって 3，4 か所に寄付する）、そのほかにも家族で女性だけでやっている「せり講」がある。
趣味	文援協にあるスポーツ、ダンス、生け花などの各クラブ。旅行、絵画、パッチワークなどのグループ。「のまん会」（最近飲む人が減ったので飲みましょうという意味合い）、聖書などの読書会。
FAS	（Fundação de Ação Social：ファス：社会福祉財団）クリチーバを 9 つの地区に分けて設けられている。36，37 のクラブがあり、60 歳以上は無料で参加可能。沖縄人の何人かも語学（日本語、ドイツ語、スペイン語、英語、フランス語）のクラスを受講している。 9 つの地区それぞれに FAS の建物が置かれているが、そのうちの一つで中心地になっている大きな建物には、SAÚDE という市民なら無料で受けられる総合病院、運動リハビリを行う SMEL（Secretaria Municipal de Esporte e Lazer）とよばれるものも併設されている。
「琉球國祭り太鼓」クリチーバ支部	会費は月 25 レアル。2006 年に沖縄県人会が再設立の際、祝いにきていたサンパウロからの「琉球國祭り太鼓」をみて、クリチーバにも支部を作ることになった。2007 年頃から 4，5 人で支部ができ、5 周年経った現在メンバー80 人に膨れ上がっている。10～30 歳代を中心としているが、彼らの家族も食事、場所を提供するなどして協力的である。
模合	沖縄県人会の模合。家族だけの模合。中には親戚や家族、知人も含めた 13 家族の模合を 25 年以上続けているところがある。昔からやってきている女性だけの模合もある。
個人的な付き合い	仕事関係の仲間など週、月、半年ごとと決めて定期的に集まる。全く違う職種の人が 10 人前後集まって食事会をし、情報交換する。
Apaex	Apaex（Associação de Ex-bolsistas Brasil-Japão do Paraná：アッパエキス：パラナの日伯留学生協会）。 1981 年設立。クリチーバに拠点を置く研修と専門を受けたパラナ出身が集まる団体。（BUSHIDO：ｐｐ．204-205）留学生の会。県人会とは関係なく、ブラジル人が沖縄に研修で行ける。例は少ないが農業などでいくこともある[21]。

〈表 7〉クリチーバ市の沖縄人が関わっているグループの種類

各ホームページ、『武士道』、『クリチバ』、資料あり。

[21]会員のマツダ・ノブテルさんは２年間会長を務めた。

f. 自分たちの生活が安定し、地域で活動したりと、余裕がみられる。

活発に社会的な活動をしている人が多い。職業としては、農業をしている人は少ない。高齢者の中には老後をゆっくり楽しんでいる人も多い。

将来的な展望として地元のものと繋がっているという方向になるだろう。それはソーシャル・キャピタルにつながりうるような活動が増していくであろうことを予想させる。

このように生活に余裕があること、そして、次の g.のように、住んでいるクリチーバという町を気に入っていることは、クリチーバ市が格差をなくす方向でのまちづくりを行ってきたことを反映している。

g.クリチーバ市に愛着を持っている

メンバー全体が共通してクリチーバ市に愛着を感じている。

クリチーバ市は学園都市ともいえるほど大学などの学校が集まっている。

クリチーバは都市計画が整い、公共交通機関の充実、スラム住民や低所得者も排除しない市民参加のまちづくりのため、住民の満足度、愛着度が特に高い町であり、そのまちづくりに関係してきた日系人、沖縄人（ウチナーンチュ）も多い。

気候が良い、暑すぎないという意見も共通して見られた。

「選んでクリチーバにきた。市は大きいが、きれいで、よく整備されている。ブラジリアからきて 23 年になる。人は閉鎖的だけど、それでもすき」（2.5 世・ヒガ・エリオさん）

「クリチーバは４、５年前（2009 年当時）から人口が増えすぎて、渋滞する。都市計画が追いついていないようだ。人口が 160 万から 200 万ぐらいになっている。10 年前は安全で治安も良く、住みやすかった。人口が増えるのは中産階級。技術者の人が少ない。ブラジル国内でも公務員とかが一番選ぶ場所にもなっている。日本ほどとは思わないが、サンパウロなんかと比べて町が整備されている。今は地方から来ている人が増えて、ファベーラも増えて、整備が間に合わない。クリチーバは大変住みやすい。ゆったりした生活できると思っている。結婚する前の 1962 年にクリチーバに１年見習いで住んだ。86 年の２月には義弟ジョージもいた。仕事もあるし、息子の勉強のためにクリチーバへきた。気候が日本と似ている」（１世・上地安勝さん）

「サンパウロから移って３歳から住んでいる。クリチーバ市がとても好き、整っていて、きれいで、クリチーバ市以外の内陸地方、その中でクリチーバは最も整っている。北部は違う現実がある。たとえば、ホンドニア州のポルトヴェーリョというところは、法律があってないようなところ。王様もいる。水道やインターネットが十分に整っていない。（３世・ヤマシロ・アウドさん）

「クリチーバの魅力は、ブラジル全体では、パラナ連邦大学があること。ドイツ系・イタリア系が多い。ノルデスチ（北部）の人は教育で来ている。（クリチーバは）寒いので北部からはこれまで来ていなかったので、ヨーロッパの感じがある。日本人には、寒いけど、暑いところよりもいい、北の方にいけばベタベタになって仕事をする気にならない。マリンガー（市）から来た当時は寒いと思った」（２世　オオシロ・ヨシアキ）

h. 田舎を持つ、旅行好き

サンパウロ州やパラナ州北部出身の日系人、沖縄人（ウチナーンチュ）は、大学や専門学校の多い町クリチーバ市に移住し、その後も同市を気に入り、家族親戚を呼び寄せたりして定住していることがみられる。このような経緯から、特にサンパウロ州で、沖縄の出身市町村ごとに集住していたケースとは異なり、様々な出身の沖縄人（ウチナーンチュ）が集まっている。それでも呼び寄せや昔の関係などからメンバーのなかで親戚同士になっていることも多く見られる。それぞれがサンパウロ州やパラナ州北部に家族が残っている田舎を持っていたりする。詳しくは、付録資料２．クリチーバ沖縄県人会会員リスト（2009－2013）」の「以前の居住地または田舎」の欄を参照されたい。

田舎を持ち、旅行好きなのはブラジルでは共通してみられることだと考えられる。クリスマスとお正月は親戚が集まり、シャカラ[22]や海でシュハスコなどを楽しむ。休みごとに国内外の旅行をする人、田舎などに移動をする人が多い。

たとえば、パラナ州ロンドリーナに親戚のいるクリチーバ沖縄県人会メンバーは、ロンドリーナの人々とも関係を維持しながらネットワークを広げている。そうすると、都会だけでなく、田舎との関係のあるネットワーク形成ができる。クリチーバ市の人々の場合、もともとの出身地に親戚が残って住んでいたり、出身地でなくとも親戚がいるところ、あるいは自分たちで意識的に２つ目の家を準備することが見られる。これはブラジル全体の特徴と言えると考えられる。

たとえば、「伊佐浜移民」の田里友憲さんなどは、サンパウロ周辺で大規模なスーパーを複数経営しながら、ブラジリア近くのセラードといわれる地域に農場も所有し、２週間ごとに行き来する生活をしている。

このように考えると、クリチーバ市だけでなく周辺の田舎とワンセットに考えてみると、クリチーバを基点として、周辺の他の地域に頻繁に行き来するということがみられる。

---

[22]『世界大百科事典』「ファゼンダ」（西川 大二郎）によると、「数百 ha 以上の大農牧場をファゼンダと呼ぶ。この場合 200～300ha の規模の小型のファゼンダをファゼンドーラ fazendola と呼び，さらに規模の小さい，主として家族労働に依拠する農場をシティオ sítio，またはシャカラ chácara と呼ぶ」ものである。

i.「デカセギ」経験

1980 年代後半以降、ブラジルと日本、それぞれの政治・経済状況も影響し、誰も彼もが「デカセギ」に行く風潮ができていた。大きな流れによって決まる側面もあることから、個人、個人の対応には限界もあるが、クリチーバ市においても「デカセギ」をしている例は少なくなく、ABD（Associação Brasileira de Dekasseguis）という「デカセギ」から帰ってきた人の社会復帰などを支援する NPO ができている。

外務省の記録によると、在日ブラジル人約 28 万人の約 4 分の 1 がパラナ州出身と言われる[23]。「デカセギ」を経験している人は、日本での生活経験を持ち、日本語がある程度話せるようになるなど、影響は非常に大きい。「デカセギ」の問題点としては家族全員で行けず、家族が別れて長く過ごすケースが非常に多く、その間、家族間に温度差ができていく事例が多数みられることや、ブラジルへの帰国後の生活が難しいことなどである。

2013 年 1 月にクリチーバ沖縄県人会のたのもし会（新年会）に筆者が出席した際、出席者約 50 人に沖縄に行ったことがあるかとの質問に、半数以上が手を挙げた。沖縄に行った時期、滞在期間、回数は一人ひとり幅がある。しかし、日本には滞在したが、沖縄まではいけなかった、あるいは行かなかったメンバーも多数いる。また、沖縄までは行かなくともいいから日本に行ってみたいという人もいる。あるいは、神奈川県に「デカセギ」したが、沖縄の三線に興味を持っていたので、毎週 3 回練習に通っていたという人もいる。必ずしも沖縄という場所が重要ではなくなっていることのあらわれではないかと筆者は考える。

４．小括―「シンボルとしての沖縄」

集団ではない個としての沖縄移民のアイデンティティとして、クリチーバ沖縄県人会の事例を本章で見てきた。

沖縄から移民先であるブラジルの特にサンパウロ州を中心に沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティが直接持ち込まれたが、このサンパウロ州への移住の形態は、集団あるいは、呼び寄せとして同じ地域の出身者同士の集住が目立つ。これを集団として移住した沖縄移民のアイデンティティと筆者は捉える。サンパウロ州へ沖縄から直接移民をし、沖縄人（ウチナーンチュ）の人数の多さ、沖縄文化の環境が豊かであることから、容易に沖縄文化に触れる機会がある。

これに対してクリチーバ市はサンパウロ市から少なくとも 400km 離れており、クリチーバ市においてはじめは同地域の沖縄人（ウチナーンチュ）同士の集まりが見られたものの、小規模であり、沖縄文化に触れる機会はサンパウロ市のようなところに比べて非常に限られる。沖縄人（ウチナーンチュ）の人数が多い地域から離れれば離れるほど、沖縄文化の環境は薄まる。このように、沖縄文化環

[23]在クリチバ総領事（萩生田　浩次）「総領事館ほっとライン　第 32 回　クリチバ　日系人も創造に貢献したエコシティー」http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/iken/06/souryouji/32.html　（2016 年 1 月 5 日閲覧）

境から離れた場所にいる沖縄人(ウチナーンチュ)を「アイデンティティ難民」と捉えると、沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティの枯渇感が個人差はあるものの共通して生まれ、自分探し、あるいはアイデンティティ探しという行動につながる。つまり、「拠り所としての沖縄」を探し求めていくこととなる。その際、目に触れる沖縄に関する情報は、得てして一元的、表面的、あるいは断片的であったりする。サンパウロ州のような場所では、戦後に移民した１世がまだ多く健在しており、沖縄文化環境が整い、沖縄に関する情報を持ち合わせている人が多い。クリチーバ市においても同様に戦後に移民した１世が数名いるが、沖縄文化情報を得られる機会は少なく、一人一人が獲得、経験してきたものを共有することが中心となる。筆者がクリチーバ市を訪問した際も沖縄についての情報について多くの質問をされるケースがあった。彼らはインターネットや本などの情報を持ち合わせている上でそのことへの疑問や確認を行っていた。またサンパウロ市で開催された沖縄出身者のバンド BIGIN のコンサート、沖縄の踊りなどがあると、チャーターバスを仕立てて 400km の距離をものともせず見に行く。興味の多様性ということでは次のような例がある。沖縄人(ウチナーンチュ)のコミュニケーションとして挙げた頼母子であるが、クリチーバにおいては「たんに寄り集まって話すだけ」という形では参加人数は減少傾向となっており、今後の継続が懸念される状況もある。しかし、食事やそのレシピの持ち寄りについては強い関心が示されているケースがある。

筆者はクリチーバ市の沖縄人(ウチナーンチュ)に対して、「あなたの沖縄に対するイメージは？」あるいは「日本と沖縄の違いは？」というインタビューを行った。前述の「e.沖縄に対するイメージ」では、イメージの内容を１世、２世、2.5 世、３世と分けてみてきた。インタビュー結果をみると、沖縄人(ウチナーンチュ)たちは、環境によってアイデンティティの持ち方に大きく違いがみられた。例えば、家庭内で沖縄を見る機会の量、自ら沖縄情報を得る量、沖縄訪問の機会をどのぐらいもつのかなどで異なる。そして筆者はクリチーバ市におけるアイデンティティ形成は、各個人の作り上げた、あるいは興味の中でのシンボル化された沖縄によって大きく特徴づけられている。このように「シンボルとしての沖縄」が出来上がり、これがクリチーバ市の沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティの特徴であると筆者は考える。個として移住してきたクリチーバ沖縄県人会メンバーたちは、インタビューや活動内容から、沖縄文化の学習環境を整えようとすることが非常に積極的に見られた。この積極性は、沖縄料理、沖縄文化祭の開催、そして沖縄踊り、三線の毎月の講習開催など、１年にこなすイベントの数から明らかである。

前述のようにサンパウロを中心にしたエリアに集団で移住した沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティはその豊富な沖縄文化環境により、そのような積極性なしでも得られるアイデンティティであり、それは沖縄における沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティと共通性の高いものになっている。それに対し、クリチーバの沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティは、数少ない沖縄情報の中でそのアイデンティティ獲得欲求の高まりによって積極的に獲得されていったアイデンティティと言える。

このような特徴は以下のような場面における行動にも反映している。

クリチーバ沖縄県人会のメンバーのなかには、沖縄文化、音楽・踊りに関心の高い人もいればそうでない人もいるなかで、インタビューを通して最も全体に共通した関心事は、沖縄そばづくり等の沖縄料理教室であった。料理教室の際にクリチーバ沖縄県人会メンバーによって作成された沖縄料理のレシピ（付録資料 3.参照）がある。ブラジルの特に日系社会ではパーティーなどで集まる際、料理などの持ち寄りを頻繁に行っているが、それぞれの家庭の沖縄料理のレシピを持ち寄り、実際にみんなで作り、試食し、よければそれを祭りなどで出品する。料理に限らず、アイディアを出し合い、議論し、実際に試し、パーフェクトではなくても練習を積み重ねて披露する。クリチーバ沖縄県人会の特徴として「共有」の動きがみられた。このことはクリチーバ沖縄県人会長たちの言動にも表れていて、彼らは、キーワードとしてできるだけ「みんなでやること」を大事にするように心がけている。

2006 年のクリチーバ沖縄県人会としての始動から 10 年間で、活動はこのように益々進化を遂げているのである。

終章　個として移住した沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティの再構築

１．総括：クリチーバに移住した沖縄移民のアイデンティティを支える「シンボルとしての沖縄」

本研究では、集団ではなく個として移住した沖縄移民のアイデンティティの歴史的考察を、ブラジル国クリチーバ市における沖縄人（ウチナーンチュ）の事例をもとに行ってきた。そして沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティが沖縄移民にどのように継承されているのかをみてきた。本論文の最後の整理として振り返ってみていきたい。

まず本論文では「沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティ」と「沖縄移民のアイデンティティ」とに分けた。その理由は、沖縄において形成、醸成されてきた「沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティ」が、沖縄人（ウチナーンチュ）によってそれぞれの移民先に持ち込まれ、そこで変容し、その結果、「沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティ」とは異なる「沖縄移民のアイデンティティ」として再構築されると捉えるためであった。沖縄移民は、当初、集団移民の形で入植し、その後「呼び寄せ」の形での移民も行われているが、出身市町村ごとなどを中心に集住して居住することから、沖縄から持ち込まれた沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティは、沖縄県人会において継承、保持された。多民族国家、移民国家であるブラジルの日系社会のなかで沖縄人（ウチナーンチュ）の数が一定数あり、地域によっては沖縄人（ウチナーンチュ）が日系社会の多数派であったため、沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティを、前向きに保持することが比較的容易な環境になっていた。

ところが、その後の沖縄移民の歴史を見ると、集団的に移住した後、仕事や個人的な理由により、さらに個として移住を繰り返すことが頻繁に行われてきた。そのような人々が集まっている場所の一つとしてクリチーバ市がある。集団ではなく個として、第２、第３段階で移住していった人たちのアイデンティティはどうなるのか、どのように新たなアイデンティティが形成されるのかを明らかにすることを本論文では試みた。

本論文の目的は２つであった。まず、「沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティ」と「沖縄移民のアイデンティティ」とは何かを明らかにすることである。そして第２の目的は、集団ではなく個として、第２、第３の地へ移住を重ねた沖縄人（ウチナーンチュ）の、アイデンティティの形成および変遷を明らかにし、クリチーバの「沖縄人（ウチナーンチュ）」アイデンティティを明らかにすることであった。

これらの目的を達成するため、本論文は６つの章から論じた。

まず、第１、第２章で、１つめの目的である「沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティ」と「沖縄移民のアイデンティティ」とは何かの把握を試みた。

第１章「沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティをめぐる考察―アイデンティティ研究の対象としての沖縄」においては、主に歴史の視点から沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティ形成の考察の整理を行った。沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティは、日本におけるアイデンティティとは分けて研究対象とされてきている。その理由として沖縄は、歴史的な経緯から複数回にわたり所属が替わる経験をしてきたことにより、特異な歴史をたどってきたことが背景にある。沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンテ

ィティの先行研究は様々な分野で研究がなされており、本論では５つの分野に大別しどのような議論が行われてきたかを概観した。

さらに沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティの特徴と形成過程を、筆者は特に「もともとアイデンティティは持っていなかった」という立場で沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティの歴史的な変遷を分析しているスミッツの研究を援用しながら、歴史的視点からみた。また、歴史以外の視点で沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティに関係すると思われる要因を２点挙げた。１つめは沖縄人(ウチナーンチュ)同士の間で交わされる沖縄のフレーズの一つとなっている「イチャリバチョーデー（行き逢えば兄弟)」に見られる海洋民族的特徴である。これは沖縄人(ウチナーンチュ)が移民に出て行く際の特徴の一つといえる。２つめは、父系血縁の親族制度「門中(ムンチュウ)」の影響である。これは親族をつなぐ一種の社会システムである。「門中(ムンチュウ)」は父系血縁の親族制度であるが、長男が位牌を持つことが基本となっており、長男にあたる人が移民先に居住しているということが沖縄で起こっている。祖先崇拝を重視する沖縄人(ウチナーンチュ)にとって位牌を守ることに対してはある種の義務感が発生する。位牌を受け継ぐ役割などによって親族がつながらざるを得ない機会が生まれることは沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティに影響のある社会制度だと考える先行研究もある。

これら３つの要素、即ち歴史的視点、「イチャリバチョーデー」に見られる海洋民族的特徴、「門中(ムンチュウ)」という親族制度の 3 点から沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティは、土地との関係から離れた場所においても形成され得ることを確認した。

第２章「沖縄移民のアイデンティティをめぐる考察―アイデンティティ研究の対象としての沖縄移民」においては、沖縄移民の歴史を戦前、戦中、戦後の３つに大別し、沖縄における移民の経緯と背景をみてきた。戦前については、自由民権運動に関係のある沖縄人(ウチナーンチュ)の当山久三らの移民運動により、日本内で移民が許可されていなかった沖縄からも日本本土全体から 14 年遅れで可能となった。出移民の背景、要因については、集団で土地を共有する地割制が廃止され、個人で土地を売却することが可能となり、渡航費用が工面できるようになるなどの社会的な諸事情がある。また孤島である地理的な自然条件や徴兵忌避を理由とする移民も見られた。しかし、基本的には沖縄での窮乏から、移民として出て行かざるを得なかった状況があった。戦中については、移民先の各地でどのような境遇だったのか、どのように暮らしていたのか等について、沖縄からの移民であることによってみられた特徴を挙げた。戦後については、戦争での引揚げ者による人口増加を抑制するため、あるいは移民先からの送金を得るため、沖縄から積極的に移民を再開させている状況を述べた。戦後、沖縄は約 27 年間米軍の統治下におかれていたことから、日本本土とは別の移民政策がとられた。米軍基地のために土地を接収、占領され、それに伴い米軍側も積極的に沖縄から移民させようとする動きなどがみられた。

以上のように第 2 章では、沖縄における移民には、日本本土で語られる移民像とは異なる、沖縄に特殊な背景があることを確認した。そのような特異な歴史的経緯を踏まえたうえで、沖縄移民のアイデンティティを対象とした先行研究について概観し、研究の動向についての分析を行った。集団移民や沖縄人(ウチナーンチュ)の集住地域を対象としている先行研究から、文化変

容がありながらも、もちこまれた「伝統」を大事に継承していることが確認された。

次に、本論文の主な目的である、集団ではなく個として第２、第３段階とまったく別の土地へ移住した人たちの沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティの実態を明らかにするため、第３章「個として移住するクリチーバ市」と第４章「クリチーバ沖縄県人会とアイデンティティ」でクリチーバ市における沖縄人（ウチナーンチュ）の沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティの内容をみてみた。

第３章「クリチーバ市における沖縄人（ウチナーンチュ）の流入の歴史」においては、まず、クリチーバ市における日系人の流入の歴史として３つの要因に分けて概観した。すなわち、①戦争による海岸沿いからの立ち退き命令、②都会であるクリチーバ市への就学、就職の機会を求めて、③1975 年頃に発生した霜害である。

次に日系人組織の変遷を次の２つからみた。①戦後の「勝ち組」「負け組」問題による影響、②クリチーバ学生連盟による日系人組織の歩み寄りの促進である。

さらにクリチーバ市における沖縄人（ウチナーンチュ）の歴史についてみた。戦争後は上記①の理由で日系人組織の分裂が長引いたが、田舎からきていた学生らを中心に学生連盟が立ち上がり、助け合おうとする空気が生まれた。そして 2013 年現在も日系人組織「クリチーバ日伯文化援護協会」は活発に活動を行っている。クリチーバ市における沖縄人（ウチナーンチュ）は、日系人と一緒に日系人会を設立し、協力しあってきた。そのため、日系人の歴史と重なるが、本章では沖縄人（ウチナーンチュ）に焦点をあててみていった。

また、アイデンティティは、居住する地域の影響を受けると考えられるため、クリチーバ市とはどのような地域なのかを把握した。クリチーバ市にはヨーロッパ移民などを中心とする人々が多く入ってきており、「人間都市」「環境都市」などという理念をもとに独特の政策を展開し、市民が自主的に町に関われるような政策が展開されていることを確認した。

続いて、「個として移住した沖縄人（ウチナーンチュ）の集団の形成過程」として３つの時期に分けてみてきた。1957 年に頼母子として集まり始めた記録がある。その後現在に至るまで頼母子は続いてきたということである。しかし、その間に、サンパウロにあるブラジル沖縄県人会の本部に 1959 年から 1970 年代ごろの間に登録していたものの、入会の意味を見いだせなくなり退会したままなっていた時期がある。その後も頼母子は続いていたが、2000 年代から旧メンバーが頼母子を知らない沖縄人（ウチナーンチュ）を誘いはじめ、2006 年にはクリチーバ沖縄県人会として活動を再始動することとなった。こうした経緯を詳述した。

第４章「クリチーバ沖縄県人会とアイデンティティ」においては、再始動後のクリチーバ沖縄県人会の動きについて、クリチーバ沖縄県人会のメンバーの活動内容を概観した後、インタビューから、クリチーバ市に居住する沖縄人（ウチナーンチュ）からみる沖縄移民のアイデンティティを把握することを試みた。対象は、クリチーバ沖縄県人会の歴代の会長４名と、構成メンバーである。その結果、歴代４名の会長側に共通していたのは、血縁や地縁にこだわる傾向は低く、沖縄文化などに興味を持つ人などを歓迎するという姿勢である。構成メンバーにみられた特徴としては、住んでいるクリチーバ市に愛着を持ち、ブラジル人として、日本人としての意識を持っている一方で、沖縄の市町村のルーツ、育ってきた場所、沖縄に関する知識な

どは、構成メンバー相互にそれぞれ異なり、沖縄人(ウチナーンチュ)であることに強いこだわりはもたない。それゆえ、一見ばらばらなように見え、関心の持ち方も異なる。また職業も異なる。それにもかかわらず、彼らは沖縄を共通項にまとまり、クリチーバ沖縄県人会に一緒に集まり続けている。さらに共通していたのがクリチーバ沖縄県人会の集まりは差別に基づいた被害者意識ではなく、彼らの持つ沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティは、ネガティブなイメージが大きく後退した、積極的かつ主体的なものである点である。

サンパウロにおける沖縄人(ウチナーンチュ)のアイデンティティ形成は、集団として移住、居住している特徴から、沖縄文化の環境が豊富にあり、沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティは大きく形を変えることなく、継承されてきた。それに比べて、クリチーバは個の移住となっており、育ってきた沖縄のルーツ、場所、知識そして関心も異なり、集まる理由も様々である。沖縄文化の環境に乏しく、沖縄の情報が不足してくる。アイデンティティ形成のパワーはいったん希薄化したように見える。しかし、一度、アイデンティティ難民とも言える状況になった彼らの中に枯渇感が生まれ、限られた沖縄情報を一生懸命取得、共有しようという動きが見られる。このことにより、クリチーバ市の沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティは再構築されていったため、主体的に取得されたアイデンティティと言える。それゆえこのアイデンティティはネガティブなイメージが薄められ、ポジティブなイメージが取り入れられる傾向にある。

以上から第４章の結論として、クリチーバ市の沖縄移民のアイデンティティのつながりを支えているのは、「シンボルとしての沖縄」であるとした。

本論文の総括として、ここで改めて、「シンボルとしての沖縄」について詳しく述べたい。沖縄という場所から離れた土地に暮らしているクリチーバ沖縄県人会のメンバーたちの各々は彼らの心の中で沖縄を表わす複数のイメージを持っている。具体的にみてみると、クリチーバ沖縄県人会メンバーの各々が興味を示すもの、あるいは情報取得ルートとして持っているものは、料理、沖縄そば、頼母子で料理を持ち寄るレシピの共有、NHK の連続テレビ小説『ちゅらさん』、インターネット、「世界のウチナーンチュ大会」、太鼓、沖縄関係のイベントがある。クリチーバの沖縄人(ウチナーンチュ)の興味は人によって異なり、それぞれの人々の中に沖縄に関するイメージが存在し、彼らのアイデンティティは各々のイメージを基にして形成されたものである。それゆえに負の要素を含む古典的なものや歴史については関心が低く、血統へのこだわりもゆるくなってきている。その結果、クリチーバ沖縄県人会のメンバー各々は、彼らの中で沖縄というシンボルに結びつくイメージをそれぞれが持ち、そのことに自分自身のアイデンティティを意識する上で深い意味を込めている。そのようなクリチーバ市の沖縄人(ウチナーンチュ)の各々が持っている「シンボルとしての沖縄」がある種の“接着剤”の役割を果たし、クリチーバ沖縄県人会に参加することによってそのシンボルを定期的に確認し、互いにつながっていることを実感することで、沖縄移民のアイデンティティが新たに形成されている。

こうしたアイデンティティを持つクリチーバ沖縄県人会のメンバーたちには改めて以下のような特徴が指摘できる。1つめは、「まとまらないようにみえて、まとまっている」点、2つめは、クリチーバ沖縄県人会が場として重要な役割を果たしてきた点。3つめは、特殊な居住地としてのクリチーバ市が大きく影響を及ぼしている点である。

1つめの「まとまらないようにみえて、まとまっている」という特徴については、彼らが学ぼうとした沖縄文化の内容が沖縄の歴史的な影響からくる受動的な性質をもっていることが大きく影響したためではないか。これまで第 1 章でみたように沖縄は長い間、歴史環境から受動的にアイデンティティが形成されてきた生い立ちがある。第2章で見た移民の歴史においても、第 1 章で見てきたように受動的にできた環境状況に対応する形で移民も行われてきた。そして、サンパウロを中心とする地域では、集団移民の形で始まり、かつ、日本本土からの移民が多数であったため、沖縄人(ウチナーンチュ)移民は国内と同じような状況に置かれた。ところが第3章以下で見てきたように、クリチーバ市では、人数的には本土系移民が圧倒的に多いが、個として入ってきた人たちがメインだということで、沖縄人(ウチナーンチュ)たちも主体的、積極的に県人会を作ることができた。しかし、その時に受け継ごうとした沖縄文化自体は受動的なため、「まとまらないようで、まとまっている」特徴がみられたと考える。

2つめの特徴として、沖縄県人会が「場」として重要な役割を果たしているという点である。沖縄の言葉で「ゆんたく」というのは雑談のことであるが、ゆんたくの場としてもクリチーバ沖縄県人会が重要な機能を果たしている。このような「場」の必要性、大切さについては、沖縄にいる限りではそのような場は、どこでも作れることから、あまり深刻に意識されない。しかし、沖縄の外に出た移民にとってこのような「場」をもつことは非常に重要なことであった。

3つめの点については、ジャイメ・レルネル氏がクリチーバ市長になった 1970 年代からの町づくりの目標が、第 3 章でも詳述したとおり、個々人が市民として尊重される町になることであったことである。このクリチーバという都市の特性がクリチーバの沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティの形成に大きな影響を及ぼしたことも特筆すべき点として指摘しておきたい。

2．クリチーバにおける沖縄人(ウチナーンチュ)アイデンティティの今後の課題—次世代への継承

3世、4世と世代交代が進んでも、沖縄人(ウチナーンチュ)であるということを守ろうとする動きが現在でも見られる。しかし、沖縄人(ウチナーンチュ)だけでは会の組織運営ができなくなっていくことはクリチーバ市以外でもどこでも共通している。この次世代への継承は、県人会の活動内容の問題にもつながってくる。若い人たちがどのように関われるのか。例えば、「頼母子は飲んで食べて座っているだけでつまらない」という意見が多数ある。そういう人たちが興味を持てるような活動を取り入れることが今後の県人会活動として必要になる。では具体的に、どのような集まりがいいのか。少なくともブラジル内では、その衰退が懸念される中で沖縄県人会が再び盛り上がりを見せ始めた理由として、「琉球國祭り太鼓」の影響がある。

クリチーバ市においては「琉球國祭り太鼓」はクリチーバ沖縄県人会の支援もあって誕生した。一般に沖縄県人会は、高齢化し、衰退化しつつある中で、沖縄移民の多い地域を中心に確立している「琉球國祭り太鼓」だけは若い人たちの興味を惹きつけ、クリチーバ市においては太鼓のメンバーが 80 人ほどになっている。「琉球國祭り太鼓」は、多数の支部同士での交流を持ち、県人会やそれ以外の催しでも呼ばれ、忙しく活動している。但し、パターン化しているため、観る方、演奏する方にとっても飽きがくるという指摘もある。しかし、「シンボルとしての沖縄」が横の接着剤の役割とすると、「琉球國祭り太鼓」は縦の接着剤、つまり、世代間をつなげる重要な役割を果たしている。

「シンボルとしての沖縄」を接着剤に新たなアイデンティティが再構築されたその後の課題である、次世代への継承の鍵は、この「琉球國祭り太鼓」にあるのかもしれない。

３．本論文の今後の課題

最後に今後の課題を述べて、本論文の締めくくりとしたい。

本論文においては、サンパウロとクリチーバの比較を掘り下げたのみにとどまったが、ブラジル沖縄県人会の資料によると、サンパウロ市内のある町のケースでは、市の中心部からの距離も遠く、その移住プロセスもクリチーバ市と類似した県人会が存在する。今後、こうした類似ケースによる傍証を試みたい。

またクリチーバ市内における他国の移民、特にポーランドやイタリアからの移民のケースも見聞しており、これら個として移住した沖縄県人以外の事例の研究を通して傍証を求めたい。

そしてクリチーバ市の沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティについても自身がみてきた数年の間でも変化が感じられることから、今後の行方も引き続きみていきたい。上述のとおり「琉球國祭り太鼓」には、若い人をつなぎとめる本論文で指摘した以上の何者かが息づいている。その影響を引き続き調査し、今後の沖縄人（ウチナーンチュ）アイデンティティ研究につなげていきたい。

図表・写真一覧

[序章]
〈表 1〉『沖縄タイムス』と『琉球新報』における沖縄アイデンティティの呼称に関係する用語の登場回数 ……10

[第 1 章]
〈写真 1〉琉球國祭り太鼓クリチーバ支部 5 周年記念公演のチラシ ……21

[第 2 章]
〈表 2〉石川友紀による日本移民の時代区分 ……35
〈表 3〉在外日系人数と沖縄県系人数（2010 年推計値） ……37
〈図 1〉世界の沖縄人（ウチナーンチュ）分布（県人会など把握分）沖縄県資料より ……38
〈表 4〉沖縄移民のアイデンティティ関係の先行研究 ……43

[第 3 章]
〈写真 2〉クリチーバ市における戦後初の日系人会「友之会」のメンバーと「ウベラーバ青年会のメンバー：木製の日系人会館を背景に ……52
〈図 2〉サンパウロ州における邦人集団地の分布（1926 年当時）丸山浩明作成 ……54
〈図 3〉パラナ州日系家族分布図（1980 年 2 月 15 日　MITSURU OGAKI 作成）……55
〈図 4〉クリチーバ市の日系人会の歴史　合併の時系列:『BUSHIDO』より ……56
〈写真 3〉沖縄県人会クリチーバ支部記念式典・祝賀芸能公演 ……76
〈写真 4〉沖縄県人会クリチーバ支部記念式典・祝賀芸能公演 ……76
〈図 5〉ブラジル国の地図：パラナ州クリチーバ市の位置 ……81

[第 4 章]
〈写真 5〉クリチーバ沖縄県人会の忘年会 ……93
〈写真 6〉クリチーバ沖縄県人会の文化祭（創立 5 周年記念）の招待状 ……94
〈写真 7〉琉球國祭り太鼓クリチーバ支部 ……95
〈写真 8〉琉球國祭り太鼓クリチーバ支部メンバーの集合写真……96
〈写真 9〉マツダ・ノブテロ ……97
〈写真 10〉ウエズ・ジョージ ……99
〈写真 11〉ギノザ・マツオ・マリア ……101
〈写真 12〉ヒガ・エリオ ……103
〈写真 13〉2015 年クリチーバ沖縄県人会の新年会 ……107
〈写真 14〉「友之会　TOMO NO KAI」記念碑 ……114

〈表 5〉クリチーバ市の沖縄人（ウチナーンチュ）が関わっているグループの種類 ……115

参考文献

【移民周年史・史料・事典類】

アケミ・キクムラ＝ヤノ編・小原雅代訳 2002.『アメリカ大陸日系人百科事典―写真と絵で見る日系人の歴史』明石書店.

安里延 1941.『海外移民発展史　日本南方發展史序説』沖縄縣海外協會.

アルゼンチン日本人移民史編纂委員会編 2002.『アルゼンチン日本人移民史　第一巻　戦前篇』ブエノスアイレス：在亜日系団体連合会.

アルゼンチン日本人移民史編纂委員会編・社団法人 在亜日系団体連合会（FANA）2006.『アルゼンチン日本人移民史　第二巻（戦後編）』ブエノスアイレス：在亜日系団体連合会.

入江寅次 1938a.『邦人海外發展史上巻』移民問題研究會.

入江寅次 1938b.『邦人海外發展史下巻』移民問題研究會.

梅棹忠雄監修・松原正樹編 1995.『世界民族問題事典』平凡社.

エリス・キャッシュモア編／今野敏彦監訳 2000.『世界の民族・人種関係事典』明石書店.

〔監修〕大貫良夫＋落合一泰＋国本伊代＋恒川惠市＋松下洋＋福嶋正徳 2013.『新版　ラテンアメリカを知る事典』平凡社.

沖縄県教育委員会編 1974 原本・1989 復刻.『沖縄県史（第７巻　移民）』国書刊行会.

沖縄県教育委員会・（財）沖縄県文化振興会公文書管理部・史料編集室編 2000.『概説　沖縄の歴史と文化』沖縄県教育委員会.

沖縄大百科事典刊行事務局編 1983a.『沖縄大百科事典　上巻』沖縄タイムス社.

沖縄大百科事典刊行事務局編 1983b.『沖縄大百科事典　中巻』沖縄タイムス社.

沖縄大百科事典刊行事務局編 1983c.『沖縄大百科事典　下巻』沖縄タイムス社.

沖縄大百科事典刊行事務局編 1983d.『沖縄大百科事典　別巻』沖縄タイムス社.

『おきなわの声を伝えて半世紀』編集体制 2008.『沖縄の声を伝えて半世紀』東京沖縄県人会.

沖縄県婦人連合会編 1979.『沖縄県婦人連合会創立 30 周年記念　沖縄移民女性史』沖縄県婦人連合会.

沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室編 2002.『沖縄県史　資料編 14　琉球列島の軍政 1945-1950　現代２（和訳編）』沖縄県教育委員会.

外務省欧米局第二課 1951.・1952.「海外移住問題近況解説（第二〇号）」東京商工會議所.

外務省欧米局第二課 1952「移民促進の基盤としてのラ米諸国在留邦人」東京商工會議所

兼本盛一編 1981.『雄飛　ハワイ移民 80 周年記念　第 37 号』沖縄県海外協会.

香山六郎編 1934.『在伯日本移植民廿五周年記念鑑』バウルー：聖州新報社.

金武町史編さん委員会　金武町史　第一巻 1996.『移民・本編』金武町教育委員会.

金武町史編さん委員会　金武町史　第一巻 1996.『移民・証言編』金武町教育委員会.
金武町史編さん委員会　金武町史　第一巻 1996.『移民・資料編』金武町教育委員会.
今野敏彦・藤崎康夫 1994.『移民史　Ⅰ　南米編』新泉社.
財団法人 日本海外協会連合会 1958.『海外日系人の皆様に』東京商工會議所（冊子）.
財団法人 沖縄県文化振興会公文書管理部 1999.『企画展　公文書館資料にみる海外移民の軌跡』沖縄県公文書館（冊子）.
在伯沖縄協会 1972.『うるまの世あけ』在伯沖縄協会.
城間善吉 1959.『在伯沖縄県人・五十年の歩み　日本移民五十周年記念』東京.
第４回世界のウチナーンチュ大会実行委員会事務局 2007.『第４回世界のウチナーンチュ大会報告書』、第４回世界のウチナーンチュ大会実行委員会.
名護市史編さん委員会 2008.『名護市史本編５　出稼ぎと移民Ⅰ　総括編・地域編』、名護市役所.
名護市史編さん委員会 2008.『名護市史本編５　出稼ぎと移民Ⅱ　出稼ぎ＝移民先編（上）』名護市役所.
名護市史編さん委員会 2008.『名護市史本編５　出稼ぎと移民Ⅲ　出稼ぎ＝移民先編（下）』名護市役所.
名護市史編さん委員会 2008.『名護市史本編５　出稼ぎと移民Ⅳ　戦後編・展望』名護市役所.
名護市史編さん委員会 2010.『名護市史本編５　出稼ぎと移民　別冊　資料編』名護市役所.
名護市史編さん 1992.『世界を拓いた先人たちー戦前期名護市出身海外移住者名簿ー』名護市教育委員会.
那覇市総務部女性室・那覇女性史編集委員会編 1998.『なは・女のあしあと　那覇女性史（近代編）』ドメス出版.
那覇市歴史博物館編『戦後をたどる　「アメリカ世」から「ヤマトの世」へ』琉球新報社.
日本文化人類学会編 2009.『文化人類学事典』丸善.
南風原町史編集委員会編 2006.『南風原町史　第８巻　移民・出稼ぎ編　ふるさと離れて』沖縄県南風原町.
ハワイ日本人移民史刊行委員会 1964.『ハワイ日本人移民史　ハワイ官約移住 75 年祭記念』布哇日系人連合協会.
半田知雄 1976.『ブラジル日本移民史年表』サンパウロ人文科学研究所.
ブラジル沖縄県人会 2000a.『ブラジル沖縄県人の移民史ー笠戸丸から 90 年－１』サンパウロ：ブラジル沖縄県人会.
ブラジル沖縄県人会 2000b.『ブラジル沖縄県人の移民史ー笠戸丸から 90 年－２』サンパウロ：ブラジル沖縄県人会.
ブラジル日本移民百周年史編纂・刊行委員会編 2010.『ブラジル日本移民百年史（第三巻　生活と文化編）』風響社.
ブラジル日本移民七〇年史編纂委員会 1980.『ブラジル日本移民七〇年史』サンパウロ、

ブラジル日本文化協会.
ブラジル日本移民 80 年史編纂委員会 1991.『ブラジル日本移民八〇年史』移民 80 年祭祭典委員会・ブラジル日本文化協会.
ペルー沖縄県人会 1985.『ペルー沖縄県人移民七十五周年・ペルー沖縄県人会創立七十周年記念誌』ペルー沖縄県人会.
北米沖縄人史編集委員会編 1981.『北米沖縄人史』北米沖縄クラブ.
松本栄次著・撮影 2012.『写真は語る　南アメリカ・ブラジル・アマゾンの魅力』二宮書店.
見田宗介顧問・大澤真幸・吉見直哉・鷲田清一編 2012.『現代社会学事典』弘文堂.
宮里朝光・田名真之 1998.『沖縄門中大事典』那覇出版社.
山城勇編 1990.『沖縄県人ブラジル移住８０周年在伯沖縄県人会創立５０周年記念誌』在伯沖縄県人会.
山城善三・佐久田繁 2013.『沖縄事始め・世相史事典』日本図書館センター.
屋比久孟清編著 1987.『ブラジル沖縄移民誌』サンパウロ：在伯沖縄県人会.
屋比久孟清編著 1987.『ブラジル沖縄移民名簿』サンパウロ：在伯沖縄県人会.
与那原町教育委員会編 2006.『与那原町史　資料編１　移民』与那原町教育委員会.
若槻泰雄・鈴木譲二著 1975.『海外移住政策史論』福村出版.
渡邊欣雄・岡野宣勝・佐藤壮広・塩月亮子・宮下克也 1990.『民俗知識論の課題　沖縄の知識人類学』凱風社.
渡邊欣雄・佐藤壮広・塩月亮子・岡野宣勝・宮下克也編 2008.『沖縄民俗辞典』吉川弘文館.
蘭信三・伊豫谷登士翁・塩原良和・関根政美・山下晋司・吉原直樹編 2013.『人の移動事典　日本からアジアへ・アジアから日本へ』丸善出版.
琉球新報社編 2003.『最新版　沖縄コンパクト事典』琉球新報社.

【単行本】

浅香幸枝編 2009.『地球時代の多文化共生の諸相　人が繋ぐ国際関係』行路社.
安里進・高良倉吉・田名真之・豊見山和行・西里喜行・真栄平房昭 2004.『沖縄県の歴史』山川出版社.
足立伸子 2008.『ジャパニーズ・ディアスポラ 埋もれた過去　闘争の現在　不確かな未来』新泉社.
新川明編 1980.『新沖縄文学（45 号／沖縄移民）』沖縄タイムス社.
アンソニー・ギデンズ 2001.『暴走する社会　グローバリゼーションは何をどう変えるのか』、ダイヤモンド社.
安藤由美・鈴木規之・野入直美編 2005.『沖縄社会と日系人・外国人・アメラジアンー新たな出会いとつながりをめざしてー」』クバプロ.
五十嵐泰正編 2010.『労働再審②　越境する労働と〈移民〉』大月書店.

池田重二 1949.『ブラジル・パラナ洲邦人移植民発展史』グラフィカ・ブラジレイラ社（印刷）.
石川友紀 1997.『日本移民地理学的研究－沖縄・広島・山口－』榕樹書林.
石田甚太郎 1997.『米軍に土地を奪われた沖縄人(うちなんちゅ)―ブラジルに渡った伊佐浜移民』新読書社.
石原昌家 1986.『郷友会社会－都市のなかのムラ－』ひるぎ社.
石原昌英・喜納育江・山城新 2010.『沖縄・ハワイ　コンタクト・ゾーンとしての島嶼』彩流社.
伊集朝規 1987.『移民根性－南米の大地に生きて－』ひるぎ社.
伊高浩昭 2001.『双頭の沖縄　アイデンティティ危機（クライシス）』現代企画室.
イチロー・カワチ、等々力英美編 2013.『ソーシャル・キャピタルと地域の力』日本評論社.
伊藤一男 1984.『明治海外ニッポン人』PMC 出版.
稲葉陽二 2011.『ソーシャル・キャピタル入門　孤立から絆へ』中公新書.
今村晴彦・園田紫乃・金子郁容 2010.『コミュニティのちから－“遠慮がちな”ソーシャル・キャピタルの発見』慶應義塾大学出版会.
移民研究会編[編集委員＝飯野正子　木村健二　粂井輝子] 1997.『戦争と日本人移民』東洋書林.
伊豫谷登士翁・齋藤純一・吉原直樹 2013.『コミュニティを再考する』平凡社新書.
伊豫谷登士翁編 2007.『移動から場所を問う－現代移民研究の課題』有信堂高文社.
入江昭著・篠原初枝訳 2006.『グローバル・コミュニティ【国際機関・NGO がつくる世界】』早稲田大学出版部.
岩崎信彦・ケリ＝ピーチ・宮島喬・ロジャー＝グッドマン・油井清光編 2003.『海外における日本人、日本のなかの外国人－グローバルな移民流動とエスノスケープ－』昭和堂.
W.P.リーブラ／崎原貢・崎原政子訳 1974.『沖縄の宗教と社会構造』弘文堂.
牛窪襄 1956.『漫画移民五十年史』.
牛窪襄 1972.『パラナ日系 60 年史』パラナ文化出版社.
牛窪襄 1978.『漫画泣き笑い戦前移民』第 16 回出版.
牛窪襄 1978.『口述　移民一代』第 17 回出版.
内山節 2012.『内山節のローカリズム原論　新しい共同体をデザインする』農山漁村文化協会.
エマニュエル＝トッド（石崎晴己、東松秀雄訳）1992.『新ヨーロッパ大全』藤原書店.
エマニュエル＝トッド 1994.『移民の運命　同化か隔離か』藤原書店.
演劇「人類館」上演を実現させたい会編著 2005.『人類館・封印された扉』アットワークス.
OECD 編/ブライアン・キーリー著/濱田久美子/訳 2010.『〈OECD インサント３〉よくわかる国際移民』明石書店.
大久保潤 2009.『幻想の島　沖縄』日本経済新聞出版社.
太田恒夫 1995.『「日本は降伏していない」ブラジル日系人社会を揺るがせた十年抗争』文

藝春秋.
大田昌秀 1980.『沖縄人とは』green-life.
岡本太郎 1972.『沖縄文化論－忘れられた日本』中公叢書.
沖縄国際大学南島文化研究所 1994.『トートーメーと祖先崇拝―東アジアにおける位牌祭祀の比較』沖縄タイムス社.
沖縄心理学会（編）1994.『沖縄の人と心』九州大学出版会.
小熊英二 2003.『＜日本人＞の境界　沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮　植民地支配から復帰運動まで』新曜社.
小内透編 2009.『講座　トランスナショナルな移動と定住　第３巻　ブラジルにおけるデカセギの影響』御茶の水書房.
S.カースルズ/M.J.ミラー著・関根政美＋関根薫監訳 2011.『国際移民の時代』名古屋大学出版会.
梶田孝道 1988.『エスニシティと社会変動』有信堂高文社.
金子郁容他 2010.『コミュニティのちから　遠慮がちな“ソーシャル･キャピタル”』慶応義塾大学出版会.
金七紀男 2009.『ブラジル史』東洋書店.
狩野美智子 1991（増補版）.『沖縄を学ぶ－わたしたちの基礎講座レポート』吾妻書房.
狩野美智子 1992.『バスク物語』彩流社.
我部政男 1981.『近代日本と沖縄』三一書房.
鎌倉英也・宮本康宏 2013.『クロスロード・オキナワ　世界から見た沖縄、沖縄から見た世界』NHK 出版.
神谷良昌 2006.『帰米二世　ナンシー夏子の青春』琉球新報社.
香山六郎 1976.『香山六郎回想録：ブラジル第１回移民の記録』サンパウロ：サンパウロ人文科学研究所.
北原淳・安和守茂 2001.『沖縄の家・門中・村落』第一書房.
北原淳編 2005.『東アジアの家族・地域・エスニシティー基層と動態－』東信堂.
木村快 2013.『共生の大地アリアンサ　ブラジルに協働の夢を求めた日本人』同時代社.
「郷土」研究会編 2003.『郷土　表象と実践』嵯峨野書院.
空閑睦子 2011『変化する価値観におけるコミュニティ創生の研究』いなほ書房.
具志堅興貞著・照井裕編 1998.『沖縄移住地－ボリビアの大地とともに』 沖縄タイムス社.
工藤真由美・森幸一・山東功・李吉鎔・中東靖恵 2009.『ブラジル日系・沖縄系移民社会における言語接触』ひつじ書房.
グレゴリー＝J＝スミッツ・渡辺美季訳 2011.『琉球王国の自画像　近世沖縄思想史」』ぺりかん社
小池洋一 2014.『社会自由主義国家　ブラジルの「第三の道」』新評論.
駒井洋監修・中川文雄＋田島久歳＋山脇千賀子編者 2010.『ラテンアメリカン・ディアスポ

ラ』明石書店.
駒井洋監修・陳天璽＋小林知子 2011.『東アジアのディアスポラ』明石書店.
坂本治也 2010.『ソーシャル・キャピタルと活動する市民　新時代日本の市民政治』有斐閣.
サスキア＝サッセン・森田桐郎他訳 1992.『労働と資本の国際移動』岩波書店.
サンパウロ新聞社会部編 2000.『ブラジル日本移民の 1900 年代』サンパウロ新聞社会部
サンパウロ人文科学研究所編 1996a.『ブラジル日本移民・日系社会史年表－半田知雄編著改訂増補版－』サンパウロ人文科学研究所.
サンパウロ人文科学研究所編 2011b.『ブラジル日本移民・日系社会史年表－増補版　1996 年～2010 年－』サンパウロ人文科学研究所.
後田多敦 2010.『琉球救国運動　抗日の思想と行動』出版舎 Mugen.
篠田武司・宇佐見耕一編 2009.『安心社会を創る　ラテン・アメリカ市民社会の挑戦に学ぶ』信評論.
下川裕治 2008.『愛蔵と泡盛酒場『山原船』物語』双葉社.
下川裕治・仲村清司編著 2011.『新書　沖縄読本』講談社現代新書.
下嶋哲朗 1997.『豚と沖縄独立』未来社.
ジャイメ・レルネル 2005.『都市の鍼治療－元クリチーバ市長の都市再生術』丸善.
白水繁彦編 2015.『ハワイにおけるアイデンティティ表象　多文化社会の語り・踊り・祭り』御茶の水書房.
白水繁彦 1998.『エスニック文化の社会学』日本評論社.
白水繁彦編 2008.『移動する人びと、変容する文化　グローバリゼーションとアイデンティティ』御茶の水書房.
白水繁彦編 2011.『多文化社会ハワイのリアリティ　民族間交渉と文化創生』御茶の水書房.
杉山春 2008.『移民環流　南米から帰ってくる日系人たち』新潮社.
鈴木貞次郎 1933.『伯國日本移民の草分け』日伯協會.
住田育法監修 2009.『ブラジルの都市問題－貧困と格差を越えて』春風社.
高橋幸春 2008.『日系人の歴史を知ろう』岩波ジュニア新書.
多田治 2008.『沖縄イメージを旅する　柳田國男から移住ブームまで』中公新書ラクレ.
田名真之 1998.『近世沖縄の素顔』（おきなわ文庫、84）ひるぎ社.
田中慎二 2013.『移民画家半田知雄－その生涯』サンパウロ人文科学研究所.
谷富夫・安藤由美・野入直美[編者] 2014.『持続と変容の沖縄社会　沖縄的なるものの現在』ミネルヴァ書房.
玉城源五郎 1987.『アルゼンチンに活きる―沖縄県人移民小史―』ニライ社.
津田睦美 2009.『マブイの往来　ニューカレドニア日本　引き裂かれた家族と戦争の記録』人文書院.
富野幹雄 2008.『グローバル化時代のブラジルの実像と未来』行路社.
冨山一郎 1990.『近代日本社会と「沖縄人」』日本経済評論社.

鳥越皓之 1988.『沖縄ハワイ移民一世の記録』中央公論社.
鳥越皓之 2013.『琉球国の滅亡とハワイ移民』歴史文化ライブラリー.
中根千枝 2004.『タテ社会の人間関係　単一社会の理論』講談社現代新書.
中根千枝 2009.『タテ社会の力学』講談社学術文庫.
波平エリ子 2010.『トートーメーの民俗学講座　沖縄の門中と位牌祭祀』ボーダーインク.
西尾昭 1993.『韓国その法と文化』啓文社.
日本移民学会編 2011.『移民研究と多文化共生』御茶の水書房.
野里洋 2007.『癒しの島、沖縄の真実』ソフトバンク新書.
長谷川公一他 2007.『社会学』有斐閣.
服部圭郎 2004.『人間都市クリチーバ　環境・交通・福祉・土地利用を統合したまちづくり』学芸出版社.
服部圭郎 2014.『ブラジルの環境都市を創った日本人―中村ひとし物語』未來社.
“パラナ日本移民百周年への道程”刊行委員会編 2005.『パラナ日本移民百周年への道程』パラナ日伯文化連合会.
比嘉克博 2015.『琉球のアイデンティティーその史的展開と現在の位相』琉球館.
比嘉政夫 1987.『女性優位と男系原理　沖縄の民俗社会構造』凱風社.
広田康生 2003.『エスニシティと都市』有信堂.
福井千鶴 2010.『南米日系人と多文化共生　移住百年…その子孫たちと現代社会への提言』沖縄観光速報社.
藤崎康夫 1999.『母と子で見る A7　ブラジルへ　日本人移民物語』草の根出版会.
ベネディクト・アンダーソン著　白井隆・白井さや訳 2007.『定本　想像の共同体　ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山.
細川周平 1999.『シネマ屋(や)、ブラジルを行(ゆ)くー日系移民(にっけいいみん)の郷愁(きょうしゅう)とアイデンティティーー』新潮社（新潮選書）.
細川周平 2008.『遠きにありてつくるもの　日系ブラジル人の思い・ことば・芸能』みすず書房.
前山隆 2001.『異文化接触とアイデンティティーブラジル社会と日系人』御茶の水書房.
ボリビア日本人移住１００周年移住史編纂委員会 2000.『ボリビア日本人移住１００周年誌　ボリビアに生きる』ボリビア日系協会連合会.
又吉盛清編 2005.『日露戦争百年－沖縄人と中国の戦場』同時代社.
町田宗博・金城宏幸・宮内久光編 2013.『躍動する沖縄系移民　ブラジル、ハワイを中心に』彩流社.
丸山浩明編著 2010.『ブラジル日本移民－百年の軌跡－』明石書店.
三田千代子 2009.『「出稼ぎ」から「デカセギ」へ－ブラジル移民 100 年にみる人と文化のダイナミズム－』不二出版.
三田千代子、奥山恭子 1992.『ラテンアメリカ　家族と社会』新評論.

三田千代子編著 2011.『グローバル化の中で生きるとは　日系ブラジル人のトランスナショナルな暮らし』上智大学出版.
見田宗介 2006.『社会学入門－人間と社会の未来』岩波新書.
見田宗介・大澤真幸 2012.『二千年紀の社会と思想』太田出版.
南川文里 2007.『「日系アメリカ人」歴史社会学』エスニシティ、人種、ナショナリズム』彩流社.
宮里悦編 1979.『沖縄移民女性史』沖縄県婦人連合会.
三山喬 2008.『日本から一番遠いニッポン　南米同胞百年目の消息』東海教育研究所.
村野英一 2004.『南米の日系パワー―新しい文化の始動―』明石書店.
森仁志 2008.『境界の民族誌　多民族社会ハワイにおけるジャパニーズのエスニシティ』明石書店.
森本豊富 2009.『境界人－「移民」という生き方－』現代史料出版.
柳田利夫編著 2002.『ラテンアメリカの日系人　国家とエスニシティ』慶應義塾大学出版会.
山下清海編著 2011.『現代のエスニック社会を探る－理論からフィールドへ』学文社.
山城興勝 2010.『私の南米取材記　ウチナーンチュの生き方を探る』琉球新報社.
山本英政 2005.『ハワイの日本人移民－人種差別事件が語る、もうひとつの移民像』明石書店.
山脇直司 2004.『公共哲学とは何か』ちくま新書.
ヨーゼフ・クライナー著・沖縄大学地域研究所編 2012.『世界の沖縄学　沖縄研究 50 年の歩み』芙蓉書房出版.
ヨーゼフ・クライナー編 2013.『日本民族学の戦前と戦後－岡正雄と日本民族学の草分け』東京堂出版.
吉田忠雄 2006.『南米日系移民の軌跡』人間の科学叢社⑧.
吉成勝男・水上徹男・野呂芳明編著 2015.『市民が提案するこれからの移民政策　NPO 法人 APF の活動と世界の動向から』現代人文社.
吉原和男、鈴木正崇、末成道男 2006 年再版.『＜血縁＞の再構築－東アジアにおける父系出自と同姓結合（軽装版）』風響社.
與那覇潤 2011.『中国化する日本』文藝春秋.
米山裕・河原典史編 2007.『日系人の経験と国際移動　在外日本人・移民の近現代史』人文書院.
依光正哲編著 2003.『国際化する日本の労働市場』東洋経済.
琉球新報社編 1986a.『世界のウチナーンチュ（1）』ひるぎ社.
琉球新報社編 1986b.『世界のウチナーンチュ（2）』ひるぎ社.
琉球新報社編 1986c.『世界のウチナーンチュ（3）』ひるぎ社.
琉球新報社編著 2012.『ひずみの構造　基地と沖縄経済』琉球新報社.
琉球新報社 2011a.『薩摩侵攻 400 年　未来への羅針盤』（新報新書〔1〕）琉球新報.

琉球新報社 2011b.『「琉球処分」を問う』（新報新書〔２〕）琉球新報社.
琉球大学編 2009.『融解する境界　やわらかい南の学と思想・２』沖縄タイムス社.
林泉忠 2008.『「辺境東アジア」のアイデンティティ・ポリティックス―沖縄・台湾・香港』明石書店.
レイン=リョウ=ヒラバヤシ他 2006.『日系人とグローバリゼーション　北米、南米、日本』人文書院.
ロバート.D.パットナム著・柴内康文訳 2006.『孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房.
湧上聾人編 1929.『沖縄救済論集』越山堂.
渡邊欣雄 1993.『世界のなかの沖縄文化』沖縄タイムス社.
渡辺欣雄 2002.『沖縄文化の拡がりと変貌』榕樹書林.

【論文集】

『南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究―文部省科学研究費　海外学術調査　昭和 55 年度調査総括―』、琉球大学法文学部地理学教室、1981 年３月
『南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究（Ⅱ）－ボリビア・ブラジル－　―文部省科学研究費　海外学術調査　昭和 55 年度調査総括―』、琉球大学法文学部地理学教室、1986 年 3 月

【論文】

石川友紀 2005.「沖縄県における出移民の歴史及び出移民要因論」『移民研究』創刊 ：11-30
倉元直樹・高良美樹・北村勝朗 2012.「『沖縄アイデンティティ』の構造と規定要因―歴史・文化的視座からの尺度構成―」教育情報研究 11.
白水繁彦 2006.「ウチナーンチュ・スピリットのゆくえ―エスニシティで繋がる世界―『コミュニケーション科学』東京経済大学 24.
鳥山淳 2004.「占領と移住・移民」『沖縄を知る事典』編集委員会編『沖縄を知る事典』日外アソシエーツ 62-63.
野入直美 2009.「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク（４）－中南米からの参加者の特徴を中心に－」The Worldwide Uchinanchu Festival and Okinawan Network(4) Features of Participants from Middle and South America　琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門『移民研究』5：27-40
野入直美 2012.「構築される沖縄アイデンティティ　第 5 回世界のウチナーンチュ大会参加者アンケートを中心に」Constructing Okinawan Identities：Focusing on the Surveys of the Participants of the 5th Worldwide Uchinanchu Festival　琉球大学

国際沖縄研究所移民研究部門『移民研究』8：1-22
比嘉政夫 1974.「『門中』研究をめぐる諸問題－小川徹氏の論考を中心に－」外間守善『沖縄文化研究１』法政大学沖縄文化研究所.
森幸一 2000.「ブラジルにおける沖縄系人のアイデンティティの変遷過程」『産業総合研究調査報告』第Ⅳ編、南米研究部会、沖縄国際大学産業総合研究所 8：43-56.
戸邉秀明 2015.「沖縄近代史から考える「近代性」とアイデンティティの問い方 － 研究動向をめぐる一種の随想」(特集 沖縄研究 ： 理論/出来事の往還) 『言語社会』9：107-122
山﨑孝司 2012.「沖縄復帰運動が目指した「祖国」－境界とアイデンティティの揺らぎ」(会活動ニュース 戦争展文化企画)、日本史研究会『日本史研究』596：99-101

【インターネット文書】

Gregory Smits「沖縄アイデンティティの歴史的変動とその事情」
Text of Presentation, Okinawa Identity Symposium, Hōsei University, Tama Campus, March 9, 2004
http://cache.yahoofs.jp/search/cache?c=NIKYa1_JqGoJ&p=%E3%82%B0%E3%83%AC%E3%82%B4%E3%83%AA%E3%83%BC+%E6%B2%96%E7%B8%84+%E6%99%82%E4%BB%A3%E5%8C%BA%E5%88%86&u=www.personal.psu.edu%2Ffaculty%2Fg%2Fj%2Fgjs4%2FOkinawan_Identity.htm （2015 年 10 月 4 日閲覧）

森幸一「ブラジルにおける日本移民研究の回顧と展望」
http://gcoe.hus.osaka-u.ac.jp/100710seminar_resume&reference_.pdf#search='%E6%A3%AE%E5%B9%B8%E4%B8%80+%E3%82%A2%E3%82%A4%E3%83%87%E3%83%B3%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%86%E3%82%A3' （2015 年 10 月 4 日閲覧）

大阪大学ＧＣＯＥプログラム、コンフリクトの人文学国際研究教育拠点
大阪大学グローバル

【英語文献】

ETHNIC STUDIES ORAL HISTORY PROJECT, University of Hawaii United Okinawan Association of Hawaii. 1981. *UCHINANCHU A HISTORY OF OKINAWANS IN HAWAII*：Ethnic Studies Program University of Hawaii at Manoa Honolulu.

GREGORY, Smits, 1999. *Visions of Ryukyu: Identity and Ideology in Early-Modern Thought and Politics*, University of Hawai'i Press, Honolulu.

JOYCE, N Chinen. 2007. *Uchinaanchu Diaspora: Memories, Continuities, and Constructions*: volume42 Department of Sociology University of Hawai'i Press Honolulu.

MATTHEW, Allen. 2002. *Identity and resistance in Okinawa*: Lanham, Md. : Rowman & Littlefield.

RONALD, Y Nakasone. 2002. *Okinawan Diaspora*: University of Hawai'i Press Honolulu.

【ポルトガル語文献】

IKEOKA, Maria Cecilia Missako. 2008. *Banzai Brasil Banzai Japao!* : Historias de seis geracoes.

OKUBARO, Jorge J. 2006. *O sudito : (Banzai, Massateru!)* : Editora Terceiro Nome.

SETO, Cláudio; UYEDA, Maria Helena. 2009. *BUSHIDO 武士道 CAMINHO DO GUERREIRO SEMEADOR 100 Anos de Presença Japonesa no Paraná* VOLUME1. Curitiba-Paraná.

SETO, Cláudio; UYEDA, Maria Helena. 2009. *BUSHIDO 武士道 CAMINHO DO GUERREIRO SEMEADOR: 100 Anos de Presença Japonesa no Paraná*: : VOLUME2. Curitiba-Paraná.

SETO, Cláudio; UYEDA, Maria Helena. 2009. *BUSHIDO 武士道 CAMINHO DO GUERREIRO SEMEADOR 100 Anos de Presença Japonesa no Paraná:* VOLUME3. Curitiba-Paraná.

SETO, Cláudio; UYEDA, Maria Helena. 2002. *歩み* ***Ayumi*** **- caminhos percorridos**: *memorial da imigração japonesa – Curitiba e Litoral do Paraná. Curitiba*: Imprensa Oficial do Paraná,
(Depoimento a Cláudio Seto e Gilberto Hara. Curitiba, 20 de janeiro de 1995)

YAMASHIRO, José. 1993. *OKINAWA 沖縄 – Uma ponte para o mundo*: Cultura Editores Associados.

SOCIEDADE CULTURAL E BENEFICENTE NIPO-BRASILEIRA DE CURITIBA.1996. *50 ANOS NIKKEI CURITIBA 1946/1996*, EDIÇÃO COMEMORATIVA.

Nikkei clube de curitiba. *Caderno Comemorativo 40° Aniversário Ano 1986.*

付録資料１．クリチーバ市における沖縄人の歴史年表

クリチーバ市における沖縄人（ウチナーンチュ）の歴史年表

年代・年	会の名称	活動内容	活動内容の詳細
1930 年代	1934 年 日本人クラブ （宣化会）	※まだ沖縄人は入ってきていない。	
1940 年代	1941 年 連合　日本人会 1946 年 8 月 11 日 日本人会として友之会設立。 1946 年 8 月 25 日 ⇒２世を中心としたウベラーバ青年会もできる。[1]	1942 年頃、沖縄人（ウチナーンチュ）がクリチーバに入ってくる[2] ◆20m×幅 12m の木製の日本人会の会館建設[3] **その後、日本人会は第 2 次世界大戦の「勝ち組、負け組」などの影響により、分裂した歴史をたどる。**	「パラナ州の州都クリチーバ市への県人の進出は、1942 年頃で同市近郊サン・ジョゼ・ピニェイロに伊波松一・勇吉が、蔬菜作りで入植したが、大きな集団地となることはなかった」[4] [建設費寄付者 31 名中 6 名が沖縄人] ・伊波永吉（元ウベラーバ日本人会長） ・伊波勇吉 ・仲間善正 ・伊波松一 ・仲村政秀 ・山城松一 背景：日本人会（または日系人会）は第 2 次世界大戦後の勝ち組、負け組の影響により３つ以上の組織に分裂していた。 グローリア、ピニェールス、ウベラーバなど。それぞれのクラブで野球の試合は盛んに行われていた。

[1]「友之会」と「ウベラーバ青年会」は 1967 年に統合され「ウベラーバ日本人会」となる。

[2]石川村、伊波村の 5 家族がパラナグァに在住していたが、立退きのために新たな場所を探していた理由でクリチーバに視察にくるなどして移り住む（インタビューによる）

[3]小屋では、喜劇、悲劇などの芝居をし、初回だけで小屋代（29 コント）以上が賄えた。（ゼンショウ・ヤマシロへのインタビューより）（『AYUMI』には 10× 6 m とある）

[4] ブラジル沖縄県人会 2000a.『ブラジル沖縄県人の移民史－笠戸丸から 90 年－１』サンパウロ：ブラジル沖縄県人会.　pp.131-132

		1949年4月29日設立のUGC（União dos Gakusseis de Curitiba：クリチーバ学生連盟）のメンバーたちによって日系人会を一つにまとめる動きが出る。	→UGCのメンバーは北パラナからクリチーバ市にきた学生たち。経済負担を減らすため、一つのペンションに一緒に住んでいた。（メンバーに沖縄人も多数いた）
1950年代	**沖縄人（ウチナーンチュ）の頼母子が始まる** **SHINBOKU KAI** **（親睦会）** **または** **頼母子** ＊呼称は複数	◆1957年、頼母子が開始される。（毎月、個人宅にて） ◆1959年、クリチーバ沖縄県人会ができる	「頼母子は、寄り合って助け合う。その場で楽しもうとした。一月に一回集まって話し合おうと。バラバラになったらいかんと。伊波永吉、松一が案を出した」（ヤマシロ・ゼンショウ） ※サンパウロ本部の記録では、会長は伊波松一。 [1958年当時のクリチーバ] クリチーバ市及び近郊 １．家族数19 ２．人口140名（内訳：日本生まれ男19、女20、計39名、伯国生まれ男54、女47、計101名。 ３．就学児童数 小学13、中学６、高等４、計23名 ４．職業別世帯　人口 ●農業（雑作農２、蔬菜栽培２、蔬菜栽培（借地）12）計16世帯●商業（バール１、雑貨店１）計２所帯[5] 伊波松一を中心に会員９名、伊波が会長を８期務めた、との記録あり[6]。
1960年代	**SHINBOKU KAI** **（親睦会）** **親睦会と呼ばれる頼母子の集まりが1960年中頃にできあがる（？）** “O grupo de Tanomoshi que se –chama	◆頼母子（毎月、個人宅にて）	**Inicio o grupo（～1966　第１グループ）** ・伊波松一（創設者） ・仲村政秀 ・伊波勇吉 ・山城松一 ・比嘉ヒデ ・仲間善正 ・比嘉昌輝

[5]城間善吉 1959.『在伯沖縄県人・五十年の歩み　日本移民五十周年記念』東京.

[6]屋比久孟清編著 1987.『ブラジル沖縄移民誌』サンパウロ：在伯沖縄県人会.　327p

	Shinboku-Kai originou-se em meados de 1960[7]”		**Uma segunda geração（第２世代）** ・伊波勇吉（リーダー）（Kichiro Iha？） ・伊波保 ・山城正義 ・久高唯義 ・伊波ゼンネイ ・古波津次郎 ・島袋ウシ ※サンパウロ本部の記録では、会長は、1966 年まで伊波松一、1967 年～伊波勇吉
1970 年代	・**頼母子** ・**クリチーバ沖縄県人会（一時期）** 一度、サンパウロの沖縄県人会に所属し、クリチーバ支部になる。しかし、会費を出しても情報が届かず、所属の意味を見出せず１、２年で脱退[8] ※1973 年の支部別会員数によるとクリチーバは 18 となっている[9]。 ※サンパウロ本部の記録では 1959-1986 年まで登録記録とされている[10]。	◆頼母子（毎月、個人宅にて） ◆1971 年 伊波松一の誕生会（Festa de aniversário do Sr.Matsuiti Iha Líder Pioneiro）（写真記録） ◆1972 年 青年会（写真記録） ◆イグアスーの滝へのツアー（写真記録）	→パラナ州サン・ジョゼー・ドス・ピネイロスにて Jovem do Groupo- S. José dos Pinhais →Excursão à Foz do Iguaçu ※サンパウロ本部の記録では、会長は、1970 年～仲村政秀、1972 年～伊波松一、1974 年～伊波勇吉、（クリチーバの写真記録によると、1975－77 年の会長は伊波永吉）

7 クリチーバ沖縄県人会の宜野座マリアの資料より。60 年代は２つのグループに分けて記録されている。

8 リーダー・伊波松一がなくなって支部を辞めた（ゼンショウ・ヤマシロへのインタビューによる）

9 石川友紀・町田宗博「ブラジルにおける沖縄県出身移民の集団形成」山城勇編 1990.『沖縄県人ブラジル移住８０周年在伯沖縄県人会創立５０周年記念誌』在伯沖縄県人会. p.227

10 ブラジル沖縄県人会 2000a.『ブラジル沖縄県人の移民史－笠戸丸から 90 年－１』サンパウロ：ブラジル沖縄県人会.

			1976 年伊波松一、1977 年仲村政秀、1978 年～伊波勇吉
1980 年代	・頼母子 ※ここまで沖縄県人会本部の記録あり	◆頼母子は継続されている模様（記録なし） ◆1981 年、赤嶺カナのシャカラ[11]にて集まる。（写真記録） ◆1985 年 3 月 24 日、個人宅（伊波ホーザ）に集まる（写真記録）	※サンパウロ本部の記録では、会長は、1980 年～伊波永吉、1982 年～伊波松一 1984 年～古波津次郎、1986 年～伊波勇吉 ※『在伯沖縄県人会名簿並びに住所録』（1981 年）には 14 名がメンバーとして記録されている。
1990 年代	・親睦会または頼母子	◆頼母子（個人宅にて毎月開催） ◆県人会長選挙の制度導入 ◆沖縄県人会会館を建設に向けて頼母子で積立 ◆新年会、忘年会などは行われてる模様	1995-1999 年 会長：セルジオ・ミヤシロ ※当時の会長セルジオ・ミヤシロが会館建設のため、力を入れていたが、不慮の事故で他界。会館建設の話は白紙になる。 1999 年～ 会長：パウロ・イハ
2000 ～ 2005 年	・頼母子	沖縄県人会の活動場所として、日系会館を使用し始める。	＜新しいメンバーが集まり始める＞ →山脇ジョージ日系人会会長に場所を使用したい旨をカンジ・イハ、リセイ・イハ、ジョゼー・ヤビク、山城弘義らが相談し、了承される。

[11] シャカラ（chácara）とは、小規模の農場のこと。

	※沖縄県人会として動き始めている印象	◆頼母子（日系会館にて毎月開催）	午後２時から軽食（持ち寄り当番制）お知らせ、ビンゴなど 2001-2005 年　役員名※会長変更あり 会長：ノブテロ・マツダ 副会長：ジョージ・ウエズ 事務局長：パウロ・イハ 会計係：アジルソン・コハツ 会計係：カルロス・タイラ 婦人部：カズコ・アカミネ 第１会計：ヘジーナ・シマブク 第２会計：カズエ・タイラ 踊り：シズコ・イハ 監督（財政アドバイス）： ＊山城弘義　＊ジョゼー・ヤビク ＊ルイス・シマブク　＊リセイ・アラカキ
		◆2000 年７月 16 日、第 39 回パラナ民族祭（39º Festival de Etnias do Paraná）に沖縄踊りが参加。	サンパウロ州カンピーナスの踊りグループが参加[13]。
		◆2002 年１月 22 日、新年会	→オオシロ・ヨシアキのシャカラにて
		◆2002 年３月 16 日、金城節子先生の琉舞の初回講座。	→文化担当のカズコ・アカミネさんがサンパウロ州カンピーナスから踊りの先生を呼ぶ。 当時の日系人会副会長ケイコ・ノグチ（現沖縄県人会会員）がプラサ・ド・ジャポン（日本庭園）で行われた移民祭りで行わる盆踊りに全員を招待。ちょうど移民 95 周年[14]。→日系人会館にて

[13] クリチーバ日伯文化援護協会の機関紙、第 332 号、2001 年 01 月 01 日

[14]ブラジル沖縄県人会の事務局のホームページ http://www.okinawa.com.br/noticias/2003/030317.htm（2015 年 1 月 12 日閲覧）Okinawa.com.br 2002® - Todos os direitos reservados Dúvidas e sugestões：webmaster@okinawa.com.br　Curso de Okinawa Odori em Curitiba

		◆2003 年 7 月、赤嶺カナのシャカラ[12]にて集まる。（写真記録） ◆2004 年 12 月、忘年会（写真記録） ◆2005 年 12 月、忘年会 （写真記録）	→オオシロ・ヨシアキのシャカラにて
2006 年	・頼母子 ・クリチーバ沖縄県人会設立 （Associação Okinawa-Kenjin de Curitiba, AOC）[15]	◆頼母子 （1 月～11 月、日系会館にて）	→午後 2 時から軽食（持ち寄り当番制） お知らせ、ビンゴなど 2006-2008 年　役員名 会長：ジョージ・ウエズ 副会長：ヤスカツ・ウエチ 第 1 会計係：パウロ・イハ 第 2 会計係：セリオ・コハマ・シマブク 第 1 事務：マリア・ギノザ・マツオ 第 2 会事務：ハツエ・サトウ・シマブク 婦人部：ネリ・タミコ・ウエズ 文化部：テレザ・ヤエコ・ウエチ 社会部：カズミ・オオニシ 広報：カズコ・アカミネ 監督（財政アドバイス）：ノブテロ・マツダ、アウド・ヤマシロ、エリーザ・カナシロ・マルオ 審議アドバイス： ＊ヒロヨシ・ヤマシロ　＊ジョゼー・トウマ　＊パウロ・イハ　＊アジール・ロッコ　＊リセイ・アラカキ　＊ソウキ・ヒガ　＊ゼンショウ・ヤマシロ　＊ジョゼー・ヤビク　＊ノブテロ・マツダ　＊ジュリオ・イナフコ　＊ルイス・シマブクコ

12 シャカラ（chácara）とは、小規模の農場のこと。

15 サンパウロ本部に正式登録し、クリチーバ沖縄県人会となる。

		◆6 月 4 日、クリチーバ沖縄県人会設立として式典、琉球芸能祭「沖縄芸能フェスティバル」開催。 ◆12 月 16 日、忘年会	→会場：文化援護協会（以下、日系人会） サンパウロの沖縄県人会本部とサントアンドレー支部から 140 名でバス 3 台の慶祝団かけつける。県人会本部とサントアンドレー支部から 140 名。会場には 500 名以上出席。午後 3 時から 5 時間にわたって行われた[16]。
2007 年	・頼母子 ・クリチーバ沖縄県人会	◆頼母子 （1 月～11 月、日系会館にて開催） ◆4 月 20～22 日、サンタカタリーナ州へのツアー ◆ 6 月 17 日、1 周年記念（昼食会） ◆12 月 16 日 忘年会 ◆琉球國祭り太鼓のクリチーバ支部（a RKMD filial Curitiba）設立。	会長：ジョージ・ウエズ 副会長：上地安勝 →午後 2 時から軽食（持ち寄り当番制） お知らせ、ビンゴなど →Excursão à Santa Catarina Fez um tour pelas velhas sidades catarinenses como Treza Tílias e Friburgo. →太鼓のメンバーは 10 代～30 代で構成されている。その後、沖縄県人会から独立して練習、出演を行うが、一緒に集まることも多い。
2008 年	・頼母子 ・クリチーバ沖縄県人会	◆頼母子 （1 月～11 月、日系会館にて開催）	会長：ジョージ・ウエズ 副会長：上地安勝 →午後 2 時から軽食（持ち寄り当番制）お知らせ、ビンゴなど

[16] ニッケイ新聞「沖縄県人会に 44 番目の支部＝クリチーバで発足式典＝記念芸能祭に 500 人超集う」2006 年 6 月 6 日付記事。http://200.218.30.171/2006/060606-71colonia.html（2015 年 1 月 12 日閲覧）

		◆8月22～26日、沖縄からブラジルへの移民 100周年記念祭参加。 ◆5月の母の日 ◆8月の父の日	→サンパウロにて開催。 チャーターバスで乗り合わせる。 →シュハスカリア（バーベキュー）
2009年	・頼母子 ・クリチーバ沖縄県人会	◆頼母子 （1月～11月、日系会館にて開催） ◆5月3日沖縄料理教室・試食会の集まり。 「そば教室(AULA DE SOBA)」 ◆6月14日、 クリチーバ沖縄県人会3周年記念として 「沖縄文化祭（Festival da Cultura de kinawa）」 ◆7月1日、第48回パラナ国際民族芸能祭	会長交代 ジョージ・ウエズ→　マリア・ギノザ・マツオ →午後2時から軽食（持ち寄り当番制）お知らせ、ビンゴなど →伝統的な沖縄そばと沖縄おにぎりを作る。ハツエ・シマブクロ家のパステル[17]台を使用。 ＊沖縄そば600食完売、不足が出る ＊サーターアンダギー ＊クリチーバのメンバーの踊り ＊歌・三線 ＊ビンゴ ＊80歳以上に記念品贈呈など →サンパウロから斉藤悟が出演 クリチーバの琉球國祭り太鼓が参加。サンパウロからは日本舞踊の「花柳龍千多会」一門をはじめ、琉球国祭り太鼓（浦崎直秀代表）、琉球舞踊協会（島袋ヨリコ代表）も出演[18]。

17 パステルとはブラジル風揚げ餃子とも言われる。沖縄そばの麺などを作るのに適しているメンバーのパステル工場が使用されている。

18ブラジル沖縄県人会のホームページ参照。

2010 年	・頼母子 ・クリチーバ沖縄県人会		会長：マリア・ギノザ・マツオ 副会長：アリオ・アラカキ
		◆頼母子 （1 月～11 月、日系会館にて開催）	→午後 2 時から軽食（持ち寄り当番制） お知らせ、ビンゴなど
		◆1 月 31 日 新年会（Nikkei Club 日系クラブにて） ◆2 月 28 日 2010-2011 年度の会長選挙	
		◆4 月 18～21 日 ツアー	→場所：パラナ州コルネイロ・プロコピオ（Cornélio Procópio）
		◆6 月 6～8 日、 移民祭り参加 バリグイ公園にて	→ソーキそば 800 食売る。 琉球國祭り太鼓参加。
		◆7 月 4 日、クリチーバ沖縄県人会 4 周年記念	
		◆8 月 23 日、 斉藤悟 Satoru Saito の琉舞ショー鑑賞。	→サンパウロまでチャーターバスでの移動
		◆頼母子でシュハスコ（バーベキュー）	

http://www.100nen.com.br/ja/okinawa/000165/20090812005735.cfm （2014 年 1 月 12 日閲覧）

		◆10 月 17 日、沖縄料理作りの集まり ◆琉球舞踊の教室が始まる。 ◆忘年会	→伝統的な沖縄そば、木灰汁（もっかいじる）の沖縄そば、沖縄おにぎり、沖縄もち、サーターアンダギー、ウムクジテンプラ、チンビグァーを作る。山城弘義家族のパステル台を使用。 →サンパウロから新たな琉舞の先生 2 人を呼ぶ。（月１） （個人宅などで練習） →250 人集まる
2011 年	・**頼母子** ・**クリチーバ沖縄県人会**	◆頼母子 （1 月～11 月、日系会館にて開催） ◆１月 30 日、新年会＠日系クラブ ◆３月 17～21 日カウダス・ノーバスのツアー ◆５月 15 日、５周年記念として文化祭を開催 ◆10 月 12～16 日、沖縄にて開催の第 5 回世界のウチナーンチュ大会	会長交代 マリア・ギノザ・マリア → エリオ・ヒガ →午後２時から軽食（持ち寄り当番制） お知らせ、ビンゴなど →「沖縄週間(Semana da cultura Okinawana)」 ＊沖縄そば、サーターアンダギー、沖縄もちを売る。 クリチーバ市から多数参加予定だったが、東日本大震災の影響により全員キャンセル

		◆10 月 18 日～19 日、移民祭り参加。 ◆毎月、琉球舞踊　その後、三線教室も開始（2015 年現在も継続）	→そば 500～700 食売る 80kg の肉を使用。汁担当（上地テレザ） 琉球國祭り太鼓参加。 （月 1 回） →サンパウロから琉舞の先生を呼ぶ。 →サンパウロから三線の先生を呼ぶ。 （個人宅などで練習会）
2012 年	・頼母子 ・クリチーバ沖縄県人会	◆頼母子 （1 月～11 月、日系会館にて開催） ◆ 1 月 29 日、新年会[19] ◆定期的な講習（毎月、隔週） ・琉球舞踊 ・三線教室 ◆10 月 20 日、メリッサ国吉のコンサート@日系会館 ◆11 月、琉球國祭り太鼓クリチーバ支部 5 周年記念公演 ◆新年会／忘年会	会長：エリオ比嘉 副会長：アリオ新垣 →午後 2 時から軽食（持ち寄り当番制） お知らせ、ビンゴなど （月 1 回） →サンパウロから琉舞の先生を呼ぶ。 →サンパウロから三線の先生を呼ぶ。 （個人宅などで練習会） MelissaKuniyoshi, Jovens Talentos Okinawanos
2013 年	・頼母子 ・クリチーバ沖縄県人会	◆頼母子 （1 月～11 月、日系会館にて開催）	会長：エリオ比嘉 副会長：アリオ新垣 →午後 2 時から軽食（持ち寄り当番制） お知らせ、ビンゴなど

[19] ニッケイ新聞「クリチーバ沖縄県人会＝新年会、４０人が和やかに＝郷里の話題に花さかせ」2012 年 2 月 3 日付記事。http://www.nikkeyshimbun.jp/2012/120203-74colonia.html（2014 年 1 月 12 日閲覧）

		◆定期的な講習 （毎月、隔週） ・琉球舞踊 ・三線教室 ◆1 月 23 日、 新年会 ◆ 7 月 13 日、 夕食会 ◆忘年会	（月 1 回） →サンパウロから琉舞の先生を呼ぶ。 →サンパウロから三線の先生を呼ぶ。 （個人宅などで練習会⇒日系会館） →看護師ヴェーラミサオ国吉中島さんの東京・沖縄での JICA 研修報告会。 沖縄県人会の夕食会参加者の一品持寄り
2014 年	・頼母子 ・クリチーバ沖縄県人会	◆頼母子 （1 月～11 月、日系会館にて開催） ◆定期的な講習 （毎月、隔週） ・琉球舞踊 ・三線教室 ◆新年会 ◆サンパウロのサンタクラーラ沖縄県人会のイベントにクリチーバの琉舞メンバーが参加。 ◆ 7 月 12 日、 第 53 回パラナ民族祭 （53º Festival de Etnias do Paraná）	会長：エリオ比嘉 副会長：アリオ新垣 →頼母子時間変更 変更前：午後 2 時から軽食 変更後：午後 12 時昼食（持ち寄り） お知らせ、ビンゴなど （月 1 回） →サンパウロから琉舞の先生を呼ぶ。 →サンパウロから三線の先生を呼ぶ。 （個人宅などで練習会→日系会館） →ガイーラ劇場（Teatro Guaira）にて。 踊りのグループが初参加。 サンパウロから踊りの先生たちも参加。

		◆忘年会	持ち寄り昼食、琉球國祭り太鼓披露、クラフト販売：メンバーの数名が、沖縄からの布を再利用して手作りしたもの
2015 年	・頼母子 ・クリチーバ沖縄県人会	◆頼母子 （1 月～11 月、日系会館にて開催） ◆７月、第 54 回パラナ民族祭（53° Festival de Etnias do Paraná） ◆春祭りに参加	会長：エリオ・ヒガ 副会長：アリオ・アラカキ →　琉球舞踊 →沖縄そば 900 食販売

（出所：宜野座マリアさんの資料、以下の文献、ブラジル沖縄県人会 2000a.『ブラジル沖縄県人の移民史－笠戸丸から 90 年－１』サンパウロ：ブラジル沖縄県人会.ブラジル沖縄県人会 2000b.『ブラジル沖縄県人の移民史－笠戸丸から 90 年－２』サンパウロ：ブラジル沖縄県人会.　CLAUDIO, Seto MARIA, HELENA Uyeda“BUSHIDO 武士道 CAMINHO DO GUERREIRO SEMEADOR：100 Anos de Presença Japonesa no Paraná”、インタビュー調査などをもとに筆者作成）
※太枠は、特に重要な活動としている。

付属資料2. クリチーバ沖縄県人会会員リスト （2009年－2013年）

No.	氏名	生年	世代	祖先の出身地	宗教	職業	デカセギ経験	沖縄滞在経験	居住地	以前の居住地または田舎
1	K.A- P.P（女性・男性）	1943年	2世	那覇市小録・大嶺・島尻/非日系	・生長の家（学校の方針で）・祖先崇拝（トートーメーを守るように言われている）	パラナ州カンピーナグランデ市の文化担当秘書	なし	★2回（79年と90年）	**パラナ州**クリチーバ／カンピーナグランデ・ド・スール	**サンパウロ州**モジアナ、カンジ・ド・ホドリゲス、アンドラジーナ、バウルー、オリンピア
2	E.A（男性）	1967年	3世	本部町・今帰仁村	カトリックだが教会には行かない、トートーメー	大衆食堂		なし	**パラナ州**クリチーバ	**サンパウロ州**ドラセーナ
3	R.A-J.A（男性・女性）	1933年	2世	本部町／今帰仁村	ホリネス（エヴァンジェリコの一種？）・トートーメーはある	大衆食堂		★2度（R.A）／なし	クリチーバ	**サンパウロ州**マリリア、アダマンチーナ、ドラセーナ
4	H.C- I.C(男性・女性)		1世／2世	浦添市		個人店経営			クリチーバ	**サンパウロ州**
5	J.F-M.K(男性・女性)			非日系／与那原町						
6	I.F-A.G（女性・男性）	1949年／1943年	3世／2世	那覇市／糸満市	・カトリック・母親が沖縄の仏壇を拝んでいた（イ	元銀行員／事務所員	★長野、静岡	なし／★1回	クリチーバ	**サンパウロ州**プレシデンテ・プルデンテ／プレジデンテ ヴェンセスラウ
7	J.G-R.M（男性・女性）	1945年	3世／3世	那覇市	カトリック	歯科医師／	なし	なし	クリチーバ	**サンパウロ州**プレシデンテ・プルデンテ
8	E.H -N.K（男性・女性）		2世／2世	東風平町（八重瀬町）					クリチーバ	
9	H.H - I.A（男性・女性）	1950年	2.5世／3世	北中城村仲順/与那原町・北中城村喜舎場（父）	・カトリック・祖先崇拝	地理統計院員/主婦	★神奈川（イレーニ）	★1回	クリチーバ	**サンパウロ州**ヘジストロ、サンタクラーラ・**ブラジリア／ヒオクランジドスール州**カンポグランジ
10	S.H（女性）	1951年	1世	那覇市壷屋	生長の家	主婦	なし	62年にブラジルへ移民後、一度も帰っていない	クリチーバ	**パラナ州**マリンガー
11	S.H（男性）		2世	那覇市・沖縄市					クリチーバ	**サンパウロ州**サントス
12	A.H - N.M（男性・女性）		2世／2世	名護市羽地村					クリチーバ	
13	T.H（女性）		2世	伊波村（現うるま市）					クリチーバ	

No.	氏名	生年	世代	祖先の出身地	宗教	職業	デカセギ経験	沖縄滞在経験	居住地	以前の居住地または田舎
14	G.H-C.H（男性・女性）	1933年／	2世／2世	恩納村（父方）、大宜味村（母）／福島県	カトリック	元銀行員（弁護士として勤務）	★82年に1年間ブラジル銀行東京支店勤務。89～95年にデカセギ、その後もデカセギへ行っている。家族全員	なし	クリチーバ	**サンパウロ州**ペドロ・デ・トレド、**パラナ州**ロンドリーナ・ローランジャ、**ミナスジェライス州**ポッソス・デ・カウダス／**サンパウロ州**パラグァス・パウリスタ、**パラナ州**アサイー
15	R.K（女性）					（元）公設市場で営業	★品川に3ヶ月		クリチーバ	
16	M.I（女性）		2世	美里（現沖縄市）	・エヴァンジェリコ・仏壇ある	（元）公設市場で営業			クリチーバ	
17	M.I（女性）		3世	美里（現沖縄市）		公設市場で営業			クリチーバ	
18	Y.I（女性）		2世	石川市(現うるま市)						
19	R.K（女性）	1934年	2世	那覇市上間	・祖先崇拝・メシニカ	（元）大衆食堂経営	★品川に3ヶ月	★3回	クリチーバ	**サンパウロ州**プレシデンテ・プルデンテ、**パラナ州**グァチファ、サンジョゼドスピニャイス
20	S.I（女性）		1世	石川市（現うるま市）	キリスト御霊教会（エヴァンジェリコ）	（元）農業、喫茶店経営	★埼玉県羽生市に5年間	★あり	クリチーバ	
21	S.K-D.H（男性・女性）	1950年／1947年	3世／2世	美里村、福岡、那覇、読谷／嘉手納	メソジスタ（祖母が沖縄で始めた）沖縄の仏壇はやめた	精神科医／ピアノの先生	なし	★あり	クリチーバ	**パラナ州**カンバラー（セ）／**サンパウロ州**プレシデンテ・プルデンテ
22	N.K-R.B（男性・女性）	1959年／1962年	2世／4世	名護市真喜屋（父方）／イタリア	Allan Kardek-Espiritismo	個人店経営	★92年～94年、静岡、愛知、甲西市スズキの会社	★1回	クリチーバ	**マットグロッソドスール州**カンポグランジ／**ヒオクランジドスール州**
23	N.K- B.M（男性・女性）								クリチーバ	
24	J.K - M.K（男性・女性）								クリチーバ	
25	M.K - H.K（男性・女性）		2世						クリチーバ	**パラナ州**アンジラー
26	P.K -J.K（男性・女性）	1941年	2．5世／2世	沖縄市、那覇市（母方）、西原、那覇市（父）	カトリック	（元）公設市場で家族経営、運転手	★静岡、神奈川、名古屋（家族全員）	なし	クリチーバ	**パラナ州**アンジラー（登録はカンバラー）

No.	氏名	生年	世代	祖先の出身地	宗教	職業	デカセギ経験	沖縄滞在経験	居住地	以前の居住地または田舎
27	A.K- S.I（男性・女性）		2世						クリチーバ	**パラナ州**アンジラー
28	L.K – C.K（男性・女性）		2世						クリチーバ	**パラナ州**アンジラー
29	H.K- M.N（男性・女性）		2世	福岡県／浦添市					クリチーバ	**サンパウロ州**マリリア、カンピーナス
30	R.K（女性）		3世	宜野座村字惣慶		弁護士			**パラナ州**カンバラー	**パラナ州**カンバラー
31	S.K –C.K（男性・女性）		1世/2世	宜野座村字惣慶／		農業	なし	★あり／★あり	**パラナ州**カンバラー	**パラナ州**カンバラー
32	S.K – C.M（男性・女性）		2世／2世	宜野座村字惣慶／					クリチーバ	**パラナ州**カンバラー
33	T.M – E.K（男性・女性）	1949年	2世／2世	三重県・京都・東京（上野）／大宜味村	カトリック	公文（塾）経営	なし	★1回（89年）	クリチーバ	**サンパウロ州**トレド／**パラナ州**アプカラーナ
34	N.M – L.M（男性・女性）	1928年／	2世／2世	羽地村字仲尾次（父）名幸市（母）／名護市	カトリック、仏教も勉強、沖縄の仏壇ある	（元）市会議員（クリチーバ市の日系人の中で初	なし	★3回（70,74,88年）／★2回（74,88年）	クリチーバ	**サンパウロ州**リンス、トゥッパン／**サンパウロ州**ミラカトゥ市ビグワ、イヴィウーナ
35	B.M – M.G（男性・女性）	1950／1948	2世／2世	長崎県／金武町並里	カトリック	元エンジニア/元小学校教師	なし	★3回（03年、06年、12年）	クリチーバ	**サンパウロ州グアララペス、パラナ州**マリンガー／**パラナ州**パラナナバイ、マリンガー
36	M.M（女性）	1928年	2世	恩納村（父方）、大宜味村（母）		元旗作り店経営	なし		クリチーバ	**サンパウロ州**ジュキアーのアレクリン町、**パラナ州**カスカベル、マリンガー
37	N.M – L.M（男性・女性）		2世／2世	名護市羽地村／		小児心臓医			クリチーバ	**パラナ州**ロンドリーナ（北パラナのシアノルテ）／
38	T.M（女性）		2世	石川市（現うるま市）					クリチーバ	

No.	氏名	生年	世代	祖先の出身地	宗教	職業	デカセギ経験	沖縄滞在経験	居住地	以前の居住地または田舎
39	E.N−V.K（男性・女性）		2世／父1世、母2世（ベラ）	日本/宜野座村字惣慶		銀行員/看護婦（パラナ州クリチーバ市保健局カジュルー区保健事務所長）	なし	★研修滞在	クリチーバ	**パラナ州**カンバラー
40	F.N（女性）	1925年	2世	佐敷村（現南城市）	カトリックだったが、やめた。夫の死に際、カトリックはいやだと言われて。仏教（東本願寺）	（元）コチア組合の会計。食品販売など	娘の一人が日本に。		クリチーバ	**サンパウロ州**セードロ（ジュキアー町）・サントス・ヘベロンプレット
41	Q.N（女性）		2世	日本		旅行社、ツアーコンダクター			クリチーバ	
42	T.N（女性）		2世	岡山県					クリチーバ	
43	M.O − M.H（男性・女性）		／2世	国頭郡恩納村安富祖／恩納村（父方）、大宜味村（母方）					クリチーバ	**サンパウロ州**ペドロ・デ・トレド／パラナ州ロンドリーナ
44	P.O − E.O（男性・女性）		2世／1世　3歳のときに来伯（エウザ）	日本/群馬県					クリチーバ	
45	E.O − N.O（男性・女性）		2世／	広島県／那覇市					クリチーバ	
46	K.O − I.O（男性・女性）		2世／2世	香川／豊見城村				★あり	クリチーバ	**サンパウロ州**
47	Y.O − O.M（男性・女性）	1942年	2世／2世	本部／日本本土	エヴァンジェリコ	パラナ日伯商工会議所会頭。2つの会社（化粧品、着物）を経営・		★あり	**パラナ州**コロンボ	**パラナ州**マリンガー

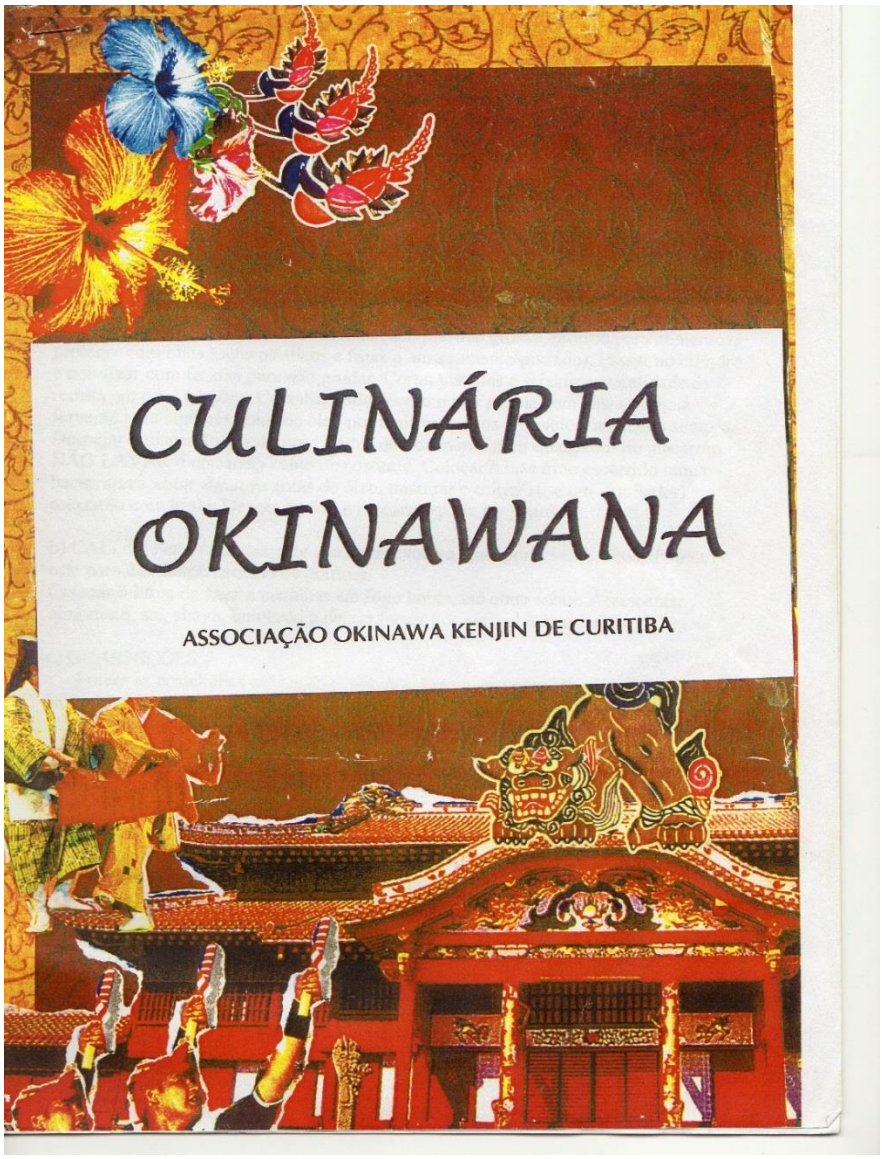
No.	氏名	生年	世代	祖先の出身地	宗教	職業	デカセギ経験	沖縄滞在経験	居住地	以前の居住地または田舎
48	R.A － M.I（男性・女性）		／2世	石川市（現うるま市）／イタリア					クリチーバ	
49	C.S － H.S（男性・女性）	1956／1956	2世／2世	国頭村・那覇市/栃木、熊本	カトリック・父、母方の父の家にそれぞれ仏壇がある／カトリック	（元）銀行員、（現）パステル店経営			クリチーバ	**サンパウロ州**アダマンチーナ／**サンパウロ州**マリリア
50	A.S － I.S（男性・女性）	1964年/1965年	2世／2世	広島/大宜味村	カトリック	エンジニア／元看護士	転勤（DENSO）		クリチーバ→サンパウロに引越	
51	E.S － M.N（男性・女性）		3世／3世	佐敷（現南城市）/東風平町（八重瀬町）		／塾（公文）経営	★91～95年		クリチーバ	**サンパウロ州**
52	L.S － R.S（男性・女性）		2世	美里（現沖縄市）		マニュキュア・サロン経営	★		クリチーバ	
53	P.S － E.G（男性・女性）					／塾（公文）経営			クリチーバ	
54	Y.S（女性）			具志川市（うるま市）					クリチーバ	**パラナ州**ロンドリーナ
55	H.T－ S.K（男性・女性）	1957年	2世/2世（父1世、母2世）	北海道／山原の宜野座村字惣慶	カトリック	建築家／銀行員	なし	なし	クリチーバ	**サンパウロ州**／**パラナ州**チェジュコ・プレット、カンバラー
56	H.T － M.O（男性・女性）	1950年	2世／2世	国頭郡　今帰仁村字　天底（アメスク）／広島		市長秘書、都市計画部局、議員／議員	なし		クリチーバ	**サンパウロ州**プレシデンテ・プルデンテ
57	J.T－ L.K（男性・女性）								クリチーバ	
58	T.T － F.T（男性・女性）	1930年／1929年	2世／2世	沖縄市・浦添市／那覇市首里	トキオさんは3男だが7代目の仏壇を持つ/生長の家	（元）農業、食品販売	★愛知県　次女は三重県在住	★92年	クリチーバ	**サンパウロ州**パウリスタ線のゴイヤス・**パラナ州**フェニックス／**パラナ州**カンバラー、アンジラー、フェニックス

No.	氏名	生年	世代	祖先の出身地	宗教	職業	デカセギ経験	沖縄滞在経験	居住地	以前の居住地または田舎
59	Y.U – T.U（男性・女性）	1942年／	1世/3世（2.5世）	宜野座村惣慶区（父）宜野座区（母）（大阪出稼ぎも)/具志川（うるま市）	・カトリック・祖先崇拝	写真館経営。1年半、那覇の写真屋で働きながら学ぶ／琉球大学に留学	—	★複数回	クリチーバ	**パラナ州**カンバラー／**パラナ州**ロンドリーナ
60	R.U – C.T（男性・女性）		3世	宜野座村惣慶区（父）宜野座区（母）（/具志川（うるま市）				★研修滞在	クリチーバ	**パラナ州**カンバラー／
61	J.U – N.M（男性・女性）	1947年	3世／3世（2.5世）	具志川（現うるま市）／名護市羽地村	・カトリック・祖先崇拝	眼科医／塾（公文）経営	なし	★あり	クリチーバ	**パラナ州**カンバラー／**パラナ州**ロンドリーナ（北パラナのシアノルテ植民地）
62	N.W – C.W（男性・女性）		2世／2世	石川市（現うるま市）／高知県					クリチーバ	
63	W.W– S.Y（男性・女性）		3世／3世	石川市（現うるま市）	エヴァンジェリコ	パステル屋経営	★	なし	クリチーバ	**サンタカタリーナ州**カンポリウ
64	J.Y–H.S（男性・女性）	1924–2010/	2世／2世	島尻／美里（現沖縄市）	エヴァンジェリコ	（元）建築事務所、昔は洋服、技工士、トラック百姓	★名古屋（部品組み立て）／東京の羽村		クリチーバ	
65	A.Y– M.Y（男性・女性）		3世／	石川市（現うるま市）/非日系	カトリック	大学教員／アナリスト	なし	なし	クリチーバ	
66	G.Y（男性）	1929年	2世	石川市伊波（現うるま市）	祖先崇拝	（元）農業、タクシー運転手	なし	★あり（親戚訪問）	クリチーバ	**サンパウロ州**アララクワラ、イターポリス、ビラソンミゲル、オリンピア
67	H.Y – S.Y（男性・女性）	1942年	1世/2世	石川市（現うるま市）・大阪出稼ぎ／今帰仁村	祖先崇拝／エヴァンジェリコ	元パステル屋	なし	★あり	クリチーバ	**サンパウロ州**オリンピア／**サンパウロ州**ジュトリーナ、マリリア、アダマンチーナ、ドラセーナ

No.	氏名	生年	世代	祖先の出身地	宗教	職業	デカセギ経験	沖縄滞在経験	居住地	以前の居住地または田舎
68	A.S － N.M（男性・女性）		／2世	名護市羽地村					クリチーバ	／**パラナ州**ロンドリーナ（北パラナのシアノルテ）
69	S.K － M.K（男性・女性）								クリチーバ	
70	R.H － M.I（男性・女性）								クリチーバ	
71	N.I（女性）								クリチーバ	
72	J.K － J.M（男性・女性）					元教員			クリチーバ	

※所帯ごとの会費支払を基準としたもの。たのもし会のみの参加は含まれていない場合もある。インタビューに基づいて筆者作成。

付録資料３．クリチーバ沖縄県人会メンバーによる沖縄料理のレシピ



〈資料 0-1〉

クリチーバ沖縄県人会のメンバーが持ち寄ってまとめた沖縄料理レシピ全６ページ。

出所：クリチーバ沖縄県人会

OKINAWA SOBA (Shizuko Iha)

1- Ingredientes:

a) massa: 1 kg de farinha de trigo- 6 ovos – 1 colher(sopa) rasa de ajinomoto
2 ½ colheres(sopa) rasa de sal – água

b) caldo: 1/2 kg de suan (suíno) – 2 colheres (sopa) de hondashi – 1 colher (chá) de ajinomoto – 1/3 copo de shoyu – 3 litros de água

c) guarnição: 1/2 kg de costelinha suína – 3 ovos – 1 kamaboko colorido
1 maço de cebolinha – 1 shogá pequeno

2- Modo de fazer:

a) MASSA: Despejar a farinha peneirada numa bacia. Acrescentar o ajinomoto e o sal. Colocar 3 ovos num copo americano, completar com água e despejar sobre a farinha. Fazer isso duas vezes. Mexer muito bem com as mãos até formar uma massa homogênea. (dica: colocar a massa num saco plástico grosso, próprio para alimentos, proteger com mais sacos plásticos e fazer o amassamento pisando). Passar no cilindro e polvilhar com farinha para não grudar. Cortar em tiras e separar a quantidade da receita em duas porções. Cozinhar cada porção numa panela com bastante água fervente com algumas gotas de óleo por mais ou menos 8 minutos, mexendo sempre. Despejar o macarrão cozido com a água do cozimento num escorredor de macarrão. NÃO LAVAR o macarrão como de costume. Colocar o macarrão escorrido numa bacia, acrescentar algumas gotas de óleo, misturar e esfriar (use um ventilador) mexendo com hashi. Depois de frio o macarrão pode ser guardado.

b) CALDO: Ferver previamente o suan trocando a água por 3 vezes. Procedimento este para eliminar o excesso de gordura.
Colocar 3 litros de água e cozinhar em fogo baixo, até obter sabor. Acrescentar ajinomoto, sal, shoyu, hondashi e deixar ferver por mais alguns minutos.

c) GUARNIÇÕES:
- Ferver as costelinhas até levantar espuma. Despejar a água e lavar as costelinhas. Repetir mais uma vez.
  A seguir cozinhar com água, sal e shoyu até amaciar. Dar uma dourada.
- Fazer omelete e cortar em tiras bem finas.
- Cortar kamaboko em tiras, picar cebolinha e ralar shogá.

3- Como montar o sobá

Colocar uma porção de macarrão na tigela. Despejar o caldo por cima e retornar o caldo na panela. Repetir a operação (finalidade: dar mais sabor e garantir um soba bem quente). Arrumar as guarnições (costelinha, tiras de omelete e kamaboko). Colocar o caldo definitivo sobre o macarrão com as guarnições. Por último colocar o shogá e ceboliha por cima. Servir.

Sugestão: invés de costelinhas pode-se usar bacon em fatias grossas, o preparo é o mesmo (ver modo de preparo das guarnições "c").

Rendimento: 6 a 8 porções.

〈資料 0-2〉

「OKINAWA SOBA：沖縄そば」（伊波シズコさんによる調理法）

SOBÁ com água de cinza (Nereu Kanashiro)

Ingredientes :

1 kg de farinha de trigo
1/2 copo (200 ml) de água de cinza
3/4 copo de óleo
1 1/2 colher (sopa) de sal
4 ovos grandes (350 ml)

Modo de fazer :

Numa vasilha grande colocar a água de cinza, o sal, os ovos e o óleo . Misturar tudo muito bem.
Acrescentar a farinha aos poucos e ir misturando tudo até obter uma massa lisa e homogênea. Sovar com a mão e colocar a massa num saco plástico e deixar descansando por 1 hora.
Passar no cilindro e cortar.
O processo do cozimento, resfriamento, preparo do caldo e guarnição é o mesmo do Okinawa sobá.

Água de cinza:
1 copo de cinza para 2 litros de água.
Misturar tudo e deixar nas garrafas , para usar.

〈付録資料 0-3〉

「SOBÁ com água de cinza：木灰汁（「もっかい」「もくはい」または「もくあく」）そば」（カナシロ・ネレウさんの出身地マットグロッソ・ド・スール州カンポグランデで使われている調理法）

木灰は、麺生地をつなぐ「かんすい」の代わりになるもの。沖縄の沖縄では手に入りにくかった「かんすい」の代わりに木灰が使用されていたとされる。沖縄そばとほとんど変わらないという人もいる。

OKINAWA MOTI (Helena Shimabukuro)

Ingredientes:
4 xícaras (chá) de motigome
2 xícaras (chá) de açúcar
3 xícaras (chá) de água
Gengibre ralado – 1 colher sopa rasa (opcional)
Maizena para polvilhar
Corante alimentício vermelho
Kinako torrado e moído para polvilhar

Modo de fazer:
Lavar o motigome e deixar de molho durante 5 h.
Escorrer a água numa vasilha e reservar.
Bater no liquidificador o motigome que estava de molho acrescentando 3 xícaras da água reservada.
Colocar numa tigela, acrescentar o açúcar, o gengibre e misturar bem mexendo com uma colher.
Cozinhar em banho-maria durante 15 a 20 min.

a) Moti com corante:
Despejar a massa sobre uma tábua forrada com um pano úmido, espalhando bem e colocar o corante. Enrolar como rocambole e cortar em rodelas de 1cm, polvilhando com maizena para não grudar.

b) Moti com kinako:
Enrolar a massa como rocambole, cortar em rodelas de 1 cm e polvilhar com kinako.

〈資料 0-3〉「OKINAWA MOTI 沖縄もち」(シマブクロ・エレナさんによる調理法)
結納などのお祝いごとで使われるもちとされる。

UMUKUJITEN ou TIMBIGUÁ (Julia Arakaki)

Ingredientes:
1 kg de batata doce (+ enxuta)
½ kg de polvilho doce
250 gr. de açúcar
Óleo para fritura

Modo de fazer:

Após lavar bem as batatas com as cascas, cozinha-las numa panela colocando água até cobrir as batatas.
Após o cozimento, deixar esfriar.
Descascar as batatas, ralar e amassar bem dentro de uma vasilha.
Acrescentar o açúcar e o polvilho, misturando muito bem até obter uma massa bem consistente. Enrolar como rocambole, cortar em rodelas de 1 cm cada e fritar em óleo quente. Deixar escorrer sobre um papel.

Rendimento: +/- 35 unidades

Obs.: Se a batata for mais aguada acrescentar mais polvilho.

〈資料 0-4〉「UMUKUJITEN ウムクジてんぷら」または「TIMBIGUÁ チンビグァー」
（アラカキ・ジュリアさんによる調理法）
芋くずのてんぷら（甘さのあるものとないものがある）。芋とタピオカの粉を使用する。芋が使われた沖縄料理が多い。

SATA ANDAGUI (Shizuko Iha)

Ingredientes:

1 kg de farinha de trigo
2 ~~3~~ copos (200ml cada copo) de açúcar
8 ovos grandes
2 colheres (sopa) cheia de fermento em pó
½ copo de leite
2/3 copo de óleo
Óleo para fritura

Modo de fazer:

Numa vasilha grande, bater os ovos, o leite, o óleo, misturando tudo muito bem.

Acrescentar aos poucos o açúcar, a farinha e o fermento peneirados, adicionando-os gradativamente à mistura, mexendo bem até obter uma massa consistente.

Aquecer o óleo numa frigideira e com o auxilio de uma colher, retire pequenas porções da massa da vasilha e vá fritando os bolinhos, que vão subindo à superfície e ficando douradinhos. Retirar, deixar escorrer e servir.

Rendimento: +/- 50 bolinhos

* SE A MASSA FICAR MUITO CONSISTENTE, É MELHOR FAZER BOLINHAS.

〈資料 0-5〉「SATA ANDAGUI サーターアンダギー」（伊波しずこさんによる調理法）
ドーナツのような揚げ菓子

OKINAWA ONIGUIRI (Neli Uesu)

1- Ingredientes:

8 Copinhos de arroz japonês
Misso
Gengibre Ralado
Ovos
Ajinomoto
Cebolinha picada
Açúcar a gosto

2- Modo de Fazer:
Cozinhar o arroz lavado na panela de arroz como para fazer oniguiri.

3- Preparo do recheio:
Em uma frigideira, fritar o misso com um pouco de óleo, acrescentar o gengibre ralado, o açúcar e o ajinomoto, misturando bem.
À parte fazer um omelete com os ovos e acrescentar o restante do recheio formando uma pasta homogênea, por ultimo misturar a cebolinha picada.
Fazer os oniguiris com este recheio bem no centro.

Rendimento: +/- 35 Oniguiris

Opcional: Pode - se colocar alho picado em vez de gengibre

〈資料 0-6〉「OKINAWA ONIGUIRI 沖縄おにぎり」（ウエズ・ネリさんによる調理法）
調理された油みそ、卵の入ったおにぎり
一般的な沖縄料理ではなく、その家庭独自の調理法の可能性がある。

付録資料４．　沖縄人アイデンティティに関する論文・文献リスト：５分野

分野	著者・論文／文献名、発行社、発行年など
心理学	・東江平之『沖縄人の意識構造』、沖縄タイムス社、1991 年 ・沖縄心理学会『沖縄の人と心』、九州大学出版会、1994 年 ・倉元直樹、高良美樹、北村勝朗「沖縄アイデンティティ」の構造と規定要因―歴史・文化的視座からの尺度構成―」『教育情報学研究』、第 11 号、2012 年、pp.91-118 ・高良美樹、與久田巌、倉元直樹「沖縄アイデンティティを測定する　―沖縄在住の大学生を対象とした調査結果から―」『クオリティ・エデュケーション』第 4 号、2012 年、pp.131-148
社会学	・石田正治「沖縄における「日本的」および「沖縄的」アイデンティティのあり方に関する総合的研究」、[九州大学] 、2001 年、科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書、平成 10 年度～平成 12 年度 ・石原昌家「沖縄人出稼ぎ移住者の生活史とアイデンティティの確立」『沖縄国際大学文学部紀要　社会学科篇』第 10 号(1)、1982 年、pp.63-68 ・海勢頭豊 [ほか著]、藤原良雄編『琉球文化圏とは何か』、別冊環 6、藤原書店、2003 年 ・大田昌秀『沖縄人とは』、green-life、1980 年 ・大庭由子「沖縄の音楽と観光に見るアンビバレンス－人々とアイデンティティ構築」『秀明大学紀要』、第 7 号、2010 年、pp.35-51 ・沖縄国際大学南島文化研究所編『八重山の地域性』(南島文化研究所叢書　1)、編集工房東洋企画、2006 年 ・沖縄国際大学南島文化研究所編集『韓国・済州島と沖縄』（南島文化研究所叢書 2）編集工房東洋企画、2009 年 ・「オキナワから地球へ－国家をこえる民際交流の可能性」筑波大学社会学研究室、1987 年、筑波大学社会学類調査報告 1986 年度 ・沖縄地域科学研究所著『沖縄の県民像－ウチナンチュとは何か』（おきなわ文庫, 23)、ひるぎ社、1997 年 ・岸政彦「アイデンティティとネットワーク－ある沖縄人女性の生活史と文化実践から」、『龍谷大学社会学部人権問題研究』、大阪市立大学人権問題研究センター編、第 8 号、2008 年、41-58 ・北原淳編『東アジアの家族・地域・エスニシティー基層と動態』、東信堂、2005 年 ・國吉和子「大学生の郷土意識と社会的アイデンティティ」 (V)：8 地域間の比較を中心に『沖縄大学地域研究所年報』、第 16 号、2002 年、pp.13-31 ・國吉和子「大学生の郷土意識と社会的アイデンティティ(IV)：沖縄の大学生は'99 春の甲子園大会をどう見たか」、『沖縄大学紀要』、第 17 号、2000 年、pp.1-17

	・米須興文『ピロメラのうた　情報化時代における沖縄のアイデンティティ』(タイムス選書；II・8)、沖縄タイムス社、1991 年 ・島尾敏雄著者代表『ヤポネシア考－島尾敏雄対談集』、葦書房、1977 年 ・鈴木規之編『沖縄のディアスポラの研究－日系人・外国人住民への意識調査から』、2002 年度琉球大学法文学部人間科学科社会学専攻社会学コース「社会学実習」調査報告者、2005 年 ・「占領と文学」編集委員会編『占領と文学』、オリジン出版センター、1993 年 ・武山梅乗、呉炳三「ネーションとエスニシティ－“在日”、沖縄人というアイデンティティ」、『社会学の扉をノックする』、学文社、2013 年 ・田中史生「7～11 世紀の奄美・沖縄諸島と国際社会－交流が生み出す地域」(特集 地域とアイデンティティ)、関東学院大学経済学部教養学会編『自然・人間・社会 ：関東学院大学経済学部総合学術論叢』第 38 号、2005 年 1 月、pp.55-73 ・谷富夫、安藤由美、野入直美編著『持続と変容の沖縄社会－沖縄的なるものの現在』、ミネルヴァ書房、2014 年 ・富川盛武『魂落ちゃる沖縄人－人間、文化、風土の視点からみた沖縄経済』、新星図書出版、1987 年 ・冨山一郎『近代日本社会と「沖縄人」－「日本人」になるということ』、日本経済評論社、2006 年 ・野村浩也『無意識の植民地主義－日本人の米軍基地と沖縄人』、御茶の水書房、2005 年 ・花崎皋平『「じゃなかしゃば」の哲学：ジェンダー・エスニシティ・エコロジー』(ブックス 5)、インパクト出版会、2002 年 ・福地曠昭『命(ヌチ)まさい－徴兵を忌避した沖縄人』、那覇出版社、1987 年 ・松井健編『開発と環境の文化学 沖縄地域社会変動の諸契機』、榕樹書林 2002 年 ・目取真俊『沖縄「戦後」ゼロ年』、生活人新書 150、2005 年 ・山里勝己研究代表「戦後沖縄とアメリカ ：異文化接触の総合的研究」、琉球大学法文学部 2005 年 1 月、科学研究費補助金(基盤研究(A)(2))研究成果報告書、平成 14～16 年度 ・饒平名長秀ほか[述]『沖縄の現実から見る日本宣教の課題』(JEA 信教の自由セミナー報告書、第 10 回)、日本福音同盟(JEA)社会委員会、1999 年 ・琉球新報社・社会部編「ヤマトウンチュ・ウチナーンチュ」、『お隣さん考現学』、琉球新報社、1976 年 ・同上「沖縄的バイタリティー」、同上書 ・琉球大学編『やわらかい南の学と思想―琉球大学の知への誘い』、沖縄タイムス社、2008 年
民俗／民族学	・安達義弘『沖縄の祖先崇拝と自己アイデンティティ 確固』、九州大学出版会、2001 年 ・安達義弘「沖縄社会における祖先崇拝と自己アイデンティティの構築」(特集 沖縄の宗教)『宗教研究』(日本宗教学会) 第 71(1)号、1997 年、pp.79-103 ・安達義弘「沖縄的自己アイデンティティの形成過程－「おもろ主取家元祖由来記」を中心と

して」『西日本宗教学雑誌』、第 19 号、1997 年、pp.1-17
・伊波普猷『琉球人種論』（沖縄学資料シリーズ、1）、榕樹書林、1997 年　復刻
・上間常道「沖縄学－アイデンティティをめぐって－私的な文献案内（民間学<主題>)」『思想の科学』第 7 次（96)、1987 年 11 月、pp.115-119
・小熊誠「書評 安達義弘著『沖縄の祖先崇拝と自己アイデンティティ』」日本民俗学、第 241 号、2005 年 2 月、73-79
・勝方=稲福恵子、前嵩西一馬編『沖縄学入門　空腹の作法 』、昭和堂、2010 年（「歴史」「芸術・思想・文化」「言語・文学・表象」「社会・政治」に分類）
・金城厚『沖縄音楽入門』、音楽之友社、2006 年
・Clarke Hugh「アイデンティティーの形成と維持－沖縄とオーストラリアを中心に」、沖縄学研究所編『沖縄学』第 8(1)号、2005 年、pp.30-41
・小松寛「謝花昇の「悲劇」－沖縄アイデンティティーを巡って」『沖縄学』第 10(1)号、2007 年、66-90
・塩月亮子「沖縄における死霊観の歴史的変遷--静態的社会人類学へのクリティーク」（<COE 国際シンポジウム ポスターセッション>生・老・死:日本人の人生観--内からの眼,外からの眼）国立歴史民俗博物館研究報告 国立歴史民俗博物館研究報告 pp.91, 219-235, 2001 年 3 月
・高橋孝代『境界性の人類学－重層する沖永良部島民のアイデンティティ』、弘文堂、2006 年
・Chandralal Dileep「沖縄のアイデンティティーと文化的再現表象」'The Crying Wind' and Hovering Butterflies: Identity and Cultural Representations of Okinawa”、沖縄大学人文学部編『沖縄大学人文学部紀要』、第 7 号、2006 年、pp.1-16
・豊見山和行、高良倉吉編『琉球・沖縄と海上の道』、吉川弘文館、2005 年、街道の日本史 56
・浜下武志『沖縄入門－アジアをつなぐ海域構想』（ちくま新書、249)、筑摩書房、2000 年
・松島朝彦『沖縄の時代』（おきなわ文庫、77)、ひるぎ社、1996 年
・三島わかな『近代沖縄の洋楽受容－伝統・創作・アイデンティティ』森話社、2014 年
・三島わかな「琉球政府時代における洋楽受容－沖縄人としてのアイデンティティの創出と異文化受容のはざまで」『沖縄県立芸術大学紀要』第 11 号、2003 年 3 月、pp.125-146
・森田俊男『個性としての地域・沖縄－森田俊男地域・教育論集－沖縄・日本認識をめぐって伊波普猷・柳田国男・河上肇』、平和文化、1988 年
・ヨーゼフ・クライナー著、沖縄大学地域研究所編『世界の沖縄学 －沖縄研究 50 年の歩み』、芙蓉書房出版、2012 年
・ヨーゼフ・クライナー編『日本民族学の戦前と戦後－岡正雄と日本民族学の草分け』、東京堂出版、2013 年
・與那覇潤「民族問題」の不在－あるいは「琉球処分」の歴史／人類学」、『文化人類学』、

	第 70(4)号、2006 年 3 月、pp.451-472
政治学	・石川捷治「復帰運動における「沖縄的」アイデンティティと「日本的」アイデンティティの変容と相剋」、九州大学大学院法学研究院『法政研究』、第 68(1)号、2001 年 7 月、pp.179-200 ・伊高浩昭『沖縄アイデンティティーー日本（ヤマト）に取り込まれながら日本（ヤマト）を相対視する思想（ココロ）』、マルジュ社、1986 年 ・伊高浩昭『双頭の沖縄－アイデンティティー危機（クライシス）』現代企画室、2001 年 ・井端正幸、前泊博盛、中村司「イデオロギーからアイデンティティへー鼎談 県知事選が語る沖縄の変化」（特集 怒りの島・沖縄の意志）、『季論 21』編集委員会『季論 21』、第 27 号、2015 年、pp.52-72 ・沖縄広報センター『自立への新たな胎動－沖縄アイデンティティの要素』、沖縄県知事公室、1996 年 ・沖縄国際大学広報委員会編『グローバリゼーションの中の沖縄－国際シンポジウム』（沖国大ブックレット 12）、沖縄国際大学広報委員会、2004 年 ・加藤大仁「スポーツとナショナル・アイデンティティーー沖縄海邦国体「焼き捨てられた日の丸」事件を手掛りに」、慶應義塾大学体育研究所編『体育研究所紀要』第 40(1)号、pp.31-38、2001 年 1 月 ・小松寛『日本復帰と反復帰　戦後沖縄ナショナリズムの展開』、早稲田大学出版部、2015 年 ・高橋順子『沖縄「復帰」の構造－ナショナル・アイデンティティの編成過程』、新宿書房、2011 年 ・照屋寛徳『ウチナーンチュときどき日本人』、ゆい出版、2003 年 ・照屋信治『近代沖縄教育と「沖縄人」意識の行方－沖縄県教育会機関誌『琉球教育』『沖縄教育』の研究』、溪水社、2014 年 ・照屋善彦・山里勝己編『戦後沖縄とアメリカ―異文化接触の五〇年―』、沖縄タイムス社、1995 年 ・中谷義和、安本典夫編『グローバル化と現代国家－国家・社会・人権論の課題』、御茶の水書房、2002 年、立命館大学人文科学研究所研究叢書、第 15 輯 ・波平恒男「戦後沖縄とアイデンティティをめぐる政治」『政策科学・国際関係論集』第 6 号、2003 年 3 月、pp.202-145 ・橋本晃和著『「普天間」を終わらせるために－終わらない最大の元凶は本土の沖縄に対する「差別」的意識と無関心』、桜美林学園出版部、はる書房、2014 年 ・藤原昌樹「沖縄における「アイデンティティ論」の陥落」、『表現者』、2015 年 7 月、pp.80-85 ・宮城能彦『沖縄道－沖縄問題の本質を考えるために』ザ・メディアジョン・エデュケーショナル、ザメディアジョン、2012 年 ・林泉忠「沖縄アイデンティティの十字路－「祖国復帰」と「反復帰」のイデオロギー的性格

	を中心に」『政策科学・国際関係論集』、第 7 号、2005 年 3 月、pp.274-243 ・林泉忠「沖縄住民のアイデンティティ調査（2005 年～2007 年）」『政策科学・国際関係論集』、第 11 号、2009 年 3 月、pp.105-147 ・林泉忠『「辺境東アジア」のアイデンティティ・ポリティクスー沖縄・台湾・香港』、明石書店、2005 年
歴史学	・グレゴリー・J.スミッツ著『琉球王国の自画像―近世沖縄思想史』（渡辺 美季訳）、ぺりかん社、2011 年 ・田名真之『近世沖縄の素顔』（おきなわ文庫、84）、ひるぎ社、1998 年 ・戸邉秀明「沖縄近代史から考える「近代性」とアイデンティティの問い方 ― 研究動向をめぐる一種の随想」（特集 沖縄研究 ： 理論/出来事の往還）『言語社会』、第 9 号、2015 年 3 月、pp.107-122 ・比嘉克博『琉球のアイデンティティーその史的展開と現在の位相』、琉球館、2015 年 ・又吉盛清編『日露戦争百年－沖縄人と中国の戦場』同時代社、2005 年 ・山﨑孝司「沖縄復帰運動が目指した「祖国」－境界とアイデンティティの揺らぎ」（会活動ニュース 戦争展文化企画）、日本史研究会『日本史研究』第 596 号、2012 年 4 月、pp.99-101 ・琉球新報社『薩摩侵攻 400 年　未来への羅針盤』（新報新書〔１〕）、琉球新報、2011 年 ・琉球新報社『「琉球処分」を問う』（新報新書〔２〕）、琉球新報社、2011 年

出典：CiNii Articles：http://ci.nii.ac.jp/（2015 年 10 月 14 日閲覧）と
CiNii Books：http://ci.nii.ac.jp/books/（2015 年 10 月 14 日閲覧）を併用した。
検出されたもののなかで、直接本論文とは関係しないと思われるものについては省いた。また検出されなかった文献 2 冊、グレゴリー・J.スミッツ著『琉球王国の自画像―近世沖縄思想史』（渡辺美季訳）、ぺりかん社、2011 年と比嘉克博『琉球のアイデンティティーその史的展開と現在の位相』、琉球館、2015 年は、筆者によって付け加えた。

謝辞

本研究を進めるにあたって、修士課程で丁寧に指導していただき、博士課程進学への道を開いてくださった五十嵐暁郎教授、博士課程に進学後、右も左もわからない筆者を 5 年間ご指導いただいた萩原なつ子教授、そして筆者のつたない論文原稿を辛抱強く見て頂き、ここまで導いてくださった長有紀枝教授に心からお礼を申し上げたい。

主な調査地としてきたクリチーバ沖縄県人会の方々には、何から何まで大変お世話になったことをお礼申し上げたい。おかげで、サンパウロで初めてクリチーバの方々に会って以来、筆者はずっと継続してクリチーバへの関心を持ち続けることができた。

そして、なかなか論文が書けない筆者に書くことの面白さを教えてくれた、21 世紀社会デザイン研究科博士後期課程の修了生である小関孝子さんにも心からお礼を申し上げたい。

また各地の現地調査先、沖縄研究の先生方、研究の仲間、沖縄の友人たち、家族、親戚、バイト先で出会った方々と、ここにはお名前をあげられないぐらい沢山の方々にお世話になった。心よりお礼申し上げたい。